

---

# クオリティ・オブ・ライフ

伊吹ノア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クオリティ・オブ・ライフ

### 【Nコード】

N2800K

### 【作者名】

伊吹ノア

### 【あらすじ】

夢と幻想の世界、ユーライジア。未来の可能性の一つとして具現する世界。今、一人の老人がその生を閉じようとしている。老人には、心残りが一つあった。笑顔の似合う少女。自身の目に入れても痛くない孫娘が、老人に迫る死期を悟り、本当の笑顔を失くしてしまっていることが。だからこそ、老人は語りだす。いつもと変わらない、茶受けの昔話のように。それは、生きることの価値を問う、少女に笑顔を取り戻させるための、老人の人生、その一片だった…。

## 第1話、始まりはさいごの語り（前書き）

伊吹ノアです。

通算で第6作品目、満を持して『クオリティ・オブ・ライフ』をお送りします。

今までの作品を糧に、むしろ踏み台にする勢いでやっていきたいと思えます。

引き続き、感想評価、ご指導ご指摘ご教義のほど、お待ちしております。

## 第1話、始まりはさいごの語り

そこは幻想の世界、ユーライジア。  
現実の映し絵である夢の世界。

ある一軒家の寝室。

一人の老人がベッドに腰掛けるようにして、柔らかな陽射し降り注ぐ外の景色を見ていた。

老人の身体には、包帯が巻かれている。

見るからに痛々しいそれは、長年生きてついた古傷が開いたものだった。

もう長くはないだろう。

それは彼自身が一番よく分かっていた。

(ようやく、か……)

老人は言葉をその飲み込み、深い深い息を吐いた。

国を、家族を守るために受けた、名誉の傷。

その事に対しての後悔は彼にはなかった。

むしろ……ずっと求めてきたことだと、そう思っていた。

ノヴァキ・マインとして生き続けなければならなかった人生。

それは決して辛いことばかりではなかったけれど。

愛する人たちに先立たれて、だけど追うことなど許されなくて。

心と身体を削りながら、結局今の今まで生きてしまったのだから。

「これで……」

ようやく答えが出せる。

ずっとずっと導き出せなかったその答えを知ることができる。

この、苦しみから解放される。

そう思うと、じわじわと迫り来る死の感触もそれほど悪いものでは

ない、

なんて長く生きたものの達観した感情が彼を包んでいたが。

老人には、心残りが一つだけあった。

死の淵に立った彼を、たった一つ引き止めるもの、と言ってもいいのかもしれない。

「じいちゃん？ 入るよ〜？」

弾むノックの音。

高く甘く、幼く。

老人にとって唯一の心残りそのものである、孫娘だった。

儂さすら覚える絶対的な美貌。

赤、金、茶、三種の輝きちりばめし長い長い髪。

その奥に何人たりとも穢すことのかなわぬ炎を宿した、意志の強い瞳。

一度目にすれば千差万別の感情を持って、誰もがその心に留め置くだろう、

世界のためにその身を捧げること運命づけられた、重き使命を負う少女。

世界にとって何にも変えがたき宝である少女。

だが、周りのものがどう思おうとも、老人にとって彼女が、男勝りで泣き虫で、

それでいて優しい、目を離せない……目にに入れても痛くない、そんな孫娘であることに変わりはない。

彼女が、その宿命に流されることなく、愛する人と結ばれて幸せな笑顔を浮かべる様を見届け、

見続けることができないことが、老人の最後の叶うことのない未練

だった。

「あのさ……オレ、ちょっと分からないことがあって……聞いてもいい？」

そんな彼女が珍しく、何かを言い澀んでいる。

「何だいそれは？ 話してごらん」  
ずっと見守り続けることができないのならせめて、憂いなく終わりを迎えたいと彼は思う。

彼に残された日々と付き合うことを決めてくれた、彼女の思いに報いるためにも。

彼には聞くことと話すことしかできなかったから……話しやすいように微笑みを浮かべ、  
穏やかにそう訊いた。

すると彼女は一つ頷いて。

「あのさ……じいちゃんって一体誰なの？」

一見するとわけが分からないだろう言葉を紡ぐ。

「……ふふふっ」

老人は、そんな孫娘がおかしくて、声をあげて笑ってしまう。

「笑わないでよ、本当にそう思ったんだもん……」

それに、拗ねたように頬を膨らませる少女。

真面目にそう思って聞いているらしい。

老人には、その言葉の先にあるものに心当たりがあったから……笑顔のままに言葉を続ける。

「随分と興味深い事を聞くのだな。……して、その心は？」

「あ、うん。……あのさ、普段は周りのみんなにカムラル老って呼ばれてるでしょ、じいちゃんって。」

オレにとってじいちゃんはいいちゃんだからさ、今まではあんまり

気にしてなかったんだけど……

じいちゃんのほんとの名前、聞いたことなかったな、って」

すると少女は、考え考え言葉を選ぶようにして、そんな事を言った。「そうだったか？ いやはや、すまない。お初にお目にかかる。私の名はノヴァキ・マインじゃ。」

……もつとも、カムラル家に婿入りしたから、今はカムラルの性を名乗っているがね」

冗談めいた口調。

自分に言い聞かせるようにして刻みつけていた名は、既に完全に彼のものとして落ち着いていた。

「……嘘。じいちゃんのほんとの名前って、カリス・カムラルでしょう？」

少女の、自分の言葉にゆるぎない自信を持った強い言葉。

それは……老人が今の今までほとんどのものに知られることなく秘密にしていた真実そのものだった。

それを知られてしまったというのに……老人の心中には喜びの感情が溢れている。

それはきつと、誰かに気付いて欲しかったからなのかもしれない。

「……驚いたな。どこでその名を聞いた？」

もう、嘘が嘘でなくなってしまうくらい長い間それに気付いたものなどいかなかったのに。

老人は、昂ぶる感情を抑えられぬままにそう問いかける。

「えつと……その、鏡の向こうの世界で、じいちゃん本人に聞いたんだけど……」

随分と頼りなさそうな、少女らしい夢見がちな言葉。

頼りないのは、そんな話、信じられないと言った本人が思っ

ているからなのだろう。

老人は、それにちよつと意地悪そうな笑みを見せ、

「ああ、お前がライジアパークの展示室から勝手に持ち出した『夏夢の鏡』のことが。」

……なるほど。それなら知りえてもおかしくはないな」

「じいちゃん知ってたんだ、その事」

「あいにく眠りは浅いほうでな。夜な夜な家を出て行くお前を見て、昔の私を思い出したよ」

「気まずそうな、叱られたような顔をする少女に、今度は老人は楽しげな笑みを浮かべていて。」

「して、鏡の向こうの私と会ったのならば、何故私がカリスではなくノヴァキと名乗るようになったか……その理由も知っているのかな？」

少女が一番聞きたかっただろう本題へ移るためにと、老人はそう問いかける。

顔を上げた少女は、それにぶんぶんと首を振った。

「ううん。さすがにそこまでは。なんでじいちゃんには二つの名前があるんだろって思っただけだから」

「そんなわけで、初めの誰、と言う問いかけに繋がるのだろう。」

「理由、知りたいかね？」

「うん。……じいちゃんの事なら何でも知っておきたいから」それは少女の、覚悟の言葉なのだろう。

間もなく訪れるだろう、老人の死に対しての。

ならば、それに応えなければならないと、彼は強く思った。

「長い話になるが……構わないかな？」

「じいちゃんの身体に障らないなら」



「結構。では、語ろうか」

彼女のためなら、近づく死もそれくらいは遠慮してくれるだろう。

老人は、少女に向けていた視線を外し、窓の向こうへ視線を向け……  
静かに語り始めたのだった。

生命の価値を問う……その物語を。

(第二話につづく)

## 第2話 それは……思い出してはいけない音色（前書き）

ー 1話の更新ができなそうなので、少し前倒しでお送りします。

## 第2話、それは……思い出してはいけない音色

オレ……カリウス・カムラルが、ノヴァキ・マインに出会ったのは町での『仕事』を終えて、なんとなく帰る気にならず、夜の散歩を楽しんでいた時だった。

ばれたらきつと大騒ぎになるだろう夜の仕事と散歩。

普段から自室には入らないで欲しいと強くお願いしているので、今のところばれたことはないけれど。

自身の好奇心を満たすためだけの、周りの迷惑を省みない行動と言えはそうなのかもしれない。

だけど、そんな後ろめたさも回数を重ねていくうちに慣れ、しまいには癖になってしまっていた。

そんな感情の推移すら、外に出ることで初めて知ることのできた発見で。

「今日はどこに行くかな……」

夜の『ライジアパーク』（そう呼ばれるユーライジアの国々の人々の憩いの場）は行き飽きたし、

夜の海も満喫した。

守りが固くて夜は入れない『スクール』（ユーライジアじゅうの子供たちが通う、剣や魔法を習い、

鍛錬する施設）は論外。

すると残るは……スクールの裏手にある、裏山だけだった。

陽のあたる時分ならば、入ってはいけませんときつく言われている場所。

何でも、裏山のとつぺんには魔物の親玉だと言われている魔族……その末裔が暮らしているから、らしい。

一昔前までは、魔族はオレたちのような人間族や、竜族やエルフ族、

はたまた魔精霊（魔法を使うのを手伝ってくれて、ユーライジアの世界を形作るもの、とも言われている）を滅ぼし、世界を支配せんとする存在、だったそう。

（そんなに怖い存在なのかな……）  
でもそれはあくまで、一昔前までのことだ。

オレの母、この国の守り主と呼ぶべき存在でもある、アスカ・カムラルによって作られたと言う、

『ユーライジアスクール』。

平等な教育が理念で、ユーライジアに住むすべての種族に子供たちがそこに通っている。

そこには当然魔族と呼ばれる子たちもいる。

家柄上まともに接する機会などなかったけど、遠目に見た彼らは大人しく静かで、その姿もオレたちと変わることはなく、とても何か害があるようには思えなかった。

「ここまでする必要はないと思うんだけどな……」

目の前には魔族にとっては猛毒だという光の魔力だろうか。

それらしきものが込められた封印のロープが、オレの行く先に張り巡らされている。

昼間ならば、そんなものはない。

誰がこんなものを用意したのか知らないけど、夜に力が強くなると言われている魔族たちを、ここから出さないための処置らしいって、町の人は言っていた。

かつては魔族たちの下僕とも言われていた意思疎通の全くできない魔物たちに関しては、

オレ自身にも苦い記憶があるというか、危険であるという体験による認識があるから話は別だけど。

オレとしては、魔族と魔物は別物だって思いは強い。

だけど、そんなオレの考えは、知らないからこそ言えるのかもしれない。

母、アスカ・カムラルが国をまとめスクールを作るまでには、お互いに多くのものが血を流したのだという。

歩み寄りにはまだ遠い。

そんな一般常識を、理解はしているのだが……。

「ダメだ近付くなと言われると、余計に行きたくなるよね」

世界を守る使命のためにずっと会話すら交わせずにいる母さん。

彼女が望んでいるの平等は、こんなものじゃないだろうと勝手に結論付けて。

オレに対してはただのロープでしかないそれをくぐり抜け、均された道のなくなった、

草木生い茂る山道を上がってゆく。

「……あ、でもよく考えたらこんな夜ふけにお邪魔したら失礼極まりないな。こんな格好だし」

ただの散歩がいつのまにやら魔族の人に会うことに変わっていて、はっとなって立ち止まる。

こんな夜更けに人の家にお邪魔することが非常識なのはもちろんだけど、今のオレは『夜を駆けるもの』の変装をしているのだ。

闇色のマントに髪を隠すシルクハット、極彩色のお面。

万一知り合いに出くわした時にはばれないように試行錯誤してできたそれは、神出鬼没の夜の何でも屋の服装、でもある。

オレはその姿で、ユーライジア元町にあるギルド……そこで仕事の依頼、

あっせんを断られて困っている人たちを助ける、そんな夜の仕事をしていたのだが……。

いくらなんでもこの姿で魔人さん宅へお邪魔したら不審者じゃまされないかもしれない。

変装を解けばいいんじゃないのかって案もあつたけど、結局オレは魔人さんに会うのは諦め、

山のとっぺんの景色でも見て帰ろう……そんな結論に達していた。

深く考えずに、好奇心だけで動いていた、と言ってもいいのかもしれないけれど。

山道は次第に進路すら曖昧になる獣道になり、さっきまであつたはずの虫の声は途絶え、

次第に深く怪しい霧が立ち込めだし、空にはこちらを覗き込むような真円の赤い月だけが見える……

なんて頭の中で想像を膨らませていたオレだったけれど。

とっぺんに向かう山道は、拍子抜けするくらいに普通だった。

どうやらオレ自身も、少なからずこの場所は危険だということを経験にしていた部分があったらしい。

よくよく考えてみれば、この道だってスクールへと通う子供たちの通り道なわけで。

そんな非日常へと飛び込んでしまったかのような状況になどなるわけがなくて。

ただ、思ったよりも大きく見える、赤みがかかった満月だけが現実としてそこにある。

もちろん、その周りには競うように瞬く星たちがともにあっただけだ。

それほど傾斜のきつくない、うねった坂道の途中には、いくつもの枝分かれした道があった。

その先に目を向ければ、人が生き暮らすことを証明する、うすぼんやりとした灯りがいくつも見える。

「……………」

オレは、その灯りひとつひとつにあるだろう家族の団欒というものを夢想しながら、止まっていた足を目的地へと向ける。

自分はこんな夜更けにたった一人で、あるべき家を抜け出して一体何がしたいのか、なんてことを考えていて……………。

その、答えが出ないはずの考えは、  
明確な答えとして、オレの前に示されることとなる。

それは、民家もなくなって辺りの木々の葉も尖りだし、その背丈が低くなってきた……………頂上付近でのことだった。

「……………っ？」

こんなに大きな山だと思わなくて、いい加減降りようかな、なんて考え始めたオレの思考が止まる。

ついでに、足も止まる。

何かの音が、足の向く先……おそらく頂上あたりから聞こえてくるそれは、

ここまでわざわざ出向かなければ、強くなってきた風の音に紛れて聞こえなかつただろう音だ。

初めは魔物の鳴き声か……あるいは風の魔精霊が強い風を共にして歌でも歌っているのかとオレは思った。

魔物ならば当然危険だし、風の魔精霊ならば、人に害をなすものではないとはいえ、

その歌には魔力が込められているから、何かしら面倒なことが起るかもしれない。

厄介事に巻き込まれる前に退散しようかな、なんて思っていたけど。その時ふいに風がやんで、今度ははっきりとその音がオレの耳に届いてくる。

(これは、『トランペット』の音色……?)

それは、ユーライジアの国を守っている『風紀』の人たちが好んで使う、管楽器の音色に聞こえた。

だけど何かが圧倒的に違う。決定的に違う。

その生きている音色は、容易にオレの心を引っ張り、掴んで離さない。

高く甘く、美しい音色だった。

心が、『魂』が震える。

その一音一音が耳朵を通過する度に、様々な感情を与えてくれる。

郷愁、歓喜、悲哀、感動。

わくわくどきどきする一方で、不意に油断すると泣きたくなる。

だが、何よりオレを驚かせたのは、その感覚を知ったのが、その時



が初めてじゃなかったということだ。

(いつだ……?)

オレはふらふらと、音へ近寄っていく。  
自分の記憶を辿るように。

それは確か……10年前。

新しい神が来た、祭りの日だ。

舞い降りた神を歓迎するように、風に乗って流れてきた、その旋律。

オレは覚えている。

この音色が、その時に聞いたものと同じであることを、確信している。

同じ感動を味わったことがある。

思い出そうとすると、どんどん記憶の底から溢れてくる。

どうして今まで忘れていたのだろうか？

こんな素敵な音色を。

簡単だ。

その日は、本当に色々なことがあった。

心躍る旋律の詰められた記憶。

それに蓋をしてしまいたいくらい、辛いことがあったのもその日だった。

大事な人を、亡くした日だった。

それを思つと、無性に悲しくなつて。

途端に募る、焦燥感。

何でなのかは、オレにも分からない。  
ただオレは、音の先に何があるのか、知りたくなった。  
音が、誰の手によって生まれたのか、知りたくなって。  
急がなくちゃって、そう思ってた。

そうして辿り着いたのが……当初の目的地であつたてっぺん。

「……………」

夜星と赤い月と、眼下の家々……魔法灯りきらめく喝采を受けて、  
誰かがそこにいた。

無銭観劇のオレに気付くことはなく、無限に広がる空と大地に向か  
つて、幻想的な音を奏でている。

正直、『トランプペット』であんな音が出るなんて信じられない。

失礼ながら思い描いていた、安っぽくて乾いたもの、という感覚は  
全くなかった。

相変わらず心の震えは止まらず、甘くもどかしいしびれを与えてく  
る。

一体どんな魔法を使えば、技術があれば、こんな音が奏でられるの  
だろう。

その音を生み出す人物にも、俄然興味が沸いてくる。

というよりも。

その時オレはすでに、神秘的とすら思える音を奏でるその人物から、  
視線を外せなくなっていた。

そこにいたのは、魔人族の……少年だった。

頭には、未成熟な魔人族の男性を示す、短い珊瑚の角。

月光に反射するいくつもの刃を従わせた、竜のような尾と、虹色を

反射する全身の鱗。

それらを半ば隠すように包み込む、闇色の巻頭衣。

それと相對するかのような、長い……花びらのような薄桃色の髪。

見覚えはなかったが、それも当然なのだろう。

何故ならその姿は。

家族や大切な人にしか見せない、あるいは本気を持って戦う時に現すとされる……

魔族の本性だったのだから。

(第3話につづく)

### 第3話、体験したことのない不思議な執着

そこにいたのは、魔族の少年。

その、普段は見せないはずの本性を曝け出して。

無限の夜空へ追いつけばかりに瞬く眼下の町を見下ろしている。

そこまで考えて、オレははっとなった。

うるたえた、と言ってもいいのかもしれない。

思わずその場から逃げ出そうとして。

まるでそうだと決まってもいたかのようなお約束で足元の小枝を踏み、大きな音を立ててしまった。

「……………誰だっ！」

当然、彼はオレの存在に気付くだろう。

ただ、その時オレは、人の触れてはならぬ部分に土足で突っ込むような真似をしてしまった後ろめたさよりも。

その音色がちゃんとした終わりを迎えることなく止まってしまったことに安堵している自分と、

もったいなくて悔しがっている自分が格闘している。

もっと聞きたい、もっと心震わせていたい。

だけど怖い、その先を聞くのが。

取り返しのつかない何かが起こるような、そんな予感。

相反する思いが、ぶつかり合って弾けている。

その時感じた激情のようなものは、その正体を掴めない、生まれて初めて感じたもので。

明らかにオレに警戒し、その場から離れようとする魔族の少年を

見て。

半ば無意識のままに、引き止めなくては、なんて思っ

「待って！ オレの話を聞いてくれ！」

「……………」

『夜を駆けるもの』に変装している時の芝居がかったものじゃなく、素の自分の渾身の叫び。

それは、仮面に込められた魔力により声が変わる機能を、外すことで無効にしたせいもあって。

それが功を奏したのか、背を向け去りかけていた少年の身体が、ぴたりと止まる。

そして、鈍い光を発したかと思うと少年に身はみるみるうちに縮まり置き換え、

鱗が肌色になって見えなくなり……人間族と変わらない姿になる。

そしてそのまま、オレのことをまじまじと見つめ、何だかお化けでも見たいな顔をして固まっている。

……まあ、こんな時間に出歩けるような人間じゃないからこそ、なんだらうけど。

少年は、見たことのある人物だった。

話したことはないが、スクールでは見かけたことがあった。

『クラス』が違うから名前とかを聞く機会には恵まれなかったけれど、だいたい同学年か、一つ下くらいだろう。

知っている人だと思うと、ふいに身勝手な親近感のようなものが沸いて。

だからこそ余計に彼の真の姿を知ってしまったことが申し訳なく思えて。

「ごめん！ 君のほんとの姿を見てしまって。夜の散歩をしていたら凄く綺麗な音が聞こえてきたから、  
どんな人が吹いてるんだろうって、我慢できなかったんだ」

「……」  
「がばつと頭を下げ、嘘偽りなく正直に謝ることにする。  
だが、それに対しての返事はない。」

おそろおそろ顔を上げると、未だに驚き硬直したままの少年がいて、オレが考えているよりも、正体を見られてしまったことは大事だったのかもしれない……そんな風にも思えて。

「君が許せないというのなら、『夜を駆けるもの』がこのオレ、カリウス・カムラルだって公表してくれて構わない。君の正体を勝手に知ってしまった罪に及ぶとは思えないけど……それが、オレの知られたくない秘密であることは確かだから」

仮面を外したその勢いのままに、再び頭を下げ、そんな事を言った。今思えば……オレはなりふり構ってなどいられなかったんだろう。今の自由を失つても、オレを知ってもらって、あの素晴らしい音色を聞かせてもらえるような、そんな繋がりが欲しかったのかもしれない。

「……『夜を駆けるもの』？ それって街で噂になっている何でも屋か？」

それから、しばらく間があって。  
なにやら深く考え込んでいるようにも見えた魔族の少年は、顔を上げてくれることなく、そんな事を呟いた。

目を見て会話してくれなかったのは少し淋しかったけれど。

今回は一方的にオレが悪い立場だし、オレを避けているのかなんのか、

普段から視線を合わせてもらえない事は多々あったので、慣れたものと言えばそうだったろう。

それでも、いつも以上にへこんでいる自分を自覚しながら少年の言葉に頷く。

「あ、うん。そうだよ。その『夜を駆けるもの』だよ。確か、ギルドが断った仕事を奪い取ってお客さんが流れちゃって迷惑してるって……自分で言っちゃ世話ないけど」

「あんた、カリス……いや、カリウス・カムラルだって言ったか？ 証拠はあるのか？ 誰もが知ってる国の至宝だぞ？ それが町を騒がす『夜を駆けるもの』と同一人物だって？ そんな事を公表して……しかも魔族の俺が言うことなんで、誰が信じるって言うんだよ」

苦笑混じりのオレの言葉に対して返ってきたのは、何かを焦ってるかのようにいきなり饒舌になった、そんな言葉だった。びっくりして、オレは思わず言葉を失う。

それと同時に、確かに証拠がなければどうしようもないことに気付いて。

「これなら証拠にならないかな。母さんからもらったカムラル家の紋様と、火の魔力が封じられた髪留めなんだけど、一つしかないらしいから、お店で鑑定すれば簡単に証明できると思うよ？」

手渡そうとしたけれど、ばばっと逃げられる。差し出された手が空を切るのがやるせなくて。

「……言い方が悪かったか。魔族の言葉なんかそもそも信じるところか聞いてくれる人間なんていやしないだろうが」

その代わりに、冷たく悲しい、そんな言葉が返ってくる。

そんなことない、オレは信じるって言いたかった。

でもそれは、自分が『夜を駆けるもの』だと宣言しているに等しく意味がなく。

信じるという言葉も、彼にとってみればいきなりすぎて信憑性に欠けるような気もして。

オレの口からは、何も出てこない。

そんなオレのことを、少年はどう思っただろう？

「……お前、本当にカリウス・カムラルなのか？」

「うん。火の根源に誓って」

再度の問いかけ。

そこで初めて少年と目が合う。

深い深遠を湛えた、琥珀の瞳。

オレはそれだけは自信を持って、しっかりと頷く。

すると、その瞳が、何かの感情に揺れた気がした。

戸惑い、恐怖、悲しみ……他にも、オレの知らない色を持って。

それは……一体なんなのか。

その答えを求めようとしたけれど。

逃げるように視線を逸らされたから……それ以上その事について考えることはできなくて。

「……俺の正体になんか何の価値もありはしないよ。忘れてくれればいい。」

あんたが『夜を駆けるもの』であることを秘密にしたいのならば従おう。口外したって俺に利があるわけじゃないからな」

「でもっ……！」

そのまま背を向けて立ち去ろうとするから、オレはまたしても声あげて、少年を引き止めてしまう。

「信用できないか？ 魔人族なんて」



「うっんっ、そうじゃなくて！ その……なんて言えばいいのか、入っちゃだめなのに勝手に入ってさ。

君の場所に土足で踏み込むような真似をして、何もお咎めがないのってどうなのって思っ……」

冷えた少年の言葉に、オレはぶんぶんと首を振る。

そして、弁解するみたいにそんなオレ自身も何言ってるかよく分かっていないようなことを口にしていて。

再び訪れる、あまり居心地のよくない静寂。

少年が立ち去る足を止めてくれたことだけが、せめてもの救いで。

そう言えば、どうしてオレはこんなに必死なんだろうって、答えの出ない疑問にぶち当たったとき。

「……そこまで言うなら、頼みがある。来週末にスクールで実地試験があるのは知っているだろう？」

少年は唐突に、そんな事を訊いてきた。

スクールの生徒として当然知らぬはずはない。

確か、スクールの地下で最近発見されたダンジョンの搜索をかねたものだったはずだ。

何があるか分からない未開の地であることもあって、楽しみにしていたから、ちゃんと憶えている。

同時に、彼が何を言いたいのかオレにも読めてきて。

「今回の試験は2人一組。しかもなるべくなら、他種族であるほうが好ましい。だから……」

俺のパートナーにならないか。

たぶんきつと、そんな言葉が続くんだろうって、そう思ったけれど。少年は何か苦しそうに、言葉を締めるのをためらっている。

よくよく考えてみたらオレのパートナーなんて面倒くさいだけだつて、そう思い至ったのかもしれない。

それはまずい兆候だった。

オレにとつては彼がそう言うてくれるのは願ったり叶ったりで。

そのお願いは、真の姿を見てしまったことのお詫びになんて到底なりようもないだろう。

その事に気付かれてしまったらせつかくのチャンス逃してしまう。あの素晴らしい音色を、再び耳にする機会が。

オレはその時……そんな自分勝手なことを思っていて。

「組もう！ 是非組もう！ オレ、結構成績いい方だったはずだから、きつと君の助けになれると思うし！」

気付けばオレは、絶る勢いでそう叫んでいた。

「……………」

その瞬間、少年はびくりと身体を震わせて、とてもとても嫌そうな……悲しそうな顔をする。

それだけで、上がりかけていた気分が一気に急降下する。

勝手なこと考えて調子に乗りすぎたかなあって、そのまま深く反省しそつになつて。

「……………よろしく頼むよ。俺はノヴァキ・マイン。ハイグレード一般クラス、2年水組ウルガウに在籍している。パートナーを決める時になったら、そう伝えてくれ」

俯いたオレにかかったのは、オレの我が侷を肯定する、そんな言葉だった。

下がりかけた気持ちもどこへやらすぐに浮上してオレは顔をあげる。

「ほんと？ ……………って、ちょっと待ってよ！」

かと思つたらどこか疲れたように去っていくノヴァキの姿が見えて。

いい加減しつこいだろうなと自分で思いつつも三度ノヴァキを引き止める。

ノヴァキはやっぱり呆れているのか、背を向けたまま立ち止まるのみで。

「もしノヴァキが許してくれるのなら……またここにお邪魔してもいいかな？」

オレを『夜を駆けるもの』として自由にさせてもらえるのならば。

その言葉には、ノヴァキの善意にかこつけてそんな事を考えているオレがいる。

オレってこんな調子のいいやつだったんだなあって改めて気付かされて……。

「……………何故？」

表情が分からないままの、強い疑問が返ってくる。

なんとなく、怒っているような気がしなくもなかったけれど。

「えっと……………その、ノヴァキの『トランプペット』、また聴きたいなつて。オレ、ものすつごく感動したんだ」

「……………」

結局、我慢できずに。

オレはそんな本音を口にしてしまう。

またしても、長い長い沈黙が続いて。

「好きにすればいい……………」

ぼそりと言い捨てるみたいに、そんなお許しの言葉がかるうじてオレの耳に入ってきて。

「ありがとう、ノヴァキ！」

さっさとオレを置いて山を下ってしまおうノヴァキに、そう叫んでいた。

今の今まで体験したことのない、喜びを胸に感じながら……。

(第4話につづく)

## 第4話、いとしきものと、穏やかな籠の中

そうして……次の日。光セザールの日。

スクールの休みの日。

いつもなら秘密の夜更かしをしていた影響で遅いはずの目覚めは、休日の記録を更新するほどに早かった。起きたら開けるといふ習慣で、寝室のカーテンを引く。

「いい天気だ。寝てるのもつたいないや」

いつもよりだいぶ高揚してる自分を自覚しつつ、一つのびをして最後までしがみついていた眠気を吹き飛ばす。

そして……家のものが見ていたら大目玉だろう、彼女らの言う品性のカケラもない脱ぎっぷりで、さっさと私服に着替えると部屋を出た。まずは顔でも洗って歯でも磨こうかと。

「おはようございます、カリス様」

「……っ、おはようございます、ラネアさん」

いつもより早いこともあって、なんとなく気配を消しながらのつもりで、全く足音の立たないはずのふかふか絨毯が敷き詰められた廊下を歩いていると。

まるでタイミングを見計らったかのように、カムラル家のメイド長であり、オレの専属メイドであるラネアさんが声をかけてきた。

「まもなく朝食の準備が整いますので、お好きな時間に食事の間へと足をお運びください」

「あ、うん……」

いつもと全く変わらない調子の言葉。

極力感情のこもらないようにしているようにも見える必要最低限の言葉。

本音を隠した仕事の言葉だ。

カリスって愛称で呼んでくれるぶんだけ、まだましではあるんだろ  
うけど。

オレは知っている。

本当の彼女は、西方……サントザ地方なまりが出る、朗らかで明るい人物であることを。

でも彼女は、それをオレには、全く見せない。

国の盟主……いずれは母さんの後を継いで、世界の守り神『アスカ』  
となることを宿命づけられているオレには、恐れ多くて気安い態度  
をとってはならない、というのが本人の弁だ。

オレが物心つく前からカムラル家に仕えているラネアさんですらそ  
うなのだから、その下につくものたちもほとんど似たようなもので  
去っていくほうを見れば、慌しく働く家のものたちの様子が見える。  
オレがいつもよりだいたい早く起きたから時間が前倒しになったのだ  
ろう。

だから気配を消して出てきたつもりなのに、生まれた頃からメイド  
長だったラネアさんの熟達した仕事ぶりに、毎度驚かされるオレで  
ある。

その事を考えると夜中抜け出しているのもとつくにバレてるんじゃない  
なからうかと思えて仕方がない。

最近是自己責任が重要になってくる年頃のせいかあまり怒られるこ  
とがなくなつたから……もしかしたら呆れられ放置されてるのかも  
しれないけれど。

「お邪魔です」

使う人が、今やオレともう一人しかいないというカムラル家御用達の豪奢でピカピカな手洗い場へとやってくると、そのもう一人の先客がいた。

一つ下の妹、サミイが。

下ろせば腰くらいまで届くだろう長い金の髪。

においたつような美しい彼女の髪は、国中の評判だ。

紅やら茶やら雑多に混じってるオレの髪とは比べるべくもない神々しさがそこにある。

肌はすべらかな真雪。

細身ですらりとしていて、背が高く、座っているだけで絵になる。

未だ少し眠たそうな紅髓玉の輝石秘めし瞳は、まさしくカムラル家のもものにふさわしく。

その高潔な雰囲気と落ち着いた喋り方故に冷たく見られがちだが、その実淋しがり屋で甘えんぼうのところがある、自慢で可愛いオレの妹である。

「おはようございます、カリス」

「おはようさっちゃん。みなさん、ご苦労様」

サミイやラネアさんを初めとするオレの身近にいる人たちは、まるで何かに抵抗でもしているかのように、こぞってオレのことをあだ名で呼びたがる。

だからサミイの世話をしていたメイドさんの半分が、慌ててオレの方へやってこようとするのをいつものように手で制した後、お返しに最近考えた愛称で妹の名を呼んでみた。

「その呼び方は恥ずかしいです。カリスが使えば国中に広まってしまつんですから……やめてください」

すると返ってきたのはきっぱりとした否定の言葉だった。

「可愛いのかなぁ……」

髪の手を整えながらそんな捨て台詞を残すオレだけど、サミイが嫌だと言うのなら仕方ない。  
呼び方についてはオレも我が俣聞いてもらっているし、素直に従うことにする。

「それにしても今日は早いんですね。休みの日は……カリスっていつもゆつくりなのに」

支度を終え、メイドさんたちを下げさせたサミイは、オレだけに見せてくれる笑顔で、そんな事を言う。

「ああ、うん。母さんのところに行こうと思って」

ただ、内と外で違うのはオレも大差ない。

やんごとなきカムラル家のもものとして、あるべき姿でいるようにと、きつく縛られている。

オレとサミイで違うのは、オレ自身がそのことに不満を抱いていることだろうけど。

(そう言えば、ノヴァキの前じゃ、素のオレだったな……)

それは、『夜を駆けるもの』として外に出ていたせいもあったんだろうけど。

「何か良い事あったんですね」

「えっ？ 顔に出してる？」

オレの顔はニヤけてでもいただろうか。

「水嫌いのカリスが、顔を洗いながら笑ってるなんて、そうそう見られるものじゃないですからね」

確かに、オレは水が嫌いだ。

安心できるのは、自室にあるお風呂くらいだろうか。

火の名を冠する一族だからなのかなって思ってたけど、サミイは平気そうだったから、オレが単に苦手なだけだろうけど。

見透かされたようなサミイの言葉に、顔を洗う手を止めて、平然を



装い、振り返る。

「ふふ、やっぱり。母様に会いに行くのはいつもの事だから、わざわざどうしてって、ちよつと気になっただけなんですけどね」  
オレが、予想以上にうるたえていたからなんだろう。  
サミイは本気で楽しげな笑みをもらし、手洗い場を出て行く。

「……浮かれているのか、オレ」  
言われてみれば、母さんの元へ足を運ぶのは毎日の習慣で。

そんな当たり前のことをわざわざ口にして、しかも滅多にない早起きなんぞしていれば、そりゃ何かあるなって思うだろう。  
オレは、そんな自分をいまいち理解できないままに。  
頬を叩き、目を覚まさせると、洗い場を出て……。

そして、そのまま……朝食の時間。

いつもは時間が合わないから一人だったけれど、今日は二人だ。  
百人は軽く座れるだろう大きな食卓にたった二人だけ。

その場には、他にカムラル家のものが多くいるのに、食事をとるのはオレ達だけだ。

なぜなら他のもの……カムラル家で働く人たちの食卓の間は別にあつて、ここは家主だけが使う場所だからだ。

もう慣れきってしまった光景。

もっと小さい頃は、家のものに一緒に食べない？って誘った時もあったけれど。

それをすれば怒られるのはその誘った家のもので……。

迷惑をかけるのは嫌だったから、オレは我慢して、そう言うものだ

と自分に言い聞かせてきた。  
心に溜まる不満をひた隠しにしたままで。

とは言え、そう言う気を使わなくていいはずの妹と、遠い遠い対面で食事を摂るのもなんなんだろうって思う。

これでは話もできない。

椅子を持って妹の所へ相席を賜ろうか、とも考えたけれど、椅子を持って歩こうものなら、ラネアさんが鬼の形相をして飛んでくるだろう。

何より、せっかく用意してもらって並べてある料理を、わざわざ移動させるのも気が引けた。

オレは内心ぶすくれながら朝食に手をつける。

外の世界とは何もかも違う極上においしいけど味気ない、そんな朝食を。

「ごちそうさま、っと」

「カリス様。今日のご予定を、お伺いいたします」

そして……朝食を終えて立ち上がるうたとすると、まさにそのタイミングでラネアさんが声をかけてきた。

メイド長であり、オレの専属であるラネアさんは、スクール内と自室以外の場所にオレが行こうとする時はたいてい一緒だ。

たくさんの人にあれやこれお世話されるのが億劫になったのもあって、自室にいる時は一人でいい、という我が侘を聞いてもらっているから、その事に関しては文句の言いようもない。

それでも敢えて言うなら、もう少し洒落の聞いた会話とかできないかなあとは思っただけ。

「これから母さんの所に行こうと思って。サミイも行くならそっちの時間に合わせてもらっていいけど。……後は、マイカの家になら

つと行きたいかも」

「了解しました。お供します。サミイ様も、これからアス力様の元へ向かうとのことですが」

「そっか、それじゃ行こう」

笑顔で頷くけど、ラネアさんの表情は変わらない。

いや、長年見てきて分かったけど……変えないようにしているんだと思う。

そこまでする必要ないのになあ。

いつもいつもそう考えるけれど。

そうしなければならぬ理由を、オレが知らないだけなのかもしれないし、強要はできなかった。

表情を変えないまま一礼し、外出の準備だろう……家のものと何やら真剣な口調で話し合い、慌しくなっていく食堂。

オレはそれを、内心でため息をつきながら見守ることしかできなくて……。

( 第5話につづく )

## 第5話、無自覚な存在感、それは至宝

半刻あまり経った頃には、オレはサミイとともに馬上の人となっていた。

四人が座ってちよつどの狭さ。

オレの隣には、ラネアさんが。

サミイの隣には、サミイの専属メイドの、ケイル・ガイアットさんがいる。

ラネアさんほどではないが、やはり彼女も立場をわきまえてあまり喋ろうとはしない。

いつの無駄に広い場所にいる反動なのか、狭い場所は人をすぐ近くに感じる事ができて、比較的好きな場所なんだけど。

サミイとの話題が途切れてしまうと、その場はすぐに静寂が支配する。

重苦しいといってもいいかもしれない。

それは不満ではあるけれど。

我が俣を言ってもらえないってこともちゃんと分かっている。

何故なら外は、危険な場所だからだ。

……いや、カムラル家のものとして外出する場合は、と云うべきなのかもしれない。

国の外にいる魔物に匹敵する怖い人間族……悪い人間たちにとってみれば、オレたちは格好の獲物らしいのだ。

それは、カリウス・カムラルとしてではなく、『夜を駆けるもの』として町へ出なければ知りえなかった状況。

『誘拐でもすれば、一生遊んで暮らせる身代金が要求できる』

『カムラル家の下につく形となっている他の有力王家が、次の盟主の座を奪い取るために、

カリウス・カムラルの命を狙っている』

『世界の支配を目論む魔人族たちにとってみれば、カムラル家は最も邪魔な存在』

まさか本人が聞いているとは夢にも思わなかっただろうが、様々な仕事を請け負っているうちに耳に入ってきた嘘かホントかも分からない噂話。

全てが……特に他の三家のことに關しては出任せだとは思うけど、それらの全てがただの噂ではないことを示すように、過去に一度オレたちは馬上で襲撃されたことがある。

それは魔物だった。

頼もしき『風紀』のものたちが国の周りを固めているため、決して外からは入ってこられないはずの魔物が。

幸い、小さい頃の魔物に対しての苦い思い出……その教訓もあつて、オレたちには腕に覚えがあつたし、ラネアさんたちもいたから事なきを得たわけなんだけど。

どうやら国内にいる誰かが、俺たちを狙うために魔物を召喚したという噂が広がって。

それ以降馬車には厳重な警備がつけられるようになってしまったのだ。

それまでは風を感じる事ができたのに、今は対魔法の力を秘めた堅固な鋼の風防と、強化硝子に変えられ、馬車の周りには常に八人以上の護衛がついている。

せめて自分の身は自分で守らなくてはいけない。

そんな経験と教育を受けてきたからこそ、大げさじゃないかなあとはちよっと思っけど。

結局それは、面子と立場が許されない。

万が一のことを考えて、昼間の外出はいつも籠の鳥だ。

風の音も聞こえない。

ゆっくり進む外の景色を見ていると、その不自由さを強く感じる。

比較的自由にさせてもらえるスクールでのひと時と、カリウス・カムラルではない自分……『夜を駆けるもの』である自分がいなければ、オレはその雁字搦めさにとづくにどうにかなってしまっているだろう。

同じ立場にあつて、その面子と立場をわきまえているサミイのことを考えれば、そんな思いは我が俣以外の何ものでもないんだろうけど。

と、そこではたと気付く。

勢いの成り行きだったとは言え、ノヴァキにオレが『夜を駆けるもの』であることを教えて……

もし彼がそれを公表していたらとんでもないことになっていたんじゃないかなろうか、って。

きつと、せつかく不可侵の自由を許してもらっている自室にも人がつくだろうし、下手したらスクールすら通わせてもらえなくなるかもしれない。

自分が悪いことをしているという自覚があるからこそ、余計にそう思えて。

言わないでくれると約束してくれたノヴァキに、感謝してもしきれなかった。

そんな心内の感情は……少し外にただ漏れただのだろう。

もしかしたら思い出し笑いでもしていたのかもしれない。

対面にいたサミイが、とても面白いものを見た、とばかりに転がるような笑みをこぼす。

「ふふ、ごめんなさい、カリス。よっぽどいいことがあったんですね。……もしよければ、話を聞かせてもらっても？」

二人きりの時ならともかく、仕事のできるお付きの二人は、そんなオレたちの会話に混ざることにはなく、逐一耳を傾けている。

その上で、何か話せることがあれば、ということなのだろう。

ノヴァキとの出合いを話せば一番なんだけど、そもそもサミイはオレが『夜を駆けるもの』であることすら知らない。

サミイには楽しい夜の散歩のことはいつか話したいとは思っていたけど。

本格的にバレて身動き取れなくなるのは嫌だったし、かといって珍しくサミイから話をふってくれたのに、何も語らないわけにはいかないだろう。

オレはそれに頷いて。

「うん、あのさ。来週の試験なんだけどさ、パートナーが決まりそうなんだ」

そう言った。

サミイは学年こそ一つ下だけど、今度の実践試験はハイグレドクラス三学年合同のもので、当然知ってはいたんだろう。

「え、そうなんですか？……どんな人なんです？今の今までパートナー決める気なんて全くなかったのに」

思ったよりも驚いた様子のサミイがそこにいる。

確かに言われてみれば、ノヴァキにそう言われるまで誰にしようとかあまり考えたことはなかった気がする。

何事もなければサミイや他の三家の誰かと組めばいいか、なんて思っていた。

「……もしかして、ティンさんですか？」  
すると、何だか嫌だけど断定するみたいなの、低い声色でサミーがそう聞いてくる。  
さらに、それまでオレたちの話なんて聞いてませんよってフリして聞き耳を立てていたラネアさんとケイルさんが、あからさまにびくりと反応した。

「え？　なんで？　違うよ」

みんなの反応に、今度はオレのほうが驚いて目をしばたかせる。  
ユーライジアの四王家のひとつ、ルート・ガイゼルの騎士、それがサミーの言うティンことティン・オカリーと呼ばれる少年だ。  
オレと同じ学年で、知り合ったのはセントレアクラスに入ってからだったけど、知的で……だけど面白い、いいやつだ。  
何よりオレと、友達として接してくれる数少ない人物の一人でもある。

「ですけどカリス、あの人に誘われてましたよね？　試験のパートナーの件で」

言下に否定したのに返ってきたのはオレの言葉をまだ疑っているみたいなの、サミーの外行きの言葉だった。  
だけどそれで思い出したのは、サミーは生理的に合わないとかいつてティンの事を嫌っていたことが一つ。  
そしてもう一つは、すっかり舞い上がって？　失念していたけど、そう言えばティンにもパートナーを組もうかって話をしていただけだった。

「……そう言えばそうだった。すっかり忘れてたよ。ティンに謝らなくちゃ。随分熱心だったからちよつと気が引けるけど」

随分と友達がいないやつだなあと自分自身で思いつつ、苦笑を浮かべる。



「なんだ。本当に違うんですね。脈ありな感じで楽しげに話されていたから私はてっきりカリスもその気なのかと思ってましたけど……」  
「……」  
「そこでようやく分かってくれたのか、何故か安堵のため息をついているサミイ。」  
あまり表には出さないが人見知りなサミイは、特に男の人が苦手な部分があるから、そのせいなのかもしれない。

「確かに組まないかとは言われたけど、別のその気があったわけじゃないよ。数少ない友達と話してるんだから、そりゃ楽しいけどさ」  
もしかしたら、最初オレが考えていたのと同じように、サミイはオレと組むつもりだったのかもしれない。

それを考えると申し訳ないなあって思いつつそう言つと。  
今度は何故か大爆笑される。

そう、大爆笑だ。  
サミイもラネアさんもケイルさんも、三人そろって。

「ぶっ……くくく」

「カリスもなかなか言いますね」

「……傑作だな」

心底楽しそうな、まるで溜飲でも下がったかのようなラネアさんの笑顔。

何かに感心しているサミイに、めったに聞けないケイルさんの楽しげな呟き。

「……？」

その場の空気が暖かく朗らかなものになったのはいいことだったんだけど。

今オレ、何か面白いことでも言ったんだろうか？って首を傾げずに

はいられなかった。

世間知らずとはよく言われるけれど、やっぱりその通りなんだろうなってしみじみ実感させられてしまう。

「とすると、カリスと一緒に組む人って誰なんですか？ ルレインってことはないと思いますけど……」

そして、オレの頭が疑問符で一杯になっているところに、うやむやにはさせません、とばかりにサミイがそう聞いてくる。

「ああうん。違うよ？ ルレインはルコナで決まりでしょ。……そうじゃなくて、新しく友達になったやつなんだ。ノヴァキって言うんだけど……たぶん明日スクールで会えると思うし、紹介するよ」「サミイには迷惑をかけっぱなしだから。

基本嘘つきなオレだけど、せめて彼女の前だけではあまり嘘をつきたくない。

出会った場所や時間のことは話せないけど、これくらいなら許されるだろう。

オレは頷き、そう答える。

「聞かない名ですね。四王家の人じゃないんですか？」

「うん」

「……新しい友達ですか。四王家の人間でもないのにカリスに話しかけようなんて思うとはいい度胸です」

多分違うだろうなって頷くと、返ってきたのは何だかちょっと怒ってでもいるかのような、オレの心にぐさりと刺さる冷たい言葉だった。

「……どうせオレは友達もちょっとしかいない駄目人間ですよーだ」「いじけるようにそう言つと、スクールでの自分を思い出して、どんだんみじめになってくるオレである。

基本的に四王家以外の生徒たちは、話しかけてもくれないし近付い

てきてもくれない。

オレが歩けば波割れるように人垣が割れるくらいだ。

カムラルの家の人間だってこともあるにはあるんだろうけど、どうもここ最近それだけではないような気がしてならない。

それに友達友達って言うてるけど、そんな友達の約束すら忘れるようなオレを友達だって思ってるのはオレだけで、合わせてくれるんじゃないのかなって思うときもある。

なんて言えばいいのか……触れようとするのを避けられるというか、言葉では表現しづらいけど、そんな感じなのだ。

特にさつき名前があがったティンヤルレインなんかは。

でも、中にはマイカみたいなの気兼ねもなく接してくれる子もいるにはいるわけだから……さつきみたいに世間知らずなオレが、ちよっぴり避けられるようなことをしてしまった可能性もある。

「そんな泣きそうな顔しないでください。そういう意味で言ったんじゃないですって……」

よくできた妹が、困ったもんだと苦笑してなぐさめてくれるけど、思ってた以上にサミイの言葉は効いたらしい。

そのまま、母さんのいる場所につくまで、オレは気分の奥深くへと沈んだままだった。

気にしないようにしてはいたつもりだったんだけど。

やっぱり自分は弱いなあ、なんてしみじみ思い知らされつつ、今日も今日とて馬車はゆく。

日課である、世界の中枢と呼ばれる場所に。

毎日変わることなく、母さんのいるその場所に。

（第6話）

## 第6話、本音はいつも、母の前で

「カリス様、到着いたしました」

呼びかけるその声ではつとなり、オレは馬車の中を降りる。

カムラル家直属の騎士たちに壁を作られ道となるその先には、見上げるほどに大きな扉があった。

玄関の屋根下には、音の符を表す紋様。

『風の教会』、と呼ばれる場所だ。

世界を構成すると言われる十二の根源のひとつ、<sup>ヴァーレスト</sup>風を祀るもので、<sup>カムラル</sup>火の根源をあがめるオレたち一族とが縁が深い。

表向きには、お互いの親睦と交流のために、オレたちは足しげくここへと通っている、ということになっている。

触れることなく開け放たれた扉の向こうには、ユーライジアでも一、二を争うほどの大きさを誇る、大聖堂が広がっていた。

中心には、世界全ての風の音を聞き、歌うと言われる風の根源、ヴァーレストの姿。

立ち並ぶ長椅子がヴァーレストを中心に円を描いているのは、その歌声を聞き、あるいは祈り歌を捧げるためだと言われている。

今は、祈りを捧げるものはいないようだった。

もつとも、広さの割にはここを利用するものは少ない。

四王家の一つであるヴァーレスト家のものか、オレたちくらいだろう。

運が良ければ懇意にしてもらっている友人の一人であるキキヨウ・ヴァーレストの心揺さぶる美声を聞けるのだが、今日は外れだったらしい。

キキヨウの姿は、そこにはなかった。

「あれ？ キキヨウってば、今日はお祈りお休みなのかな？」  
後々会うことになるだろうから、それはそれでいいんだけど。

「どうでしょう。ルフローズの日の準備にでも追われてるんですかね、まだまだ先のことですけど」

サミイが言うのは、一年に一度だけある、氷の根源ルフローズをあがめる日のことだ。

ルフローズは催し物好きで、その日はどの家でもいろんな催し物が開かれる。

かくいうオレたちも、ヴァーレスト家の催し物に参加するつもりでいた。

何か出し物を考えておいてねって、そう言われていた。

(出し物かあ……)

その時思い出したのは、何故かノヴァキの顔とトランペットの音色で。

「カリス、お祈りしましょう」

「あ、う、うん」

サミイにそう言われてはつとなり。

オレたちは……特にオレは歌が下手なこともあって、心内で祈りを捧げた後、パイプオルガンの脇に隠れた、小さな扉へと入ってゆく。

そのまま迂回するように聖堂の裏手に回ると。

薄暗い広間に、全ての魔力の奔流を混ぜ合わせてできたような虹色の、光の渦があった。

それは虹の泉、なんて呼ばれている。

この世界を守る使命を負ったカムラルの一族だけが入ることの許される場所だ。

時の間に繋がっているとも言われるそれは、『資格』がないものを

阻むと言う。

何でも、そのの間には、とてつもなく恐ろしい怪物が住んでいて、資格なきものを血の一滴も残らず食らいつくすらしい。

本当なのかどうかは確かめるわけにはいかないからなんとも言えないが、そんなわけでここまで着いて来てくれたラネアさんとケイルさんとは、一旦ここで離れることとなる。

母さん……アスカ・カムラルに謁見できるのは、いつもオレたち二人だけ。

母さんにあつたことを気兼ねなく話せるのはいいとしても、その事を考えるとちょっと寂しい気持ちになる。

そしてそれは、いつか母さんの後を継いで『アスカ』として生きなければならぬことへの戸惑いの一つでもあつて。

「カリス？ 行きますよ？」

「あ、うん」

そんな事を考えていたオレに、差し出されるサミイの手。

オレは頷きその手を掴む。

それは、二人で来る時には必ずする習慣みたいなものだ。

時の間に住む怪物の話聞いて怖くなって以来、欠かさずそうしている。

どちらがそう提言したのかは……お互いの名誉のために口にはしないけれど。

「お気をつけて言つてらっしゃいませ」

オレたちはラネアさんの見送りの言葉に一つ頷き、その七色の光の渦へと同時に一歩踏み出す。

何かを捉える感触はない。

代わりにあるのは、吸い込まれていくような力と、軽い酩酊感。視界は虹色の渦を描き、ぐるぐると回る。

何度体験しても、慣れない感覚。

自分が立っているのかすらもよく分からなくなって。

分かるのは右手にある、柔らかく華奢なサミイの手のぬくもりだけで……。

「カリス、もう終わりましたよ」

「……あ、うん」

オレは、再びサミイの声で意識を呼び起こされる。

虹の渦をずつと見ていられなくてぎゅつと閉じていた瞳を開けると、そこには橙に染まる空間が広がっていた。

足元には、赤煉瓦の地面。

橙の中空をバツクに、浮かぶ赤煉瓦の塊でできた階段が天まで続いている。

その階段を昇りきれば、母さんがいる。

「相変わらず慣れませんか、カリスは」

「いや、だって。目を開けてまだ時の間だったりしたら怖いじゃないか。怪物が口を開けて待っていたらイヤだろ？ ……今まではたまにたまうまく言ってるけどさあ、何かオレだけその資格ってやつをいきなり失ったりしそうでさ」

サミイのちよつと呆れたような言葉は、サミイに声をかけられるままでオレが目を開けようとしなからなんだろう。

何だかどつちが年上か分からなくなつて、照れ隠しするみたいに、オレはそんな事を口にする。

「そんな事あるわけないでしょう。めったなこと言わないでください」



い。言葉にして表わすと本当になってしまいます、よっ!」

「お、おふ。……ごめん」

何気なくの言葉に対してサミイがしたことは、両側から叩くみたい  
にオレの頬をその手で包んだことだった。

サミイの口にしたことは、魔法の原点だ。

その口調はやけに真剣で。

その状態のままに平謝りする。

「なに？ キス？ キスするの？」

……と。

その時横合いからかかってきたのは、心底楽しそうな、からかうよ  
うな女の子の声だった。

「なわけないでしょう。いきなり現れて開口一番それですか、アル  
は。まったく」

何故だか知らないけど、パチンと一度オレの頬を叩いたサミイは、  
呆れたようなため息をつく。

ぬくもりの残る頬をさすりながら声の主のほうを見やると、そこに  
はオレやサミイの妹だと言っても通るだろう、赤髪赤目の、可愛ら  
しい女の子が、その見た目に合わぬ笑みを浮かべてこちらを伺って  
いた。

「おはよう、アル」

「……おはようございます」

「おはよ。カリスちゃん、サミイちゃん。今日も目がくらむほど  
かわいいね!」

それは、お決まりの朝の挨拶。

かわいいとかきれいとか、愛でる言葉が好きらしい。

オレだろうがサミイだろうが関係なく、それこそ会うたびに挨拶代

わりにそう言ってくるので、もう慣れてしまっていた。

問題があると言えば、場所を選ばずして、というところだろう。

最近サミィや友人たちも悪戯に真似するようになってしまっ  
てちよっと恥ずかしいやら情けないやらで。

「今日はここにいたんだね」

「うん、スクールは休みだし、二人が来る予感がしたからね」

そう言っただけに微笑むアルは、正しくは人ではない。

ユーライジアの世界を構成すると言われる十二の魔力の源……それが意志を持ち形をなした存在で、

魔精霊ませいれいと呼ばれる種族の少女だ。

少女、と言ってもこれでもオレたちの何倍も長く生きているらしいらしいというのは本人の言葉しか証拠がないからだ。

まあ、ここでは母さんを守る番人である一方で、母さんが作ったユーライジスクールを、母さんの代わりに纏める人物……理事長の任をこなしているところを見ると、それもあながち嘘ではないんだろ。

魔精霊の友人は何人がいるが、その友人曰く、魔精霊には力に  
応じてとる姿が異なるらしく、人の形……『人型』をしているのは、よっぽどの力を持つもので位が高く、めつたにないらしい。

言われてみれば、一般的に魔精霊と言えば動植物を模したものがほとん  
どで、魔物と混同されることも多いから。

やっぱり目の前の手のかかるほうの妹に等しい彼女は、言うだけのこと  
はある偉い人物なのだろうと、オレはオレで自分を納得させていて。

「もしかして待ってくれてたんですか？ 休みとはいえスクールの

仕事はあるんでしょう?」

「だいじょぶだいじょぶ。そっちはヴァーレストちゃんやガイゼルちゃんが頑張ってるから」

律儀で礼儀正しいサミイは、見た目年下の妹なアルに対しても、ちゃんと敬意を払って接している。

だが、一見きつちりとしたその口調には、外では見せない柔らかかな響きが混じっていた。

スクールの理事長と言えば、ユーライジアでは一国の主を意味する。細かいことを言えば、他の三王家と共同で国を治めているわけだが

……

それらは全て、母さんの役目だったはずのもので。

アルはその代理だ。

代理だったけど……そんな事はあまりオレたちには関係なかった。

代わりなんかじゃなく、間違いなくアルは、オレたちの家族だった。

「それじゃあゆっくりしていいのかな? 母さんは元気?」

「そりゃあもう! 元気だよ。カリスちゃん何かいいことあってでしょ。私、分かるんだからっ」

「はは、そっか、うん。いいことって言うか……面白いことって言うか、話したいことはあるかな」

なんだか見透かされたてるみたいで、照れ笑い。

「よし、それじゃあ、しゅっぱーっ!」

そして、元気なアルに背中を押され、オレたちは浮かぶ階段を昇ってゆく。

下の階段からは、大きな丸い円に見えた場所。

階段の終点まで上りきると、そこは赤岩の地面に巨大で精緻な魔方阵が描かれた舞台のような場所だった。

その中心、四本の白柱に囲まれるようにして、ルビーのように深く赤く透き通った結晶体がある。

それは、火を表わす三角架を頂点に据えていた。

母さんは……その結晶体の中、礫にでもされているみたいに両手を広げ、眠り続けている。

「……………」

「……………」

ここに来ると必ず、オレたちはしばらくの間、言葉を忘れてしまう。自らを持って世界を守るその姿に、神々しいまでのその姿に、圧倒されているのもちろんあるだろう。

でも少なくともオレは、それよりも先に、いずれは母さんの後を継がなくてはいけないというその使命に恐れていた。

「ほらほら、いいことってなに？ 教えてよ？」

アルは、彼女言葉を紡ぐことの叶わない母、アスカの代弁者でもある。

オレたちは、彼女に促される形でひざまずき、祈りを捧げる。

「別に普通にお喋りしてくれてもいいんだけどなあ」

心内で新しい友人……ノヴァキの事について訥々と語っていると。

横合いから不満そうな呟きが聞こえてくる。

この場で鈴なる言葉を発するのはいつもアルだけだ。

語ることはない母さんに合わせるようにして、オレたちは祈る。

日々の変化を、思い出を伝えてゆく。

そしてその一方で、オレはいつも訴えていた。

アルやサミィには決して口にする事のない我が俣を。

ずっとずっと思ってきた……本音を。

（やっぱりオレには無理だよ、母さん。『夜を駆けるもの』の話はしたでしょ？ 家でじっとしていることでさえ耐えられないんだ。オレに、こんなとこでじっとしてるなんて、無理なんだ……）

まさか、現実で逃げ出して、サミイに迷惑をかけるわけにはいかないから。

それはあくまでオレの心内だけに留め続ける愚痴だった。

オレがスクールの最小学級、リトクラスへ上がる頃から、ずっとここで眠ったままの母さん。

それは寂しく、悲しいことだったけれど。

何を守ってるかも分からないこの使命を負う破目になったことは母さんのせいじゃなかったから、カムラル家の宿命だったただだから納得するしかなかったし、我慢した。

オレにはサミイがいたし、まさしくそんな母さんと入れ替わるようにしてオレたちの前に現れたアルが、ラネアさんたちがずっと側にいてくれたからだ。

でも、その使命が自分に降りかかってくるとなると話は違ってくる。

（大切な人たちも守れないのに、一体何を守ってるの？ ねえ、教えてよ、母さん）

母さんは何も悪くないのに、オレは一方的に辛辣な言葉をぶつける。オレが、いつかは継がなくてはならないこの使命に嫌気がさしたのは、母さんがここで眠り始めてすぐの事だった。

十年前、ユーライジアの国を突然襲った、魔物の大群。

昔の悪い魔人族が裏で糸を引いていたという噂も立った。

その魔人族が、一度繰り出せば街が焦土と化す覆滅の魔法を使い、ユーライジアを滅ぼそうとしたとも。

真相は定かじやない。

ただ、たくさんの人が死んだのは確かだった。

その中には、オレたちの父さんの姿もあって。

何もできずに泣きじやくっていたのはオレたちも同じで。

母さんを責めるいわれはないのは、もちろん分かってる。

だけど……母さんは、父さんの死に目に会えなかった。

もしかしたら死んでしまったことすら知らないんじゃないか、とすら思う。

本来いるべき場所に母さんの姿はなく。

代わりにオレたちと一緒にになって継るように泣いてくれたのはアルで。

だからこそ。

オレは強く思うようになったと思う。

大事な人も守れないのに、何を守れるのだろうか。

……でもそんな考えは、本当は誰も聞いてないってことを分かっているからこそその独白だ。

オレはその思いを、きつと死ぬまで秘めたまま生きるのだろう。

現実をもって母さんの後を継ぐことは、オレにとっては当たり前として確定されていることなのだから。

(こんな事考えてるようじゃ、そのうち『資格』剥奪されそうだな) 思わず苦笑。

それを心のどこかで望んでいる自分に。

「今日はずいぶんと長いねえ」と、そこで。

退屈になったのだろう。

アルのそんな声が聞こえて、オレは考えるのをやめ、目を開ける。立ち上がって見れば、サミイもつくにお祈りを済ませていたのか、オレの事を待っていてくれた。

「ごめんごめん。いつもより話すことたくさんあってさ」

「いえ、問題ないです」

そっけないけど、嘘じゃないだろうサミイの言葉。

こうやってお祈りの時間が重なる時は、いつもサミイはオレの事を待っている。

一度理由を聞いたなら、オレの顔を見ていて面白いかららしい。顔には出していないはずだけど、それはそれで複雑なもので。

「この後どうするの？ 用事ある？」

「私は特に」

「あ、オレマイカと約束してるんだ。いつものやつだけど、なんかおいしいお菓子見つけたんだって」

マイカは、オレの数少ない友達の一入で。

四王家のひとつ、エクゼリオ家の姫にして魔精霊の女の子だ。

両親はいないらしく、国を治めているひとりでもある、祖母と一緒に暮らしている。

エクゼリオ家が四王家に加わったその歴史が浅く、まだ九年ほどしか経っていない。

それがなぜ他の三家と肩を並べているのかと言えば……詳しいいきさつはよく分からない。

何でも母さんとエクゼリオの長であるマイカの祖母との間には深い親交があったから、だそうだけど……。

「マイカちゃんかあ。そう言えば最近、へんなムシがついてるってゆってたけど、ゴキブリみたいなの」

「……キミテのこと？ ひどいなあその言い方。確かにでっかくて全身黒つぶいけどさ、面白いやつだよ？」

マイカはオレと同学年でスクールの副会長を務め始めたばかりだ。理事長としても接する機会も多く、仲良くしてるのをよく見かける。それは、二人とも希少な『人型』の魔精霊だし、マイカもオレと同じ年の割には幼い雰囲気醸し出していて、同じく幼いアルとウマがあつのかもしいけど……。

ここ最近になって、マイカの家で新しい執事を雇ったのだ。

それが、キミテ・リヴァと言う少年で。

どこで知り合ったのかマイカに聞いたんだけど、恥ずかしいのかななのか、『拾った』の一点張りだ。

アルは仲の良い友達を取られてしまったような気分になったのだらう。

眉を八の字にしている様は、そんなキミテが気に入らないらしいことがよく分かる。

「面白いって……話したんですか、その人と？」

「あ、うん。このマイカの家に行ったらいたんだよ。随分無口なやつでさ。マイカがいないと、ほとんどオレと口聞いてくれないんだ。でもって凄く大きな身体でさ、逃げ足が速いっていうか……」

こう言っちゃなんだけど、見ていて飽きない。

アルの悪口も言い得て妙のような気がしちゃってる時点で、オレも存外ひどいわけだけだ。



「まさか、カリスが試験の相棒に選んだ人ってその人ですか？」

「え？ ……あはは。それこそまさかだよ。キミテは生徒じゃないし」

また引きずってたんだその話題、なんて思いつつも、オレは笑顔でそれを否定する。

「生徒だよ？ この前マイカちゃんが入学手続きの申請してきたもん」

ますますぶーたれた様子のアル。

となると、キミテは中途入学生、ということなのだろう。

「何年生？」

「ハイグレードクラスの一年生」

「おお、優秀なんだ」

「……っ」

基本的に、ユーライジヤスクールは、新しくやってきた人を拒まない。い。

他国、他大陸から引越してきても、すぐにスクールに通うことができる。

ただ、中途の入学生は、ちょっとした試験を受けることになっている。

その結果により、どのレベルの教育が相応しいか判断するためだ。今年二年のオレとそう変わらない年に見えたから……それはすなわち、ユーライジヤに九年通っていると同等の実力を認められたってことなのだろう。

それって結構、凄いことなんじゃないかなって思う。

ハイグレード一年生になったばかりのサミイが思わず固まるくらいには。

「相棒って、次の試験……ハイグレードクラス合同のやつだよね？」

もしやカリスちゃん、あいつと組む気なの？」

「だからないって。そんな話したことないし」

と、どこでサミイとよく似た拗ねた顔で、そんな事を聞いてくるアル。

オレは思わず破顔し、そう言って手を振った。

第一そんな事をしたら、マイカに悪い、と言うか、オレが彼の事を面白いと思う一番の理由はそこだった。

マイカの家に行けば、いつも一緒にいる二人。

無口な彼のことはまだ分からないけど、マイカは絶対にキミテに気があるのだとオレは思っている。

マイカの友人としては、その想いが実ることを是が非でも応援したかった。

……オレには縁遠いどころか道が閉ざされていると思うと、余計にそう思えてならなくて。

「ま、そう言うことだから。オレもう行くよ」

「そっか……ならいいや。お家でお夕飯作って待つてるね」

「うん。楽しみにしてるよ」

「……っ」

時間は決めていなかったけど、あまり遅くなるのもまずいだろう。

オレは、アルとそんなやり取りをして、手を振って階段を降りてゆく。

ちなみに、ここの番人のはずのアルは、スクールだけじゃなく、暇さえあればうちにくる。

そんなんで大丈夫なのかって聞いたら……時の間の怪物が番をしてくれてるから、大丈夫、だなんて言っていたけど。

そんなオレに、ワントンが遅れて、アルと挨拶を交わした後、サミイがついてくる。

「やっぱり私も、マイカさんのところへついていってもいいですか？」

「ん？ りやもちろんいいと思うけど……何？ キミテのことが気になるのか？」

「ことスクール以外あまり外に出たがらないサミイにしては珍しい言葉だった。

だからからかうみたいに、そう言う。

「違います。世間知らずで無自覚なカリスには私がついていなければ、何しでかすか分かったものじゃないからです」

「はは、手厳しいなあ」

サミイが言うほど、世間知らずなオレじゃないってのは口には出せない。

かといってオレ自身、世間の酸いも甘いも知り尽くしている、なんて事は遠く及ばないのは事実だけど。

心痛める罪悪感をひた隠しにしつつ、オレは肯定の意味での苦笑を浮かべる。

「それじゃあ、一緒に行こうか」

「はい」

「いつてらっしやーい」

馬車の人たちもラネアさんたちも、バラバラになるより二人一緒のほうが手間がかからなくていいだろう。

サミイがついてくることに、異論なんてあるはずもなく。

オレたちはアルに見送られ、渦を巻く名もなき扉をくぐり、マイカの家へと向かったのだ……。

( 第7話につづく )

## 第7話、無垢なる時と、純なる闇

そうして、再び馬車の中の人になってしばらく。

たどり着いたのは、オレたちが通っているユーライジアスクールだった。

生きるための術と、その心を養う知識を学ぶためのその場所は、ユーライジアの国そのものだといっている。

ユーライジアの国土の約五分の一を占め、世界各地の子供たちが集まってくるだけでなく、この国の政治の中心地であり、その広い敷地の中にたくさんの人々が暮らしている。

その一角に、家のないもの、実家が遠いもの、人と生きることを選んだ十二種族の魔精霊たちが暮らす、『寮』と呼ばれる地域があった。

そこにある中央庭園……さらにそのど真ん中に居を構えるのお屋敷こそが国をまとめる四王家のうちのひとつであるエクゼリオ家のものであり、ここ一帯の魔精霊たちを統括しうる人物……アイカ・エクゼリオが暮らす場所だった。

マイカは、アイカの孫になるらしい。

オレが物心つく頃からここに暮らしている彼女たちだが、マイカの両親に会ったことはない。

マイカ曰く、二人は遠い遠いところにいるのだという。

それは、まだ母さんの理想とは程遠いこの世界においてよくあることだったから、その事については突っ込んで聞くような事はなかったけれど。

「何故この場に来るといつも雲行きが悪くなるのだろう……」

そんな事を考えつつ、馬車から降り立つと、別名『闇の城』と呼ぶにふさわしいマイカの家の手まゐを見て、ケイルさんが珍しく不思議そうな顔をして、そんな事を呟く。

「えっと、確か……マイカ様たちは闇の魔精霊だから、お屋敷の周りに結界を貼ることで、自分たちが過ごしやすいようにしてらって聞きましたけど……」

それに、真面目に答えたのはサミイだった。

確かにそれはその通りなのだろうけど。

サミイもそのお付きのケイルさんも、あまりこの場所に来ることがなかったから知らないのだろう。

この、『おどろおどろしい』という表現が相応しい、雷が轟き、黒雲の合間から赤い月が覗き、深い霧が立ち込めるこの場所に、本当はちゃんとした意味などないことを。

いや、ないなどと言ったらマイカに失礼だろう。

これは、マイカの演出なのだ。

掲げた題目は、『いかにも魔王がいそうな城』らしい。

ただ一つ問題なのは、マイカにしろ祖母のアイカにしろ、このロケーションが全くもって似合わない、ということだろう。

特にマイカは、夏の日差しが似合うような澁刺とした可愛らしい女の子だ。

それでもあえてこの景色に似合う感じで言うなら……魔王の城にとらわれたけど逃げ出す気満々のお姫様、といったところだろうか。自分で言っていてよくわかんないけど。

「……っ」

「……ん？」

そんな事を考えながら、庭に一面に咲く、薬草の元になるらしい黄色い花々と、それを囲むようにしてさらさらと揺れ続けるススキによつて成された、屋敷の前にある庭園を眺めていると、なんか違和感。

初めにそれに気付いたのはラネアさんだった。

ざわざわとした蠢きに変わる、ススキの穂。

その、草花に隠れて死角になっている場所に、なにかいるらしい。

一瞬の緊張が走る中、何だろうつてオレが首を傾げていると。

そこから飛び出してきたのは、子供の竜だった。

赤い身体に鱗はない。

カムラル  
火に属する魔精霊の幼生だ。

あるいは、『獣型』と呼ばれるそれは、ぴいぴい鳴き声を上げながら一目散にこちらに駆けてくる。

たぶん、オレたちの魔力の香りにでも釣られたんだろう。

『獣型』の魔精霊には縁がないというか、どちらかというど避けられ気味だったオレはなんだか嬉しくなつて体勢を低くし、近付いて受け止めようとする。

「カリス様っ！」

カムラル家のものなのに、一度も触ったことがなかったから、どんな感じなんだろうつてちよつと興奮気味だったオレだったけど。

しかしそんな儂い願望は叶うことはなかった。

鋭く叫ぶラネアさんの声と、しゃがむ格好になったオレを、黒い影が覆ったからだ。

火の魔精霊は、それから逃げていたのだろう。  
オレの手をすり抜け、あっという間にどこかに行ってしまう。

「あゝあ、せつかく触れると思ったのに……」  
背後で噴き出す敵意。  
駆け寄ってくる気配。

オレはそれに大丈夫だよと言わんばかりに言葉をもらす。  
お前もオレと同じで魔精霊には好かれない性質なんだなって、内心でちよつと親近感が沸きつつ顔を上げると。  
そこには全身黒づくめの……オレの縦も横も三倍はあるんじゃないかなろうかってくらいの大男がいた。

「……二人いる」  
一体、どんな身体の構造してるんだってくらい低い声。  
しかし、それはこちらを威圧するものではなく、純心無垢な子供を  
思わせる。

そんな見た目に全く合わない声だ。  
そう思うのは、身体の大きさが心の大きさを表すかのように、一見  
鋭い彼の大きな黒目の中に、澄み切った光を見出せるからなんだろ  
う。

ついでに彼は言葉が足りないことがままある。  
彼……キミテの人となりを知っているオレならともかく、サミイた  
ちには何のことやらだろう。  
いつの間にかオレを庇うみたいに立っていたサミイとキミテを交互  
に見やってから、オレは一つ頷き、答える。

「ああ、そっか。キミテには紹介してなかったよな。オレの妹のサ  
ミイだよ。で、後ろにいるのがうちのメイドさんで、ケイルさんと



……ああ、ラネアさんは知ってるか」  
オレは、黙ってればサミイとよく似てるって言われる。  
背格好も雰囲気も結構違うと思うんだけど。  
やっぱり妹だから、どこか似てしまうものなのかもしれない。

「で、こつちがキミテね。マイカの……執事っていうか、お世話係  
だっけ？」

「う……」

にこやかに紹介すると、茂みから急に出てきた自分のことを思い出  
したのであろうか。  
キミテはオレの問いに答えることはなく、物凄い勢いでオレたちか  
ら間合いを取る。

「すまない。驚かせた。……キミテという。マイカのところにお世  
話になってる」

かと思つたら、頭が地面につくんじゃないかってくらい深々と頭を  
下げ、最後のところだけ否定してみせた。

「いえ、あの……ご丁寧にどうも。カリスの妹のサミイです」

離れたことと（オレ自身は避けられてるみたいで結構へこむんだけ  
ど）、その下手すぎる態度に、さっきから背後からびしびし伝わっ  
てきれいた敵意が和らぐのが分かる。

いつの時でも仕事熱心なメイドさん二人に思わず苦笑していると、  
相手の態度に対して何も言わないのでは失礼だと思つたのか、こつ  
ちも律儀に頭を下げて自己紹介するサミイ。

引っ込み思案というか真面目というか、そんなところがちょっと似  
てる気がして、ちょっとおかし。

オレは楽しいな笑みを浮かべながら、そこで疑問に思っていたこと  
を口にした。

「そんなとこで何してたんだキミテ？ 泥だらけじゃないか。庭の手入れかなんかか？」

「……………」

「うおっ？」

この大男が草花に隠れて見えなかったわけだから、きつとしゃがみ込んだりしてたんだろう。

半ば無意識のままめに黒の一張羅についてた葉っぱを取ってやると、キミテはその大きな身体からは想像もつかない俊敏さでオレから離れる。

その大げさなりアクションに、同じように間合いを取って声を上げるオレ。

「ごめん。なんつーか手が勝手に」

「……………いや。こつちこそすまない」

見た目にそぐわぬ、その空気だろうか。

キミテとはまだ会ったばかりなのに、どうも大きな弟ができたような感覚にさせられてしまう。

「……………さっきのあいつ、ここに住み着いてるんだ。マイカはそれを許可してるけど……………時々悪戯するから」

お互いの間に包むのは、なんとも言えない微妙な空気。

キミテは、それを打ち破るようにして、唐突にそんな事を言った。

慌ててたからなのか、それが素なのか、今までの会話の中では、一番の長台詞で。

一瞬考え込んだけど、それがキミテがこんなところで草花まみれになつていた理由、ということなのだろう。

「そっか、燃やされちゃったりとかするの？」

「……………ああ、簡単に燃えるのが楽しいらしい」

確かにそれは、追いかけてもしょうがないかなあって笑っただけ

ど……そこから再びのだんまり。  
どうも会話が續かない。

それはいつものこと……いや、元々無口なほうのキミテにしてみれば、まだ会ったばかりのオレに対してちゃんと会話してくれたほうなんだと思う。

あんまり喋ってくれないその原因は、オレにあるらしいことは、つい最近マイカから聞いた。

何でもオレには、カムラルの家の肩書きに上乘せするように、おいそれと近付いてはいけないような、そんな雰囲気醸し出しているらしい。

何故らしい、かというと、オレ自身に全くその自覚がないからだ。オレにはそんなつもりはないのに……誰もが一步引いてしまう。

だからオレには、友達が少ない。

いや、それでもオレと仲良くしてくれる奇特な人は結構いるのだから、その少ない友達のことを、オレは大事にしなきゃっていつも思っではいるけど……。

自分ではその近付きがたい雰囲気ってというのがよく分からないので、近付きやすい雰囲気を作るにはどうすればいいのかと、その中でも一番の親友のマイカに聞いてみたら……返ってきたのは『無理』というたった一言だった。

その事にへこみつつも、何故無理なのかは今現在絶賛討論中なわけだ。

「カリス、おそ〜い！」

そんな事を考えていると、横合いからそんなにべもない言葉を発し

た張本人が姿を現した。

「きゃっ?」

「っ!」

「……ほう」

それに対する三者三様の反応。

それも仕方ないんだろう。

いつのまにそこにいたのか、はたまた最初からそこにいたのか、キミテの背後にある庭園から、マイカがひよっこり姿を現したからだ。キミテと同じように、草花まみれになって。

マイカ・エクゼリオ。

自称、最強の『闇』の魔精霊。

一種の近寄りがたき……美しさというよりは、可愛らしさを持つ少女だ。

その耳元で切りそろえられた髪はさらさらのブロンド。

いつも潤んでいる……時に様々な色を見せるエメラルドの瞳は、無垢と神秘を内包している。

「……マイカ、いつの間に」

「こらーっ、あんたは使用人なんだから様をつけなさい様を!」

肩をいからせ、びしって怒ってるつもりなのだろうが、リトクラスの子くらい小さな身体と、全身を派手に飾り立てる黒とピンクをを基調としたフリフリのドレスでは、全くもって迫力がなかった。

「分かった。マイカ様」

「そうそう、それでいいのよ。……んで? あんたに与えた仕事は?」

「……まだ」

「なら、ちゃっちゃとやっちゃいなさい！」

「了解」

やれやれとため息をついて、キミテはオレたちに軽く頭を下げると、  
カムラル火の魔精霊が去っていった方へと駆けてゆく。

「なかなか来ないと思ってたら、こんなところで足止めくつってたんだね。大丈夫カリス？ キミテに変なことされなかった？」

「おっとと。……って、何言ってるんだよ。そんなことあるわけないだろ。むしろキミテの仕事邪魔しちゃったみたいだし、あんまり怒ってやるなよな」

何だかとてもめんどくさそうな大きな背中を眺めていると、いつものようにそんな事を言いながら抱きついてくるマイカ。

「いいのいいの。あんなやつほっとけば」

「そんな事言ってるよ、嫌われるぞ」

「べつにいいもん〜」

それに苦笑して、ちょうどいい位置にあるさらさらの髪を、一度二度叩くように撫でると、あからさまに強がってる、そんな微笑ましい言葉が返ってくる。

物心つく頃からの付き合いというか、幼馴染であるマイカは、オレと同級だ。

だけどその行動は、今のように突飛で幼い。

「サミイも、ラネアもケイルも、よく来たね〜」

「あ、えっと、その……」

と、そこでオレにしたのと同じ行為を、その場にいる全員にしてみせる。

それは、マイカなりの親愛の証、なんだろう。

サミイなんかは、それが恥ずかしくてマイカの家には来づらい、な

んて言っていたけど。

「んじゃ、早く行こ。生徒会みんな、待ってるよ」

「あ、うん」

「……おいしいお菓子のお披露目会じゃなかったんですか？」

そのまま手を引かれて歩いていこうとするオレの背中が引つ張られる感覚。

どうやら生徒会という言葉に、想定と違うというか、人見知りの気が強いサミイは、不穏なものを感じ取ったらしい。

オレは振り向き、笑って答えた。

「そうだよ？ 生徒会のみんなで話し合うときは、当番決めてお菓子を出すことになってるんだ」

「カリスつてば、話し合いにほとんど参加しないで、お菓子食べるだけだもんねえ」

「いやあ、面目ない。あんまりみんなの作るやつがおいしいものだから」

「……」

オレたちのやり取りに、サミイは軽いため息をついて、気を取り直すようにしてついてくる。

ここで引き返すのもなんだし、生徒会の面子ならば、まだ耐性があるとふんだのだろう。

最初から分かっていたのか、特に異論がある様子もなく。

影のように付き従うラネアさんやケイルさんも一緒になって、オレたちはマイカの屋敷へとお邪魔するのだった……。



## 第8話、集うは次世代の礎

スクールの一角にある、マイカが暮らすお屋敷。

本来の家主であるマイカの祖母は、ほとんど家にいない。

アルや、他の四王家の主たちとともに国をよくするために尽くしているからだ。

それは、いずれはオレたちの世代へと繋がっていく、そんな役目で。

「……全員揃い踏み、か」

通されたのは、サロン兼会議室として使われている客間の一室。

オレやサミーだけに聞こえるくらいに小さな声でケイルさんが呟いたように。

そこには……ユーライジアスクールの、代が変わって新しく発起したばかりの生徒会の面々が顔を連ねていた。

「みんな、おはよう。ちょっと遅くなった」

オレの……数はあんまり多くない、ほぼ全員の友人たちが集まっている。

後ろにくっついたままのサミーとともに朗らかに挨拶。

すると、四方八方からその返事が飛んでくる。

だが、ケイルさんが驚いたように……あるいは楽しみにそう言ったのは、そこに生徒会の面々が集まっている、と言う意味じゃないんだろう。

四王家の一つ、ガイゼル家の跡継ぎである、ルート・ガイゼルと呼ばれる少女と、その従者であり騎士である少年、ティン・オカリィ。



同じく四王家のひとつであるヴァーレスト家の姫、キキヨウ・ヴァーレストに、彼女の守護魔精霊であるルッキー。

そして、いずれはユーライジア国以外にもスクールを、という理念のもと、他大陸『ラルシート』から留学してきている、ラルシート国の姫、ルコナ・アーヴァインと、その世話役にして騎士でもある、ルレイン・セザール。

いい意味でも悪い意味でも、国を、世界を動かせる、恐れ多い面子が一同に介しているからだ。

「こんにちは、カリス。流石生徒会長らしい重役出勤ですね」

「ははは。ごめん。今日はいつもより母さんへの報告が長引いてさ」  
そんな中、気さくに声をかけてきてくれたのはティンだった。

茶色みがかった短髪に藍の瞳を覆うは、生真面目そうな眼鏡。  
事実同じクラスである彼は、クラス委員長兼生徒会書記をつとめている。

優等生であるが、齒に衣着せないとというか、あけすけのない、オレをオレとして対等に扱ってくれる人物でもある。

「カリスが謝ることはありません。この場に来たいと、私が我が俣を言つてたから遅れたんです」

なんて事を考えていると、ふいにサミーがオレとティンの間に割つて入り、威嚇でもするみたいにティンのことを睨みつけた。

遅れたのはさつきオレが言った言葉の通りで。

そんな我が俣なんか、全くもってなかったわけだけど。

サミーに言わせれば、そんなティンは『馴れ馴れしい』らしい。

ある意味、人見知りするサミーにとつては、お構いなしに強気になれる希少な人物、と言えるかもしれない。

ただの挨拶にも等しいオレたちのやり取りにまで噛み付かれて、さ

すがのタインもちよつと困つた顔をしている。

「そんなに怒らないでくださいって。ただの冗談ですから。……ああ、そつか。カリスにばかり構つていると思つて拗ねてらっしゃるんですね。こんにちは、サミイさん。それからカムラル家の方々も」かと思いきや、サミイの言う『馴れ馴れしい』態度で満面の笑顔を浮かべる。

「……どうも」

タインとはセントレアクラスの頃からの付き合いなのだから、馴れ馴れしいというのもおかしな話だとは思つが、どうもタインはサミイも含めたカムラル家のものに嫌われている節があるようだ。

一度何故か聞いてみたら、見た目の割にお調子もので軽い、生理的に苦手、なんて言葉が返つてくる始末。

一応カムラル家とは同格であるガイゼル家のひとなのだから、そこまで嫌わなくてもいいんじゃないかなつて思うわけだけど……。

「大事な会議の場だ。主の許可も得ずに従者がペラペラと口を開くな」

「はいはい。すみませんでした」

元々そりが合わなかつたからかなんなのか、主であるルートにも嫌われているみたいだからいたたまれない。

確かタインの一族は、代々ガイゼル家に仕えてきた一族で、お互いが望んで主と従者の関係になつたわけじゃないとは聞いていたけど、もう三年以上も経つのもう少し優しくしてあげてもいいんじゃないのかなあ、なんて思つたりもする。

「はいはい。ルートちゃんもかたいこと言わないの。お茶会は楽しまなきゃ、だよ。いまサミイちゃん達のぶんも持つてくるから、座つてまつて」

「あ、すみませんわざわざね」

たぶん、マイカも同じ気持ちだったんだろう。

お茶当番でもあるマイカが、場をとりなすようにそう言うので、オシはいるもの席につき、その横に律儀に頭を下げているサミイを座らせ……じっと待つことにする。

そこはちょうどルートと対面になる席。

「すまない。楽しくが基本のお茶会なのにな」

「いや、こっちこそ。遅れたのは事実だし」

隣でサミイとタインが、バチバチやってる（タインは付き合ってるだけだろうけど）のを横目に、オレとルートはそんなやり取り。

するとすぐに、柔らかな笑みがルートに浮かぶ。

ルートは、ガイゼルの名にふさわしく、きりつとした気配を纏う、こちらは真正銘の実直を絵に描いたような少女だ。

質感のある長いカラスの濡れ羽色の髪は、きつちりと後ろに纏められており、その黒真珠のごとき瞳は、伶俐な輝きと、熱い炎のような強い意志が内在している。

それだけを並べると、まさしく近寄りがたき美しさをもった少女であるけれど。

彼女は生徒会の仕事とともに、スクール内の『風紀』……治安を守る長をも兼任している彼女は、懐の深い、皆の姉のような存在でもある。

身内にはちよつと厳しいようだけど、やはりオレたちの幼馴染一人で。

髪がきつちりしてるのは、纏めておかないとあっちこっちに髪が暴発するからだとか、実は小さな動物が物凄く好きだっていう、お茶目な部分も知っている。

「おまたせーっ」

と、そんなやり取りをしてる間に、マイカが四人分のお茶を持って帰ってくる。

顔を上げると、さっきの仕事のカタがついたのか、キミテの大きな姿もあった。

同席を遠慮するうちのメイドさんたちと同じように、サロンの白壁に立ち、随分と小さく見えるカップを弄んでいる。

もう顔合わせはしていたのか、彼を気にかけるものはなく。

「それじゃ会長、始めよっか」

「あ、うん。……ええと、今日は来年の建国祭のお客さんを誰にするか、だったよね？」

ユーライジア建国祭。

それは、毎年行われるユーライジヤスクール建学祭のさらに上を行く、十年に一度のスクールあげて国あげての最大の催し物だ。

その一番の目玉として、大物のお客さんを迎える企画があった。

お客さん……それは、根源魔精霊と呼ばれる、世界に十二人しかない神様のことで。

オレたち新しい生徒会にとって、とても名誉なことであり、大きな仕事でもあった。

誰を呼ぶかはもちろん、神の住む世界に暮らすと言われる彼らをどう呼ぶのか、呼んでからどう楽しんでもらうのか、考えなければならぬことはたくさんある。

まだ一年も先のことだが、今から準備しても全然遅くないわけで。それならこうやってお茶会をしてるわけだし、その時にでも相談しようってことになったのだ。

「ちょっと待ってくれ。……じゃなくて、発言してもいいかな、姫？」

誰にするかより誰にするかを決める方法をどうするのか、なんて聞こうとしたら、挙手しながら言葉を発したのはルレイン・セザールだった。

白銀の短髪に、意志の強さとした高さを表わす太い眉。

どこか斜に構える節のある、同学年とは思えないくらいに渋い雰囲気を持つ少年だ。

その背は、座っていても分かるほどに高く、背だけならキミテより高いんじゃないだろうか。

しかし、威圧する感じは全くなく。

物腰柔らかく、ルレインは隣の少女……ルコナ・アーヴァインに問いかける。

「あ、えつと……た、多分」

「ああつ、あなたたちが間に受けることはない……さっきの言葉は忘れてくれ」

恐縮しきった様子のルコナ。

それに慌てた様子を見せるルート。

ルレインは、その事を分かっててそう言ったんだろう。

オレは、意地悪くも僅かにルレイン唇が笑みの形を作ったのを見逃さなかった。

それに、仕方のないやつだなあって内心苦笑するオレである。

それはルレインがルコナに対する愛情の裏返しなんだろう。

好きだからこそいじめたくなるっていう、あれだ。

ルコナ自身もルレインのことを信じきっている節があるというか、

そんな風にからかつてるルレインのことなんて気付いてもないんだらうけど。

光と月の国ラルシータの姫であるルコナに対し、騎士であるルレインは全くその自覚があるようには思えないのだ。

少なくとも、自分を仕えるものであるとは見ていない。

可愛い妹をからかって楽しんでいるような……そんな風に見える。ただこれは、オレにとってみれば彼に対する褒め言葉でもある。

自覚はともかく、騎士としての役割をちゃんとこなしているし、そこにはただ仕えるものと仕えさせるものの関係に留まらない、深いつながりのようなものを感じたからだ。

その、一番の原因は、そんなルコナが、所謂嗜虐心をそそるような？大人しくて引込み思案な少女だからなんだろう。

白金のような長い髪に、壊れそうなほどに線の細い身体。

いっつもおどおどしていて、赤面性で、オレよりも背が高いのに、守ってあげたくなくなるくらい小さく見えるのは、もはや彼女の才能なんじゃないかなって思うくらいである。

「それで、発言って？」

「ああ、うん。その神様を呼ぶってやつさ、生徒会に任されるとはいえ、ユーライジアの一大事だろう？ 同盟国とはいえ、俺らに話しても平気なのか？」

オレが苦笑を浮かべながら話を先に進めると、返ってきたのは今まで考えも及ばなかった、そんな言葉だった。

「別に大丈夫だよな？」

「どうですか、議長？」

すぐに答えようがなくて、思わず副会長であるマイカにふると。

それをそのまま流して、その横にいた……終始笑顔のほんわかとした女の子、キキヨウ・ヴァーレストに問いかける。

「ふわっ、わ、わたし？ ……ん〜と、大丈夫だと思うよ？ だってみんな仲良しさんだもん」

ふわふわのカールのかかった向日葵色の髪と、どこまでも純粹な朱

を滲ませた、大きな黒曜石の瞳。

我が生徒会の雰囲気づくりの達人にして、議長でもあるキキヨウの声は、そののんびりした口調とあいまって、有無を言わさぬ説得力を持たせる。

それは、彼女が声に魔力を持たすことのできると言われる、レスト族と呼ばれる希少種族だからに他ならない。

何でも、人間でもあり、魔精霊でもある不思議な種族らしい。

歌が物凄く上手いこと以外に、オレやマイカたちと変わりはないから、その種族の謎についてはあまりに気にしたことはなかったけれど。

まさしくキキヨウの一声は鶴の一声で、話し合いが膠着した時なんかは、なくてはならない存在だと言えるかもしれない。

例のごとくこの場合、キキヨウがそう言うのなら別に気にしなくていいかって感じになったわけだけど。

「だあつ、黙って聞いてればユルい奴らめっ！ いいわけねーだろっ！ お前らは根源魔精霊を呼ぶのがどれだけやべえのか分かってんのかーっ！」

ある意味魔法めいたキキヨウのその声に、全くこたえていない人物が一人いた。

キキヨウの肩口にふわふわと浮いている青銀の羽根をぱたつかせている彼の名はルッキー。

針のような銀の髪に、鋭く冷たい青の瞳。

見た目だけなら古の魔人族すら髭髯とさせる佇まいだが、小顔なキキヨウよりもさらに一回り小さいどころか、その頭に乗っけても気にならないくらいの大きさしかない。

そんな彼は氷の魔精霊……またの名を雪妖精と呼ばれる種族で。

キキヨウの頼もしい守護者でもある。

だが、その小ささがいけないのか、キキヨウは彼に対し愛玩動物のような感じで接している。

その事にルッキーが気がついていない様子なのが、今まさに態度と言葉となつて現れているわけだが……。

「こわい人たちのの？」

「あゝ、神つて呼ばれるくらいだから、中にはそう言うのもいるだろうけど……」

そう言う意味じゃねえよ。根源魔精霊つてのはさ、普通人の前でオシ様は神だ！ なんて公表して歩いたりしねえもんなのよ。下のヤツラや人間たちにてめえの名前つけさしたりして自分が神であることを、隠そうとする」

こう見えても、いろんな知識が豊富で、難しい話をする時は、結構彼がその話の中心にいたりする。

だからキキヨウも含めて、オレたちは彼のことは一目置いている。

まあ、見た目が愛いやつだから、その事だからかったりはするけど……。

「つまり、普段はその正体を隠してるのにわざわざ指名で呼ぶわけだから……」

「……その高貴なる命を狙いし不届きものも出てくる、というわけか」

ルッキーがここで強く訴えたかったことに気付いたらしい。

マイカとルートが真面目な顔で言葉をつなげる。

「まあ、くさつてもオレたちの頭張ってるヤツラだからな。そう簡単にはいかねえだろうが……」

ヤツラは世界そのものだ。もしがあれば世界が壊れる。祭りの余興の一つだってタカをくくつてつと、トンでもねえことになるぞ」



「ああ、そう言えば聞いたことがあります。前回……十年前でしたっけ。たいへんだったそうですよ。大事なお客さんを守るために当時の役員たちは祭りが終わるまで寝ることもろくにできなかつたそうです」  
正直、続くルツキーの言葉は、規模が大きすぎてあまり実感が沸かなかつたオレだったけど。  
「タイムが思い出したように言った言葉は、ルツキーの言う『どれだけヤベエ』かつてことを分かりやすく説明していた。」

「ああ、それは私も父上から聞いたことがあるな。十年前の客はそれは大きな黒い竜だったらしい。」

「一目見たいと人が際限なく集まってきた、それは大変だったそうだし」

十年前。まだ父さんも母さんもそばにいてくれた頃の話だ。

当然、前の祭りのことは憶えている。

何も知らないオレたちは、当時の役員たちをそっちのけで、優雅に空を飛び回る黒竜を見て、強い感動を覚えたものだ。

そのことで、魔物の大群がユーライジアを襲つたなんてことを知つたのは、何もかも終わってから、だったけど。

「俺も見てみたかつたな。俺たちの国にも噂広まってきたくらいだもんな……そりゃあ魔物の奴らも見に来るか」

「……っ」

「レイっ！」

単純な羨ましさからきてたんだろう。

他意のないルレインの言葉。

それまでただ話を聞いていたサミイが表情をなくし、ルコナが咎めるみたいにルレインの名を呼ぶ。

マイカの表情が、悲しげに歪むのが分かって……。

彼女たちから視線を逸らすために、キミテが顔を背けるのが分か

った。

他のみんなは、言うべき言葉を失っている。

それは、タインが言ったのもう一つ。

この話し合いが、これからオレたちがすることが、軽い気分でできることではないことを強く実感させられたからだろう。

また同じ悲劇を繰り返さない保証なんてどこにもない。

みんなの気持ちが高く沈む中、オレだけが他人事みたいにみんなの様子を伺っている。

その悲劇の、当事者のはずなのに。

「……っ、なんつーか、すまん。軽率だった」

そんなオレを見てどう思ったのか、最後に目があったルレインは、はっと我に返ったみたいに飛び上がって……深々と頭を下げた。

オレに向かって。

何だかそれがとてもいたたまれなくて、オレはわざと明るいい声を出してそれに答えることにする。

「いやいや。謝らなくても。どっちみち、祭を行って神様を呼ぶ以上、過去に起きた問題点つてのはどうしても掘り起こさなくちゃいけないことだからね。むしろ率先して議題にすべきことだと思うよ。同じことを繰り返さないためにさ」

今回の祭を運営する任を負った以上、それは是非に考えなければいけないことではあった。

自分では中々言い出しにくかったし、マイカもルツキーも遠慮してる風だったから、ひどく恐縮してるルレインには悪いけど、こういう展開になったのは僥倖かもしれない、なんて思うオレである。

だから笑ってそう言うと、気まずそうに口を噤んでしまったルレインの代わりに、タインが助け舟を出す形で口を開いた。

「つまり、祭の開催にあたって、それ相応の危険を覚悟しておけ  
てことですよね。でも俺、前々から思ってたんですが……たかがな  
んて言ったら失礼なのかもしれないですけど、祭の一行事のために  
どうしてそんな危険なことをする必要があるんですか？」

それはいみじくもお客さんに根源魔精霊を呼ぶ意味で。

世界の守護者の一族であるオレにとっても、知りたいことでもあつ  
た。

何故ならば、祭を行うこと自体が、オレたちカムラル家と密接に関  
係してるらしいからだ。

十年前は、そう言うものなんだと、自分の番が来れば分かることだ  
ろうと思っていたけど。

今はその関係について知りたいって気持ちが強くなっているのは確  
かだ。

それにオレは頷き、おそらくは何らかのことを知っているだろう、  
マイカヤルツキーのほうに視線を移す。

「理由を話せば長くなるんだけど……答えだけをあげるなら、十  
年に一度、根源のヤツラを呼ばなければ、やっぱりこの世界は壊れ  
ちまうってところか」

「来ても来なくても世界の危機か。まるで諸悪の根源だな」

「うまいこと言うねえ」  
そしてルツキーが発した言葉は、先程とあまり変わらない内容のも  
のだった。

それに対し、タインが呆れたように言葉を返し、ルレインがそのこ  
とに感心したような眩きをもらす。

するとすかさず、それぞれの主に睨まれて。

すくすく口を噤む様子が何だか似通ってて。  
オレは思わず苦笑する。

「もう、はしよりすぎだよ、ルツキーってば。でもね、確かに彼らはただの観光のためにこの地にやってくるわけじゃないんだ。循環してるんだよ。このユーライジアの世界と、彼らの棲む世界とで。……ユーライジアの世界が、根源そのもので作られてるって伝説、みんなも習ったでしょ？ あれって、魔精霊側から言わせてもらえば、あながち外れてないんだよね」

窘めるようにルツキーを見た後、マイカは一同を見渡し、何だか先生みたいな口調で語りだす。

「こつちの世界に六人。あつちの世界に六人。十年に一度、一人ずつ時間が進むみたいに動いて入れ替わることで、それぞれの力が偏らないようにしてるんだよ。世界はけっこう危うい均衡で保たれてるってわけ。滞っても駄目、誰か一人欠けても駄目。ほころびはいつしか広がり、二つの世界はこつちやになつて……やがて世界は破滅する」

真に迫ったマイカ言葉。

とてもじゃないけど、冗談でしょ、なんて言える雰囲気じゃなかった。

むしろ、生徒会の役員の集まりとはいえ、一介の生徒たちだけえ話合ってるいいレベルじゃないような気がしてならない。

まあ、いずれはここにいるほとんどの人間が国を背負って立つべき人間になっていくだろうことは間違いないだろうから、先を見据える意味ではありなのかもしれないけれど。

「あれ？ それじゃあもしかして、来年のお祭りのお客さんって、もう誰か決まってるんじゃない？」

さつきとは少し違う感じで重くなったその場に、やんわりと確かな一言を投じるキキョウ。

「うう、痛いところくなあ。確かにそうだけど、誰がいいよとか、好きだとか話し合いたかったんだもん」

そのほんわかした空気に圧されたのか、可愛らしく拗ねてそんな事を言うマイカ。

さつきの真剣な……少し怖い部分すら感じられたマイカの張り詰めた空気は、もうどこにもなかった。

「次は、誰が来るんですか？」

そのおかげで発言がしやすくなったからなのか、それでもおどおど伺うように、ルコナがそう聞いてくる。

「次は時の根源だな。リヴァったか。ああ、ちなみに今回向こうに帰るのは水のウルガヴだったか」

「……そうですか」  
拍子抜けするほどあっさり答えるルツキーに、何やら深く考え込んだ後、頷くルコナ。

何だか、その間に何かあるような気がして、なんとなく気になったオレだったけど。

「向こう、か。それって、こことは違う神様が住む世界っていうか家が別にあるってことだよな？」

例えば……このユーライジアの世界と繋がってる扉、なんてものがあつたりするわけだ？」

ルレインのそんな言葉と、眉を上げるマイカたちを見て、その些細なことはどこかにいってしまう。

というより、ルレインの言う扉と言うものに、オレの中で心当たりと言うかピンとくるものがあった。

それは、長年知りたくても知ることもなかったことの答えとも言っている。

オレたちの住むユーライジアの世界と、神様の住む世界を繋ぐもの。それこそが、代々カムラル家が守っているものなんじゃないのかって。

そう、ほとんど確信に近い思いを抱いていて……。

(第9話に続く)

第9話、すれ違う気持ち、人知れず燻るものは……

オレたちの住むユーライジアの世界と、神様の住む世界を繋ぐもの。それこそが、代々カムラル家が守っているものなんじゃないのかって。

オレはほとんど、確信に近い思いでいたんだけど……。

「うん。あるよ。アルちゃんの……じゃなかった、理事長室のうんと地下の、魔法で何重もの封印を施されてるその場所にね」

「十年ごとにそこで新たな根源を迎え、任を終えた根源を返すことになってるんだ。」

新しく招かれた根源は、オレ様たちの案内と加護のもと、祭の間だけひとしきり現世を楽しんだ後、

どこへともなく消える。……いや、任を全うするために、このユーライジアの世界にとける、

という表現のほうに近いかもしれないけどな」

そんなオレの考えは、すぐに返ってきた畳み掛けるようなマイカとルツキーの言葉により、

一瞬をもって却下される。

言われてみれば確かに思い出せるのは、理事長室のアル……理事長が座る席のその背後にあった、仰々しい開かずの扉のことで。

それじゃあ母さんは一体何を守ってるんだらうって。

何の意味があつてあんなところに閉じ込められてるんだらうって強く思ったけれど。

「確か、その扉を開ける儀式って随分めんど……ややこしい方法なんだよね？」

それは、母さんの存在を……ひいてはオレたちの存在を否定してしまいかねない言葉のような気がして。

もっとも知りたいその疑問はオレの口からついて出ることはなく、代わりに出たのは、そんな言葉だった。

「ややこしいって。その儀式の中心人物がそんなんでどうするよ。ちゃんと頭入ってんのか？」

「あはは、中心人物って。オレがやるの確定なわけ？」

「あつたりめーだろ！ オマエはスクールの頂点だろうが！」

最初は呆れて、次には怒られて。

どっちにしろ迫力だけはなくて。

そうやって、当たり前前に接してくれるのがうれしくて。

ルツキーには悪いけど、思わず笑みを浮かべてしまう。

それでさらに睨まれたけど。

その儀式のことは、十年前の先輩たちが残してくれたという資料にも載っていたのでちゃんと憶えていた。

何気に見渡すと、サミィや留学生のルレインやルコナ、しまいにはキミテすら知りたそうにしていたので、オレはそれを思い出しながら言葉にし説明する。

「えっと、まず四人の代表者と、その補佐役を選ぶんだよね」

十年前の資料によると、北に光の神、南に闇の神、東に火の神、西に氷の神などと呼ばれる代表者をおいて、前夜祭にかけて扉を開けるための祈りを捧げる、とある。

その祈りとは、古代の言葉で書かれた歌の音系魔法（風魔法の一種で、歌と魔法が混ざったもので、あつかいが非常にむづかしい）で。



一晩中となるとさすがに人を選ぶんだろう。

その四人の代表者には、見合った実力と根気が要求される。

また、その手伝いをする四人の補佐役も重要だ。

代表者の声が出なくなる、なんて不測の事態が起きたときの、代わりをとめなくてはならないからだ。

「代表者なんてもう決まってるんだろ。火がカリス、氷がキキョウ、光がルート、闇がマイカだって」

当たり前のように、四王家の代表者の名前を口にするルッキー。

確かに、スクールの成績のことを考えれば、順当なところなんだろう。

キキョウみたいに音系魔法……じゃなく、歌が得意じゃないオレにしてみれば、中々に重圧のかかるご意見だったけれど。

「となると、決めなければならぬのはその補佐役、か」

「え？ それこそ決まってるんじゃないの？」

続いたタイムの言葉に、オレは思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。

オレがもし代表者になったのならば、最初からその補佐役はサミイがいいなって思ってたし、

ルートにはタイムが、キキョウにはルッキーがいる。

それにマイカにだって……。

「……………」

キミテがいるじゃないか。そう思って視線を向けると、ぷいっと視線を逸らされる。

それがあまりにも露骨で、正直傷つくわけなんだけども。

「……………あいにく生粹の魔精霊には無理なんだよ」

「あたしは生粹じゃないから、たぶん大丈夫だと思うけど……………」

ルッキーが拗ねたように、マイカも心なしか不安げに、そんな事を

言う。

「そんな事、先輩たち引き継ぎのやつに書いてたっけ？」

「書いてあるわけねえだろ。一昔前までは、人間以外のヤツらが役員をするなんてありえなかったからな」

だからこそ、こうやってみんなして集まって決めよう、ってところなんだろう。

「つまり、誰と誰が組むかはまずおいておくとしても、ここにみんな……ルレインやルコナたちはもちろん、サミイやキミテにも力を貸してもらわなくちゃいけないかも、ってことだね？」

「うん、そゆこと。サミイちゃん呼んできてくれて話す手間が省けて、正直助かったよ」

「ええっ？」

「……」

話の流れからいって、儀式に耐えうる力を持つ人ってことを考えると、ここにいる面子が適任だろう。

もっとも、それは交友範囲の著しく狭いオレの見解にすぎないし、正直に言えば実力とか全然知らないのに、ノヴァキの顔も浮かんだりもしていて。

ルレインやルコナは、なんとなくそうなるだろうなってことを予見していたらしい。

二人はここに在る意味に得心いったとばかりに頷いていたけれど。

そう言えば、まだお伺いすら立てていなかったサミイや、まだまだ新入生もいいとこのキミテが大層驚いた顔をしていた。

「あれ、まずかった？ できればサミイと組もうかと思ってたんだけど」

「聞いてません。……というか、二年や三年の先輩方に、私より適任の方がいらっしやると思いますが」

「うむ」  
なんといても火の代表者だし、長時間一緒にいるのならサミイといるのが気楽でいいんだけどなって思ってたわけだが。  
なかなかうまくはいかないらしい。  
断わられることはないだろうなんて思ってた自分がどこかにいて、妙にへこむ。

「あんたはまさか断るなんて言わないわよね？　そのためにスクールに入ってもらったようなもんなんだから」  
「ああ……。好きにしてくれ」  
一方、めんどくさそうではあるものの、キミテの方には異論はないらしい。  
というより、もしキミテがいなかったら、この補佐役決めて一番苦労したのはマイカだったんだろうなとは思わずにはいられないオレである。

今この場だけを見ると、子供っぽくてとっつきやすい、オレなんかと比べるべくもない社交性の富んだ人物に見えるマイカだけど。  
類は友を呼ぶというか、誇り高き人型の魔精霊だからなのか、実は人付き合いが下手な偏屈者だ。  
見た目通りの子供だっていつてもいいのかもしれない。

好き嫌いと、敵味方がはっきりしている。  
人の事はまったくもって言えないんだけど…マイカが今いる面子とアル以外で、まともに会話しているところなんて見たことなかった。寄れば避けられ逃げられるオレと違って、嫌いなもの、興味ないものに対しては、視界にすら入ってないような態度を取るのだ。

どこで見つけてきたのか分からないキミテ。  
そんなキミテにちょっと口は悪いとはいえ、本音で付き合っている

風のマイカ。

それだけで、彼がマイカにとってすでに捨て置けぬ存在であることは一目瞭然だろう。

そんなことを想像して、羨ましさも手伝って、自然と顔がにやけてしまうオレである。

「な、なによつ。沈んだかと思っただらものすつごくうれしそーな顔して」

「いや？ なんでも。確かに急に言われたって困るよな。ルッキー

……っというか、

キキヨウはどうするつもりだったんだ？」

「こいつはカリスとタメ張れるくらい危なっかしいからな。オレ様がついててやりたいのはやまやまなんだが……祭までにくつつか試験あるだろ？ 来週のなんかおあつらえ向きに二人一組のやつだし、こいつの好きにさせようかなって思ってる。一晩中二人つきりで一緒にいるんだ。

合わねえやつとかキラいなやつとかと組むようなことになるのもなんだろ？」

「誰がいいかなあ？ まだ決めてないけど」

やっぱり、組みたい人と組むのが一番だろう。

それはオレも同意見だ。

ルッキーは、そう言っただけでキキヨウの頭の上に陣取り、偉そうな態度で胡坐をかいてその小さな手でぺちぺちとキキヨウの頭を叩いている。

キキヨウはそれに気を悪くした風もなく、かえって嬉しそうにそんな事を言っていて……。

「あ……」

そんなルッキーの言葉に、思うところがあつたんだろう。

言葉を失い、俯くサミイ。

何だかそれが、ひどく落ち込んでるように見えて。

声をかけようとしたオレだったけれど、それより先にルートが口を開いた。

「ふむ。言われてみれば、こやつと組むのも何だか気が引けるな。なにされるか分からんし。」

他のものに目を向けてみるのもいいかもしれん」

「うわ、ひどっ。ルート様ってば俺のことそんな風に見てたんですか？ …… まあ、別にいいですけどね。そしたら俺はカリスと組みますから。妹さんは嫌がつてるみたいだしちょうどいい。」

あ、ついでに来週の試験も、一緒にどうですか？ まだ答えももらってないですしね？」

つれないルートの言葉に、よよよとへこんで見せた後、いやに挑戦的な笑顔でオレでなくサミイを見据え、そんなことを言うタイン。すると、今さっきまで俯いていたサミイがぱっと顔を上げて。

「冗談も休み休み言いなさい！ あなたに任せるくたいならカリスの補佐役は私がやります！ …… それに残念でした。来週の試験、カリスの相手はもう決まってるんですから」

舌まで出して、勝ち誇ったような笑みで、そんな事を言うサミイ。タインの性格がそうさせるのか、やっぱりタインの前では人見知り性分が薄れるらしい。

そのあまりの変わりように、さすがのタインも驚いたような顔をしていただけ。

やがて苦笑を浮かべ、オレの方に向き直る。

「なんだ、俺が聞いたときには随分そっけなかったのに。 …… 誰？

誰と組むんです、来週の試験」

「え、えっと……」

ちよつと強引な、有無を言わせぬ問いかけ。

約束してたわけじゃないけど、オレと組みたい意志のあったタインのことをないがしろにしているみたいで、気が引けてすぐには何も言えないオレである。

というより、オレの中では確定事項でも、ノヴァキと交わした手のその約束は、実感というものがあまりなかったからだ。

突然だったし、どこか夢の中のような感触が残っている。

今日の夜なり、明日スクールへ行つて、もう一度確認したほうがいいんじゃないかなつて、そんな気持ちになつていて。

「その、ノヴァキつてやつなんだけど。まだ正式に登録したわけじゃないし、もしかしたらオレの勘違いかもしれないし……もう一度ちゃんと話し合つてつて感じなんだけど……」

ほとんど無意識に、その今を考えていたことが口から出る。

「ふむ。知らぬ名だな。……まったく。マイカにしるカリスにしる、つれないというかなんというか……」

深いため息をついたルートの言葉は、半ばで途切れる。

なんて言いたかつたのかはとも気になつたけど、たぶんきつと嬉し楽しいことじゃないんだろう。

聞かなかつたことにして周りを見ると、その名前に心当たりがあるものはいないようだった。

まあ、それはそうだろう。

もう十年近くスクールに通つてるのに、オレ自身がノヴァキのことを知つたのが、先日の……しかもいはいけない場所と時間帯だったのだから。

「……そうですか、なら仕方ないですね。それじゃあキキヨウさん、俺と組みませんか？」

「え？ うーん。どうしよっかな」

「バカヤロ、こつちだつててめえなんか願ひ下げだつての！」

「みんなしてつれない。泣くよ？ 泣きますよ？」  
やっぱりわざとらしい振りで、泣き崩れているティン。

彼がこうやってこういう場を盛り上げるのは毎日のことだったけれど。

それよりも気になったのは、オレと組むことに対して頑なにも見えただのに、妙にあっさり引き下がったなあ、なんてことだった。

たぶんそこに、寂しさみたいなものを感じていたからなんだろうけど……。

「それじゃあまずは来週の試験だね。そのノヴァキって人のことも気になるし？」

何かをたくらんでいるかのような、底意地の悪いマイカの実笑みにより、そんな思考はかき消される。

「はは、お手柔らかにね……」

オレはそんなマイカに、引きつった笑みで言葉を返すことしかできなかった。

何故ならば……改めて気がつかされたからだ。

オレ自身としてはとつくの間に友達みたいに思い込んでいるところがあったけれど。ノヴァキにとってはそうじゃないってことを。

約束したことで舞い上がったんだらう。

冷静に考えてみれば、あの少ない時間での邂逅で、同じ気持ちになっただけだ。だるうことなどまずありえない気がして。

だから。

オレはその、貼り付けたようなわざとらしい笑顔の裏で。

早くもそんなマイカの言葉に対してどうしようって、うまくノヴァキと口裏を合わせとかなきゃって。

自分勝手な思考を彷徨わせていた……。

（第10話につづく）



## 第10話、夜を駆けるもの、初めてその名を口にする

そうして、その日の夜。

いつもの派手な仮面にマント……『夜を駆けるもの』の格好で、出てはいけなはずのお屋敷を飛び出してた。

咎めるものは誰もいない。

気付いているのかどうかは、正直分からないけれど。

『オレの自室には絶対入らないこと』。

そんな我が佯が通るくらいなのだから、ある程度は容認されているのかもしれない、なんて自分本位なことも考えたりはする。

部屋の窓から風の魔法を頼りに、硬い石畳の地面に降り立ち、カムラル家のお屋敷の周りに張り巡らされた、雷ガイセルの魔力の走る金属の網と、背の高い鉄壁を、やつぱり風の魔法……空気に溶けた魔精霊たちにお願いして、飛び越える。

そんなオレを見ているのは、そんな彼らと月の根源アーヴァインの故郷であり象徴でもあると言われるまんまるのお月様、かのものに従い瞬き続ける星々のみ。

彼らの口が堅いことをいいことに、オレは悠々と駆ける。

ここ最近はどこぞの盗賊か怪人のように、人様の家の屋根の上を駆けるのがお気に入りだ。

その屋根に土足で踏み込んでも、猫の散歩程度しか迷惑がかからないのは、人より脆弱で矮小なオレの身体の、数少ない利点だと言えるかもしれない。

ここでいつもならば、夜でも眠ることのない、ギルドのあるスクール元町通りへ向かうのだが、  
今日ばかりがオレの足は真逆へと向いていた。

スクールの正門を外れた裏手にそびえる、広い裏山。  
相変わらず光の魔力流れる結界により封鎖されて……なかった。

「……あれ？」

煌々と、眩しいくらいだったはずのそれは、鬱蒼とした闇に紛れ、  
ただの縄と化している。

前に一度来たときは、一仕事終えた後だったから、早く来すぎたの  
かもしれない。

もしかして、消灯時間に合わせて光るのだろうか、なんて益体もな  
いことを考えていると。

「ちょっと、ひとんちの前で突っ立っていると邪魔なんだけど」

今のこの時間帯にそぐわないような、突き抜けるほどあっけらかん  
とした少女の声が背中にかけられる。

言われてみればふらふらと、山道へ続く道を塞ぐ形で突っ立ってい  
ることに気付いて。

失礼、とよそ行き用……『夜を駆けるもの』の時の低い声色で会釈  
をし、道を開けた。

「って言うかあなたって確か、最近噂になってる『夜を駆けるもの』  
とかいう人でしょ。」

こんな魔人族もどきしかいないような場所に何か用なの？ 悪い魔  
人族を懲らしめてやってください、

なんて依頼でも来たのかしら。……でもおあいにく様。ここには悪

事を働くような根性のあるやつはいないわよ」

「ええと……」

随分と饒舌な少女だった。

だがその内には、オレに対しての緊張感のようなものが僅かに伺える。

その事もあって、つい素になって口ごもってしまおうオレ。

言葉も出ず、足も動かない代わりに、月明かりに照らされた少女の輪郭が浮かび上がる。

澆刺として勝気そうな、闇よりも太陽の下のほうが似合う、そんな少女だ。

薄い茶の短めの髪。僅かに尖がった耳。意思の強さと、知性を湛えるは紫水晶の輝きを秘めし瞳。

年の頃は同じくらいだろうか。

人のことなど言えるわけがないのだが、あどけなさが残る彼女は、こんな時間に出歩けばとにかく目立つだろう容姿をしていたけれど、年季の入った黒のローブとマント、加えて見たことのない不思議な物体…… たぶんきつと、マジックアイテムか何かなのだろうが、その手に背中に大量に抱えていた。

元々は細身だろうに、その荷物が多さで、輪郭は何倍にも膨れ上がって見える。

なるほど、これならオレが通行の妨げにもなるだろう。

そう思い立ち、さらに一歩下がって道を開けたオレだったけど。

そのまま続く山道へ進もうとはせず、両手に抱えていた雑多な荷物を降ろすと、めんどくさそうに振り返り、オレのことを睨みつけてくる。

「な、何かな……？」

「それはこつちの台詞。人のことじろじろ見て」

「ごめん。こんな夜遅くに出歩いでる女の子に会うのは初めてだったから」

思わず本音を口にすると、一層視線がきつくなる。

「……そんなもの、探せばいくらでもいるでしょうに。でも残念だったわね。せつかく見つけたのに。ワタシは魔族よ。他をあたることね」

「……？ そうなの？ 知らなかったな。あ、でもでも、やっぱり君も魔族さんなんだね」

意外とオレみたいなの、外出は駄目だと言われれば出たくなるひねくれものなひとたちは結構いるようで。

今の今まで知らなかったわけだから、やっぱりオレってまだまだ世間知らずだなって思ったけれど。

それよりなにより、彼女もノヴァキと同じで、魔族の子供らしい。だとすると、彼女もスクールに通ってるのだろう。それなら一度くらい顔を合わせていてもよさそうなものなのに、初めて見る少女の姿に、自分の交友関係の狭さを実感させられる。

「へえ、さすがにそんなけつたいなカツコしてるだけあって動じないのね。まあ、こんなところにいるくらいなんだから、考えてみればそりゃそうなんだけど」

少女の緊張が、針刺すような警戒に変わる。

どうやらオレは得体の知れない怪しいやつに思われてるらしい。

故あって正体は明かせないけど、怪しいものじゃない。

オレはいつものように、説得力のない言い訳を口にしようとしたけれど。

オレの言葉より早く、少女が言葉を続ける。

「冗談で言ったつもりだったんだけどな。本気で魔族駆除でも依

頼されたの？ ……言つとくけど、ワタシはそう簡単じゃないわよ」  
明らかな敵意と、内在する恐れ。  
でも、そんな少女にびっくりしたのはむしろオレのほうだった。  
慌ててぶんぶんと首を振り、少女の勘違いを正すべく叫ぶ。

「ちょっと待つてくれ、そんな依頼なんて受けてない！ っていうかそんな怖い依頼受けるわけないでしょ！ オレはただ友達に会いに来ただけなんだ。 ……あ、いや、友達っていうか、それはオレが勝手に思ってるだけなんだけど ……」

前半は勢いがあつたが、後半自信がなくなつて、声が小さくなつてゆく。

そもそも今回は、友達として接しても大丈夫かっってお伺いを立てるつて意味合いもあつたわけで。

そんな自分に情けない気持ちにすらなつたけど、一応オレが彼女の言うような物騒な目的でここに来たわけではないことを、分かつてくれたらしい。

彼女は刺さるような敵意を引つ込め、おかしなことを聞いた、とばかりに首を傾げている。

「 ……友達？ 言ってる意味がいまいちよく分からないんだけど。

この先には魔族しかいないのに」

「う、うん。 だから、その ……魔族の子だよ。 ノヴァキつて言うんだけど」

すっかり、『夜を駆けるもの』でいることも忘れて、言葉に自信の籠っていないことを自覚しつつそう言うと、そんなオレの態度なのか、突然少女が笑い出した。

一人だけど、大爆笑だ。

「そ、そんなに笑うところ、あつたかな」

そのお腹を抱え、身を擦らんばかりの勢いに、さすがにちよつとむつとなつたけど。

「あはははっ。ご、ごめん。魔族に対してそんな事を言うやつがいるとは思わなくてさ。しかも、『変わり者』のノヴァキときた！……ほら、友達つてことはさ、あいつとまともに会話できたつてことでしょ？ いやあ、ワタシ以外にそんなひねくれものがあるんだと思つたら愉快でさ！」

おそらくそれが、目の前の少女の素なのだろう。

先程まであつた警戒感は消え去り、親しげな雰囲気がその場に溢れる。

「えつと……君はノヴァキの友達なの？」

「ん？ いや、まさか。そんなご大層なもんじゃないわよ。じつは……じゃなかった、仕事をね、頼んでるの。そうそう、あなたとギルドに仕事を受け入れてもらえなかった人たちとの関係と近いかね」

その雰囲気に押されるようにしてオレが聞くと、彼女はぱたぱたと手を振り、その言葉を返してきた。

つまり、仕事の依頼人と、請負人の間柄つてことなんだろう。

でも、オレは彼女からノヴァキに対しての仕事の間柄に留まらないような親しさを感じ取っていた。

年も近いし、おそらくオレとマイカのような馴染みの関係なんだろうな、なんて考える。

「ああ、忘れてた。自己紹介が遅れたわね。ワタシはリシア。リシア・ウルツクよ。こう見えても魔族の生き残りよ。ま、ハーフだけど。そう言うあなたは？ 正体隠してるみたいだけど、『夜を駆けるもの』ってのがまさか名前じゃないでしょ？」

魔族の少女……リシアの言葉に、一つ頷くオレ。

やけに快く名乗ってくれたリシアに、故あって正体を開かせません、と馬鹿正直に言うのは少々気が引けた。

今まではわが身かわいさに名乗ろうなんてこれっぽっちも考えなかったけど、ノヴァキの正体を明かしてしまったことで、オレの中で何やら心情の変化が生じたらしい。

「リシアが秘密にしてくれるって言うなら教えてもいいけど」  
我が侂だけど、夜な夜なの出歩きは、オレの中ですでに当たり前のものと化していて。

家のものに知られて、それがおじゃんになったら、もう生きていけないかもしれない、なんて思っていた。  
ムシのいい話だけど、念のため、とばかりにそう聞いてみる。

「あゝ、ダメダメ。情報だってお金になるんだから。そのくらいあなただって分かってるでしょう？」

秘密にしなきゃいけないような事情があるなら、ワタシになんか話さないほうがいいわ。下手すれば次の日にはユーライジアじゅうに広まってるかも」

そうしたら、返ってきたのはなんとも正直な、そんな言葉だった。

「それは、困るなあ」  
思わず苦笑。

「でしょ。別にあなたを呼ぶときに困るなって思っただけだから、やめときなさい。」

「……でも、そしたらどうするかな。ヨルさん、とか？」  
その苦笑は、すぐに嬉しいものになる。

だってリシアのその言葉は正体も明かせない怪しい人物であるはずのオレに対して、これきりでない関係を示唆する、そんな言葉だったからだ。

「リシアはすごくいい人だね」

少なくとも、常識として教えられてきた、近付いてはならない存在とはおおいにかけ離れている。

「な、何よ。いきなり?」

うるたえ、照れている様は何変わることはない可愛らしい女の子だ。

「だって、黙ってればすむことでしょ? それなのにわざわざ忠告してくれたじゃん」

「そ、それは……口が滑ったのよ。っていうか、だいたいあなた、街での話と違いすぎるのよ。もつと得体の知れない怖いやつかと思つてたのに」

どうやら、お互いに似たような先入観を持っていたらしい。

なんだか彼女にますます親近感が湧いてくる。

リシアとなら友達になれるかも、そんな予感。

その事を考えれば、やっぱり正直に名乗ってもよかったような気もしたけれど。

「……ラルス、って呼んでくれないかな。この格好の時のために考えた……あ、いや、名前が必要なときは、この名を使ってるから」

気付けばオレは、そんな事を言っていた。

考えに考えぬいて、初披露の機会がようやく訪れた、なんて内心思いながら。

「ラルス、ね。よし、憶えた。……それで? ラルスは結局何しにきたんだっけ?」

するとリシアは満足そうに頷き、わざと意地悪そうな顔をして、一度口にしたはずの分かりきつたことを再び聞いてくる。

「あ、だから……ノヴァキに会いに来たんだよ」

「本当に友達っていう間柄でいいのか、確認するんだっけ?」

ニヤニヤとリシア。



ハイグレドクラスの生徒にもなってそんな事を心配してるなんて随分子供っぽいっていうか、なんとも情けなく。仮面で顔は見えないはずなのに、そんな自分がほとんど筒抜けのようにも見えて。

「いいわ、面白そうだから付き合って……案内してあげる」

「あ、うん……」

心底楽しそうなりシアに引かれるままに、オレはその手を取ったのだった……。

(第11話につづく)

## 第11話、不意に生まれし、拒絶の裏にあるもの

心底楽しそうなりシアに引かれるままに、オレはその手を取ってまもなく。

リシアは山道に入り口へ差し掛かったところで立ち止まり、オレにそこで待っているように命じると、重そうな荷物を運びだし、縄の引かれた境界線。その入り口にある茂みに顔を突っ込んだ。

一体何をしてるのかなと思うより早く感じたのは、微弱な金の魔力<sup>ウルツク</sup>で。

それに気付いたとたん、ぶうんと唸る音がして。

今の今まで暗かったその場が、前来たときと同様、白けた光に包まれる。

それは、魔人族が住むこの場所と、外界を隔てる縄から発せられたもので。

「もしかしてこの縄、リシアが？」

てつきり、外のものが魔人族たちを避けるために、出さないために張られているものだと思いついてから、リシアのその行動に驚きを返せない。

「そうよ。むやみやたらに人間や魔精霊たちが、この中に入っていないようにね。光の魔力<sup>セザール</sup>が走ってるの。このワタシが作った『機械』<sup>機械</sup>っていうマジックアイテムでね」

言って、リシアは茂みの奥にある、何やらピカピカと光る鉄の箱を見せてくれる。

前にここを訪れた時は、ただ光ってただけで何かあったわけじゃなかったことに疑問を覚えたオレだったけど。

それより何より、リシアの発したその言葉に、オレは強く興味をそ

そられていた。

「作った？ それを？ リシアが？」

「ええ、そうよ。金の名のもとにつくられたマジックアイテム。それが『機械』。」

これはほんの一部だけど、思いつく限りの役立つものを作って、このユーライジアの世界をヴルックなしでは生きられない、そんな世界にするのがワタシの野望なの」

ヴルック。それは金属性の根源……神の一人の名前だ。

魔族に姓はなかったはずだから、リシアのお父さんかお母さん、そのどちらかの姓なんだろう。

発するその言葉に、強い自信が溢れている。

自信の生まれを尊び、誇りを持って生きるその様に、オレは強い感動をおぼえた。

カムラル家のものである意味を見出せないでいるオレとは比べるのもおこがましいと。

「すごいな。ほんの一部だってことは、他にもあるってことでしょっ？」

「ええ、まだ中古のマジックアイテムに手を加えたのがほとんどだけだね。世界をあっと言わせることのできる代物を、いくつか考えてるわ」

雑多で大きなリシアの荷物は、その使われなくなったり壊れたりした中古のマジックアイテムのようだった。

一つ持とうかと提案したけど、大事なもののだろう。

あっさりと断られて、それでもめげずにそんな話をしながら、山道を登ってゆく。

「例えば、どんな？」

「そうねえ……竜より早く飛べるやつとか、馬のいない馬車とか、遠くと遠くで会話できるやつとか、書くのに時間かかる絵が、一瞬で完成しちゃうやつとか……上げればきりがないけど」  
「へえ。……すごい、ほんとにすごいよ。夢の世界みたいだね」  
それでもまだほんの一部なんだろう。言葉の端から伺えるそのことに、同じ言葉しか出てこない。

「って言っても、今あげたのはヴルツク家に太古の昔から伝わる古文書の受け売りみたいなものなだけだ」

「古文書かあ。ロシアは解読とかできたりするんだ」

「ま、まあ、一応ね」

「やるなあ。オレなんかちゃんと今の言葉に訳された魔術書一冊覚えるのがやつとなのに」

「できる人がいるところにはいるもんだなって、しみじみ思うオレである。」

来週の試験のような未開のダンジョンなどには、古代語が記されている遺物なんかも多くて、それが理解できるというのは大きな強みだろう。

「……そんなこと面と向かって言われたの、ノヴァキ以来ね」

驚きと、そこから生まれる喜びをこちゃませにしてロシアは呟き、それを誤魔化すようにして、ロシアは言葉を続ける。

「でも魔術書って、あの凶器になるくらい分厚いやつでしょ？ あれを覚えたっていうの？ まるまる一冊？」

「え？ う、うん。なんていうか暇だったから……」

もちろん魔法の知識を深めることが好きだったからって理由もあるけれど。

今みたいな『夜を駆けるもの』でいる時間を除けば……特にお日様が昇っている間は、一人で自由にしていられるのは自室か図書室く

らしいしかなかった。

カムラル家は元々魔法の素養がある家系だし、魔法に関わるのが趣味の一つになるのは、

まあ必然と言えばそうだったんだろうけど……。

「あなた、もしかしてかなりいいところのおじ……」

「違う！ オレはそんなんじゃない！」

その言葉を聞いたとたん。

自分でも驚くほどの勢いで、心が沸騰してゆくのをオレは感じていた。

かっと白くなる視界。

思考が与えられた言葉を排除しようとしている。

それは、少し前に感じたことのある感覚だった。

オレが他人とは違う、避けられるべきおかしい存在であると自覚するその瞬間だ。

サミィやマイカにも同じような事を言われて、同じように視界が白くなって。

何も悪いところはないのに、自分勝手に理不尽な怒りをぶつけた記憶が。

それはとても苦い思い出。

故にオレの熱は、やはり一瞬で冷え込む。

苦味だけを残して、我に返る。

「う、ごめん。急にどなったりして……」

「……びっくりしたなあ、もう。いやいや、こっちこそごめん。そんな風に姿隠してるんだもの、

そりゃそうよね。あー、なんていうか、そんななりの割には話やすくてさ、つい突っ込みすぎちゃったみたいね」

穴があつたら入りたいオレに、大げさに肩をすくめて見せて、朗らかに逆に頭を下げってくるリシア。

一方的に悪いのはこっちなのがいい人だなんてオレは思った。

それはサミイやマイカたちも同じだ。

数はたくさんいないけど、そう言う意味では、オレは周りで支えてくれる人に恵まれているんだろう。

リシアともそうなれば、よりいいと強く思う。

「やっぱりリシアはいい人だね。オレ、リシアと友達になりたいかも」

「また……こつ恥ずかしいことを臆面もなく……いや、あるのか。減るもんじゃなし、別に構わないけどさ」

「本当？　ありがとう！」

「はは。噂の『夜を駆けるもの』が、あなたみたいな子だとは思わなかったわよ……」

気持ち昂ぶるオレに、照れの含んだ苦笑のリシア。

なんだ、やっぱり魔族と人間族の違いなんてない。

そんな確たる実感を得たのもその瞬間で……。

「ああ、でも一つだけ聞いてもいいかな？」

笑顔のまま、少し真面目な面持ちでリシアが言う。

友達になる条件かな、なんて思い、それでもさっきの苦い感情を引きずったまま頷くと。

「あなた……ラルスって、魔導師か何かなの？ もしそうなら、ワタシの研究を手伝ってくれると助かるんだけど」

帰ってきた答えは、恐れていたものではなく、そんな答えだった。

「いやいや、まさか。勉強中の見習いだよ。現に資格持つてるわけじゃないし」

オレは、期待を持たせてしまったかもしれないと思い、申し訳なくなって頭を下げる。

リシアの言う魔導師とは、その言葉通り、ある意味無限の可能性を秘めた魔法を、効率よく、理性的に世のために使うことを教える人のことである。

スクールの魔法科の先生はそのための資格（ギルドと国で認可が下りる）を持っているし、アルもその資格を所有している。

ギルドへ行き、試験を受けて、素養と人格的に問題がなければ、その人は魔導師という肩書きを持つことになるわけだが、まだまだ修行不足のオレには、先の話だろう。

いや、オレに先なんかないわけだから取っても無意味だ、という方が意味合いが強いのもしれないけれど。

「夢のひとつかな、魔導師になるのは……」

そう、希ったことはある。

もしオレが、母さんの後を継ぐことがなかったらと。

「ふうん、そか。見習いか。でも目指してるってことは魔法使う素質があるってことよね」

オレの普段なら口には出せない本音を聞いて、リシアはどう思っただろう。

少しだけ考え込む仕草を見せた後、そう聞いてくる。

「う、うん。どうだろ。だといんだけど」  
生まれつきの魔力ならマイカやルコナのほうが全然上だし、例えば魔法剣のような、魔法を用いた戦いにおいてはルートの右に出るものはいないだろう。  
くわえて、日々真面目に努力し、真剣に取り組んでいる分、その知識においてもサミイのほうに分があるように思える。

「はは、自信なさげだね。そんな上等なマジックアイテム身につけてるのに」

だから本気でそう言うと、リシアは謙遜しなさんな、とばかりにオレの顔を見てきた。

「あ、これのこと？　うちのほう……じゃなかった、物置で埃かぶっててさ、ちょうどいいやって思ってたんだけど」

「ワタシの見立てだと、それ一つで家一つ建つくらい価値があると思うけどね」

「うっ……」

秘密にしたいのなら迂闊に喋らないほうがいいんじゃないのって感じの呆れた声。

ほんとにうちの宝物殿の隅っこで埃かぶってたから大したものじゃないって思ってたわけだけど、くさっても宝物の殿というか、なかなか大したことあるらしい。

その時点でやんごとなき人物像が浮かんでこようものだが、リシアは聞かなかったことにしてくれて、話を続ける。

「視覚と……音声を補正する魔法……かな？　この場合。光と風のほうが必要になってくるんだけど、

他の、これからワタシが作ろうと思ってる大発明品も、十二種様々な魔力が必要になってくるわけ。

ワタシは金属性の魔力なら持つてるんだけど、とくに火の魔力を集めるのに苦労しててね、ほら、やっぱりアイテムの練成には不可欠



なものでしょ？」

確かに、魔法剣とかじゃなくても、武器防具を作るのに火は不可欠だろう。

そしてその言葉は、カムラル家のオレにとって願ったり叶ったりの言葉だった。

「火の魔力？ それならちょうどいいかも。オレ、火の魔法得意だよ。……ほら」

右手のひらを開くと同時に、燃える炎を頭に浮かばせる。

火の魔力を種火にし、ぼうと燃え立つ小さな炎。

その手のひらをぎゅっと閉じると、火の粉よりも細かなカムラルの粒子となって、風に流され世界にとけて、消えてゆく。それを随分長い間ぽかんと見ていたリシアだったけど。

「期待以上よ、親友！ 是非うちの工房へ寄ってきなさい！」

瞳をきらきらさせて、がっしとオレの手を掴むリシア。

そのいきなりの行動に、覆いに戸惑うオレ。

「そ、それはいいけど、ノヴァキのところに案内してくれるんじゃない……」

「問題ないわ。うちの通り道に、あいつんちあるし！ 今の時間帯なら家にいるはずよ。」

「急ぎましよう！ 夜は短いわ！」

そのまま引っ張られるようにして、山道を登ってゆく破目になる。

そう言えば、魔法は無闇やたらに使うものではないと母さんにも父さんにもいい聞かされていたことを思い出したのはその瞬間で……。

(第12話につづく)

## 第12話、何に置いても拘るその意味は

リシアに引つ張られるようにして進む、夜の山道。

こういうのも悪くないかも、なんて思いつつ連れ立って歩いてみると、やがて辿り着いたのは山のてっぺんに向かう途中で見た、魔族たちの暮らす集落の一つへと続く道だった。

「ここよ。まあ、家自体少ないから案内の必要もなかったかもしれないけど」

仄暗い、今にも消えてしまいそうな橙色の魔法灯。

『夜を駆けるもの』の仕事で外に出ることがなければ、その見た目で小一時間世間知らずを思い知らされただろう、小さく寒さも夏のじめじめも素通りしそうな……木造りの家だ。

まあ、中には家がない人もいるらしいから雨がしのげるだけまだまし、なんだろうけど。

「ノヴァキいる〜?」

そんな、今思えば失礼極まりないことを考えていると。

リシアが戸を叩き、声あげて呼びかける。

そしてしばらく待ったが、家の中からは何の反応もない。

「いないのかな……?」

「まさか。ワタシとの仕事がなけりゃ日がな家に籠ってるやつよ。スクールのある昼間ならともかく、あいつがこんな時間に外出する理由なんてないと思うけど」

『トランペット』のこと知らないのかなって思ったけど、魔族と

しての正体すら晒していたわけだし、秘密なのかもしれない……なんて思い、口には出さない。

それを考えると、彼の領域に勝手に入り込んでしまった自分が改めていけない事をしてしまった、なんて気分になる。

困るのは、そんな罪悪感と相反するような、優越感みたいなものがオレの中にあることだろう。

「こらっつ、ノヴァキ！ お客さんよ！ いいから出てきなさい！」  
逆にリシアとしては、居留守を使われていると思ったのかもしれない。

周りには森しくないからいいものの、それこそ町ならご近所じゅうに響きそうな声で叫んでいる。

そんな、思っていた以上の大きな音量にオレが圧倒されていると。

リシアの思う通り居留守でも使っていたのか、はたまた眠ってでもいたのか、家の中でがたがたと人の気配がして、バン！ と木の扉が開け放たれる。

「なんだよ！ しばらく仕事はやらないって……」

そして、そんなリシア以上の大きなノヴァキの声。

それは、初めて会った時とはまるで雰囲気の違いのものだったけど。

オレが仮面の奥で、こんな一面もあるんだなって目をしばたかせていると、その視線と言葉は、オレとあったところで凍りついたようにぴたりと止まった。

「こ、こんばんは、ノヴァキ」

「……っ、また来たのか」

とりあえずとばかりに夜の挨拶をすると、魔族としての正体を見失ったとき以上に機嫌の悪そうな……というか明らかに嫌なやつが来た、って感じの言葉を返される。

「その、聞きたいことがあるっていうか、話しておきたいことがあるって……」

もしかしたら、深い意味なんてなく、それがノヴァキの普通の対応だったのかもしれないけれど。

その一言だけで、オレの気分はオレが予想していた以上に沈んでいった。

友達になること、さっきリシアに言うことのできたその言葉が、ぶ厚い何かにせき止められていて、

口から出てきてくれない。

「あなた、相変わらずね。こんな場所までわざわざやって来てくれるのに何よその態度。もっと愛想よくできないの？」

「……無理だな。オレはお前みたいに上手くはできない」

「……」

言い捨てるようなノヴァキの言葉に、リシアも沈黙する。

二人のそんな気まずい雰囲気がいやで。

自分がここに来たせいで空気が悪くなってことを実感して、オレはそれを破るように口を開く。

「ごめん。こんな時間に。あのさ、来週の試験のことなんだけど。

ほら、オレたちで組もって話」

「……なんだ、やっぱりやめにするか？ 安心していい。それで俺

がお前の正体をバラすことはない。

言葉だけじゃ信用できないなら……」

「ううん、そうじゃなくて！ ノヴァキと組むこと、友達に言っちゃってさ。その、なんて言えばいいのか……紹介しろって言われるかもしれないし、スクールへ行く前に口裏を合わせなきゃまずいなって思ってたんだよ。ええと、あの、ここで会ってるってことは話せないから、スクール内で知り合って……と、友達になった経緯とか

さ……」

ノヴァキは、オレが二人で組むのを断りにきたのだと思っていたらしい。

あるいはあの時ぼつと口から出ただけで、ノヴァキとしてはあまり乗り気じゃなかったのかもしれない。

確かに突然の言葉だったけれど。

オレの方としてはノヴァキと組むことは確定事項だったから、オレはノヴァキの言葉を遮るようにして口を挟む。

その言葉はまとまってなくて無茶苦茶だったけれど、今さっき言葉にならなかったことも流れで口にできたから、オレとしては上出来だったんだけど。

なぜかその場に訪れるは、一層の重い沈黙だった。

「ごめん。そりゃそうだよね。調子に乗ったかも。組むかどうかってのはオレの正体に関しての代価だもんね。……やっぱり忘れて。

あ、ええと。友達ってことはさ」

オレは、その雰囲気を引きずられるようにして、どんどん落ち込んでゆく。

それと同時に冷静になって考えてみれば、オレはともかくとしてノヴァキにオレを友達だと認めてくれる要素なんて一つもないんじゃないかってことだった。

あるのは、迷惑をかけたことだけののような気もする。

友達のことはオレの気のせいだったけど、故あって試験で組むことになった。

その事をどう辻褃が合うように明日話そうかかって悩み込んでいると。

そこでようやく、ノヴァキが口を開いてくれた。

「……リシア、席を外してくれ」

「うーん。自ら言いふらすって宣言した手前、仕方ないか。それじゃあラルス、ワタシ家に帰るわ。」

ワタシんちこっから一本道だからまた暇なときに顔出してね」

リシアは、ノヴァキの言葉に苦笑を浮かべた後、そう言って立ち去っていく。

「分かった。今日はどうもありがとう！」

その背に声をかけると、軽く手を上げる仕草をして、そのまま森の闇へと紛れてゆく。

「リシアと何か約束したのか？」

「え？ う、うん。発明品を見せてもらって、作るのを手伝うことになってたんだけど……」

ふいに横合いからかかった言葉。

とことん迷惑がられているのかと思っただらそうでもないらしい。

「……迂闊な事はしない方がいい。リシアがお前の正体を知れば、それは一瞬で広まるぞ、あいつはああ見えて、自分が生きるためには手段を選ばない女だ」

「はは、リシアと同じこと言ってる。ノヴァキってリシアのこと、よく知ってるんだね。やっぱり付き合いは長いの？」

それがついおかしくて、笑みをこぼすオレ。

そんなオレに対し、ノヴァキは苦虫を噛み潰したような顔をして天を見上げた。

つられるようにして無数の瞬く星を見やっていると、そのままノヴァキは言葉を続ける。

「長いだろうな、あくまで仕事上の関係だが」

「それも言ってた。仕事ってなんなの？」

まるで示し合わせたような言葉。

それが面白くて、さっきまでのへこんでた気分はどこへやら、思わずそう聞くと、ノヴァキは顔を下ろし、オレを見据えた。

「……実験体。あいつのマジックアイテムが、ちゃんと人間族に……魔族でもいいが、効力を発揮するかどうかのな。おかげで三回ほど死にかけたよ。まあ、リシアからの仕事があれば、オレはとくに野垂れ死んでいただろうがな」  
そして、何だか言い聞かせるみたいに、その詳しい仕事内容を教えてくれる。

「へえ、それじゃあれからもしリシアの夢が叶ったら、ノヴァキは英雄だね」

「……お前、俺の話聞いてたか？」

「うん？ もちろん。だってそうでしょ。たとえば火の力カムラルを借りることだってさ、最初の一人が勇気を出して頑張ってたから、今こんなに当たり前になるまで広まってるわけだし、ノヴァキのしてることって、それと同じでしょ？ やっぱりすごいじゃん」

得意げにそう言うと、何故かノヴァキは深い深いため息をついて。

「立ち話もなんだ、家にあがってくれ。汚くて小さい家だが……茶ぐらい出してやるよ。あんたが飲んだこともないような極上に薄いやつをな」

くるりと背を向けて、そっくり残しさつさと家に入ってしまったから。

オレは頷き感謝の意を示す間もなく、ノヴァキの後を追って、ノヴァキの家へとお邪魔したのだった……。



家の中にお邪魔してみれば、空間の使い方がうまいのか、そこには思ったより広い空間があった。

真ん中に木のテーブル、木の丸椅子。

木のベッドに本棚、箆笥。

確かにどれも骨董品のように古ぼけてはいたけど、ノヴァキの言葉はやっぱり建前で、意識して清潔にしているのがよく伺える。

友達の家といえども無駄に広くて自宅とあまり変わらず（大工さんが同じ人だっというのものもあるけど）って感じだったから、こういかにも家って感じの雰囲気、随分と新鮮だった。

ノヴァキに淹れてもらった、飲んだこともないような極上に薄いお茶をご馳走になりつつ、不躰なまでに辺りを見学している。

机の反対側、対面の一番遠いところに陣取ったノヴァキと、目が合う。

「……変なやつだな。あんたは。王族ってやつは、みんなそうなのか？」

先程の冷たく突き放す感じはどこにもなく、わずかに苦笑を浮かべて、そんな事を言う。

「ええー？ 変かなあ？ まあ、世間知らずとはよく言われるけど」

「世間知らずね、確かにそりゃそうだろうが、俺には何も考えてないってほづがじっくりくるがな」

「うっ……そんなことないやい」

確かにオレは思いのままに行動することが多々あって、痛いところをつかれたなあと思いつつ、ノヴァキはさらに言葉を続ける。

「いや、あるね。少なくとも試験で俺たちが組む話を、リシアの前ですべきではなかった。あれでリシアは俺があんたの正体を知っていることに確信を得たはずだ。他人事ながら聞いてて冷や冷やしたよ。こいつは本当に正体を隠す気があるのか、ってね」

「うぐっ……」

自分の住処だからなのか、饒舌なノヴァキにただただ言葉を失うオレ。

反論が思い浮かぶ前に、ノヴァキはさらに畳み掛ける。

「それにだ、オレと実際のおんたはそもそも会う機会なんてなかったはずだ。口裏を合わせるだつて？ 馬鹿げてる。俺を試験の相棒だなんて紹介なんかしてみる。言わなくなつてばれるぞ」

「そ、そうかなあ。だからスクールでたまたま知り合つてさ、試験で同じ組になるくらい仲良くなった……って感じにしようと思つただけだ」

「不可能だろ、そもそもそんな事は」

「何で？」

暗にお前とは絶対に友達にはならない、そう言われてる気がして、それを否定するみたいにオレはノヴァキに問いかける。

「……あんたは自分のこと、よく分かつてるよ。確かに俺たちのことを何も知らないらしい。」

まあ、知る必要もないんだろうけどな」

呆れたような、でも少し驚きの混じつたノヴァキの眩き。

それじゃあ教えてくれ、とばかりに続く言葉を待っていると、再びノヴァキはため息を吐いて、言った。

「ユーライジアの女神アスカの元、俺たちはスクールへ通わなければならぬ義務がある。」

拒否すれば日がな陽の当たらない牢屋行きだ」

「そんな！ そんなの、横暴でしょ！」

「仕方ないさ、俺たちは魔人族なんだ。人間族や魔精霊にとつての害悪。従わなければ末路は見えてる。……もつとも、牢屋に閉じ込められている方が、まだマシだろうけどな」

かつては人間たちの敵だった魔人族。

ユーライジアの国を、世界を滅ぼそうとしていた魔人族。

だけどそれを母さんたちが撃退して、罪を憎み人を憎まず、みんなで生きるために作ったのあスクールであり、母さんの信念のはずだった。

だけど、実際は違うらしい。

今の今まで知らなかった自分が、すごく嫌になる。

「そんなのすぐにやめさせなきゃ、アルに言って……」

「だからそれをやめておけと言ってるんだ。あんたはともかく、他の人間はそんな事一つも望んじやいないんだ。十年前の魔物の襲撃事件、知らないわけじゃやないだろう？ あれで、多くの人が殺されてる。その裏では、魔人族が手を引いているって噂をさ。……つまり、魔人族はみんな容疑者なんだよ。それを知って、同じことが言えるか？」

「……っ」

その言葉はもしかしたら、父さんたちを殺した敵に対して『友達』だなんて言葉を吐けるのかと、そう言いたいのかも知れない。そんなオレと同じように、十年前の魔物の襲撃による被害者は、かなりの数、スクールの生徒の中にいる。

オレは二の句が告げなくなる代わりに、そこでようやく理解した。理解してしまった。

今、魔族たちの置かれている状況がどんなものなのかを。何故、不可能なのかを。

「でも、それは根も葉もない噂でしょ？ 魔族たちが裏で手を引いてるなんて証拠はないはずだし、十年前って言ったなら今スクールに通ってる魔人さんたちはみんな幼い子供じゃないか」

それでも納得はできなくて、オレはそんな事を言う。

ノヴァキはそれに頷いて。

「確かにそれは正論だ。他の奴らもそれは分かってるだろう。それで納得いくかどうかは別問題だな」

すぐさまオレの反論の言葉を奪う。

そんなノヴァキの言葉に対し、そうかもしれないって思ってしまった自分が、情けなくて。

「だったらなんで一緒に組もう、なんて言ったのさ？」

ノヴァキの言葉を認めるのが嫌で、否定して欲しくて、オレは決定的なその言葉を口にする。

「あんたはユーライジアの宝だ。裏を返せば、この国を破滅させるための肝とも言える。」

開のダンジョン、たった一人の相棒、二人きり。亡き者にするには絶好の機会だと思わないか？」

すると返ってきたのは、完膚なきまでの肯定の言葉だった。

「……買い被りすぎだって。オレ一人死んだって、世界は何も変わらない。ユーライジアはびくともしないさ。……それに、オレは滅茶苦茶しぶといよ？ ノヴァキなんか指先一つで返り討ちにしちゃうよっ。」

それは、さつきリシアが口にしたのと同じ、オレを慮っての言葉だ。証拠にノヴァキは、無理して悪い顔をしている。それが自虐の言葉であることを自覚している。

だからオレは、笑顔でそう返した。

そこに一抹の真実が混じっていることなど、オレ自身も気付くことはなく。

「大層な自信だな。……そうだな、うん。その時はいつそのこと、ひと思いに殺してくれ」

「やだよ、そんなの」

諦観のこもった、ノヴァキの言葉。

危ないから近寄ってはいけない、そんな危険色のようなやり取りは、まだ続いているらしい。

オレはそれに、仮面の奥で舌を出しつつ、言下に否定する。

それは本意だった。

偉そうなことを口にしていただけ、ノヴァキが言うような妄想めいたことが起こったとしたら、多分オレは何もできないだろうと言う確信。

「で？ 結局理由は？ 実際オレと組んでいいことなんてないかもだけ」

それは、想像するもありえないことだったから、その妄想を打ち消すように、オレは再度問いかける。

「……そこまで徹底していると、呆れを通り越して驚きだな。普通頂点に立つ奴つてのは自分の価値を肯定し自慢したがるものと思っただけ……いや、気付いてないのか？ それこそまさかだが……」

何だか、もう癖みたいになってる、ノヴァキのため息。

その後はぶつぶつ言っていてよく聞こえなかったけど、どうやらオレはノヴァキにとって驚くべき人物らしい。

それがいいのか悪いのかは、正直微妙だった。

……思ったより嫌われている風でないのは、せめてもの救いだったけれど。

「カムラル家の土地に、カムラル教会って名前の建物があるだろう？ あの、とてつもなく大きな舞台のある」

ふいにというか、ようやくノヴァキは理由を口にしてくれる。オレがそれに相槌を打つと、ノヴァキはさらに言葉を続けた。

「ルフローズの日、あるいは今度の祭の『音楽会』で、そこに立つのが夢なんだ。俺の『トランペット』とともにさ。人間族や魔精霊なら誰でも参加が認められてるけど、魔人族はまだ認められていない。……だからそのための下地作りさ。その子と仲良くなって魔人族の地位を確立する。同じ人間だって認めてもらって、参加資格を勝ち取りたい……ってあの時思った。それが理由だよ。魔人族らしい中々な企みだろう？」

「お、おう。お主も悪よのう……じゃなかった、それを本人の前で言っちゃう時点で企みも何も無いと思うけどな」

そんな事なら今すぐにでも、なんてオレだったけど、それはすんでのところで思いとどまった。

何故かは分からない。

ノヴァキの語るその夢を、軽いものにしたくなかったからなのかもしれないし、その夢を一步一步叶える様を、見たかったからなのかもしれなかった。

向けられる笑顔が眩しくて直視できない。

それは、オレにできないことができる、夢を持つことができるノヴァキが心底羨ましかったせいもあるだろうけど。

「……って待てよ？ その理由はよく分かったけどさ、そしたら試験で一緒に組むって話はどうするんだ？」

仲良くする気持ちは同じで嬉しかったけど、当面の問題はそこだろう。

内心では、罪を憎んでというか、別にノヴァキが首謀者じゃないんだから、ノヴァキの夢のためにもたまたまスクールで知り合って友達になった案を推したいんだけど……。

「ああ、ようやく本題に入ったか。それなんだけどな、あんたにちよつとやってみたいことがあるんだ」

「やってもらいたいこと？ 何かいい案あるの？」

ちゃんとノヴァキも考えていてくれたらしい、オレの反芻に頷き、言葉を続ける。

「試験の公平を期すためというのが大義名分なんだが、実技と教養での成績付けをされているわけだし、それぞれの組の実力が平均的にすべきだって主張をするんだ。簡単に言えば、一番上の成績のあったと、一番下の俺みたいにさ」

「ええっ、そうなの？」

「悪かったな。どうせどうしようもない馬鹿だよ」

「違う違う。そうじゃなく、オレって一番だったの？」

確か教養の一番はルッキーで、実技の一番はルートだったような気がしたけど。

「嫌味か？ ……だからあんたは生徒会長なんだろう？」

「うっむ……」

ジト目のノヴァキに唸るオレ。

ノヴァキが最下位なこと（まったくもってそうは思えなかったか

ら)驚いたことも確かにあっただけ。  
アルに頼まれてなんとなくて仕事してたなんてとてもじゃないが言えそうもない雰囲気だったからだ。

「……まあ、いい。それにあたつての問題は一つだ。普通なら一番上のやつが一番下のやつと組むなんて嫌なはずなんだ。だがあんたは相当おかしいことが、今日の言動で嫌というほど理解させられた。そんなあんたなら、この案にしぶったりしないだろう?」

「なんか引つかかる言い方だけど、まあ、そうかな」  
むしろ、最初に言われた時点でオレの中では確定事項だったわけだが、そこまでして変言されると、さすがにオレでも堪えてくる。むすつとしてそう答えると、ノヴァキは苦笑して、

「そこで俺は生徒会の『意見箱』にその旨を書いたものを投書する。そしてそれをなんとか議会上げてもらい、あんたにまずそれを当然のように嫌がるんだ。だがそれをあえて採用して、度量のある素晴らしい生徒会長を主張する。……そうすればあんたの格も上がり、オレの夢も一歩近付く」

得意げに、だけど自分に言い聞かせるみたいにして、そう言った。

「ほほう、よくそんなこと思いつくなあ。本当に成績最下位なの?

もしかしてそれもそのための布石なんじゃあ」

「はは。……まさか」

純粹に感心してそう呟いたのだが、どうやら間抜けは見つかっただけらしい。

いやそれもわざとかもしれないけれど、そこでもノヴァキの笑みはいかにも嘘っぽかった。

でもその嘘は悪くない。なんとなく、そう思う。

ノヴァキにはこんな一面もあるんだって、新しい発見だったから。



そうして、オレたちはその後、ノヴァキの極上の薄いお茶を肴に、意味のあつてないような様々なことを話した。

それは、当面の問題はなんとかかなりそうだったことと、言葉では否定されてしまったけど、

十分可能性は残されてるだろう友達同士のようなその空気をできるだけ長く感じ取っていたかったからなのかもしれない。

ふいに思うのは、どうしてオレはこんなにもノヴァキと友達になることに拘ってるんだらうって事だった。

半ばそれを強引に押し付けようとする節があるのを、オレは自覚している。

それは、昔母さんに何かを言われたような……オレの、カムラル家の使命に関係してる気がしたけど、どうしても思い出せなかった。

「あ、そう言えばリシアにも用があつたんだったか？ あんた、いつまでもここにいられるわけじゃないんだろ？」

できるだけ長くと思っていたその時間は、三杯目のお茶が終わった所であっさり終止符を打たれる。

「あ、うん。そうだった。急がなくちゃ」

さすがに大遅刻でもしない限り部屋に入ってこられる可能性はないだろうけど、ラネアさん達の朝は早い。

してはいけないことをしている手前、徹夜してしまうというのもなんだらう。

次の日に支障をきたすようなことがあつてはならない。

リシアの発明品をじっくり見せてもらおうかと思つたけど、もうあまり時間はなさそうだった。

もう寝てるかもしれないけど、とにもかくにも寄るだけ寄ってみよ

う。

オレはそう思い立ち、ノヴァキにお暇を告げる。

「こんな遅くにごめん。……っていうのは、さっきも言ったかもしれないけど、今日はありがとう」

「いや、試験の件について詳しく話さなかったのがいけなかったんだ。ちよつとよかったよ」

家の外までお見送りしてくれたノヴァキに、自然と口からついて出た感謝の言葉。

返ってきたのは、今日ここに来たときは想像もつかなかた柔らかな声。

そのまままた明日の挨拶をして別れようとしたオレだったけれど。

その声に安心して調子に乗ったからなのか、気付けばオレは友達であることと同じくらいに聞きたかったことを口にしていた。

「あのさ、『トランペット』のことなんだけどさ……最初の時みたいに、また聞きに来てもいい？」

いや、ほら、あのさ、カムラル教会の舞台に立つんならそれなりのレベルが必要っていうかさ、その家のものオレとしてはさ、ノヴァキの腕をもつと知っておきたいんだよ」

聞かれてもいないのに、言い訳してるみたいに矢継ぎ早に言葉を紡ぐオレ。

それなりのレベルどころか、オレの見立てでは優勝できるんじゃないかなって思ってた。

なにぶん素人の感想なわけで、さすがにそこまでは口にできなかったけど……。

「……ああ、是非頼む。俺のほうから口にするのはどうかなって思

つてたところなんだ」

言って、ノヴァキは破顔する。

「そ、それじゃ、そう言うことで明日も明後日も来るから！」

「別にそれは構わないが……さすがに毎日はいないぞ？」

「う、うん。それならそれで別にいいよっ」

オレはそんなノヴァキに、ひどく動揺していた。

だから焦ったようなやり取りをし、そのまま手を上げてその場を離れる。

何故動揺していたのか。

理由は明確だった。

さっきの嘘の笑顔とは質の違うその笑顔のその中に。

真逆の……オレの言葉で表わすのなら、泣きたくなるような何かが含まれていたからだ。

( 第13話につづく )

### 第13話、心の奥底にある願望、露わに

そうして、さらにきつくなる山道、ノヴァキの笑顔の中にあるものの理由を探し求めて心ここにあらずの気分で歩いていると。

ちょうど靴の先くらいの大さの何かに躓いて、転びそうになった所で我に返った。

「…………あれ？ これ、どこかで見たような…………」

草が丸まっていたわけでも、石にけつまずいたのとも違う。

よくよく見てみると、それは腕輪だった。

材質はおそらく、魔力をためるのに適した魔法金か何かだろう。

金色を下地に、赤の…………古代文字が使われている。

「『SOUL』か…………」

どこでそれを見たのか。

それにはすぐに思い当たることができた。

半ば義務と化した、生きるために…………あるいは趣味として読んでいた魔法書、ではなく。

ノヴァキやリシアのように語ることもできない、オレの心内だけの夢を、心内だけで叶えるために読んでいた、古い歴史書に載っていた言葉だ。

何でも、人は死ぬことで形のない、生まれたての魔精霊と同じような状態になるらしい。

『SOUL』、魂と呼ばれるそれは、一度神の世界に運ばれた後、他の肉体に宿り、他の存在として生まれ変わる…………そんなような事が書かれていたはずだ。

スクールにある図書館の、貸し出し禁止図書。普通なら知ることはないだろうその知識に、オレはいろいろと想像を巡らせていたから、その言葉を覚えていた。

「うーん、これリシアが落としたのかな。つがいのやつがあるみたいだし」

以外と重いそれを両手で持ち上げさらに観察していると、細い金ぴかの金具と鎖がついているのが分かった。それは脆いものなのか、半ばのところで千切れており、だらんとしている。

「何かのマジックアイテムなんだろうな、届けてあげなくちゃ」  
仮に二つで一つのものならば、無くて困っているかもしれない。そう思い、足を進めようとして。

「え……っ?」

初めに感じたのは、身体の重さだった。腕輪を見やれば、それは赤く鈍い光を放っている。オレから何かが流れ込むように。

「うわぁっ?」

そして、それがオレ自身の魔力であることに気付いた時。いきなり視界がぐるぐるになり擦れ、色彩がごちゃ混ぜになり、戻る。

いや、戻ってなどいなかった。

そこは知らない場所だ。

大きさはノヴァキの家に近いだろうか。

だが、その半分は女性らしい雰囲気醸し出している、そんな部屋

で。

ふいに香るのは、金属の錆びたような匂いだ。  
オレの知らない匂い。

ごっつ。

ここはどこだ？ と口にしようとした瞬間、視界が暗くなって。

……それが自分の瞼の裏であることに気付いたとき。

目を開ければ、腕輪を最初に見つけた場所へと戻っていた。

「今のは……」

視線を下げれば、そこにあるのはもう光らない金色の腕輪。

匂いがしたということは、あれはここに立っていたオレが見た幻ではない、そんな気がした。

近くに、今さっき感じた金属の匂いは……。

「あつた！」

風上、オレがこれから目指そうとしていた場所に。

気付けばオレは走っていた。

腕輪を直接手で触れぬようにマントで包み、一目散に。

何故ならオレは、確信めいた思いを描いていたからだ。

オレの予想が正しければ、この腕輪は。

このマジックアイテムの効力は……。

「リシア、起きてる？ 夜分遅くにごめん！ オレだよ、よるの…

…じゃなかった、ラルス！」

「ラルス？ ……あ、ちよっと待ってて！」

逸る気持ちを抑えつつ山道を登った先にあった、半分がブリキでできた灰色の扉を叩くと、案の定まだ起きていたのか、すぐに驚いた

ようなりシアの声がする。

自分を落ち着かせるように深呼吸しながらリシアの事を待っていると、すぐにその扉が開かれ、何かに驚き戸惑っていた風のリシアと目が合った。

「なんだい、律儀だねえ。ラルスも。まさか今日の今日で遊びに来てくれるとは思わなかったわよ」

だがそれも、すぐに笑顔に変わる。

オレはそれに一つ頷くと、マントに包んでいた腕輪を差し出した。

「さつき、これを道端で拾ったんだ。たぶんリシアが落としたんだろうなって思っつて、届けに来たんだよ」

そう言っつて手渡そうとしたけど、リシアは何かを怖がるみたいにそれを手に取るうとしない。

やっぱり。そう思いオレはリシアの家の中を見渡す。

そこには、今さつき見たばかりの光景が広がっつていて。

ついさつきまでリシアがいただろう場所には、青い文字の書かれた

……それ以外は全く同じ腕輪が転がっつていた。

「リシア、あのさ。ちょっと変なこと聞かもしかもしれないけどいいかな。今さつきこの腕輪を手に取っつたら、この部屋が見えたんだけど

……」

「嘘、ラルスも？ ワタシもだよ！ あれを手に取っつてさ、片方ないやっつて思っつたら何か光っつて、山の道が見えたの」

どうやらオレたちは、同じ体験をしてたらしい。

ついで出たお互いの言葉にひとしきり驚いた後、オレはまたしても夜のお茶会に招待されることになった。

そこには、その腕輪が一体どういうものなのか、どういっつう経緯で手に入れたのか、オレ自身が知リたかっつたから、なんてオレ個人の希望もあっつたけれど。

「いやね、ワタシってガラクタっていか人様がいらなくなったものや使わなくなつたものを集めるのが趣味みたいなもんでさ。これは元町の古い屋のおばにもらつたのよ。『お前みたいなのによれもんなんかないわ』って文句言つてただけどさ、それでも粘つたらこれくれたんだ」

「ああ、あのおばあさんか。知ってる。『お主はやがて世の魔法使いの憧れとなる、伝説の魔導師になるじやろう』なんて大嘘言われてさ。しょんぼりして帰つてきたの覚えてるし」

オレが母さんの後を継ぐのは確かな事実だ。

可愛い生徒たちに時には厳しく、愛を持って魔法を教えるなんてのは憧れるけど、それは夢にもならない空論だ。

その時のことを思い出して（実はかなりのお金を取られた）気分を下降させていると、ロシアは首をかしげて言葉を続ける。

「嘘って決め付けてるのね。まあ、本人がそう思うなら別にいいけど。おばばって結構胡散臭いところあるしね。そうそう、その後に残った言葉なんてひどいのよ。『どうせ鎖が千切れて使い物にならないから』なんて言つてさ」

「ああ、やつぱり壊れてるんだ……」

落胆は正直隠せなかったが、しかしそれより気になるのは、青文字で書かれた……おそらくは赤い文字と何か関連があるのだろう、古代文字だった。

「【CHANGE】か……」

「ええと、変化、転機、変ずる、そんな意味だつたつけ。……こつちのソウル？ は確か魔精霊の幼生を表わす言葉だつたかしら」

オレがますますの確信を強めてそう呟くと、前に言っていた通りそれが読めるらしいロシアが、その意味まで教えてくれた。



「何だ、ラルスだって古代文字読めるんじゃない」  
「たまたまだよ。たまたま知ってた単語だったんだ……」  
「ふうん？ 何かラルスで勉強できそうだもんねえ。あくまでその仮面越しでだけど」  
とっさにオレが誤魔化すようにして笑うと、リシアはそれで納得したのか、お恐る恐る腕輪をつついていいる。

「でさ、結局これってなんなのかな？ さっきのって」  
「おばあさんからは何か聞かなかつたの？」

「んにゃ、壊れてるんじゃないんだなーって思ってたには。溶かして鉄の馬車の部品にでも使おうかなって思ってたし」  
確かに、この腕輪に使われている魔法金は、魔力を貯めることのできる特殊な金属なので、材料としてもなかなかの値打ちだろう。  
リシアは、最初からそのつもりで買ったに違いない。

「さっきさ、リシアここに立ってたんだよね？」

オレはさっき腕輪に触れたことで見えた光景をなぞるようにして席を立ち、そう言う。

「ええ、そうね」

「つまりこれってさ、お互いの視点を変えることのできるマジックアイテムってことだよな？」

「言われてみればそうかもしれないけどさ……それっておかしくない？ だってこれ壊れてるのよ？」  
隣にいるわけだしさ」

リシアはおそらく、このマジックアイテムの利点を考えたのだろう。古代文字が蔓延していた大昔の遺物とも言われるマジックアイテム

ぶつちやけなんでもありで、何が起こつてもおかしくないものも多々あるという。

この場合、遠くにいてもお互いの場所が分かる、といったところだろうか。

確かに鎖が繋がっていれば意味がないように思えるし、逆に言えば壊れてるからこそ、あんな事が起こつた、とも言えなくもなかった。

「それはほら、隣にいる人を介して客観的に自分を見るためとか？」「何か微妙じゃない、それって？」

「うーん、何せ昔の人が考えたことだからなあ……」  
お互いの魂の交換。

本当はオレは、この腕輪がなんのためにあるのか、もう一つの可能性に気付いていた。

……いや、期待していた、といつてもいいのかもしれない。

自分勝手な、願ってはならない夢。

それが叶うかもしれない、そんな独りよがりな思いだけでオレは、それを口にするとはなかった。

リシアに対し、嘘ついて騙している……そんな感覚がオレを苛んだけど、あえてそれは無視する。

「……それで、この腕輪、どうするの？」

その代わりに伺うように、オレはそんな事を口にした。

ここで潰して溶かして材料に使うとリシアが言うならそれはそれで構わなかった。

それは元々リシアがもらったものだ。

リシアの発明品のために生まれ変わるといふならオレにそれを止める権利はなかったから。

「うーん、この文字を削っちゃえばただの魔法金になるかもだけど……それはあくまで現代の理論だしなあ。爆発とかしたら困るし、しかも触れただけで効果発揮するでしょ？ 何か危ないしな、壊れてるし、捨てちゃおうかな……」

「じゃ、じゃあ、オレに出来ない？ リシアの発明を手伝う、そのお駄賃代わりにさ！」

好機だと、オレは思った。

リシアがいらぬのならば。捨てるのならば。

オレが貰っても構わないだろうと。

思わず勢い込んでそう言うと、リシアはちょっと戸惑ってみせて。

「それなりの報酬は支払うつもりでいたから、それはむしろこっちが願ったり叶ったりだけだよ……」

一体何に使うの？ こんなもの

少しあからさますぎたらしい。

何かある、と思ったのか、訝しげにそう聞いてくる。

「……一回体験してみたかったんだ。他の人の生活」

夜だけじゃない、真の自由ってやつを。

それこそが、オレの心内だけにある本当の夢の一端だった。

あっさりと口からついて出たオレの本音。

それを口にする価値があると思っただし、姿、正体を隠しているのにその上さらに嘘を重ねるなんて、

友達になってくれたリシアに対して申し訳なかったからだ。

「ふふ、まるでどこかの王様みたいな台詞ね？」

「え？ いや、その……」

正体を隠す気があるのか。

さつきそう言われたばかりなのに、リシアの楽しそうな笑顔は、如実にオレの迂闊さを象徴していた。

べつに王様じゃないけど、正体を知ったらみんなに公言するといつてはばからない彼女に対して正体を明かすのは自分勝手ながらさすがに抵抗がある。

困ってただまごまごしていると、しかしその笑みは柔らかなものに変わり、リシアは代わりに言葉を紡いだ。

「まあ、いいわ。ワタシにも悪い話じゃないどころかかえって悪いくらいだし、それで手を打ちましょう」

「ありがとう、リシア！」

「いやいや。まっすぐねえ、あんたは」  
抱きつく勢いで喜びを露わにするオレに、照れて苦笑を浮かべているリシアがいて。

オレは無性に浮かれていたと思う。

そのまま、いつの間にか空が明らんでいたことに仰天するくらいには、時間を忘れていた。

だって、すごく嬉しかったからだ。

ノヴァキもリシアもいい人で。

種族なんて関係ない、そう思ったからだ。

それなのに。

オレは次の日、今まで知ることのなかった現実に、打ちのめされる羽目になる。

(第14話に続く)

第14話 日常にある幸せ、それ以上を願うのは（前書き）

短いです。

## 第14話、日常にある幸せ、それ以上を願うのは

次の日、スクールの登校日。

オレはいつものようにサミィとラネアさんたちと馬車に乗り、スクールへと向かっていた。

「カリス、今日はまたいつにも増してご機嫌ですね」

「え？ そう？」

ノヴァキヤリシアとの出会いもそうだけど、何より昨日持ち帰った戦利品が、オレの気分を否が応にも上昇させていた。

使うにあたって、まだいくつか調べなくてはならないことはあるだろうけど。

うまくいけば昼間から堂々と町を……あるいは町の外を歩ける。

そう思っていたからだ。

「例の試験で組むっていうお友達のことですか？ 確か、今日紹介

してくれるって言う」

「……あ」

しかし、思い出すようにしてサミィにそう言われて、オレは思わず固まってしまった。

すっかり忘れていた。

オレが自分勝手に口を滑らせてしまったいたことを。

「ええと……それはそのオレの勘違いだったんだよ。オレが一方的にそう思ってたただけだったっていうかさ、だから……試験で組むって話は、白紙かな、一応」

「なんですかそのうるたえようは。嘘ですね？　もしや紹介するの  
が恥ずかしいんですか？」

「……恋人？」

「な、なんやて〜っ！」

いきなりだったから、やつぱりぼろが出てしまったらしい。

ジト目のサミイに、変な邪推……というか度肝を抜かれる台詞を口  
にするケイラさんと、オレの気持ちを代弁するみたいに素になって  
大声を上げるラネアさん。

「はは、まさか。オレにそんな縁があるわけないでしょ。……いや、  
まあ確かに恥ずかしいっていうか、言いにくいことではあるかな。  
確認もしないで勝手に友達だってはしゃいで……」

ひいき目に見ても、打ち解けたとは思ったけど、言葉ではつきりと  
確たるものを得られたわけじゃなかった。

それに、長年オレをやってるわけだから態度で分かる。

ノヴァキは、明らかにオレと一線を引いていた。

カムラル家のもものだからっていうのもあるかもしれないけれど。  
ティンヤルレインがオレと接する時も同じものを感じていたから、  
それがすぐに分かるようになったのだ。

リシアはそんな事なかったけれど、それは正体が知られてなかった  
からこそなのかもしれない。

「すみません。余計な事を聞きました。だから泣かないでください」

「え？　嘘！　……って、泣いてねーよっ！」

しんみりとした口調でそんな事を言うものだから思わず目尻を押さ  
えたけど、当然そんなものはなく。思わず抗議すると、さっきのは



フリだったのか、あきれ返ったような顔をしたサミイがそこにいる。

「そんなの自分で分かるでしょうに。カリスは素直すぎるんです。もっと人を疑うことを覚えないと、いつか痛い目見ますよ?」

「うぐぐ……」

自分からそう呼んでくれって言ったんだから仕方ないけど、これじやどっちが年上だか分からなくなってくる。

思わず言葉につまるオレに、見ていて飽きないって感じの笑みばかりが向けられていて……。

そんな風に妹にさんざん苛められたオレは、おかげ様で上がりすぎている気分もすっかり元に帰るところか、ちよつと下降気味でスクールの門扉をくぐった。

ラネアさんたちとは、そこで別れる。

スクールの関係者と生徒以外原則立ち入り禁止なせいもあるけど、ここでは警護が不要だからだ。

国土の五分の一を占めるユーライジアスクール。

そこには、十年前の魔物襲撃の際にも破られることのなかった無敵の結界魔法が貼られている。

なんでも、四王家の長が共同して作ったものらしい。

そんなわけで、ラネアさんたちには悪いけど、オレの数少ない自由を感じられる場所、なわけ。

そんなスクールの門扉をくぐってすぐ。

学び舎まで続く均された広い一本道の両脇にあるのは、『グラウンド』と呼ばれる場所だ。

平らで広大な草原、森林地帯であるその場所には、様々な動物や獣

型の魔精霊たちが暮らしていて、授業や試験などでよく足を踏み入れるのだが、広すぎて迷子になる人も出てくるほどだ。

まあ、それでもここは安全を約束された箱庭のようなものだ。魔物の徘徊する街の外……『フィールド』の怖さには、及ばないんだろう。

「なあ、サミイ。やっぱりこの専用道路ってやつどうにかなんない？ みんなの通行の邪魔でしょ」

門扉から学び舎までの大きな道をぶった切るように真ん中に通された赤絨毯の道。

四王家とそれに属するものしか渡ることの許されない道。

そのごく少数のおかげで両脇は渋滞していて。

さらにその渋滞から人が零れ、専用道路にみだりに足を踏み入れぬようにと人の列ができていた。

言葉を交わした機会すらないのに、ルートの下で働くスクール直属の風紀の人たちが、専用道路を歩く人を守っているからだ。

「カリス、言葉遣い」

「……」

思わずわあーって叫んで絨毯をぐるぐるに丸めてほしいたい衝動に駆られたが、冷たくサミイにそう言われて、オレは条件反射で黙り込んだ。

サミイには悪いけど、サミイのようないかにもって感じの丁寧な言葉遣いは、苦手だった。

故にオレは基本には授業中、あるいは友達に対してを除き、あまり口を開かないようにしている。

喋ればすぐにぼろが出るからだ。

そのまま、寡黙な召使いよろしくサミィの後をついてゆく。

遠い喧騒。

ユーライジアじゅうの子供たちが集まっているのに、その賑やかさと遠いところにいる。

いつもは学び舎に入るまで視線をサミィの綺麗な髪から逸らすことはなかったけれど。

今日ばかりはどこかにノヴァキヤリシアがいないかなくなって気になって、辺りを見回してみた。

(……いないか)

しかしこれだけたくさんの人がいると、そう都合よく見つかるはずもなく。

執拗に視線を彷徨わせていたのがまずかったんだろう。

それはいつもならばしない行動だったから。

遠巻きにこちらを眺めている人たちの中に、動揺が走るのが分かる。

もっと子供の頃はそれが結構楽しくもあつたけれど。

何かあるなら直接言ってくれればいいのに。

そう思うようになってからは、正直あまりいい気分じゃなかった。

見世物、晒し物。

そんな言葉がオレの頭の中に浮かんでくる。

「カリス」

「……分かってるよ」

気にするな、という意味合いの籠ったサミィの一言。

オレはそれに頷き前だけを見る。  
どよめきはまだ続いていたけど、それは明確な言葉となってオレの  
耳には届かない。

ただオレが視線を向けたことで、何かしらの迷惑がかかったことだ  
けを理解する。

(改めて考えるときついな……)

『夜を駆けるもの』としての奔放さと対比してみて、ひどくそれを  
実感する。

さすがに授業が始まればここまで思うことはないけれど、ノヴァキ  
の言った通り直接話したりとかしてたらノヴァキに多大な迷惑が  
かるだろうことは容易に想像できた。

「どーん！」

「わつとと」

と、そんな事を考えながら足音のたたない絨毯の上を歩いていると、  
効果音つきで背中にやわつこい感触が降ってくる。

「おっはよ〜！ カリス、サミイちゃんも！」

「……おはようございます、マイカさん」

「おはよう。マイカは元気だなあ」

たぶん、丸まってでもいたんだろうオレの背中を、ちゃんとさせる  
みたいに飛びついてきたマイカ。

それだけでくさくさしていた気分がどこかにいっってしまうんだから  
現金なもので。

オレは苦笑を浮かべて、お決まりの挨拶をする。

対するサミイの挨拶はちょっと硬い。

傍目から見えてくるものには毅然とした態度を取れるサミイだけど、

懐に入つてこられるととたんに人見知りか顔を出すらしい。  
自分を柵に上げてそんなんで大丈夫かな、とか思つたけれど。

「入り口でじゃれるな。後が支える」

「やあ、みなさん。おはようございます。それじゃあ私も混ぜても  
ごはあつ！」

ここ最近、妙にピリピリしているというか、ご機嫌斜めなルートに  
きつい一撃を受けて絨毯に沈むタイン。

「邪魔だあーっ！」

「いたたっ、踏まないでくださいよルツキー！ あなたの邪魔はし  
てないじゃないですかっ！」

「キキヨウが通るんだよっ！ こいつはすつとろいからお前にけつ  
まずくかもしねえだろ！」

「そんなことないよお。ほら、タインちゃん、立てる？」

「優しいなあ、キキヨウは。惚れてしまいそうです。誰かさんとは  
大違いだ」

「……どうやらまだ足りんらしいな」

「お、お助け〜っ！」

気付けばあつという間に賑やかになるその場。

「またやってるよ。ほんと仲悪いね、ガイゼルんとこの夫婦は」

「こ、こら、レイっ、滅多なことを言うんじゃありませんっ……」

そこにルレイナルコナも加わつていつもの安心できる居場所が生  
まれる。

自分の立場をちよつとだけ忘れられる瞬間。

オレは我が俣でぜいたくな奴だと強く感じていた。

こんな楽しい空気の流れる場所がオレにはあるのに。

それだけじゃ……満足できていないのだから。

(第15話につづく)

## 第15話、知らず知らずの、滾る炎

それからオレたちは、スクールの中央棟にある『カムラル組』へと向かって。

いつものように授業が始まった。

カムラル組は、学年ごとに一つずつある特別クラスだ。

オレたちのような四王家のもの、ずば抜けて成績の高いもの、その価値を認められている人たちが集まる。

同学年には他に十一クラスあるんだけど、階どころか学び舎自体が違っていた。

オレたちのすぐす中央棟の下の階には、図書室や生徒会室、職員室、保健室、カムラル組専用の食堂などがあり、同学年でも他のクラスの人と会う機会は基本的にない。

一応、休み時間になれば自由が許されるが、他クラスの別棟は遠く、今まではあまり必要性を感じていなかったため、足を向けることは基本的になかった。

時折一学年下のサミイが所属するカムラル組へ足を運ぶか、日がなスクールにいくつかある図書館で過ごすくらいで。

それは、図書館以外では大抵一緒にいるマイカなんか別棟に行くことを渋っていたせいもあるけれど。

やっぱり何かを成す……友達を作るには、自分から行動しなくちゃなってしまう今日この頃である。

そんなわけでオレは、その日の最初の休み時間、二つ後ろの席のタインの元へとまずは出向いた。

「なあ……じゃなかった、タイムさん、ちょっとよろしいでしょうか？」  
言動はともかく行動は不真面目……もとい、面白いタイムだが、オレより何倍も真面目に授業を受けているし、成績の特別クラスの中でも上位だ。

終業の鐘が鳴っても、筆記帳に書き込む手を止めないタイムに、遠慮がちに、それらしい口調で呼びかけると、タイムは気さくな笑顔を向けてくる。

「どうかしましたか、カリス様？」

ただたどしいオレが可笑しかったんだろう。

からかいの笑みで様付けなんかしてくるタイム。

「別棟にある生徒会意見箱のことなのですが……回収なさってるのってあなたでしたよね？」

その回収の仕事、付き合ってもよろしいでしょうか？」

それにちよっとむっとなって、頑張って言い慣れない言葉を使うオレ。

「……」

それがあまりに可笑しかったからなのか。

何やらこっちが心配になるくらいに深く考え込んでいるようにも見えるタイムだったけれど。

「何々？ 意見箱がどうしたって？ 楽しい話なら、俺も混ぜてくれやい」

すぐ隣でちゃっかり話を聞いていたらしいルレインが、そう口を挟んできた。

なんとなくルレインのさらに隣の席を見やると、ルコナの姿がない。ルートがないのは、いつもの見回りだろうが、マイカの姿もいつの間になかった。



どこに行つたのになつて気にはなつたけど、今は自由時間だしお互いを縛る権利もない。

ただ、ルコナがいないからルレインも暇だったんだろう。オレはタイムにしたのと同じ話をルレインにもする。

「ふうん。何だ、思つてたより熱心なんだな。俺はてつきりカリスつてばおかざりの生徒会長かと思つてたけど」

「口がすぎるよ、ルレイン。そんな本当のことを」

「うう、二人ともひどい……」

二人ともいつもの絶妙な間を取つたからかいの笑顔。

基本仕事はみんなに任せちゃってるし、まさにその言葉通りだから地味にへこむ。

そんな空気が、また嫌いじゃないから困りもので。

「拗ねない拗ねない。国の至宝の願いならばなんなりと、ってね」  
仕方ない、といった感じのタイムの言葉。

精神的攻撃を受けたけど、どうやらオレの話は通つたらしい。

「よし、それじゃあ俺も付き合つぜ。タイム、お前は来なくていいぞ」

「何を馬鹿なことを。これは元々私の仕事です」

さらに、二人は一緒についてきてくれるらしかつた。

お互い顔をつき合わせてバチバチやってる様は、いかにも仲がいいんだなあつて感じで。

「それじゃ、善は急げだつ！」

「お、おい待てつ！」

「は、早っ！」

そんな二人を置いていく勢いで駆け出すと、背後からしてやったりなうろたえ声が聞こえてくる。

「なんてね。おかげりなもので、意見箱の場所すら知らないものですから……道案内お願いできます?」

「くっそ、思いつきし振り回されてるじゃねーか」

「やれやれです」

たくさん生徒たちのいる廊下で澄ましてそう言つと、二人は肩は一緒になつて肩を落とす。

当然、そんな様すら、何事かと針のむしろだ。

「それじゃ、行きましよう。慌てなくても意見箱は逃げませんから」  
「……ルコナができたやつだつてのがつくづく分かるぜ」

だが、そんなものはもう慣れてしまっているのか、お互いに言いたい事を言つて手を差し出してくる。

どうやら、道案内と言つ言葉を、少しばかり曲解したらしい。

「よろしくっ」

「……」

「……」

オレはそれに乗っかる形で、ぎゅっと、タインとルレインの差し出された手を繋げてあげると、

ようやくさっきの精神的攻撃に対する溜飲が降りて、そのまま背を向けて、別棟へと歩き出す。

背中何とも言えぬ沈黙が、なんだかおどろおどろしくて、ちよっぴり怖かったけど……。

そんなこんなでたどり着いた、図書館以外訪れたことのなかった別棟は、しかしオレの知るものとは様相が異なっていた。

「何か静かだな、いつもならカリスが来れば騒ぎになるのに」

「うっ。また気にしてることを……」  
さっきのをまだ根に持つてるのか、低いタインの眩きが聞こえる。  
だが確かに、朝の登校風景からも分かるように、オレが別棟に訪れ  
ると、ちよつとした騒ぎになる。  
とはいっても、めいめい休み時間を過ごしている生徒たちが、珍し  
いものでもやってきたみたいに遠巻きで眺めてるって感じではある  
けど……。

「誰かが決闘してるんじゃない？ 人いないし、こっちの棟では  
よくある話だつて聞いたが」  
オレと同じでこっちの事をあまりよく知らないらしい留学生のルレ  
インは、辺りを不躰に見回しつつ、興味津々でそんな事を言う。

「ふむ。だとすると当然あのお方もしゃばってるのかな。面倒臭  
いことにならなければいいけど」  
タインの言うあの方つてのはルートのことだろう。  
本気で面倒臭そうな顔をしている。

「だったらここで引き返すか。カリスのお守りはオレに任せとけ」  
「抜かせ、ですよ」

「お守りつて、もつといい言い方はないのかなあ〜」  
しかし、そんな落ち込んだタインのやる気をすぐに復活させるルレ  
イン。

まだお互いの付き合いはそう長くはないはずなのに流石だ、なんて思  
う。

本当の友達つて感じた。

そこでオレをダシに使わなければもつとよかつたんだけど。

そんなわけで改めて。

オレたちは意見箱のあるという別棟用の食堂へと向かったわけだが、  
入ってから違和感に対するルレインの予測は、当たっていたらしい。

何とも運悪くオレたちが向かいた場所……意見箱ある場所を中心に、お昼でもないのに人垣ができていた。

そのうちの後ろのほうにいる人に何事かと声をかけようとする。

「カリスはここで待っていてください。ちょっと聞いています」

一つため息をついた後、タインにぴしゃりとそう言われて、もの扱  
うみたいルレインに手渡されて。オレは何とも不満な待ちぼうけ  
を食らわされた。

しかし、そんなタインは人垣の方に足を向け、一言二言話した後、  
すぐにオレたちの元へと戻ってくる。

「あの方もいないし、決闘、までは至ってないようですが、揉め  
事なのは確かかなようですな。

人間族が四人に対して、魔人族と竜族の組み合わせのようですが…

…珍しいこともあるものですね。

魔人族が人間族に盾突くなんて」

「珍しいことなのか？」

「……ええ。魔人族は大抵のものが人間族に負い目を感じているん  
です。それをいい事に、別棟の人間族による魔人族への憂さ晴らし  
は日常茶飯事だそうです。基本的に魔人族はそれを黙って受け入れて  
る。でも今日は、そうじゃないみたいですね。よっぽど腹に据えか  
ねることでもあったんでしょうか。」

それで珍しくてみなさん集まってるみたいですよ」

何気なく聞いたルレインの問いかけ。

それに対するタインの言葉は随分と饒舌だった。

でもそれ以上に、初めて明確に聞かされた魔人族たちの現実に、オ  
レはひどい衝撃を受けていた。

当然、そんな事ノヴァキヤリシアからは聞いていない。

……いや、言いたくても言えなかったかもしれない。

人間族に負い目を感じてるっていう部分は、確かにノヴァキも口にしていたけど。

だからといって、憂さ晴らし………タインは曖昧に濁したんだろうけど、そんなひどいことをやっていい理由にはならないだろう。

日常茶飯事、だって？

信じられなかった。

それが当然になってしまっているのも、誰も止めようとしもないのも。

「ルレインっ、肩車してくれっ！ オレの背じゃ見えないつ！」

「あ？ ……お、おう」

しぶしぶと言った感じで頷くルレインに、取り付く勢いでその背に乗る。

そして……ルレインの肩に陣取って、かろうじて見えたのは。

魔族という言葉聞いた時点で想像していた、最悪のものだった。

四人の人間族の生徒……顔に見覚えはない。

相対するのは、長い緑の髪の魔族の少女の、こちらも見覚えのない女の子と、彼女を庇うようにして立つ……ノヴァキの姿だった。

人より長く、エルフ族よりも尖った耳、青白い肌、桜色の長髪。ス

クルルの制服姿。

強く燃える琥珀の瞳。

明るい場所で始めて見るノヴァキの姿だ。

だが、それによる感慨は。

座り込んだ魔族の少女と、そこに散乱している意見箱の惨状により、全てが吹き飛んだ。

「ほう、それはつまりオレさまたちと決闘するってことでいいんだよなあ。今ここで」

「……っ、彼女は関係ない、巻き込むな」  
かみ合わない会話。

でも、ノヴァキは随分と余裕がないってことが手に取るように分かった。

その声は震え搾り出すようついで、無理してそこにいるのがよく分かって。

見ているだけで視界がかつと白くなる。

「分かってるさあ、ほら早くどこかへ行け、お前に用はない」

「……っ！」

四人のまとめ役らしいその少年は、しっしと手を振り払う仕草をする。

竜族の少女は視線を彷徨わせていたが、やがて何も言わずにその場から逃げ出していく。

「ははは、残念だったな、騎士気取りが台無しだ。……それで？」

魔族の糞野郎が、人間様の食堂に何の用だよ。お高くとまってるやつらに何をチクる気だ？ 言ってみろ、そうしたら半殺しで済ましてやる」

「お前らに……関係、ない」

ぎゅっと拳を握り締めるノヴァキ。その手の中に、例の手紙があるんだろう。

俯いたままのノヴァキは。しかし頑なだった。

知らず知らずのうちに、オレも拳を握り返していて。

「いい度胸だ。二度と反抗する気も起きないくらいに成敗してやるよ」

その言葉が、どうやら決闘の合図らしい。

「……品性のカケラもないな」  
冷えた、タインの咳きが聞こえる。  
止めるものは今のところいない。  
それどころか、人垣はその品性のカケラもないほうを煽り、応援している節さえある。

とん、と肩を叩くようにしてルレインの背から降り立ったオレは、委細承知した、とばかりに歩き出した。  
周りの群集がオレに気付いて道を開けるのが分かる。  
ちようどいい、こんな決闘思い切りぶち壊してやろう。そう思った。

「ちよい待ち。その手の炎はなんだ。そんなの放つたらここら一体焦土と化すぞ」

それを長いルレインの手で止められる。  
言われた手のひらを見つめると、そこにはいつの間にもやら魔力の炎があつた。

無意識のままに怒りが具現化するとは、どうやらオレは思った以上にキれているらしい。  
それを自覚すると、周りの群集が一層割れるのを感じて。

それでもまだ、壁の向こうは見えない。  
背丈のないじぶんを恨めしく思い、オレは残りの壁を突貫しようとして……。

「だから待って。カリスが出たら国際問題に発展するだろ。ここはオレたちに任せとけて。」  
多対一ってのは公正じゃないしな」

「生徒会の所有物の破壊……それだけでも十分出て行く理由はあり

ますしね。加えて、女性を傷つけるような輩は、世界の敵です」  
思ったら、見上げるほど高い二人の男（オレが低いだけなんだろうけど）が、何だかオレこそが諸悪の根源みたいに通せんぼする。文句を言っただかそうとしたけど、そういう二人はどうやらオレの味方らしい。

確かに、もう既にオレがいることで新たな騒ぎが起こっている。  
ノヴァキを助けたいのは山々だけど、夜に接触禁止を固く言いつけられている。

自分はよくてもノヴァキに迷惑はかけたくないし、二人に任せておけば大丈夫だろう。

表情は不満げだっただろうが、オレはそう思い、この状況を見守ることにしたのだった……。

（第16話につづく）



## 第16話、張子の生徒会長、そう思うは自身だけ

自分はよくてもノヴァキに迷惑はかけたくないし、二人に任せておけば大丈夫だろう。

表情は不満げだっただろうが、とりあえずは状況を見守ることにして。

そんなオレに、やれやれとため息をつき、二人が人垣を割って出て行こうとして……それは起こった。

前方……人垣の中心でのどよめき。

タインの背中にくっつくようにしてそちらを見ると、体格だけならたぶんオレの見立てでは一番だろう大男が、四人の生徒とノヴァキに間に割って入るように倒れているのが分かった。

よくみると、それは新しい特別クラスの制服を着たキミテだった。何でそんな所で転がってんだらうと視線を彷徨わせると、オレみたいに人の背に隠れるようにしていたマイカがそこにいる。

隠れている相手はルコナだ。

二人ともすぐにオレたちに気付き、小さく手を振っている。

マイカは実にぢやあくな笑顔をしていた。

あれは本気で怒っている時の顔であると同時に、何かをたくらんでる顔でもある。

これはあくまで予想だけど、マイカはキミテのことを蹴倒しでもしたのだろう。

オレと同じように、この場をどうにかするために。

「……………」

「な、なんだお前は！ と、特別クラスのヤツがこんな場所に何の用だ！」

ゆらりと起き上がる巨体。

無言の威圧でマイカを睨んでいる。

それは中々の迫力で、四人の生徒たちは早くも怯んでいた。

驚きおののいているのはノヴァキも同じだ。

……………まあ、気持ちは分かる。

オレの、二倍、三倍はあるような体躯だ。

一体何食ったらあんなにでかくなれるんだろって感じだからだ。

「……………一部始終を見ていた。この決闘は不当だ。どう見てもお前たちが悪い」

「な、何だとっ！」

威圧感が変わらずの……………だけど何故か棒読みのようにも聞こえる言葉。

よくよく見てみるとマイカがなにやら台詞を描いた紙を、キミテに見せていた。

それに、オレたちの側から見ている人たちは当然気付いただろう。

どよめきにいくつもの失笑が混じったが、当人たちは気付いていないらしい。

キミテと言う突然の闖入者に、ただただ圧倒されている。

「ちえ、先越されたよ」

「はいは〜いっと。お高くとまった特別クラスのものが来ましたよ

」

「……………」

そこへ時期よく、ルレインとタイムンが割って入る。

ノヴァキはそれに目を見開いて驚いていた。

それは、マイカたちやキミテを除く全てのものがそうだっただろう。いずれは世界を救う英雄『ステューデンツ』になる。そう呼ばれ続けてきた勇者たちだからだ。

「な、何であんたたちがここに……」

「いやあ、意見箱に用があったんですけどね。いざやって来たらそれを壊した張本人たちが決闘だなんて面白いことやってるじゃないですか」

「……っ」

意見箱を壊したのが四人の生徒たちであると断定しながらも、軽い口調でティンが言う。

それに対して四人の生徒たちの反論はない。

それは肯定を意味するのだろう。

これだけ目撃者がいるのだから嘘をつくのは不可能だって判断したのかもしれない。

「四対二じゃ格好つかねえだろ、オレたちこっちにつくからよ」

さらにルレインが、満面の笑顔でキミテとノヴァキの肩に手を置き、そう言った。

それは、正式に決闘に参戦する、そんな意味合いがあったんだろう。さらにどよめく群集。

「そ、そんなっ……く、くそっ、魔族のくせにつ、うまくやりやがって……」

「やれやれ、相手が叶わぬものと察したとたんにそれか」

腰が引け強がる四人の生徒たち。

その逆恨みの何物でもない悪意は、ノヴァキただ一人に向けられていた。

ティンが呆れたようにため息をつく。

ちよつとまずい方向に話が動いてるなつて、そう思った。  
キミテやノヴァキの実力は未知数だけど、決闘の勝敗は火を見るよ  
り明らかだろう。

決闘という名目で一方的にノヴァキの事を傷つきたいだけの彼らは、  
こんな展開になるなど予想もしていなかったに違いない。

周りの群集を巻き込もうと周囲を見渡すが、群集は所詮傍観者だ。  
先程までは味方のように見えた彼らは、まさしく他人事であるかの  
ように、一瞬で冷たい顔を作る。

これでは晒し者になるのは、彼らのほうだろう。  
個人的には何だか物凄くム力つくから別にそれでもいいんだけど、  
その後が怖い気がした。

黒く汚い感情が、全てノヴァキにぶつけられるような気がして。

そう思い、ノヴァキのほうを見ると、今の状況にただ戸惑っている、  
そんな風に見えた。

震えているのは、これからの事を考えていたからなのかもしれない。  
その四人の生徒だけじゃない。

別棟の生徒たとの、魔族たちに対する嫌悪感は、ノヴァキが話し  
てくれたそれ以上に根が深いような気がする。

この場合は、確かになんとかなるだろうが、その後の事を考えるとそ  
れじゃ駄目のような気がして……。

「あつ……」

そこで初めて、まともにノヴァキと目があった。

驚き、だけどそれ以上に別の感情が、彼の琥珀の瞳を占めている。

それは……なんだろう。

悲しみのようにも見えるけど少し違う。

でも、何だか凄く傷ついているような気がして。

オレは目を離せなくなる。

その答えを求めようとして。

それは、言うほど長い時間ではなかったんだろうけど。周りを気にせずにはいたのは結構問題だったらしい。いつの間にやらオレは、群集の内側に弾き出されていて。そこにいる全員の注目を浴びていた。

「せ、生徒会長っ……っ！」

初めにオレを明確に示したのは、皮肉にも四人の生徒、その中心人物らしき少年だった。

それが波紋となって広がるように、言葉として具現しない音がぶつかけられる。

いらいらと心が沸騰してくるから、あえて耳に入れてないものもあつたけれど。

「……出てくるなって言ってたのによ」

呆れ返ってどうしようもないルレインの苦笑交じりの言葉が、かろうじてオレの意識を繋ぐ。

改めて我に返って、今自分の置かれている状況を把握した、といつてもいいかもしれない。

内心でおたおた慌てるオレに、いつの間にやら雑音は消え、静寂がその場を支配する。

それはつまるところ、オレの言葉を待っているからなんだろう。わざわざ出てきたのなら、きっと言うことがあるに違いない。

周りの視線はそれを如実に物語っていて。

どうしよう、どうしよう。

そう思つて視線を彷徨わせっていると、何だか恥ずかしかつてるルコナの姿が目に入った。

なんだろうって思ってたよく見てみると、マイカがオレに向かって……なるべく他の人にバレぬように、ルコナのロングスカートの下から手書きの台詞を出しているのが分かった。

一見ふざけているようにも見えるけど、マイカは紛れもなく本気なのだ。

いつも生徒会の頭脳役を務めてくれている副会長のその助言に一つ頷き、初心者スキミテよりは感情がこもってるだろうことを祈りつつ、完璧な生徒会長……そんな自分を演じ、言葉を紡ぐ。

「……嘆かわしいことです。私は知りませんでした。ふたつの棟の生徒たちの間に、このような隔たりがあったということ。種族が違えど、平等に生きる。それが我が校の信念である。そう思っていたのは私だけだったのでしょうか……」

どうやらマイカとしては、オレと言う鶴を使って、今の事態が起きた、その根本を断つ気らしい。

悪くない案だとは思っけど、心中の本当のオレとしては、こんな事言ったくらいでお互いのしこりがこの場でなくなるとは思えなかった。

オレが、そう思い込んでいるだけなのかもしれないけど……。

「悲しい過去があるからこそ、私たちは争ってはならないのです。争いは何も生み出しません。」

今ここで、誓ってください。カリス・カムラルの名の元に。ここに  
いる皆が手を取り合って共に生きていくことを……」

そこまでマイカの台本を読み上げて……オレははっと我に返る。

なんて言えばいいのか、色々突っ込み所満載だった。

オレに誓ってどうするって感じだし、名前も間違ってるし、そんな言葉だけで世界がまかり通るなら世話はないというかありえないというか……。

そんな表と裏で真逆なことを考えていると、再びノヴァキと目が合う。

というか、みんなオレを見てるわけだからオレのほうが彼のことを見たんだけど……なんて言えばいいのか、ノヴァキはぼかんと呆気に取られた顔をしていた。

たぶんきつと、夜の時の自分と、それこそありえないくらい違うオレに呆れてるんだろう。

それを意識すると、途端にノヴァキの視線が気になって。

慌ててオレは視線を逸らした。

似合わないすぎのすました言葉が、恥ずかしかったっていうのが一番の理由だけ。

そのままマイカのほうに視線を向けると、以上だと言わんばかりに満足げにうづむつむと頷いていた。

この状態でどうやって締めろって言うんだろう？

全くなんの解決にもなっていないじゃないか。

オレはそう思って……その瞬間、ある一つの天啓が降りてくる。

「……なんて言葉ですめば、それはそれでとてもよいことなのでしようけど」

けどを強調して、オレは微笑み浮かべ辺りを見回す。

マイカが焦ったような顔をしていたが、オレは構わずに言葉を続けた。

「何事もまずは一步です。ちょうど今週末に試験があります。すでに誰かと組んでしまった方もいらっしゃるのかもしれませんが……」

「ここは一度種族やクラスの垣根を越えてみませんか？試験という同じ苦難を乗り越えれば、お互いの知らなかった新たな発見があるかもしれません」

閃いた、その案を。

もともとそうするつもりだったのだから。

むしろこの状況は渡りに船で。

「どうでしょう？」

異存なければ、今から生徒会を通してそれを実行に移す。

そう言っつて、その瞬間だけはしてやったりな笑顔。

それが功を奏したのかなんなのか。

その場に、オレの言葉に首を振るものはいなかったのだ……。



## 第17話、嘘を嘘で包んで、生まれるものは

それからすぐに休み時間を終える鐘がなって。

オレ自身が発したその言葉のおかげで、だいぶバタバタする一日を過ごしてしまった。

マイカに、あの瞬間張りぼてじゃない生徒会長が生まれたよ、なんて感激されたのを皮切りに。

時期悪く試験場所の下見をしていたルートに、なんで私はその場にいなかったのだ！　なんて怒られたり。

ルレインに、今日の一件でカリス親衛隊（何でも、オレを崇める人たちの集まりらしい。ルレインもタイムも参加してるって言っていた）の参加人数が倍増したぞ、なんで脅されたり。

同じクラスに転校することになったらしいキミテがおっかなくて嘆いていたサミイをなくさめる？のに苦労したり。

自業自得と言えばまさにそうなんだろうけど。

それはそれは目まぐるしい一日になったと思う。

その中でも大きな収穫と言えば、意見箱の件を（やつぱりあの生徒たちが、ノヴァキのことを邪魔する形で壊したらしい）なかったことにする代わりに、別棟の食堂の、あらゆる種族の出入りが自由になったことや、今週末の試験において、目論見通りに成績という平等も考慮して、オレがノヴァキと組むことが決まったことだった。

それに関しては、マイカやサミイを初めとするみんなに強く反対されたけど。

オレがそう口にしてしまった以上、責任を取る必要がある、なんて

タインの素敵な助言のおかげで、  
何とか事なきを得て……。

今オレは、あまりに事がうまく運びすぎて、うきうきのままにノヴァキヤリシアの住む裏山の道を登っているところだった。

このままじゃ眠れないのも確かにあったけれど。  
目論見の成功を、とにかくノヴァキと分かち合いたかったからだ。

「もう来ないと思ってたがな……」

それなのに。

当のノヴァキはむしろ前回来たときよりも冷たく、つれない言葉を返してきた。

前回はまさかだったから、だんだん悪くなってきている。  
しかも、家から出てきたノヴァキは、オレと視線を合わせようともしてくれなかった。

「毎日来ていって、言ったじゃん」

「毎日とは言っていない。……分かったよ。少し、歩こう」  
だからどうにかしなくちゃって思っただけ。事実と異なるオレの本心を口にすると。

何かを諦めたようにノヴァキは苦笑を浮かべ、『トランペット』を手に取ったノヴァキとともに、山の頂上へ向かうことにした。

「何で突然、もう来ないかも、なんて思ったのさ？」

鈴のような虫の音の中、のんびり歩を進めながらオレはそう問いかける。

ノヴァキは嫌かもしれないけど、ノヴァキに会いその演奏を聴くのは夜の日課だと、オレの中ではもう決めていた。

そりゃあ、流石毎日ってのは迷惑だっことは分かっているのだけど。

「あんたはそうやって簡単に聞くよな。一番嫌なことを。……分かっ  
てないだけ余計にたちが悪い」

「う、ごめん」

「意味分かって謝ってるのか？」

「うっ……」

何か怒られているような気がしたから謝ったら余計に怒られた。

ぐうの音も出なくなっただけオレが言葉を失っている、ノヴァキはやつぱりなっただけ顔して大きなため息をつく。

そして、相変わらず空を賑わす星たちを眺めるように夜空を見上げ  
つつ……言った。

「情けなかつたろ今日の俺。嫌なもの見せちまつたよな。幻滅つて  
言うか……滅るようなものは最初からなかつただろうけど……でき  
れば会いたくなかつたよ、スクールでは」  
しぼって吐き出すような声。

言われて、今日あったことを思い出してみる。

ノヴァキが言うようなことが、果たしてあったのかどうか。

「……もしかして、来るとは思ってたって、今日あったこと  
のせいなの？」

オレの言葉に頷くノヴァキ。

つまりノヴァキはこう思ってたんだろう。

スクールでのノヴァキをオレが見て、ノヴァキに幻滅しただろうと。

興味を失っただろうと。

「……確かに、情けないよ」

「……」

そんなの、冗談じゃない。

オレがそう言う見方をする人間だって思われるのは一向に構わなかったけど、ノヴァキは勘違いしている。

たった今も。

「同じ人間としてすごく情けないと思った。奇麗事を言うわけじゃないけどさ、正直あいつら殴ってやりたかったもん」

情けないのはオレたち人間族だ。

確かに、昔とも呼べない過去に、人間族は魔族にひどい目に合わされてきたのかもしれない。

でも、全く抵抗しなかったわけじゃないだろう。

少なからずやられたらやり返したはずだ。

でもそれはどこにも救いはない。

悪循環となつて繰り返すだけ。

ものを知らない人間族の甘い発言だと言われても。

被害者意識にかまけて八つ当たりするのは、ほんとに情けないと思つた。

「聞いたよ。あの竜族の子を助けてあげたんでしょ？ ノヴァキが情けないことなんてどこにもないじゃないか」

「だが、俺は何もできなかった。囲まれて離し立てられて、震えてるだけだった。……それどころか、あんたたちにまで迷惑をかけた」

ノヴァキは手はず通り、意見箱に試験についての意見書を投函するつもりだったらしい。

だが、意見箱は、ノヴァキたちが入ることを禁止されていた場所に  
あった。

そこにはその事実をオレが知らなかったことにも責任の一端はある  
わけだが。

実はノヴァキと同じクラスだという竜族の少女も、ノヴァキとは別  
口で意見書を投函するつもりだったらしい。

内容はそう、食堂を初めとする施設利用の自由化だ。

勇気を出して別棟の内情を暴こうと意見書を投函しようとして、少  
女はあの四人組に捕まった。

四人組は珍しい相手へのからかいとナンパの意味合いもあったそう  
だが、すぐに意見書の存在に気付かれてしまった。

現状がバレてはまずいと破壊される意見箱。

そこにちようど同じ目的でやってきたノヴァキが現れて……割って  
入ったのだという。

それらは、キミテのスクール内見学に付き合っていたマイカたちが  
たまたまその場において、一部始終を教えてくれたことだ。

ノヴァキに先を越され、そこから様子見を決め込んでいたのは、い  
いやら悪いやらだったけど。

「食堂に行く事だつて、ダメだつて言われてて……勇気があること  
だったんでしょう？ それなのにノヴァキは彼女を助けた。誰より  
も早く。それはなかなかできないことだと思っよ？」

かっこいい、とすら思う。

まるでおとぎ話の中だけに存在する勇者みたいだと。

話を聞いたとき思ったのは、子供っぽくて恥ずかしいから内緒だ。

それでもすごいを伝えたくて、幻滅なんてとんでもないって伝えた  
くてそう言つと。

ノヴァキはそんなんじゃない、とばかりに首を振る。

「違う、俺は別に彼女を助けたわけじゃない。焦ってたんだ、意見箱を壊されて、怖かったんだ。」

あの意見書が届かないと思うと、気が気じゃなかった。オレがとんでもないことをしたって気付いたときにはもう、手遅れだったんだ。あんな人間族に逆らうような真似をして……

オレは明日からどう過ごせばいいんだって、ただ震えてたんだ」  
「ノヴァキ……」

いつの間にやら頂上にたどり着いて。

吐露されるノヴァキの心情に、オレはその名を呼ぶことしかできなかった。

試験と一緒に組むという作戦のことについてそこまで追い詰めてたなんて全く気付きもしなかったし、語るその言葉に、まだまだオレが知らない魔族と人間族との陰湿な軋轢を垣間見たからだ。

「あんと組むのは、やつぱりまずかったと思う。今日の件で、完全にオレは標的にされただろう。」

オレはそれが怖くてたまらないんだ」

ノヴァキは独り言のようにそう呟き、自分を抱くような仕草をする。その体は、確かに震えていた。その理不尽な恐怖に。

「違うよ……それをなくすためにオレたちは組むんだ。そんな事言われたら余計に組むんじゃないかって言わせないよ。ノヴァキは……オレが守るもの」

「無理だよ。あんたがいる所でボ口を出すやつなんかいるわけない。現に、食堂の件だってたまたまあんたが足を運ぼうと思わなかった

ら、ああもつまくはいかなかったはずだ」

オレの本気の言葉を、いつもみないにべもなく否定するノヴァキ。オレはその時ちよつとむつとしていただけで、俯いて隠れたノヴァキの表情が、ひどく傷ついたものであることなど、知る由もなかった。

オレが紡いだ言葉で、彼がとても傷ついたことなんて、今のオレには分かりようもなかったんだ。

分からなかったからこそ、だつたらずつと一緒にいればいい、なんて短絡的なことさえ思っていて。

「そもそも何故、食堂の件があんたたちに伝わらなかったと思う？」それを口にしようとした俺だったけれど。

明らかに今までの様相とは違う言葉に、口元まで出かかっていた言葉が霧散する。

「言わなかったからさ。……いや、言う資格なんてなかったんだ。

それとばつちりを受けた他種族の人たちには申し訳ないけど」

「どういう意味？」

言わなかったことってのは、食堂のことを含めた別棟による惨状のことだろう。

だが、続く資格がない、の意味が分からない。

だから素直に、そう問いかける。

「噂、前にも話しただろ？ ……魔人族はな、未だに諦めてないん

だよ。この国を…人間族や魔精霊の暮らすユーライジアを壊し、乗っ取るうとしてるってことを」

「そんなの嘘でしょ？」

「……」

即座に否定。

だけそノヴァキは頷いても答えてもくれなかった。それが、とても不安になる。

「ノヴァキやりシアに接したから分かるよ。オレたちと君たちは変わらない。そんな事をするような人たちには、到底思えないよ」  
本気でそう思ったからそう言ったのに。

ノヴァキは笑った。  
今までで一番に嫌な、哀れみのような目で。

「それはあんたが知らないだけさ。魔人族は上手いんだ。表面上笑顔であつても、それが事実とは限らない。さも仲のいいふりをして、本当は淡々とその命を狙っている……」

まるで自嘲。

それはあまりに真に迫っていて。  
知らないというより考えもしなかったことだ。  
だから。オレはすごく動揺していたと思う。

ただ、視界が歪んでいた。

「資格ないって、そういうことなの？ ひどい仕打ちを受けても仕方ないって、そう思う理由があるから、黙ってたってことなの？」  
震えながらのオレの言葉に、ノヴァキはただ頷く。

「ノヴァキもそうなの？ 違うよね？ だってノヴァキは笑ってないじゃないか。オレにも分かるくらい辛そうだもん」

「だったらどうする？ この国を……本当にあんたの命を狙っているとしたら」

それは、この場所でノヴァキが一度口にした言葉だ。  
でもその顔に浮かぶのは、無理な笑顔だ。  
言葉一つ一つを、苦労して発している。



それがほんとに辛そうだったから。  
オレはその言葉に、半ば無意識のままに頷いていた。

「いいよ。それでノヴァキの辛いのが消えるのなら」

言った瞬間、視界が開けたような気がした。

それは本能に従った言葉だ。

口にしたことで明確に、それがオレの本意であることを自覚し、心が軽くなる。

大切な人をたくさん失って、悲しむくらいならいっそ……ノヴァキの手にかかったほうがどれだけいいかって、本気でオレは思っていた。

「……ははは。馬鹿だな。あんたは手の施しようのない馬鹿だよ」  
するとノヴァキは。

突然大声で笑い出した。

さっきの嫌なのじゃない、心底楽しそうな笑顔。

泣き笑いの表情。

「なんだよお。そんなこと分かってるよ。本当にそんな人にそんなこと言っちゃいけないんだぞ……」

我ながら恥ずかしいことを口にしてしまったと、しみじみ思う。

こんなのまるで告白みたいじゃないか。

自分にはありえないことなのに、考えれば考えるほど確かに愚かでおかしくて。

初めはぶすくれていたオレも、つられるように笑顔になる。

「こんな大嘘本気で鵜呑みにしやがって」

「え？ う、嘘なの……？」

それは、楽しくてたまらないという中の、突然のネタばらしだった。「そりゃそうだろ。第一オレに国を乗っ取ったりとか、人を傷つけるなんて度胸があるように見えるのか？」  
ついには腹を抱えて笑い出すノヴァキ。

「ええー。ひどすぎるよ……」

オレは呆然とするしかなかった。

今のがほんとにただオレを陥れるための大嘘だったのなら、それはノヴァキの演技力が相当なものであると証明されるだろう。

でもオレは、ノヴァキの語る言葉すべてが嘘というわけじゃないよ  
うな気がしていた。

少なくとも、魔族であることに負い目を感じて、オレの知りえない  
いだろう迫害を受けても、それに対して何も言わず我慢していただ  
ろうことは紛れもない事実だろうし。

別棟の生徒たちが、魔族に対してノヴァキが言うような危機感を  
持ち、警戒しているのは確かなんだろう。

「この前は返り討ちにしてやる、なんて言ってたのにな」

「だ、だって……何かほんとはぼかったんだもん」

だからつい本音を口にしてしまったなどは口が裂けても言えない  
オレである。

「それにさ、オレなんかと組んじやったせいでノヴァキの立場が悪  
くなりそうなのは、嘘じゃないんだろ？」

「ああ、まあな」

まだ笑いの種が残っているのか、さっきとは違い、何だかもうどう  
でもいって感じだった。

「大丈夫なの？」

「問題ないさ。さすがに命まで取られるわけじゃないからな。そん  
な事したら人生終わるのはそっちのほうだし」

だからといってオレまでどうでもいい、というわけにはいかない。ノヴァキの言う通り、オレはノヴァキの……魔族さんたちの身に降りかかる現実というものを知らなかったから。そんな急に楽観的になって大丈夫なのかなって思ってたら、返ってきたのはあんまり大丈夫じゃなさそう、そんな言葉だった。

それは裏を返せば、死なない限りなんでもあり、みたいに聞こえる。オレには想像しかできなかったけれど、想像だけでも青くなっていたらろう。

会わないほうがいい。

そう言っていたのは、それをオレに知られないためだったんだろうか。

何度も言うが、もう知らないじゃ済まされないだろう。

どうすればそんな想像するだに恐ろしいひどい仕打ちがなくなるのか、考えてみる。

「あ、そうだ」

考えてみると、天啓は意外とすぐそばに落っこちていた。

ノヴァキは、オレがいればひどいことはされない。

オレの前ではしない、そう言っていた。

ならばそれを逆手に取ればいいのだ。

「あのさ、ノヴァキ、こういうのはどうかな？ オレとノヴァキ、

試しに入れ代わってみるってのは」

「入れ代わる？ ……意味がよく分からないんだが」

反芻し首をかしげるノヴァキ。

オレはそんなノヴァキにリシアからもらったお互いの魂を入れ替えることのできるマジックアイテムの説明をした。

まだ調整段階というか、まともに使えるかどうかは色々調べてみなくちゃ分からないけれど。

それが上手く使えるようになれば、予想するに、オレの魂……意識がノヴァキの身体に入り、

ノヴァキの魂がオレの身体に入ることになる。

カリウス・カムラルじゃないオレで外を歩くというオレの願いも叶うし、それまで知りえなかった現実を知ることができて、一石二鳥、と言う寸法だ。

「それは……」

ただ一つ問題なのは、身体を借りなければならぬ相手であるノヴァキに、お許しをもらえるかどうか、ということだった。

「駄目、かな……?」

「そうか……それなら……」

聞いてみたけど、ノヴァキは深く考え込んでいるようで答えを返してはくれなかった。

なんだか雲行きが怪しい感じ。

リシアの時みたいに勝手に変わっちゃえばいい、なんてことも考えたけど、

それは人としてやってはいけなくなって思ったし、できればちゃんとノヴァキのお許しがもらいたかった。

と言うより、何も知らずに変わったときの驚きよつと言ったら心臓に悪いっただらありゃしないからだ。

「それはすぐに使えるものなのか?」

なんてことを考えていたら、ふいに返ってきたのは思っていたより色よい返事で。

「うん。どうだろ、二、三日……最悪試験までには困ったことに今度はオレがいい返事ができなかった。」

問題なのは、壊れた部分についてだ。とりあえず、古い師のおばあさんに聞きにいったのだが、どこかへ遠出しているらしく、ずっと留守で。

何がどういう風に壊れているのかは、自分で調べなければならなかった。

あの鎖を直せばいいのか、壊れていて何か悪い影響はないのか、下手すると結構危険なアイテムだし、その辺は慎重になる必要がある。

「そうか。だが、初めにも言ったが、あんたには知ってもらいたくないな。俺の個人的な感情としては。……あんたが傷つくのはごめん」

かなり荒唐無稽な話ではあるんだけど。

疑いもせずに信じてくれたノヴァキ。

そしてその上で、オレの事を心配してくれていた。

そこまで辛い日々を送っているのかと思うと、不謹慎にも逆に興味が湧いてくるオレである。

するなと言えはしたくなる例のアレだ。

「つまり、オレには耐えられないくらいきついじめや迫害を受けていると?」

「……どうだろうな」

曖昧に濁すノヴァキ。

どいやら目的達成には後一押し必要らしい。

「大丈夫、やられたことは全部覚えて百倍にして返しに行くから、これうちの家訓ね」

「やな家訓だが……できそうだから怖いよな」

悪魔な感じで笑顔を浮かべるオレに、しょうがないなって感じのノ

ヴァキの苦笑がこぼれて。

「分かった、好きにすればいい」

「ああ、できたら連絡したから、その時はよろしく」

始めはどうなることかと思ったけれど、終わってみれば上々の結果で。

また一歩、オレは夢に近付いたのだった……。

（第18話につづく）

## 第18話、初めて名前を呼ばれた日

それから、試験までの一週間はあっという間だった。

カムラル家のものとしてのオレ。

『夜を駆けるもの』としてもオレ。

立場はまるきり違えど楽しい日々を過ごしていた。

もともと、夜のオレはノヴァキの演奏を聞いたり（残念ながら最初に聞いたあの懐かしい『一番』の曲は、それっきりだったけれど）、リシアの実験を魔力の提供という形で付き合ったりと、

一昔前までの『夜を駆けるもの』として働くということとはあまりしなくなっていたけど。

変化があったといえはそのくらいのこと。

思えばそれはオレの生涯でもっとも充実し、幸せな日々だったんだと思う。

事実その時のオレは、いつか母さんの後を継ぐその時まで……スクールを卒業して大人になるまで、

間違いなく続いていくものと信じきっていた所はあったんだろう。

世間知らずなオレは、全くこれっぽっちも気付いてやしなかった。

自分に向けられる悪意と呼ばれるものを。

二人で組んで行う今回の実地試験。  
ハイグレドクラス三学年合同のそれは、スクールの地下に見つかった地下洞窟の探索だった。

そこには何があるのか、何がいてどんな歴史を刻み、何のために作られたのか。

それらを設けられた時間内にどれだけ知ることができるか、というものだ。

試験、とさんざん言ってきたが、オレからすればちよつとした冒険旅行……遠足という感覚が強い。

一応知りえた情報によって成績付けはなされるが、それはあってないようなものだろう。

何せその場所は、未開の地の探索と呼びながら、生徒たちの安全を第一に考え、完璧にスクールの先生たちの手が入っている場所だからだ。

未開の地というのは、試験上の建前なのだろう。

危険である場所には予めなんたかの安全対策がなされているだろうし、試験中は各地に先生が待機していて、尚且つ試験を行うものたちの動向は、その腕につけられた魔法の腕輪によって逐一分かるようになっており、それでも危険があった場合は、その腕輪で先生たちに知らせることができるといって徹底ぶりだった。

そこまでされると、冒険が冒険でなくなっちゃってつまないじゃん……とか思ってしまうのは既に過去のオレだった。

第一、そんな事言ったら厳しく安全のために先生とともにこの場を見回っていたルートに失礼だし。

それより何より、オレには楽しみで楽しみでたまらないことがあったからだ。



「次！ カリス・カムラル、ノヴァキ・マイン組、出発してください！」  
そんな事を考えていると……聞こえてくる先生の声。

「それでは、行きましょうか？」

「あ、ああ……」  
オレたちが試験開始を告げられたのは、試験が始まってちょうど真ん中くらいだった。

前方には新しく作られた……闇の広がる地下への階段。

言葉として届かぬざわめきとともに注視してくる群衆……オレたちの後に試験を受ける生徒たち。

いまだその視線に慣れることなはいのか、ノヴァキの尋常じゃないくらいに緊張した返事が耳に残る。

それも無理はないんだろう。

なし崩しにノヴァキと組むことを決めてしまった後。

ノヴァキの風当たりというのは本当にひどかった、らしい。

らしいというの、ノヴァキは直接そのことを話してくれないし、組む人と予め親交を深めておくという建前で、なるべくノヴァキと一緒にいる時間を増やしたんだけど、オレがノヴァキのそばにいる時は必ずみんな、そんなひどいことをするとは思えないいい人、だったからだ。

それでも、オレのせいでノヴァキが迷惑をかけてるらしいことは、仕事でたりシアにそれとなく聞いて知っていた。

一番心残り、というかもどかしかったのは、その決定的な証拠をこ

の目で見るために使うつもりだった魂を入れ替える腕輪が、ちゃんとうまく機能してくれなかったことだろう。

切れた鎖は直して新しいのを付け替えたのに、入れ替わっていられる時間がものの数秒、だったのだ。

それでは証拠を掴むために別行動してる時間すらなく。

様々な悪戦苦闘をして、なんとかうまくいくようになったのは、昨日……試験前日のことだった。

よって、今日こそが魂を入れ替える腕輪の本当のお披露目で。

ノヴァキの身に起こっている実情を知らなくちゃいけないってことを考えると、ちょっと不謹慎なのかもしれないけれど、それがあつたからこそ、余計にオレはうかれ、今日と言う日が楽しみでならなかったんだけど。

その当日に、オレにとって少し腹に据えかねることが起こってしまった。

オレはそのいらいらを極力出さないように階段の前に立ち、ノヴァキと顔を見合わせる。

やっぱり緊張していた。

オレの方まで、その緊張感が伝わってくるほどに。

オレはそんなノヴァキに軽く微笑み、左手首に嵌められた腕輪をかち合わせる。

それはみんなの付けている腕輪じゃなく、オレとノヴァキのとおつておきの腕輪だ。

みんなの持つてるのと同じ腕輪は、荷物袋の中に入れてある。

魔力を送ること入れ替わるように改造したそれは、言わば二人だけの秘密。

それ故に、悪戯めいた共有感がある。  
入れ替わってみんなを驚かせてやろう。

そんな気持ちが多分、伝わったんだろう。

少しだけ落ち着いた様子で、ノヴァキは頷く。

だけどそれでも、ノヴァキの緊張感……それに似た何かが消えることとはなく。

「……っ」

「ち、ちよつと！」

オレは半ば強引にノヴァキの手を引っ張り、階段を降りていった。  
その顔が、今更ながら躊躇っているように見えて。

オレと組んだこと、秘密の共有、魂を入れ替えること。

……そのすべてに戸惑っているような気がして。

ここまで来て、やめるなんて言わないよねって、少し不安になって  
ムキになってたんだと思う。

順番待ちをしていた残りの生徒たちから騒ぎが上がったが、そんな  
ものはガン無視だ。

一番の理由は、あの場にいるとこっ恥ずかしいすました自分でいな  
きゃいけないのが嫌だったからなのかもしれないけど。

「お、おい。ちよつと待ってっ」

明らかに人の手によって掘られた岩壁の洞窟。

階段を折りきり、ある程度歩いて、ノヴァキの焦ったような声には  
つとなり、オレは手を離す。

「だって面倒くさいんだもん。あの場にいるとムダにすましてなき  
やなんないし」

「だからといってあんたから手を取ることはないだろう。……これでまた風当たりが強くなる」

「そんなのほっとけばいい」

「……」

思っていた以上に強い言葉が出てしまって、黙り込むノヴァキ。

「……ごめん。ノヴァキは悪くないのに」

これじゃあ八つ当たりだ。

オレは素直に頭を下げる。

「いや、仕方ないさ。成り行きとはいえ、身に余る場所に俺がいるのは事実だからな」

「……っ」

すると返ってきたのは、あまりにも卑屈なノヴァキの言葉だった。今度は腕輪の件で上がっていたオレの気分が下降する。

というか、こんな風にノヴァキは全然悪くないのに八つ当たりしてしまったのも、オレ自身気に入らないことがあったっていうか、極力忘れるようにしていたいらいらを思い出したからなんだろう。

「あんたの友人……副会長の、マイカって言ったっけか。あんたは不満だったようだけど、俺にはあの子の気持ちはよく分かるし」

「分かんなくていいよ、そんなもの」

ノヴァキがそれを言うのかって、オレはちょっと悲しくなる。

実は今日、マイカと喧嘩したのだ。

それは、オレがノヴァキと組むことを強引に決めてしまったせいにあつた。

マイカは……いや、マイカだけでなくルートやサミイもノヴァキと

組むことを渋っていたというか反対していた。

一度決めたことを天下の会長が反古にしたら、やっぱり魔族と組むのは嫌だったってことになるぞ、なんてタインが手助けしてくれたこともあって、何とか今日まで押し切ってたんだけど……。今日の今日になってもマイカはしつこかったから、オレはつい熱くなって、怒鳴ってしまったんだ。

『うるさい！ オレの勝手だろ！』って。

普段あんまり怒るようなことないから、はっとなって我に返ったのはそのすぐ後のことで。

オレはすぐに謝ってその場を収めようとしたんだけど、何せ初めてのことだったからどうにもぎこちなくて。

オレより先にこの地下洞窟の中に入るその瞬間になっても、それは消えることはなかった。

いや、それでもマイカはノヴァキと組むことに納得いってなかったからなんだろう。

そんな時に、ノヴァキがそんな事言ったら、必死になってるオレが馬鹿みたいじゃないかって思った。

オレは感情のままにそう口にしようとして、それを寸前で留める。

せっかく楽しいことが待ってるのに自分で盛り下げてどうするって思ったからだ。

「……すまない」

「や、だから、ノヴァキが謝ることじゃないって。それよりほら、お楽しみと行こうよ」

搾り出すように発したノヴァキの実際の言葉。

オレはそんなもの忘れてドブに捨ててしまえっくらい勢いで腕

輪を掲げてみせた。

「ああ、そうだな」

それにようやく、ノヴァキが柔らかく笑ってくれたから。お互いに頷き、早速とばかりに右手へと魔力を込めた。

一方のノヴァキは左手。赤と青の光。

それはぼうつてなるくらいに、オレの視界へと近付き埋めつくして……それに吸い込まれる。

ぐるぐるになって、オレの身体が細かな粒子に分解させられ、再構築するような感覚。

初めは結構衝撃だったけれど、慣れてくれればそれも当たり前のようになっていて……。

気付けばオレの前に、オレがいた。

赤と金と茶色がごちゃ混ぜになった、うっとおしいほどに長い髪。白い仮面のような肌。

どぎつく、人を威圧するにもってこいの紅の相貌。

お高くとまった鼻、そのわりに一向に大きくならない身体。

毎日見ている、オレのキラいな顔だ。

ただ中にいるのがノヴァキであると分かっているからなのか、この時ばかりはいつものような嫌悪感は全くなかった。

ノヴァキのちよっと卑屈だけど争いを好まない、かつ耐え忍ぶことのできる人となりが表れてるんだろう。

「やっぱり、ノヴァキの魂のほうがあってるんだろつな。嫌な顔なのに嫌じゃない」

「あんたはそればかりだな。……まあ俺もそう思うが」  
その声すらオレが発するより低くてかつこよくて、ずつといい。

……このままノヴァキがずっとオレでいてくれればいいのに。  
ふいによぎるのは、そんな邪な考え。

オレを信じて変わってくれているノヴァキに対しての許されざる思考。

オレはそれを無理矢理に追い払い、笑顔で言葉を続ける。

「そうかなあ？ ノヴァキになってる姿、鏡で見たけど、やっぱりノヴァキの魂の方があってるでしょ。オレが出てるっていうかさ、生意気そうに見えない？」

「ははは。……全然？」

柔らかい笑顔。

おぼろげな母さんの笑顔とダブる。

きっとそれはオレにはできない笑顔で。

「そう？ それならいいんだけどさ……正直、バレるよね、これって」

はつきり言おう。

目の前にいるのは一見オレだけど、見る人が見ればすぐに分かるはずだ。

明らかに中の人が違うと。

こりゃあちよつと失敗かな、なんて思ったオレだったけれど。

「……どうだろうな。あんたの友人たちなら、確かに気付くかもし

れないが、なんとかなるだろ。少なくとも今のあんたを見分けるヤツはいないだろうさ」

オレをその赤い瞳でよくよく観察した後、そう言って自嘲気味に笑うノヴァキ。

それはつまり、ノヴァキの知り合い、友人たちで、今ノヴァキの身体の中にオレがいると気付ける人はいない、という意味なんだろう。何故なら俺には友人なんかいないから……そう言っているようなもので。

「リシアは？ 分かるんじゃない？」

「ははっ、それこそまさかだ。あいつはちゃんと分かっている。俺の近くにいれば特なことなんて何も無いってさ。だから仕事上だけの関係なんだ」

オレの顔だと分かり易い。

それがノヴァキの本意じゃないことに。

ノヴァキが、リシアを突き放すようにしているその意味。

何だかオレには、それがリシアのためのような気がしてならなくて。

「そうかなあ？ リシアならすぐに気付くって」

「いや、ないな」

仮面の下のおレのことも薄々気付いているようだったから。

そう思い再度推してみると、きっぱり否定が返ってくる。

それが何だか悔しかった。

リシアがノヴァキに対する感情とはきつと真逆であることを考えたら、余計に。

「んじゃ賭けようよ。もしお互いに入れ替わっていること、リシアに限らず、誰かが気付いたら……」

意地でも特別クラスに入ってもらおうからね」



実は、一般クラスでも試験の成績が上げれば、特別クラスへ編入することが許される。

そのためにはビリの成績なら死ぬほど勉強しなきゃ駄目だろう。

これは、ノヴァキが今ほどひどい目に合わぬようにと考えた手の一つでもあった。

そんなものは無理だって言って却下されたけど、そうすればスクールにいる時はずっとそばにいたことができて一石二鳥、なんて思っ  
ていて。

だからオレは、ここぞとばかりにそんな事を口にする。

「それは別に構わないが……オレが賭けに勝ったらどうするんだ？  
楽しそうなノヴァキの笑顔。

絶対に自信ありって顔だ。

それになんだかむっとなって。

「そんなん任せる。何でもいいよ。ノヴァキの好きにしてくれ」

「っ、あんた、それは……」

オレも自信たっぷりにそう言ってやる。

それでぐうの音も出なくなったのかすっかり言葉を失うノヴァキが  
そこにいて。

「よし！ んじゃさっそくりシアに会いに行こう！」

「ま、待って。そんな暇ないだろう？ この試験で一番取るって  
言ったのはあんたじゃないか」

意気軒昂に駆け出すオレに、ノヴァキははっと我に返り、そう言っ  
てくる。

そう、オレは試験前に確かにそう言った。

それは、さつきも話題に上がっていたノヴァキを特別クラスに引張ってこようって案の第一歩でもある。

ノヴァキは無理だって言っていたけど。

嫌だって言ってるわけじゃなかったから、編入のための下地を作ろう、そういう魂胆なのだ。

これ以降の試験はどうなるか分からないけど、せつかくそんなノヴァキに手助けできる今をムダにしたくなかった。

ここでいい成績を残しておけば、来春の編入試験に少なからず有利になるはずだから、どうせなら一番になろうって、そう言っていたのだ。

「だからこそだよ、ノヴァキ。リシアは古代文字の解読ができるんだ。オレたちが一番になるには、合流して損はないと思うよ」

「なんだ、結構そつがないんだな」

呆れたような、感心したようなノヴァキの眩き。

他の組と協力しちやいけなない決まりなんてないし、どっちにしろオレはそのつもりではいた。

マイカやサミイたちと合流できれば尚いい。

みんなと一緒に行動すればいい成績は残せるだろうし、今のところ成功しているとは言えない、ノヴァキが特別クラスで過ごしやすい環境を作るための親睦が深められるんじゃないかって、そう思ったのだ。

……しかし。

「……みんなと協力、か。そんな事で本当に一番にが取れるのか？」  
「うっ」

実は危惧していた痛いところをうまくついてくるノヴァキ。

思わず言葉を失うオレだったけど。

それは逆にちょっとうれしいことでもあった。

何故ならばノヴァキが意外と一番を取ることに真剣になってくれたって言うか、ほとんどオレの我が侂なのに、それに乗り気でいてくれてることが分かったからだ。

「そもそも……この試験で一番を取るのには何が必要だろう？」

「うん」

そう言われ、オレも真剣になってうんうんと考えてみた。

ここはスクール内ともうほとんど変わらないように見える、未開とは真逆な、言わば箱庭だ。

そこで生徒たちが何を得て何をなすのか。

成績をつける先生たちもある程度は予想しているだろう。

……それならば。

「すごい発見をする、とか？　ここに足を踏み入れてる先生やル―トたちすら気付かなくなったような」

「ああ、オレもそう考える。だから……」

オレの導き出した答えは、いい線いっていらしい。

領いたノヴァキは、荷物袋から試験用の地図を取り出し、広げて見せ、

「この地図に載ってない何かを探してみるのはどうだろう？　博打要素は高いが、うまくいけば高評価を得られるかもしれない。他の組と一緒に行動するよりもな」

枠外の何も書かれていない白い部分を指し示し、そんな事を言った。自信がないのか、言いながらもノヴァキ自身、とても悩んでいる感じだ。

「なるほど。いいね。面白いかもしれない」

例えば、秘密の隠し通路とか、世にも珍しい魔精霊とか、あるいは宝物を見つけることができたのなら……確かに他の組と一緒に行動

するよりは、単独で一番を狙える可能性はある。  
分け前も減らなくてすむし。

とにかく、いいこと盛りだくさんだ。

勢い込んでノヴァキの案に賛成するオレ。

それなのに。

当の案を口にしたノヴァキ本人が、残念そうな……いや、悲しそうな顔をしているではないか。  
びっくりした。

何だかそれが否定して欲しかったように見えてしまって。

「……あ、あの、オレ何かまずかったかな？」

ノヴァキを傷つけるようなことを口にしてしまったような気がしてそれが一体なんなのか、まったくもって見当がつかなくて、混乱する。

まるで幼子のように、その悲しみがオレに伝播する。  
どうしてオレはいつもいつも……。

その先の言葉は続かなかった。

情けない表情をしているだろうオレに、ノヴァキは気付いたのだから。  
う。

大層驚いたような顔をした後、ふわっと笑顔を見せてくれたからだ。  
やっぱりオレにはできないだろう、そんな笑顔を。

「何も悪くないさ、あんたは……カリスは何も悪くない。ただ、何も見つからなかったら一番どころの騒ぎじゃないなってそう思っただけさ。それに……」

「……っ！」

カリス。オレの愛称。

ノヴァキが今、初めてオレの名前を呼んでくれた。

今までずっと、あんだだっただのに。  
もしかしたら、ノヴァキにとって見れば身体はノヴァキのものだけ  
ど中身が違うわけだし、ややこしいからそう口にしただけなのかも  
しれないけれど。  
でも、それでも。

「平気平気！ 見つかるって！ オレ、そういう運とか、結構いい  
方だし」

すごく、すごく嬉しかったから。

気付けばオレも笑顔でそんな事を言っていた。

思いつきり浮かれてたっていつてもいいかもしれない。

「……そうか。それじゃ、行ってみよう」

だからオレは。

その言葉に続くものを封じてしまったことも。

頷くノヴァキが、何か強い意志を秘めていたことにも。

気付くことができるはずもなく……。

(第19話につづく)

## 第19話、裏見の滝、しぶくは永訣の虹

浮かれたままのオレは、ノヴァキをほとんど引つ張り回すみたいに、試験会場となった地下の洞窟を駆け回った。

その途中で、マイカたちを見かけることはあつた。

だけどその時は挨拶程度で一緒に行動する、という展開にはならなかつた。

特にマイカとは、お互いにぎこちなかつたせいもあつたけれど、お互いの目的が違ったのが大きかつたのだろう。

マイカたちのように、この場に用意されたものに悪戦苦闘するのではなく、逆に下手すれば成績が上がるどころか下がるかもしれない、掟破りなことをするつもりだつたからだ。

「オレがまず怪しいのはこの辺だと思つたよな」

そこは地下洞窟の入り口から、もっとも遠い場所だ。

地図で言うと、端っこも端っこで。

今オレが触れている岩壁の向こうには、何も描かれてはいない。

そこには灯りすらなく人もいなかった。

何故ならその地図で、何もないと明確に示されている……ただ試験を受けるだけなら足を踏み入れることはないだろう場所だからだ。

「……どうして」

呆けたような、ノヴァキの呟き。

ここが怪しいと踏んだのか。

ノヴァキはそう言いたいんだろう。

その表情は見えない。

あるのは変に手応えのない元オレの手のぬくもりだけ。

「うーんと、勘かな」

「……っ！」

夜は好きだけど何も見えないのは嫌なので、オレは火の力を借り、カムラル空いた手のひらの上に炎を灯す。

すると、びっくり顔のオレ……じゃなくノヴァキの顔がすぐ近くにある。

そこで初めて他人の身体なのに自分の得意な魔法が当たり前のよう  
に使えてる事実<sup>に</sup>気付いて。

「うむ。これは新たな発見かも。ノヴァキってこれ使える？」

「い、いや……あまり得意じゃない」

どうやら魔法は、その人の魂に作用するらしい。

こんな事がなければ気付くはずのなかった……大発見かもしれない。  
熱くない火の玉を生み出し、お手玉してみせつつ、オレはそんな事  
を考える。

だが、それが試験に直接関係ないことは確かだ。

そのままカンテラを取り出し火をそこに移した後。

改めてどうしてを答えるために、オレは口を開いた。

「多分……今オレたちの頭の上って砂浜だと思うんだよね」

ユーライジアスクールとその国の中心は大陸の西端、海に囲まれた  
半島に収まっている。

今、オレたちが進んできたのは、その海の方角……ラルシータ大陸  
のある方向だった。

しかも、ほんの僅かずつだけど、この地下洞窟は進行方向に向かっ  
て下っていたのだ。

そこから導き出されるのは一つ。

「もしさ、この壁の向こうに通路なんか見つけちゃったりなんかしたら大発見だよな？」

だってだってもしそんなものがあるのだとしたら、それが海の下を通っていることになるんだから」

そしてその通路はずっと伸びていて……ラルシート大陸へと海を越えてつながっている。

そこまではさすがに出来すぎかもしれないけど。

そんな発見ができれば、間違いなく一番だろう。

はるばる船でやってきたルコナたちも喜ぶかもしれない。

「しかし、そんな事常識で考えたら……」

そう、問題はそれだった。

言うてはみたものの、そんなことありえないだろう。

だったら面白いよなあっていう程度のものだ。

四角に囲まれたその地図を、ただぶち破ってみただけなのかもしれない。

「まあ、ありえないよね。ここを調べた先生たちだってそう思っているはずさ。」

だからこそ何か見つけたら大きいと思わない？ どうせ時間たっぷりあるんだしさ、念のため見てみようよ」

こつこつと岩壁を叩きながらオレは言う。

「……そうだな、調べてみよう」

するとノヴァキは納得してくれたのか、そう言つとさつと歩き出してしまふ。

その歩みは迷いが無いどころか急いでいる感じすらする。



何だかそれが、オレの世迷言なんかさつさと片付けて次に行こう、なんて考えているようにも見えて。

「わ、待てって！ オレが見つけるんだからな！」

オレは勢い込んで、そんなノヴァキの後を追う。

「お、おいつ」

そして、慌てたような声のノヴァキに構わず、オレは壁伝いに先行する。

「……あ」

すると、あたりはオレが思っていた以上に、すぐそこにあった。

触れた手が何だか、振動しているような気がする。

オレは立ち止まり、壁に耳を近づけてみた。

「……水の音だ」

それだけならカムラル家のものらしい、オレの苦手な水の気配が。

「水の音？ 何で分かるんだ？」

「ん〜、苦手だからかなあ」

同じようにノヴァキも壁に耳を当てているけど、たぶん聞こえないんだろう。

でもオレには分かる。水が苦手で怖いから。

なんでだと聞かれても答えようもなかった。

そうなった経緯とか原因があるわけじゃない、と思う。

それでもあえて理由づけをするのなら、生まれつき、なのかもしれないけど。

「……つまり、ここに何かあるのか？」

「たぶんね、地図に載ってない何かがある……って、あれ？ この壁

もしかして」

喋りながらこんこんと壁を叩いていたわけだが。  
ほんの僅かに音が違う気がした。  
もしか、と思い魔力に対する触覚を強めてみる。

それはカムラル家のものに備わった……あるいは唯一と……いい特技だ。

人より魔力の感知能力が強い、という。

それは例えば、壁に含まれてる微量な魔力の違いが、分かるくらいには。

オレはそれを、色の違いとして認識する。

例えばオレ自身なら赤……火の魔力を中心に、荒唐無稽に混ぜ合わされた十一色。

ノヴァキならばその六割が緑……木の魔力で、残りが黒……闇の魔力、といった具合に。

それは人や物を識別する力で。  
案の定、音の違う壁の部分は、隙間のない茶……地の魔力で塗りたくられていた。

それはなかなかの光量を湛えている。

おそらくは、その壁自体が魔力の塊なのだろう。

「当たりだよノヴァキ、ここだけ魔法で作られた壁になってる。ノヴァキって木の魔法得意だろ？ この壁は地の魔法でできてるみたいだし、いつちよぶつ壊してくんないかな？」

十二の根源、その魔力にはお互いそれぞれ相性というものがある。  
ガイアットの魔法に対処するには、ピアドリムの魔法。

もうそれは魔法を使うにあたっての基本中の基本だ。

見た感じカムラルを覗けば器用貧乏なオレより、ノヴァキのほうが強そうだった。

だからオレはすかさずそうお願いしたわけだが。

「……………ああ」

何だか上の空のノヴァキ。

オレが彼の得意魔法を言い当てたから驚いているのだろう。

だが、オレの言葉が本当に正しいのか、確かめる方が先決だと判断したらしい。

おもむろにオレの隣に並び、壁に手のひらを添えて、ピアドリーム  
の魔力を込める。

それが壁にあるガイアットの魔力と作用して……………。

ドゴオッ！

ノヴァキが何かの魔法を放つよりも早く、壁は粉碎した。

その先に見えるのは、地図にない今いた場所と似たような岩壁の通路……………いや、水の音が心なしが強くなっている気がするし、天井から落ちてきたらしい水滴により、所々水が溜まっているのが分かる。

「……………うさん。ほら、当たりだったろ？」

「……………ああ」

頷くノヴァキ。

でも変わらず上の空であまり嬉しそうじゃない返事。

オレが先に見つけたのが気に入らなかつたのだろうか？

思い返してみればここに来るまでにノヴァキの歩みは迷いがなかつたし、可能性は高いだろう。

「そんな残念がらなくてもオレたちは今組んでるんだし、オレの手柄はノヴァキの手柄だよ？」

「……あ、ああ。そうだな」

無理してる笑顔。

一体何に？

オレは不安になる。

「ほら、こんなところでもたもたしてると他の組が来ちゃうだろ。せつかくオレたちの手柄なのに」

半ば強引に引つ張った手。

震えている。

一体何に？

ノヴァキは何を怖がってる？

この先に何かあるんだろうか？

何かあるのか知ってるんだろうか？

心配になって思わずノヴァキを凝視するオレ。

「……そうだな、急ごう。誰かが来ないうちに」

オレの姿をしたノヴァキ。

その赤い瞳の中に、ノヴァキの姿をしたオレがいる。

そのことで改めて実感する、今の不可解な状況。

それが何だかおかしくて。

それにノヴァキも気付いたからなのか、さっきまであったオレを不安にさせている何かが消えている。

むしろなんだか嬉しそうでもあって、今度はオレを引っ張って先へと進んでいくノヴァキ。

その時感じたのは。

不思議な安堵感と。

恥ずかしいくらい小さく細い元はオレの手のひらの感触で……。

ずっとずっと続く真っ直ぐの道。

一体どれくらい歩いただろう。

だんだん大きくなる水の音。

すでに轟音と呼べるそれに、正直びびっている自分を隠しきれなくなっただ頃。

ふいにノヴァキは、口を開いた。

「カリスは水が怖いって言ってよな」

「え？ う、うん。小さい頃に何かあったとか、そういうわけじゃないと思うんだけど……」

やっぱりカムラルの家の子だからなのかな。怖いっていうか、うん、やっぱり怖いんだと思う」

何もかも洗われて流され晒されて、攫われてしまっ気がして。

「それじゃ、風呂はどうしてるんだ？」

「風呂？ 別にどうもしないけど。水とお風呂は違うでしょ？ ああでも、自分の部屋にあるのしか使ったことないけど」

自室内にあるお風呂は自分だけの世界だ。  
だから怖くない。安心できる。

「確かに、身の回りで使う水と自然のものは別物か」

「ああ、でも、うちってオレとサミイだけの手洗い場があるんだけど、それはちよつと怖いかな」

「すまん。意味が分からない」

オレがノヴァキの言葉に訂正を入れると、本気でわけが分からない、といった顔をするノヴァキ。

何でこんなこと分かんないのかなってちよつと思つた。

オレは口を尖らせ、それを言葉にしようとして……。

ゴウウウウツ！

「……………っ！」

急に視界が白け、広がった気がした。

水の轟音もとにかく近い。

思わず立ちすくみ、口を嚙むオレ。

ずっとまっすぐ続いていると思われた道。

急激に右に折れている。

いよいよ震えの止まらなくなった、カンテラのある方の手を上げてみれば、前方は流動する壁……………いや、そうじゃない。

天井から流れ出る怒涛の水が、断崖となるその先に落ち込むことで

水のカーテン、所謂裏見の滝を作っていたのだ。

「うわぁ」

怖いもの見たさと言うか、危険なものだからこそ吸い寄せられるというか。

何だかんだいって好奇心のほうが勝っていたのかもしれない。

側まで近寄って恐る恐る下を覗き込むと、暗闇ばかりでしたは見えなかった。

ただ、滝が結構な深さがあることが、しぶく水滴で何となく分かるくらいで。

「海水だ、しょっぱい」

カンテラとは逆の手でしぶく水を掬い取ってみれば、確かに塩辛い味がする。

ほら、やっぱりオレの考えは正しかった。

ここは海の底にある洞窟で、きつと海の方この大陸まで続いている。

そう得意げに、ノヴァキに伝えようとして。

「ごめんな。……俺の身体なら水には強いはずだから」

背後ごく近くから聞こえる、手にかかる幼い子供をあやすみたいなお優しく柔らかい声。

相反していつの間にもやら失っていた手のぬくもり。

「……っ」

オレは振り向けない。

ノヴァキの言っていることが理解できなくて。

ただ不安で。

どんっ！

背中に強い衝撃。

オレは抵抗すらできなかった。

よけることすらできなかった。

……だって、信じていたから。

信じられなかったから。

ノヴァキが、そんな事をするわけないって。

オレを轟音響く闇の向こうに、突き落とすなんてあるわけないって、  
そう思っていたからだ。

水は苦手だってそう言ったのに。



投げ出されるオレの身体。

カンテラが先行し、黒い恐怖にのまれ消えてゆく。

オレは振り向くこともできないままに。

その後を追った。

それが。

永遠の別れであることなど、気付きもせずに。

ただただ混乱の海におぼれ、染みゆくように。

闇の中、獰猛な水の息遣いだけが聞こえる。

怖かった。ただ怖かった。

水に攫われ、暴かれる自分が怖くて。

必死の身体を丸めようとする。

（ああ、でも……）

今はノヴァキなんだ。

オレは今ノヴァキの身体を借りている。  
それに気付いたとたん、強い安堵感がオレを包んだ。

今まであった恐怖も薄らいでいる。

ただそれでも、魔族とて水の中で生きられる種ではないんだろう。  
ぐるぐると回る視界と、あちこちにぶつかる衝撃とともに、だんだんオレの意識は朦朧としてきて。

（あれ、あの光って……）

オレが意識を失うその瞬間。

おぼろげに見たものは、どこかで見覚えのある、そんな色の光で……。

（第20話につづく）

## 第20話、忸怩たる痛みが始まり

「……………」

オレは一体、どのくらい気を失っていたんだろう。

ふと顔に感じたのは、ざらざらとしてあったかい小さなものの感触。

「みゃ〜ん！」

「わわっ……………げほげほっ、ね、猫？」

どうやらオレを起こしてくれたらしい。

仰向けになつてるオレに馬乗りになった形で、まだ子供だろう、小さな小さな白猫さんが、

起きたか！ とばかりにそのエメラルドグリーンの瞳をしばたかせていた。

「みゃん。みゃみゃみゃ」

そんなオレにちよつと怒った風の白猫さん。

人の言葉が判るのか、そもそも猫ではなくて猫の形をした魔精霊か何かなのか。

その鳴き声は、助けてもらって礼もないのか、なんて言っているようにも聞こえて。

「君が助けてくれたの？ どうもありがとう」

オレは彼を抱きかかえるようにしてその場から起き上がる。

そこでようやく狭くなっていた視界が広がった。

すぐ側で聞こえる滝の音。

どつやらここは滝つぼらしい。

七色に光る水たまりは浅く広く、温泉のように暖かい。その見たことのある水の色も、水の暖かさも気になったけど。

一番オレが目を引いたのは白猫さんのことだった。

やっぱり彼はただの猫、というわけではないらしい。

光の魔力を自らで発し、辺りを照らしている。

その光は熱を持っているらしく、びしょぬれの彼はそれで体温を保っているらしかった。

そんな彼はこの神秘的で見知らぬ場所の主か番猫か。

ごつごつして錆びかかった大きな首輪をしている。

その首輪には鎖がついていて、滝つぼの真ん中にある黒光りしていた鉄杭のようなものに繋がっていた。

「君はここに住んでるの？　ここってどこなんだろう？」

オレは白猫さんを抱き上げたまま（降ろすと、その小さな身体は浅いとはいえ水に浸かってしまうので）再び辺りを見回す。

「……みゃーん」

少し悲しげな声。

たぶん分からないんだろう。

それにおそらく、彼はここに繋がれているのだ。

それが一体どんな理由なのか。それは分からなかったけれど。

行動を制限された不自由な姿。

彼に比べればマシだったとはいえ、どこかオレの姿とダブる。

「君はもしかして……ここから出られないの？」  
「にゃん」

肯定、だと思う。

「じゃあ、ここから出たい？」

「にゃん！」

強い肯定。

それは、はっきりとオレに伝わってきた。

「分かった。ちょっと待ってて」

オレは頷き、その猫の小さな身体と比べて仰々しいくらいに分厚い鎖をなんとかかすべく、滝つぼの真ん中までやってくる。

「この黒い柱を抜けば……」

とりあえず彼はここから自由になるだろう。

それがいいか悪いかなんて考えなかった。

いや、小さな白猫の彼が悪いものはずはないと、ないか悪さをし  
てここに封じられているのだとは、考えもしなかった、と言ったほ  
うがいいのかもわからない。

この期に及んで？ いや、違う。

オレは自分を信じてるんだ、いつも。

彼を助けたらって、オレ自身が思ってるからそうするのだ。

その後の結果なんて考えない。

それで後悔するのかもしれないけど、そんな事知ったこっっちゃない。

ノヴァキのことにしてもそう。

初めから彼を信じてなければ……背中を押されたあの時、かわそうと思えばかわせたはずだった。

なのにオレは、そうしなかった。

ノヴァキがそんな事をするはずがない……理由もなしにそんな事をするはずがない。

そう思う自分を、何より信じてたからだ。

ノヴァキは背中を押すその時に、ごめんと、そう言った。

それは一体、何に？

決まってる。

その直前にオレが水を苦手としていることを話したからだ。

本当にノヴァキがかつて冗談で言っていたようにオレをどうこうしようと思っていたのなら、そんな気遣い入らないんじゃないかって思う。

だから……何か理由があるのだ。

突然の、ノヴァキの行動には。

オレは、その理由を知るために今すぐノヴァキに問い質さなくちゃいけない。

正直焦っていた。

早くノヴァキのところに戻らなくちゃって。

そう思うわけははっきりしなかったけど……多分不安だったんだろ

う。  
ノヴァキがあんなことをしなくちゃいけない理由に全く気付けなかつた自分のせいで、何かとてつもなく嫌なことが起こる……そんな気がして。

バチイッ！

「うわっ？」

そんな上の空の思考は、無意識のままに触れた黒い柱から発せられた魔力の進りにより、その場へと引き戻される。

気がつくと、柱はなくなっていた。  
相当な重量と長さがあつたはずの鎖も。

「みゃんみゃん」

「あ、うん」

感謝の意。

つぶらな瞳で見上げ一声上げる白猫さんに、そんな意味合いのものを感じ、オレも頷き返す。

そんなオレをじつと見つめていた白猫さんだったが、ふいに水を掻き分けてある方向へと駆け出してゆく。

どうやらその先に道が続いているらしい。

「みゃん」

その半ばで立ち止まり、ついて来いとはかりに声をあげて駆け出す白猫さん。

オレは言われるままに、その後を追いかけて……。

「海だ……」

空気穴にも等しいような、狭い道をやつとのことので抜け出すと、そこは夕陽の染まる砂浜だった。

あの地下洞窟に入ったのが朝だから……オレは半ば半日近く流され、気を失っていた計算になる。

目前に広がるのは、恐れ抱くほどに広大な海。

遠目には、そんな海を行き交う定期船の姿が見える。

「ユーライジア……じゃない？」

違和感。

あまり海に出向く機会がなかったからはっきりとは言い切れないけど。

この砂浜はオレの知るユーライジアの砂浜とは違う気がした。

「港町……近くにスクールが見えないってことは……」

オレはぐるりと一回転し、陸地のほうを見渡してみる。

いつもの見慣れたスクールと町公園、裏山、それらの姿はない。

となると少なくともここはユーライジアスクール付近の砂浜ではないことは間違いなさそう。

とりあえず近場にある港町へ向かって駆け出す。

「みゃ、みゃおんっ！」

「あ、ごめん」

と思つたら、置いてくなくなつて感じの白猫さんの鳴き声。

オレはきびすを返し、ふわもこの彼をしっかりと腕に抱えて走り出す。

それほど遠くでもない港町には、すぐにたどり着くことができてる。



「ここは……まさか、ラルシータの？」

おぼろげながら見覚えのある港町。

それはラルシータ大陸北端、海を越えた遙か先にある、ユーライジア大陸への玄関口となるラルシータ港だった。

ルコナヤルレインのふるさと。

ユーライジア国にとって、悠久同盟国とも言われるラルシータ王国。いずれはこちらにもスクールができる、とも言われていて。

少なくとも、せいぜい数時間で移動できるような近い場所ではなかった。

「そうか。あの七色の水、どこかで見たと思ったけど……」

風と時を併用した強力な魔法か、あるいは別に何かか、いつの間にか大陸ひとつぶん飛ばされていたらしい。

その原因を探ろうとして、思い出したのは意識を失う瞬間に見た、虹の泉と同じ色をした光だった。

まったく異なる場所へと、浸かりしものを導く虹の泉。

確証は持てないけど、おそらくそれが、オレが落ちて流れている途中か、あの滝そのものがそうだったのか、流れ行き着く先にでもあったのかもしれない。

ノヴァキはその事を知っていたのだろうか？

もし知っていたのならば、オレを遠くへ引き離すことに、オレの背中を押した理由がある気がして……。

「にゃーん」

ふと聞こえてきたのは、腕の中の白猫さんの声。

顔を上げれば、いつの間にもやら港町へ入っていたらしい。

広場のような場所に、何やら人だけがある。  
やってきたオレたちに気付くものはいない。

背中を向けているということは、その先に何かあるのだろう。

何だかちよつと尋常じゃないくらい物々しい雰囲気だ。

人垣に割って入るように覗き込むと、その日にあった出来事や、事件、探し物や仕事の求人などが事細かに書き込まれた看板がある。

ユーライジアにもある、日毎置き変わるそれ。

つまり、今日こんなたくさんの人が集まる何かがあったってことなんだろう。

「すみません。何かあったんですか？」

「何かって、アンタ知らないのかい？ ユーライジアの至宝、カリス・カムラル様がお亡くなりになったのよ！ もう国中……世界中が大騒ぎさ！」

「……え？」

興奮した様子のお話好きそうなおばさん。

知らなかったことにさえ、理不尽な怒りがそこにある。

だが、その事に恐縮するよりも早く、オレにはおばさんの言葉が理解できなかった。

いや、理解できないなんて言葉ですまされるレベルじゃない。

だってカリウス・カムラルは今ここにいるのだから。

「そんな、馬鹿な！ 嘘だよ……」

オレはそれを一笑に伏し、否定しようとする。

「嘘なもんかい。誰かに殺されたんだって、町中の噂さ。世界で一番安全だって言われてるスクールの中で。しかも、その犯人は逃走中で……」

だが、それは叶わない。

不自然に止まる会話。

おばさんが、じっとオレを見ている。

ノヴァキの姿をしたオレを見ている。

「あ、あんた、まさか……」

引き攣るような声。

彼女が手に持つものは、人相書き。

そこには確かに、ノヴァキその人の顔があつて。

大きな見出しで、カリス・カムラル殺害の容疑者、逃走中につき発見した方は至急ご連絡を、なんて書かれていて……。

「ち、違う、オレじゃない！」

オレはそう叫び、駆け出していた。

それはオレじゃない。ノヴァキだと。

今オレの身体の中にいるのはノヴァキなのだ。

つまり殺されてしまったのは……ノヴァキなのだ。

オレの代わりにノヴァキが殺されたんだ。

だからオレじゃない。ノヴァキに背を押されたオレが、そんな事ができるはずはないのだ。

「……まさか」

ノヴァキはそれをすべて知っていてオレを水の中に突き落とすのだろうか？

オレと身体を交換することを許可したのだろうか。

オレを助けるために、オレが狙われていると知っていて？

そう思うとしてもたってもいられなかった。

「そんなの、ふざけるなよっ……………」

ノヴァキの元へと急がなければ。

ただその事だけをオレは考えていた。

他の事は、もうどうでもよくなっていて。

心が、沸騰していた。

熱く熱くなって、理性失うように。

背後で騒ぎが起こったような気がしたけど構わずに、再び駆け出す。

ただ、妙に身体が軽くなるのを感じていて……。

(第21話につづく)

## 第21話、望んでいた触れ合いは、最悪のシチュエーションで

それから、どう行動したのかすらほとんど記憶にない。

奇跡とも言われる空を舞う魔法でも使ったのか、やってきた虹の泉で戻ったのか。

とにもかくにも、オレに起こった冗談ではすまされない出来事をひたすら否定したくて、オレはノヴァキの元に向かっていた。

目の前に提示されたものがあまりにも大きくて、オレは受け止めきれていかなかったんだと思う。

例えすべてが冗談でも、ノヴァキがオレの身代わりとなって死んでしまった、なんてことはあってはならない。

ノヴァキがカリウス・カムラルとして死に、オレはノヴァキとなって自由を約束され、生きる。

そんな都合のいい……心のどこかで望んでいた本当の本当の夢が叶ってしまったなんて認めるわけにはいかない、許しちゃいけない。

オレの、その邪な欲望を、ただノヴァキに、切って捨てて欲しくて。

「待ってくれ！ 駄目だ！」

カムラル家、火の教会。

赤く紅く燃えている。

死者を死後の世界へと送る聖なる火が、大きな大きな釜の中、そら恐ろしい舌を這いずりさせるようにして、燃えている。

その前には小さな棺。

たくさんの人に囲まれている。

今まさにその蓋が閉じられようとしている瞬間で。

すぐにその中にノヴァキがいると分かった。

そこかしこで上がる嗚咽、号泣。

まるで国が泣いているかのように、それは辺りを覆う風となっている。

みんな泣いていた。

アルもサミイも、ラネアさんもケイラさんも。

マイカもルレインもルコナもタインもルツキーも。

会ったばかりのキミテでさえも。

そんな中、オレの叫び声だけが、滑稽に……空しく響く。

その声に最初に反応したのは、棺のすぐ側にいたサミイだった。

泣きはらした目。

初めは驚愕。

だがそれは、すぐにオレが初めて見る類の、苛烈なものに変わる。

それはとてつもなく怖いもの。

怯み、固まる身体。

ただどこっちだつてここで諦めるわけにはいかなかった。

腕輪、腕輪があればオレはオレの身体に戻れるはずで。

ノヴァキがオレのとはっちりを受けて死ぬことなどないのだ。

オレはそんなサミイを見ないようにして棺に近付く。

たくさんの花と死化粧。

死因は分からない。

ただオレ自身でも分かるくらいに安らかな死に顔を浮かべているオレの顔。

わけが分からなくなって混乱しかけたけど。

「どうしてっ？　なんで無いんだよっ！」

衝撃は別にあつた。

そこにあるはずの腕輪がない。

折れそうな白い手首には、何もなかった。

いや、そんな事は二の次だ。

ノヴァキ自身か他の誰かかは分からないけれど、まずはどうして腕輪を外したのにノヴァキはノヴァキ自身の身体に戻ってこないのかを、考える。

「そうか、オレがつけたままだから……」

オレは至極単純なその原因に思い立ち、自らの腕輪を外す。

すると案の定、視界が霞みぐるぐると回りだし、自身の身体へ吸い

込まれていつて……。

ババチイツ！

「ぐっ？」

何かの壁に弾かれ、しびれるような感覚。  
どよめく周り。

気付けばオレは、ノヴァキの身体のままですらんと尻餅をついていて。

「どうして今になって！」

危険なものだつてことは十分に理解していたから、身体に戻るとき  
の手順は何度も試したはずだったのに。

一体何がいけなかつたんだろう？

いや、原因は予想がつく。

腕輪をノヴァキが先に外してしまつたからだ。  
このままじゃ、オレはオレの身体に戻れない。

本当にノヴァキが死んでしまう！

「なあ！ これと同じ腕輪をしてただろ！ 誰が外した！ どこに  
ある！」

オレは、すがり付くようにサミィに詰め寄ろうとした。  
びくりと身体を強張らせたサミィは、何かを口にしようとしたが…



…。

バキッ！

「……………うぐっ」

横合いから物凄い衝撃。

その力に従って、オレは吹き飛ばされ、地面に転がる。

「てめえ、いい加減にしろよ、ちったあ場をわきまえろ！」

「レイ！」

「うるせえ！ 今までどこに隠れてたか知らねえがこんな時になつてノコノコ表れやがって！」

いつものらりくらりと、穏やかなはずのレインの涙ながらの激昂。泣き顔のルコナがそれを止めようとするも、聞く耳を持っていないようだった。

オレはそこでようやく、自分がレインに殴られたのだ、ということに気付く。

それは当然、初めての触れ合いだった。

状況が状況でなければそれはある意味憧れていたものの一つではあったけれど。

焼けるほどの理不尽な痛みは、それまで燻ることもほとんどなかったオレの怒りに火をつけた。

知らず知らずのうちに拳を握り、食ってかかろうとして。

「もうやめて！ カリスを！ カリスをこれ以上苦しめないでっ！

…………… やっと、 やっと重荷がなくなつてゆっくり眠れるのに…………… そん

なのってないよ！」

悲痛なサミイの慟哭に、オレとルレインの身体は動かなくなる。

「……………すまん。あいつはこういうの一番嫌いだったもんな……………」  
肩を落とす、オレから視線を外し一人納得してサミイに頭を下げるルレイン。

オレはオレで心中複雑だった。

オレが心内にだけ抱いていたものがサミイに気付かれていたその事実と、それでも今、オレ自身がここにいることにサミイですら気付いていない、ということに。

どうやら賭けは、ノヴァキの勝ちらしい。

その時オレの心内にあったのが、気付かれなかったことへの寂しさや悲しさばかりでないことが余計に身体を硬くさせていて。

「……………腕輪はしてなかったわ。私たちが発見した時は」

その代わりに、アルが今まで聞いたこともないような声色で、オレの疑問に答えてくれる。

「そう、ですか……………」

誰かが腕輪を外したわけじゃない。  
となると腕輪はどこにいったんだろう？

変わらぬ疑問がそこにはあって。

ふらふらとオレは、再び自分自身の死に顔を見据える。

「ここしばらく、この子は本当に幸せそうだった。ほら見て、信じられないくらい満足そうな顔をしてるでしょ？ 私たちの気も知らないでっ…………」

心落ち着かせる、柔らかな柔らかなアルの声。  
それもすぐに嗚咽に変わる。

確かにその死に顔は、こっちが恥ずかしくなってくるくらい満足げで。

(そうか…………)

オレは気付かされる。

ノヴァキはノヴァキの意志で、腕輪を外したんだってことを。

オレを、オレの魂を助けるために。

やっぱり、ノヴァキはオレが死ぬような目に遭うかもしれないってことを、知っていたのだ。

思えば、そんな素振りも確かにあったような気がする。

だからノヴァキは、満足げなのだろう。

自分の命を懸けた企みがうまくいって。

「だから今はただ見送ってあげて。この子の笑顔が曇らないように

…………」

「…………はい」

本当ならば。

止めなければならぬはずのアルの言葉に、頷いてしまった。

何もせずに、自分の身体が焼かれるのを見ていた。

それはオレを……ノヴァキを殺した何者かを探し出すために必要だったからだって言い聞かせていたけれど。

本当は違う。

本当は止めたくなかったんだ。

だって、ノヴァキとしてここにいる自分こそが、オレが求めていた夢であり自由そのものだって、気付いてしまったからだ。

故に涙は出なかった。

その全てが凍り付いてしまったかのように。

涙を流す資格などない。

オレは、願ってはいけない願いを叶えてしまったのだから……。

(第22話につづく)

## 第22話、遅れて身に沁みる存在理由

それからのオレの記憶は、またしばらく曖昧になっていた。自分が燃えゆく様を見ていたら、魂がそれに反応したのかひどく胸が苦しくなつて、耐えられなくなつてしまったところまでは覚えていたんだけど……。

「みゃーん」

耳元で聞こえる、覚えのある鳴き声。

目を開けると目前に、いつぞやの白猫さんの姿があつた。

「………ついてきてくれたんだね。ごめん、ほつたらかしにしちゃつてて」

オレは笑顔を浮かべ、首筋を撫でると、彼を抱えるようにして起き上がる。

「ここは………どこだろ？」

そこは随分と狭く天井ばかりが高い、暗い部屋だつた。

周りは三方が岩壁で、一つは目の細かい鉄格子。

天井近くの天窓にも、格子があつて仄かな光をオレたちに落としていた。

少なくともノヴァキの家じゃないだろう。

彼の家よりもさらにさらに狭く小さい。

しかもベッドも何もない石べたに寝かされていたらしい。あれから一晩ほどたったのか、ひどく身体が冷えていた。

「ここはもしや、牢屋というやつではなからうか……」  
多分、気を失っているうちにここへと運ばれたのだろう。  
実感はなかったが理解はできた。  
カリウス・カムラル……ノヴァキを殺した一番の容疑者として扱われているのだろう。

(いや、オレが死なせたようなものか……)  
自由になりたい。

カリウス・カムラルから抜け出したい。  
そんなオレの欲望が叶った。  
ノヴァキの命を犠牲にして。

それは罪だ。重い重い罪。  
いずれは罰せられるべきもの。

「でもその前に、やらなくちゃいけない事があるよね……」  
オレの命を狙い、その目標を達成したものを見つけ出す。  
それが魔物であれなんであれ、必ず見つけ出して……。

「どうしよう?」

「みゃーん?」

問いかけたつもりはなかったけれど。  
当然何だよって感じの白猫さんの鳴き声が返ってくる。  
確かに、オレのような人間には、同じ目に合わせてやるとか、仕返してやるとか、おこがましい気がして。

「とりあえずは、見つけ出して……聞けるのなら理由を聞く、かな」  
何故、オレの命を狙ったのか。  
もしかしたら……かつてノヴァキが言っていたように世界を滅ぼす  
ため、なのだろうか？

そう考え、それはないだろうとオレは首を振る。

その時も思ったけど、オレにはそんな価値はないだろうと。

「ん……？」

そんな事を考えていると、こつこつと聞こえてくる複数の足音。  
誰かがやってきたらしい。

もそもぞしていた白猫さんを放してやると、簡単ではないだろうと岩  
壁登りをやってのけて、狭い鉄格子をすり抜けて。

「にゃあん」

またな、とばかりに外へ出てゆく。

「ノヴァキ・マイン、出る。今からお前に判決が下される」

そんな白猫さんの身軽さに感心していると、低い男の人の声が耳に  
届いた。

格子扉の方に目を向けると、風紀の人たちが四人、怖いくらいの無  
表情でそこに立っている。

その言葉とともに開けられる鉄格子の鍵。

言われるままに足を踏み出すと、がっちり両脇を固められるみたい  
にして、オレは上階（地下の牢屋だったらしい）へと連れられてゆ  
く。

手錠とか足枷とかはないけど、これじゃあほとんど罪人扱いだな、  
なんて思いつつもされるがままになっていくと、そこはどうやらス  
クールの中であることが分かった。

と言ってもオレもアルのお使いで数度しか足を踏み入れたことのないまつりごとを行うための区画だ。

ノヴァキの視点で見るとまた新鮮で、眩しい陽光に目を細めながら歩いていると。

辿りついたのは太陽を象った文様を頂に架する光の教会だった。

いや、単純に教会というには語弊があるだろう。

そこは半ば予想していた通りに罪を犯したものを裁くための場所だ。白い、光の魔力が建物全体からあふれている。

その入り口の大きな扉は既に開かれていて。

こちらから見て少し高いところにある円卓にはアルが一人だけ立っていた。

瞳を閉じ顔を伏せ、その表情は何えない。

「ノヴァキ・マイン以外のものは退席しなさい」

「し、しかし……」

「二度は言いません」

絶対零度のアルの言葉に、それまでだんまりを決め込んでいた風紀の人たちも焦っているようだった。

しかしその言葉に有無を言わせぬものがこもると、風紀の人たちは足並み揃えてその場を後にする。

「入りなさい、ノヴァキ・マイン」

「は、はい……」

オレの知っているアルとは全く様相の異なる雰囲気、逆らえぬものを感じ、オレすぐさまその言葉に習う。



すると、どんな仕組みなのか、軋む音を立てて大きな扉がぱたんと閉まって。  
ノヴァキの家の三倍はあろうその場に、アルと二人きりにさせられる。

規則正しく並ぶ傍聴席にも人はなく、普通の裁きならばガイゼルの盟主（ルートのお父さん）や、マイカの祖母など、四王家の者がいるはずの円卓は、何だか大きく見えて。

「魔族の者にはその性質上耐えがたき場所のほうですが……あなたには全く堪えていないようですね」

その大きな円卓の中心に一人でいるから、見かけ以上の威圧感を与えてくるアルが、ふいに口にしたのはそんな言葉だった。

「光の魔法はどちらかと言えば得意な方なので」  
「……」

確かに魔族の弱点と言えば光の魔法だっがよく言われるけど、魔法の耐性については、魂に左右されることを知っていたので、迷うことなくそう口にする。  
するとアルはその大きな瞳を殊更に大きく見開いてオレを見据えてきた。

「……そうですか。それでは本題に入りましょう」

かと思つたら、興味を無くしたみたいに視線を下げてそんな事を言う。

その試験の先を追えば、そこにあるのは七色のステンドグラス。

綺麗だけどチカチカと眩しいそれに目を細めていると、アルはそのままで言葉を続けた。

「もう分かっているとは思いますが、あなたはカリス・カムラル殺害の第一級容疑がかかっています。その容疑が確かなものとなれば死罪は免れないでしょう。他家のものは即刻刑を執行するべきという意見もありましたが、あなたは殺害時から五日後にこうして姿を見せました。」

……動機、あるいは弁明を言ずることを許可します」

平然を装っているけど、明らかに無理をして喋っているのが分かる、そんな声色。

聞いていると胸の軋みが強くなるばかりだった。

オレはアルを……きっとサミィや他のみんなのこともひどく傷つけている。

オレ自身が望んだからこそ起きた結果だと知ったらどう思うだろうと、余計に。

(もう、五日も経ってるんだ……)

おそらく、オレがノヴァキに滝の中へと突き落とされたあの日から。それは驚きではあったが、それ以上に、最初からオレがオレを殺した体でものを言っている風なのがひどく滑稽なものに見えた。

もっとも、今まだこうして生きているということは、弁解の余地があるというか、その確たる証拠がないんだろう。

まあ、あるはずはないんだけど。

「オレはカリウスを殺してなんかいません。そもそも不可能だからだ。だってオレがカリウス・カムラルなんだから。」

「どうしてその呼び名をあなたが知っているの？」

「だったらその決定的な証拠を口にしようと言いかけた言葉は、しかし割り込むようにして発せられたアルの素の言葉によって遮られる。」

「呼び名？ 本名のこと？ そんなの知ってて当然じゃ……」

「本名……じゃあやっぱり……」

その、頓狂な問いかけにも律儀に答えたのに、またしてもそれは阻まれ、何だか一人で納得している。

そのことにもどかしい思いを抱いていると、アルは再び何事もなかったように顔を上げた。

「つまりあなたは自分が犯人だという証拠はなく、犯人は別にいる、と言いたいわけですか？」

「え？ う、うん。それはそうだけど」

「だとしたら再び犯人を洗いさなくちゃだね……」

今の今まで犯人だと決めつけてる風だったのに、手のひらを返したような変わりようだった。

オレ自身がオレの言葉をそんな簡単に鵜呑みにしていいのかな、なんて思えるくらいに。

「あなたが犯人じゃない、その確たる証拠はあるの？」

「あります、だってオレはカリウス・カムラルだから」

「この裁きの場でそんな悪辣な冗談を口にするなんて言語道断です。次にその名を名乗ろうものなら！ ……直接私が手を下します」

「は、はいっ」

いきなりの激昂。

凍えた言葉。

まるで死神の鎌を首筋に当てられたような気分。

本当のことなのに理不尽だよ、と思いつつもその言葉に嘘はなかった。オレはがくがくと頷くしかなかった。

「そうじゃなくて、他に何かないですか？」

「う、う」と

釈然としない気持ちになりつつも、オレは必死に頭を巡らせる。

どこか少し、おかしい展開になってきたなあと、そう思いながら。

「あ、そうだよ。オレその現場にいなかったんだよ。ノヴァ……じやなかった、カリウスに滝つぼに落とされたから」

「けつたいな話ですが……証人はいますか？」

何故突き落とさなければならなかったのか、その辺りがけつたいなのだろうが、とりあえず今は流すことにしたらしい。

オレがノヴァキに突き落とされて虹の泉のようなものを通り、ラルシートへ飛んでしまったことを一通り話すと、すかさずアルはそんな事を聞いてくる。

「証人……えっと、白猫さんかな」

「しろねこ？」

「あ、うん。どこにいるか分からないけど……」

「人、じゃないんじゃないの、それ。ま、いいけど。それじゃ、虹の泉っていうのはどこに？」

その存在が確認できれば納得できる、とばかりに次の質問が飛んで

くる。

「あ、えっと、地図にないダンジョンを見つけて……」

「な、なんですって？」

たいそう驚いた様子のアル。

そんなアルに分かりやすく説明するために、試験の一番になるためにはどうすればいいかって考えてたことを、頭から説明することにする。

「なるほど、先生方も見つけてないダンジョンね、カリスの考えそうなことだわ。……何よ、全部自業自得じゃない」

「うっ」

何だか直接責められている気がして小さくなるオレ。

そんなオレを見て、アルは深いため息をつき、言葉を続けた。

「迂闊だったわ。悔やんでも悔やみきれないくらいに。スクールの中でも試験会場が一番安全な場所だって、タカをくくってた」

滲む悔恨。

実感が得られないのはオレがここにいるからなのか。

ノヴァキの死がオレの目の届かないところで起こったことだからなのかははっきりしなかったけれど。

「安全……」

「そうよ、わざわざ教師や生徒会の子たちに下調べさせて、危険な場所がないか見てきてもらって地図まで作ってさ、尚且つ試験中は教師が生徒の居場所が分かるような体勢を整えてた。

それなのにも関わらず、カリスは殺されてしまった。その安全の及ばない地図の外へ出たことだね」

「そうか、だから  
自業自得、なのだろう。」

オレがそんな枠から外れるようなことを安易に選択したから……。

「あなたが、そんなカリスと一緒にいたあなたが、一番疑われてる  
ってわけ。ううん、もうほとんどの人はあなたが犯人だと思ってる」  
ノヴァキは、いや、オレはこうして疑われているのだろう。  
全部、全部オレのせいなのだ。

ノヴァキが死んでしまったことも。

ノヴァキが疑われる破目になっているのも。

「オレは……ノヴァキ・マインはカリウス・カムラルを殺してなん  
かない。それだけは自身を持って言えるよ。オレ自身が保障する」  
ならばせめて、ノヴァキのいわれのない疑いだけは晴らしたかった。  
そのゆるぎない真実だけは守りたかった。

そんな事くらいでオレの罪が消えるわけじゃないってことくらい分  
かっていただけ。  
でも、それでも。

それこそが我が儂な夢を叶えてしまったオレの、生きている価値な  
のだと、思うようになったのはまさにその時で。

「あなた自身が証明すると。たいそうな自信ね。……いいわ、そこ  
まで言うなら乗りましょう。」

では、これを」

円卓から伸びをするようにして差し出されたのは、片眼鏡だった。

「これは？」

「……罪人が理由あって外出しなくちゃいけないときに身につける

拘束具のようなものよ」  
「なるほど」

現時点で第一容疑者なのは間違いないわけだし、仕方ないんだろう。これは言わばアルの温情だ。

オレは一つ頷き、片眼鏡をかけてみる。

それは軽く、度も入っていないようだったが。

「ちなみに外そうとすればそれに込められた雷ガイゼルの魔力があなたの頭を打ち抜き、死に至らしめますのでご注意ください。後、脅しじゃないけど……」

中々に衝撃的な言葉をのたまった後。

その小さな手のひらをオレの額に向けた。

バチチィッ！

「っ！」

そのとたんこめかみに迸る赤い雷光。

「自覚しておきなさい。あなたの命はたった今私に握られました。

大切な家族を奪ったものだ」と確定した時、あなたが不審な行動を取った時、いつでも私はあなたを殺せることを」

アルは本気だった。

少し人払いをした意味が理解できたような気がする。

あくまで母さんの代行という立場上だけで、オレをぎりぎりのところまで生かしてくれているのだと。

「……分かりました」

オレはそれにしつかりと頷く。

アルから視線を逸らすことなく。

そうこなくちゃって、今までなら体験することもなかったこの状況に気分が高揚しているのが、不謹慎であることを自覚しつつ。

「よろしい。同じことを、周りのものにも伝えます。そうすればあなたが本当の犯人を捜すために外に出てもいい理由になる」

かと思つたら僅かに笑みすら浮かべて、アルはそんな事を言った。まるで自分だけはオレの言葉を信じる、とでも言いたげに。

「ありがたいですけど、いいのかな？」

「もちろん。それが本物なのは確かだから」

微笑み。それでも無理は残る。

それはオレが犯人を見つけても変わらないのかもしれない。忘れられないことなのかもしれない、

オレなんかのためについて思うとひどく申し訳なくて、少しだけ嬉しかったりした。

「これは考えたくもないことなんだけど」

と、話を繰り替え進めるように、アルが再び口を開く。

「あなたはあくまで第一容疑者、容疑のかかるものは他にもいます」

「……ダンジョンの中にいる魔物とかですか？」

オレの僅かな望みにも近い言葉を、アルは首を振って否定する。

「ああ、あなたの言い分が正しければ、あなたは現場にいなかった



のですよね」

そしてそこで、言いづらそうにして口を嚙む。

何を言い激んでいるのかは、すぐに察しがついた。

オレの……いや、ノヴァキの死因だろう。

「あれは人によるものです。剣による心臓を一突き、あの子がそう容易く殺されるはずはないから、

相手はよほどの手練か、あるいは複数か。あの子が油断するような相手か……」

「そ、そんな……」

オレじゃなければ他に犯人がいるってことは分かっていたのに。アルの発した最後の言葉は、到底信じられるものじゃなかった。

「根拠がないわけじゃないの。あの子が発見された場所は、地図のある場所だったから。もしかしたら、ダンジョンを下見して、地図を作ったもの……先生方か、あるいは生徒会のものが本当の殺害現場を隠蔽したのかもしれない。初めからそのつもりでいたとすれば、あなたは利用された可能性も……」

「待つて、待つてくれ！ まさかアルは生徒会の中に犯人がいるとでも？ っていうかそもそもおかしいよ！ 何で自分たちの試験なのに地図作ったりとか下見とかさ！」

そう、よくよく考えてみればおかしいんだ。

ルートが試験の下見をしてるって話は聞いていたけど。

それって試験の意味がないじゃないかって。

「あなたが知らないだけよ。彼らには上に立つものの義務があった。試験より前に、生徒たちの安全を守る、というね。ま、うちの子たちも知らなかっただろうけど」

「……」

ぴしゃりと叩きつけるがごとく。

二の句がつけない、そんな言葉が返ってくる。

知らなかったことへの弊害が、ここにも一つ。

オレを自失させる。

「こんな事考えたくなかった。あの子が信じてやまない子たちを疑うなんて。仕事の同僚を疑うなんて。……だから、あなたに矛先が向けられたの。ひどい言い方をすれば、それが一番丸く収まるからって」

「そ、そんなの」

今オレがノヴァキでなかったのならば。

オレ自身だったのならば。

仕方ないって受け入れられたのかもしれない。

でも、ノヴァキが犯人だったらよかったなんてことで犯人にされるなんて、絶対に許せなかった。

「ひどいことだったのは分かっている。あの子だって絶対許さないでしようね。だから……」

「オレが真実を突き止める……」

「簡単なことじゃないけどね」

たとえ真実を突き止めたとして悲しむだけなのかもしれない。

オレにはオレの周りにいる人に殺されてしまうほどの感情を持たれていたことなんて見当もつかない、ありえないことだって思ってた。もしかしたらそれが誰かを傷つけてしまったのかもしれない。

「それでも、真実を突き止めたい。突き止めなくちゃいけないんだと思う」

そしてその理由を知ることが、今まで知ろうとしなかったオレの唯一できることなんだと思う。

ノヴァキが犯人でないことを間違いなく知っているのは……オレだけなのだから。

「そう……」

アルはオレの言葉に深く頷き、そのまま重い沈黙が辺りを支配する。とても長く感じたその静寂は、しかし再びアルによって破られる。

「ならばまず、特別クラスへ来なさい。あなた自身の力で。猶予は建国祭当日までです。それまでに特別クラスに入り、現実をつきとめられなければ……仕方がありません。丸く収めます」

それはつまり、現実はどうあれ、ノヴァキの理不尽な死で終わりを告げる、ということなのだろう。

全くもってひどい話だった。

ふざけるなって、そう思った。

否が応にも、現実をつきとめてやるって気にさせる。

「やってやる」

「その意気です」

微かな微笑み。

それでもまだ、そんなアルの表情は曇ったままで。

だからこそ余計に思う。

カリウス・カムラルとして生きていた頃だって、生きていた価値がちゃんとあったんだってことを。

それに本当の意味で気付くことのできなかつた自分が、とにかく悔  
しくて……。

(第23話にじつじく)

### 第23話、零以下からの一歩、見た目だけは意気昂然と

それから、ノヴァキとしての人生が始まった。

それは、毎日が驚きと衝撃の連続で、本当に自分が何も知らなかったのだということを知り知る。

辛いことがなかったわけじゃない。

帰りの時間に呼び出されての複数によるいきなりの暴力。

授業に使う道具が破損していたり、いつの間になかったり。

それこそ、目まぐるしいほどに毎日いろいろなことが起こった。

大人数に囲まれて逃げるのは大変だったし、なくなったものを探すのには骨が折れた。

持ち物が壊れていると買いなおさなくちゃいけない。

でも昔のオレと違ってそれらにはお金がかかる。

作った人に申し訳ないからって、やってた人を見つけてやめてくれって言っても聞く耳もってくれない。

逃げられたり、無視されたり、いろいろだ。

でも何よりつらかったのは、カリウス・カムラルではなく、ノヴァキ・マインとなったことで、サミイやマイカなどの家族、あるいは友達といった繋がりがなくなってしまったことだろう。

サミイにもマイカにも他の四王家のみんなにも気安く話すことができなくなってしまったのだ。

その意思があっても、風紀の人に問答無用で阻まれるし、誰も目を合わせようとしてくれない。

笑顔を失ったマイカ。

外行きの、表情が変わらないままのサミイ。

絨毯を歩くみんなの間には、以前の朗らかな空気は微塵もない。

それが自分のせいだと思うと辛くて申し訳なくて仕方がなかった。

そう強く思ってしまうのは。

辛いと思うその感情以上に、オレが自己中心的だったからなんだろう。

毎日毎日知らなかったことを思い知らされる。

今までになかったことを体験できる。

それを楽しんでいると思うってしまったのだから。

「……さて、今日も試験勉強するか」

そんなわけで、ノヴァキになってから一週間。

オレは自分で作る朝食を楽しみながら（やっとなどもに食べられるようになった）、今日も今日とて朝早くノヴァキ家を出た。

手には今日一日ぶんの授業の荷物。

初めは重かったけど、もう慣れてしまった。

常に肌身離さず持っていれば直接攻撃がほとんどないと言っことに気付いたのは大きい。

これで無駄な出費は抑えられるからだ。

今は、『夜を駆けるもの』の仕事でなんとかやっている状態で。一番身に沁みたのはお金の重さだろう。

今までは、『夜を駆けるもの』で稼いでも、全くその重みを感じていなかった。

大事にしなきゃって強く思う。

「いつもいないと思ったら、こんな早い時間に出てたんだ」と、そんな事を考えつつ眩しい朝の光と、緑の心地よさに浸っていると。

背後から怒ったような……リシアの声がかかった。

「あ、おはようリシア」

「何よそれ、嫌味のつもり？」

「……？」

昨日も一昨日も『夜を駆けるもの』の姿で会ってたし、変わらぬ普通の挨拶をしたつもりだったけど。

オレは何か失敗したらしい。

余計に怒ってる感じのリシアに訳が分からず首を傾げていると。

「ワタシを避けてる理由、近付くなつて、こつこつことだったの？」

俯き加減で、リシアはそんな事を呟いた。

「避けてはいないけど……」

そこでようやく、ノヴァキとしてちゃんと話すのはこれが始めてだと言つことに気付かされる。

何せリシアとはクラスが違うし、オレ自身ノヴァキに慣れるのが忙しかったからだ。

それに何より、リシアに迷惑がかかる、と思っていたのは大きい。

カリウスだった時もそうだけど、今はもっとひどい状態だ。

今のオレを、カリウス・カムラルを殺した犯人として目の敵にしてくる人達は多い。

オレに直接何かを言ってきたりやってきたりするのはどうとでもなるんだけど、それがうまくいかないことを知ると、関節的に攻撃するようになってきたのだ。

「オレさ、同じクラスのワカホって娘と友達になっただけだ」

意見箱の件で、ノヴァキが助けた鋼竜族の少女。

彼女は、オレが……ノヴァキが犯人じゃないってことを信じてくれる数少ない人物だった。

オレが唐突にそんな事を言うと、いきなり何をもって顔をするリシア。オレは、そんなリシアを制し、言葉を続ける。

「一緒に編入試験の勉強をしてたら誰だか知らないけど絡まれてさ。オレを攻撃すればいいのに、

彼女を傷つけようとしたから反撃したんだ。そしたらルートが飛んできて怒られて怒られて。

ワカホまで反省文書かされそうになったからまた抗議して」

「何が言いたいのよ、一体」

オレが話し終えるよりも早く、結論を急ごうとするリシア。やっぱり機嫌が悪いらしい。

オレは肩を竦めて。

「あまりオレと一緒にいると、迷惑がかかるかなって思ったんだよ」



まとめの一句を告げる。

「……………」

重い沈黙。

せつかくの朝なのになってちよつと思つ。

これ以上はオレのほうから何か言えることはないので、じつと待っている。

やがて顔を上げ（やっぱりまだ怒ったままだった）、リシアは口を開いた。

「一つだけ聞かせて」

「う、うん」

「仕事以外で近付くなって、あなたは前にそう言ったわよね？」

「う、うん？」

オレがそんな事言うわけなかった。

それはきつとノヴァキの言葉なのだろう。

何でそんな事を言ったのかわかって考えていると、その答えはリシアがくれた。

「それは……………あんたが本当にカリスさんを殺してしまったから？」

それとも、そんな濡れ衣を着せられるって、分かってたから？」

（そうか……………）

そう言うことか。

リシアのその言葉で、気付かされたことがあった。

ノヴァキは知ってたんだ。

オレが殺されるような目に会うかもしれないってことを。

そうすればすべての辻褄が合う。

命を狙ってるなんて脅してきたり、滝から突き落としたり、それらはちゃんと意味のあるものだったのだ。  
それはすなわち、ノヴァキが犯人を知っている……あるいは犯人もノヴァキのことを知っている、というわけで。

「オレは……ノヴァキはそんな事しない、犯人は別にいる」

「信じていいのね？」

「ああ、もちろん」

お互いの魂が入れ替わってからオレを突き落としたのは、おそらくノヴァキの独断だったんだろう。

でなきゃオレはここにこうしてはいないはずだからだ。

となると、もしかしたら犯人がノヴァキの中にオレがいると分からずに接触してくる可能性も……。

バチーン！

「いでっ！ な、なにすんのっ！」

なんて事を考えていたら、いきなり平手打ちされた。

敵意も何もなかったから全く避けることもできずにもろに食らい、尻餅をつくオレ。

びっくりして目をしばたかせると、やっぱりロシアはまだ怒ってて。

「じゃあ何？ 濡れ衣でいわれのない中傷を受けるからって、迷惑がかかるから避けてたって、そういうこと？ 馬鹿にしないでよ。何が迷惑よ！ そんなの小さい時から一緒に育ってきてる時点でとっくにかかってんのよ！ 今度同じ事したら許さないから！」

リシアの、本気でノヴァキを思う言葉。  
オレは強い強い衝撃を受けていた。

「…………ごめん」

オレがノヴァキじゃないことに。

オレのせいでノヴァキはもういないことに声がかすれた。

「ごめんよ、リシア…………」

自分を見送った時はなかった哀しみの波が、オレを襲う。

「なんて顔してんのよ。…………ほら、いつまでも座ってないで」

苦笑して手を引っ張り、起こしてくれるリシア。

それでも再現のない後ろめたさと罪悪感はなくならなかった。

多分それは、知らぬままに逝ってしまったノヴァキに気付けなかったリシアに対しての悲哀だったんだと思う。

「…………ごめん」

「ああ、いつまでもうじうじしない！　ワタシが悪者みたいじゃない」

「ごめ…………」

「だーかーらっ！」

オレの口を塞ぐように怒鳴って。

リシアはオレを引きずるようにして進んでゆく。

オレはそんなリシアの背を見ながら…………改めて誓ったのだった。

リシアのためにも、オレはその命尽きるまで、ノヴァキでいること

を……。

そうして、二人で登校。

いつまで握ってんのよ！ と自分から繋いできたくせに理不尽なお怒りの後は、早足なりシアにオレが慌ててついていく、といった感じだったけれど。

「……で、犯人知ってるんでしょ？ さつさと公言して濡れ衣晴らしちゃえばいいじゃない」

裏山を出て町に入ったところで、横に並んだりシアがそんな事を言ってきた。

「うーん」

それは、オレも思っていたことだった。

もしノヴァキが、オレの命が狙われていたことを知っていたのだとするならば。

何故その事自体をオレに伝えてくれなかったのかわかって。

それが誰なのかを教えてくれれば、その誰かはそんな過ちを犯さずにすんだのについて。

「……言えない理由があつたんじゃないかな、たぶん」

もし黙っていたことに理由があるのならばなんだろう？

脅されていたのか、あるいは……。

「ぬわんですって!」

「いだだだっ!」

またしても考えてる途中で、リシアのお怒りが炸裂する。ぎりぎり引つ張られるほっぺ。

爪を立てているから、千切れるほどに痛い。

「さっき隠し事はしないって言ったばっかでしょうが!」

「で、でほお……」

実際のところ犯人が誰かなんてオレは分からないのだ。

ノヴァキの交友関係にだつて詳しくない。

ノヴァキが今回のことを予め知っていて、リシアの事を避けていたとなると、今更知りませんとも言えないだろうし……。

「ノヴァキ様をいじめるな、ですっ!」

「きゃっ!」

「わっ」と

今日はつくづく思考を中断される日らしい。

横合いからの甲高い少女の声。

長い緑の髪に、潤んだ萌芽の瞳。

同じクラスのワカホ・フレンツだ。

どうやらオレがリシアに苛められている?と勘違いしたらしい。

必死でリシアに抱きつき……止めようとしている。

おかげでようやく解放されたほっぺをさすりながら、自然と浮かぶ

苦笑のままに、オレは口を開いた。

「ワカホ、リシアは味方だよ。幼馴染なんだ」

「え？ そうなんですか……？」

きよとんとして身を話すワカホ。

似たような状況で何度かワカホを助けてるから、今度は自分も、なんて思ったのかもしれない。

「で、彼女がクラスメイトのワカホだよ。リシアとおなじでオレの味方をしてくれるんだ」

「ふ、ふ〜ん」

オレが二人を紹介すると、お互いで何やらじっくり観察している。

「ノヴァキ様が辛い思いをしたこの一週間、どこに隠れてたんですか、って言いたいところでですけど、

味方だというなら許してあげます。逃げたのは私も同じですから」

「しょうがないでしょ、こいつがワタシのこと避けてたんだから」

そして顔を近付けんばかりの勢いで握手。

早くも会話に花が咲いて何よりって感じで。

「で、彼女が味方なのかともかくとして、言えない理由は教えてくれるのかしら？」

そのまましばらく賑やかに会話を交わしていたリシアは、誤魔化されないわよ、とばかりにそんな事を聞いてくる。

「ええと……なんていうかさ、オレも一番近くにいたからって理由だけで疑われてるわけだし、

確たる証拠でもない限り誰が犯人だ、なんて言いたくないんだよね。それに正直言うと、一人じゃないかもしれないし、オレは実際のその

現場を見たわけじゃないんだ」

「ああ、カリス様に滝に突き落とされたからですね、理由もなく」

その事は、事前にワカホには話してあったからなのか、何だか自慢げに胸を張ってそんな事を言うワカホ。

「ふーん。……でも一応目星はついてるんだ」

「あまり考えたくはないけど」

「……そう。仕方ないわね。それじゃあ今できることは何？ 遠巻きで睨んでくるやつらに吠え掛かりでもすればいいのかしら？」

沈むオレに、納得はいつてないが理解したって感じで辺りを見回し威嚇するリシア。

気付けばスクール近く。

スクール下町に住む生徒たちがちらほら見える。

それは、カリウス・カムラルとして慣れたものであったが。

そうではないリシアやワカホには居心地が悪いだろっ。

中には明確な殺意を向けてくるものだっているくらいだ。

お返して睨み返してやった後、制服の裾にしがみ付いているワカホの、ちょうどいい高さにある頭をそつと撫でる。

「なるほど、周りは敵だらけ、ね。視線が痛いわよ。これは早まったかな」

「今日はまだ何も無いほうじゃないかな、時間も早いしね。最初は石とか魔法弾とかいきなり飛んできたし」

「ふふん。そのような攻撃は私たちには効かぬと見て諦めたんじゃないですかね。あれだけ華麗にノヴァキ様が打ち返すのを見れば、

相手も戦う気を失くすですよ」

「そろそろ新しい攻勢に出るんじゃないかな。これが意外と訓練になっただいいんだよね」

「楽しそうねあんたら。……ま、そのくらいじゃなきややってけないんでしょけど」

オレとワカホの、敢えてのおちゃらけたそんなやり取りに。

心底呆れたようにリシアが呟く。

多分、本気で楽しんでるってのを気付かれたからなんだろう。

オレはそれを誤魔化すように頬を一つはたいて。

二人と共にスクールへと続く道を進みゆくのだった……。

(第24話につづく)



## 第24話、初めて生まれた、名もなき炎のような感情

「そう言えば随分朝早いけど、どこかへ行くの？」

そのままスクール内に入ってますぐ。

そう聞いてきたのは、案の定ロシアだった。

「図書館だよ。中央棟にある」

「私たちは特別クラスへ編入するために日々勉強、なのです」

オレたちは授業の始まるより随分前から来ている理由を、ロシアに話す。

「中央棟？ それって特別クラスの？ よく許可が下りたわね」

「ふふふ、私の願いが届いたので」

生徒会意見箱に、ワカホが入れるつもりだったのは、食堂だけでなく、あらゆる施設の自由利用化だった。

その裏では、アルにたまたま落ち着いて勉強のできる場所を提供してもらったという事実があったりするけど、ワカホが嬉しそうなのであって口にはしないことにする。

「でもあそこって生徒会室のすぐ近くでしょ？ 怖い人たくさんいない？ ほら、風紀長のルートさんとか」

だからこそその場を選んだというのはオレ自身が悲しくなってくるからやっぱり口にはしないけれど。

「あはは。普段はそうでもないんだよ。まあ、確かに最初は猛烈に突っかかってきてたけどさ。

日も悪かったし」

それは、オレが犯人の疑いをかけられて三日目のことだ。

不特定多数による、オレへの攻勢を回避し続けていたことで、矛先がワカホへと向いた最初の日だ。

そのあまりの理不尽さに反撃しただけなのに、ルートがやってきて片眼鏡まで光りだす始末。

たまたまアルが通りかかって事情を聞いてくれなければと思うとぞっとするけど。

それから何とかオレだけ反省文で済ましてもらった後だった。

仁王立ちのルートと出くわしたのは。

その様は、こんな所に何の用だ！って怒髪天をつく勢だった。

そう、ちょうど今日の前にある光景のように。

「やば」

「こ、こわいです……」

リシアもワカホも、ルートの威圧に気圧され、たじろぐばかり。

「おい貴様、また性懲りもなく。……よくもおめおめとこの場を歩けるものだな」

台詞はその時とそう変わらない。

だけど今日は少し様子がおかしかった。

オレ達に気付いたはいいが、心ここにあらずって感じた。

「歩けるさ。オレは犯人じゃないからな。……それより何か探しも

の？」

「貴様には関係ないっ！」

どうやら凶星だったらしく、そっぽを向いて怒鳴りながら辺りを見回している。

なんとなく想像はつくので、同じように辺りを見回していると、ちょうど中央棟脇の中庭へと続く、植樹帯の中から白猫さんが飛び出してきた。

「ヨース！」

今までとは明らかに違う声色でいつの間にかつけている名を呼ぶルート。

すると、白猫さんはそれに反応したのか、こちらへ駆けってくる。

「あっ……」

ルートのほうではなく、オレのところへ。

「おはよう、白猫さん」

「みゃうん」

そして、いつもの定位置……オレの頭の上へと座する白猫さん。

「ま、まさか貴様が飼い主かつ！」

「ううん。違うよ。友達なんだ」

加えて、三人目の味方でもある。

「みゃみゃん」

そんなとこだとばかりに相槌を白猫さんが打つ。

そうしたら、ルートは天を仰いで。

「認めん、認めんぞーっ！」

声上げて、その場から駆け出して行ってしまった。

「……あ、そうだ。貴様ら、図書館を使うのはともかく、窓際には近付くなよ!」

そんな、捨て台詞を残して。

「……ね? 別に怖くないでしょ?」

「う、うん」

「うう、やっぱり怖いです。私のこと、じっと見てたです」

「みゃん」

ルートはただ自分のすべきことに全力なだけだ。

それでもオレのせいで、カリウス・カムラルの死に重い責任を感じてるのが手に取るように分かる。

確実にその覇気は薄れていた。

だったら好きなことで少しでも忘れられたらって、そう思う。

ただ、可愛いものが大好きなルートでいて欲しいって。

そんな心内まで理解して頷いてくれたのは。

残念ながら白猫さん……ヨースだけだったけれど。

中央棟に通う特別クラスの者の登校時間はきっちり決められている。早すぎず遅すぎず、故に図書館までの道のりは、誰とも会わずにす

んだわけだが。

(うつ……)

貸し切りのはずの図書館には、ルートが言ったように先客がいた。カリウス・カムラルの時には定位置だった窓際の席。そこにサミイとマイカの二人が。

「おはようございます……」  
返事はないだろうことは分かっていたが。  
とりあえずそうとだけ言って一礼し、その場を素通りする。

何のことかない、オレたちにあてがわれたのは、図書館の奥にある倉庫だからだ。  
ワカホモリシアも……ついでに白猫ヨースも、状況を理解したんだろう。

オレの後に続くように、礼だけしてその場を通り過ぎようとする。

「待ちなさい。ノヴァキ・マイン」

それなのに。

マイカのほうから呼び止める声がかかった。

オレは、それに結構驚いていた。

マイカとはもう仲のいい友達ではなくなってしまっているはずなのに。

意外にも人見知りするマイカが、声をかけてきたのだから。

「は、はいっ」

冷たい、感情の薄い声。

言われるがままにオレは立ち止まり、振り返る。

「あなた、特別クラスの編入試験、受けるんだって？ 自分は犯人じゃないなんて言って、わたしたちのこと疑ってるそうね」

「え？ ち、違うよ。疑ってなんか……」

「ちがわないでしょ？ そのために編入試験を受けるんだから」

それはアルに言われたから、そう言うのは容易かったが、マイカたちからすれば確かにそう見えるんだろう。

事実、疑いたくないってオレの気持ちはどうあれ、本当の犯人を探すことでオレは生かされているのだから。

「確かに、本当の犯人は探したい。そのための編入だって言われても仕方ないと思う。」

でもね……君たちを疑いたくないのはほんとだよ」

マイカの、サミィの名前を気軽に呼びそうになって、ぐっところえる。

二人を名前で呼べるほど、ノヴァキになったオレは親しくないからだ。

「矛盾してる。だったら疑わなきゃいいじゃない。オレがやったんだって白状すればいい。」

そうしたら真っ先に殺してあげるから」

静かにマイカがそう言った瞬間。

がらりとその場の空気が変わった。

「うわわっ」

怯えたりシアの声。

白猫さんは毛を逆立てて警戒態勢を取り、ワカホが直接しがみついてくるのが分かる。

無理もないだろう。

表情のないマイカの手ひらから、圧縮された闇の魔力が生まれ出たのだから。

握りこぶし大のそれ。

受けたらただではすまないだろう。

おそらく骨も残るまい。

マイカが、本気で怒ってる風なのがよく分かって。

「……そんなの、間違ってる」

だからこそオレは、三人を置いて前に一歩進み出た。

マイカのほうも警戒して、その手を振り上げるのが分かる。

「確かにオレが犯人だつてことにすれば、一番丸く収まるのかもしれない。

でも、真実も知らずにそれを受け入れるわけにはいかない。オレはただ、知りたいだけなんだ。

なんでこんなことしなくちゃいけなかったのか、知りたい。誰が犯人かなんて、本当は関係ないんだ。オレは理由を知りたい、ただそれだけなんだよ……」

これでもし、知ることができたのならば。

オレは誓いたい。

二度とそんな原因を作らないように、努力するってことを。

「カリウス・カムラルがオレを殺して喜ぶやつだって思ってるなら、今ここでオレを殺せばいい。」

「やってない人を疑う最低の友人だったってあの世でちくってやるから」

「……っ」

マイカはそんなやつじゃない。分かった上でのそんな言葉だった。手を掲げてそれを聞いていたマイカが、はっと息をのむのが分かる。とたん、闇の魔力は霧散し、一瞬にしてその場の緊迫した空気が吹き散らされる。

背後で、リシアが深い安堵の息をつくのが分かって。

「……言うじゃない。いいわ。そっちがその気ならこっちだって確たる証拠突きつけてやるから。」

首を洗って待ってなさい」

「無理だよ。そんな証拠なんてないもの」

睨み合うオレとマイカ。

でも、そのエメラルドの瞳には、さっきのようなどぎつい殺気めいたものはもうなかった。

楽しいおもちゃを見つけたみたいにギラギラしている。

口の端には僅かな笑み。

まだいつものひまわりの笑顔には程遠いけれど、  
いい兆候だなんて、ちよっと思う。

「……一つだけ、よろしいですか？」

「うん、うん」



……と。

二人で火花散らしていたその横合いから、今までずっとだんまりのままオレのことを見据えていたサミイが口を開いた。

冷たく硬い、よそ行きの顔。

ルートやマイカのようなあからさまな感情はそこにはない。

それはいつもの、オレがいた時と変わらない、外でのサミイだ。

それが寂しいなんて思うのは、そもそもおこがましいような気はしたけれど。

全てをサミイに背負わさなきゃいけない負い目を感じていたオレとしては、かえってよかったのかもしれない。

オレの死に、サミイが自分を見失わないでいてくれたことは。

オレはそんな内心を隠しつつ頷く。

するとサミイはそれを待って一同を見回した後、口を開いた。

「あなたと……カリスが、あの試験で組んだのは、偶然ですか？

私にはどうもそれは偶然でないように思えるんです」

「……」

冷たく詰問する言葉。

オレはそれに何も答えることができない。

それは確かに、俺が仕組んだ必然だったからだ。

「試験の組み合わせは、成績の平均を取ってなされていた。カリスと組むためには最下位でなければならぬ。ですが、お見受けしたところあなたに実力がなにも思えない。もしその成績が真実のあなたならば、そもそも編入試験を受けようなどとは思わないはずすからね」

「ノヴァキ……」

さらに追い詰めてゆく、サミイの淡々とした言葉。  
言われてみればそうだと、リシアが不安な声をあげる。

マイカは真意を問うように無言。

ワカホも何も言わずにオレにしがみ付いていて。

ちゃんと答えなくちゃいけないと思った。

サミイの言っていることはつまり、ノヴァキを疑うものだったからだ。

初めから、オレを亡き者にするために近付いたのではないかと。

「……一緒に組みたかったんだ。どうしても」

「何故です？」

「友達になりたかった。夢を叶えてあげたかった。ただそれだった。自分ことばかり考えてて……そう考えれば、こんなことになったのはオレのせいなんだと思う」

でも、だからこそ。

「だからこそオレは生きなくちゃいけない。何でこんなことになってしまったのか、理由を知らなくちゃいけないんだ……」

どうして友達になりたかったのか、どうして夢を叶えてあげたいって思ったのか。

それを聞かれればオレははっきりとした答えを出すことができない。

オレ自身、そうさせる衝動がなんなのか、分かっていたいなかったからだ。

初めて生まれた、名もなき炎のような感情。

それでも半ば無理矢理に答えを探すのだとしたら。

それはオレが生きているって実感したもの、なんだと思う。

「……そうですか。カリスが言っていた『友達』というのはあなたのことだったんですね」

オレの一世一代の独白。本音。

しばらくは静寂がその場を支配したけど。

ふいにぽつりとそんな事を言うサミィ。

「どうかな。……はつきりそう言われたわけじゃないし」

それはもう、二度と確認することのできないもの。

そう思うと、自然と気持ちが落ち込んでゆくのが分かる。

「あなたがどう思っていたかは知りません。ですがカリスは幸せそうでしたよ。

友達ができたと、とてもとても喜んでいました」

思い出すように、納得するようにサミィは呟く。

「それまで、カリスは自分の運命を憂い、重い病を……あるいは呪いとも言つべきものにかかっていたいました。でも、その症状もここ最近はめっきりなくなってたんです。……それが『友達』のおかげであることは、見ていてすぐに分かりました」

穏やかに柔らかく。

オレって、そんなに喜んでたのかなって、ちょっと恥ずかしかったけれど。

「病気……呪いだって……？」

サミイは一体何を言ってるんだろうって、そう思った。

自分の使命に嫌気がさしていたってのはともかくとして。

サミイの言う病や呪いというものに、まったくもって自覚がなかったからだ。

「本人に自覚がないから厄介なんだよね」

「まあ、今となつては意味をなさないものですが」

すると、オレのそんな心情を見透かすみたいに、マイカもサミイも苦笑を浮かべる。

どうやらその病とやらのことは、オレだけが知らないらしい。

「それは……一体？」

「さあ？ まあ、同じクラスになれば口が滑ることもあるかもしれ  
ませんけどね」

つんとすましてにべもなく。

そんな言葉を残し、サミイは元、オレの指定席から立ち上がり歩き  
出す。

「んじゃ、今度会うときは特別クラスの仲間だね」

そして。

ここにやってきた当初に比べたら随分な変わりよつ……少し明る  
さを取り戻したマイカとともに図書館を出ていってしまった。

後には、呆然と取り残されたオレたちだけがここにいて。

「にゃあん」

動け、とばかりの白猫さん……ヨースの一声を皮切りに。

「じ、じゃあ、勉強しようか」

「はいですっ」

「ま、乗りかかった船だし、仕方ないか」

オレたちは、新たにできた目標とともに編入試験のための努力を始めたのだった……。

(第25話に続く)

## 第25話、それは、奇跡とも呼べる幸運

光陰矢のごとし。

それからは……特別クラス編入までの月日は、長いようであつという間に過ぎ去つた。

それはきつと、一人じゃなかつたからなんだと思う。

一人ぼっちであつたのならば、ノヴァキとして生きるっていう強い信念がなければ、とつくにオレはその周りの波に流されていたと思う。

実際問題、時が経てば経つほど周りの風当たりは強くなつていった。

何故だらだらと生かされているのか。

死ねばいいのに。

心冷える迫害を、いくつも受けてきた。

でも、一緒に立ち向かつてくれる人がいたからオレは頑張れた。

どんなつらい仕打ちも、真っ向から……むしろ楽しんでやるっていうの心意気でいることができたんだ。

それは、奇跡とも呼べる幸運だったのかもしれない。

オレと、リシアとワカホと、三人そろって特別クラスに編入できることになったことでさえ、そのほんの一部……些細なことだと思えるくらいには。

まあ、リシアに言われれば勉強のためにじつとしてるなんて、何度逃げ出そうと思つたか分からない、だそうだけど。

「……何とか最初の難関は突破してみただね」

「はい。今はちよつとほつとほつとしてます」

そんなこんなで今は。

すっかり固い口調のなくなったアルに、一人で呼び出されていた。

「ま、これからが本番なんだけどね」

真実を知るための新たな一步を探るために。

「手掛りは見つかった？あなたが犯人ではないと証明できるような」

返す答えが分かりきっているだろう、アルの言葉。

オレは視線落とし、首を振る。

編入試験の勉強の合間、オレは必死に手掛りを探し求めた。

それは、『夜を駆けるもの』としての仕事の合間の聞き込みが主だったけれど。

明確な成果は得られなかった。

本当は特別クラスのみんなに聞いて回るのが一番なんだろうけど、オレにはそれができなかったのだ。

やはりどこかで辛いかもしれない真実なんて、知りたくないって気持ちにはあつたのかもしれない。

「このままいつまでも伸ばせるものじゃないよ。忘れ去つたように見えたって、この国にはまだ悲しみが残ってる。その制裁と清算を望んでいるものも多い。最近はまだ疑われるようになった。あなたを庇ってるんじゃないか……って」

それは確かにそうだろう。  
いつまでもこのままでいいはずがなかった。

「本腰入れるって事ですよね。明日からは特別クラスなんだから  
今まで怖くて避けていた所に足を踏み入れなければならないと思う  
と、相当の覚悟が必要だった。  
ただこのままじゃアルに迷惑がかかるのも確かだ。  
辛いから目を背けているわけにはいかないだろう。」

「そんな生ぬるいものじゃないわ。実はね、期限が設けられたの。  
来月行われる建国祭、それが終わるまでが限界よ」

庇うのも限界。  
状況的にも精神的にも。  
つまりはそう言うことなのだろう。

今まで手掛りすら掴めなかったのだから理解できる。  
ただ勉強にかまけてオレ自身が疑われていることの自覚が薄れてい  
たのは確かかなだろう。  
引き締めなくちゃいけない、そう思う。

「で、ここからが本題って言うか、提案なんだけど……あなた、祭  
の代表者を目指しなさい」  
「祭の……代表者？」

かつては当たり前前として決められていたもの。  
いまいちアルの意図が理解できず、オレは首を傾げる。



「祭の代表は編入試験のようにはいかないわよ。実力だけじゃない。周りの、この国に暮らす人々の信頼と期待が要求される。二人だけで組むその相手に対しては特にね」

「それは……」

「信じてくれる人を増やすのよ。あなたが犯人でないと。そうすればおのずと真実は暴かれ、晒されてゆく。因果応報ってやつね」

「疑うわけじゃなく、信じてもらう、か……」

目からウロコが落ちる思いだった。

お前がやったんだろって疑うから辛いのだ。

でもそうじゃない。オレは違うって、信じてもらうような行動をする。

それで真実が分かるのならば心情的には気が楽だろう。

罪が暴かれ晒されるようりは、罪が自ら告白してくるほうが。

「でも、難しそうだな……」

「当たり前よ。簡単ですむなら、あなたを罰してそれで終わってるため息交じりの皮肉。

やっぱり無理してるんだろう。

そうならないために、義理もないはずなのに奮闘してくれてるのがよく分かる。

報いなければならぬと思った。

アルの決断は……オレを信じてくれたことが間違いじゃなかったって、そう思われるように。

難しい、なんて甘ったれたこと言ってられない。

ノヴァキとして生きると決めた以上、それはそう、当たり前のことなのだから。

「……そうだね。やるよオレ。オレは犯人じゃないって証明してみせる」  
拳握り意気込むオレ。  
そんなオレを、アルは柔らかに見守る表情で頷き見つめてくれていて……。

それは、そんな決意をして。  
外の世界を知るため、好奇心だけで行っていた『夜を駆けるもの』  
での仕事、生きるためのものになって、日々お金の大切さを実感するようになったある日のことだった。

もう習慣になっていたリシアの手伝いがたまたまなかった日。  
久しぶりに町に出る仕事をして……帰路に着こうと足を向けたのは、  
今や自分の家であるノヴァキの家ではなく、カムラル家のお屋敷だった。

「やば、間違えた」

ぼうつとしてたからなのか、あるいは何か予感めいたものがあって  
吸い寄せられたのかは分からない。  
兎にも角にも、オレが我に返ったのは、いつものように雷の魔力溢れる金網を風の力を借りて飛び越えて……部屋へと続く石畳の道へ

降り立ったときだった。

そんな眩きすら屋敷で眠るものに気付かれてしまっんじゃないかってくらい静かな夜。

いつもは賑やかな空ですら重い灰色に沈黙していて。

この状態で見つかったりなんかしたら洒落じゃすまないだろう。オレは踵を返し、そのまま帰ろうとする。

「え………？」

だが、オレはふいに届いてきたものに、びくりとなって立ち止まる破目になる。

……泣き声だ。

小さい頃には耳慣れていたけど、ここ最近はめっきり聞くことなかったサミイの。

それが何故オレの耳に届いてくるのか。

何かあったんだろうかって凄く気になって、オレは屋敷に背を向けていた身体を一回転させ、抜き足差し足で声の出所へと向かう。

それは、時折せき止めていたものが決壊し、支えきれなくなることによって溢れ出るかのような嗚咽だった。

ずっと我慢していて耐え切れなくなった……そんな声。

編入が決まって、サミイと同じクラスになって挨拶に言ったときも、サミイはいつもと同じように見えた。

外行きの……人を寄せ付けない、冷たい氷のような態度。  
だからとつくに吹っ切れてしまっているのだと、そう思い込んでいたのに。

(サミイ……)

お屋敷の五階。

無用心にも開かれている窓、そこは変わっていないければオレの部屋だ。

何故そこからサミイの泣き声が聞こえてくるのか。  
流石にオレでも、すぐに分かった。

オレを失ったことへの心の傷が、まだ癒えてないのだと。  
決定的なものを突きつけられて、改めて実感する罪悪。

どうすれば彼女の涙を止められるだろう？  
そう、考える。

考えて考えて考えたあげく、オレは今思えばかなり思い切った行動に出た。

直接慰めてあげたい。

そう思って、いつものように屋敷を這う蔦を登り、窓辺に降り立つ。  
サミイはオレが使っていたベッドに突っ伏すようにして泣いていた。  
オレがいた頃はそんなサミイですら受け入れることのなかった場所。  
今は、その事にも少し後悔していて。

(ここまで来てみたのはいいものの……)

どうやって声をかけよう。

一体どんな慰め方をすればサミイは泣き止んでくれるだろうか。

その答えは纏まらず、オレはただその場に立ち尽くすことしかできなかった。

オレはもう、カリウス・カムラルではないのだ。

もう戻れない。オレが何を言っても意味をなさないような、そんな気もしていて……。

そんな風にまごまごしていたから、空が渴を入れてくれたのかもしれない。

ふいに灰色の曇天が割れ、月光がバルコニーに差し込む。

当然そこに立っているオレは、その光を遮り、サミイのいるところに人の影を残す。

「だ、誰っ！」

鋭い誰何の声。

そのおかげでサミイの涙は引っ込んだようだったが、状況が最悪だった。

これで他の誰かが部屋に入ってこようものなら、何も言い訳できないことになってしまう。

オレはひどいうるたえっぷりを仮面で隠せていることに感謝しつつも人差し指を立て、静かにしてほしいって懇願してみせる。

「夜分遅くにごめん。私は『夜を駆けるもの』と呼ばれている。こ

「これがカリウスの部屋であることも知っているんだけど」  
「……………」

これは予測だったけれど。

おそらく、この部屋がサミイのものになった、というわけじゃないんだろう。

誰も入るなというオレのワガママは、まだそのままになっているはずで。

オレの言葉に、口ごもるサミイ。

すかさず、オレは言葉を続ける。

「それなのに、主がいはいはずのその場所から風に乗って嗚咽が聞こえてきたじゃないか。気になってさ、迷惑かとは思っただけど、こうして見に来たんだ」

「……………迷惑よ。人の泣き顔を見にくるなんて、趣味が悪いわ」

すると。

サミイは分かってくれたらしい。

オレに合わせて小声でそんな事を言う。

「それは悪かったね。…………でもさ、無用心でしょ。窓開けっ放しで。

サミイになにかあつたらどうするんだ」

「私の名前、知ってるんですね」

「あ、ああ。カリウスとは知り合いだったから……………」

ここに来ての致命的な失敗。

強引に誤魔化してみたけど、果たしてどうだろう。

仮面の奥でそっとサミイのほうを伺う。

「ユーライジアじゅうにその名を轟かす『夜を駆けるもの』とカリスが知り合いだったとは、これはこれは物凄い偶然ですわね？」  
するとどうしたことだろう。サミイは僅かに笑みすら浮かべていて

「ちょうどいいです。カリスの知り合いなら責任とってください。

乙女の秘密を勝手に覗き見たことを」

「せ、責任？ …… た、たとえば」

何だろう？ 痛いことや怖いことじゃなければいいけど。

最悪ここから逃げてしまえ、なんてひどい事を考えつつ返事を待っている、サミイは浮かぶ笑みを意地悪なものに変えて言葉を続けた。

「これからも、定期的にここへ来るのです。そして私の愚痴を聞いてください。全てをほっぽり出してしまったカリスの代わりをしなくちゃいけないんです。心の負荷を吐き出せるような、そんな話し相手になってくれませんか？」

「それは……」

オレが、サミイにしてあげたいと思っていたことと大差なくて。

「駄目ですか？」

口ごもるオレに、不安そうな顔をするサミイ。

「駄目じゃない。オレはそのつもりで来たんだから。 …… でもいいの？ オレみたいない得体の知れないのにそんな事」

「ええ。これは一国の主となるものの屋敷へと平気で忍び込むような無礼に対する責任ですから」

「そんな横着な。これでオレがサミイの命を狙ってるやつとかだったらどうするのさ？」

「その気がおありで？」

そんなものあるわけがない。オレはぶんぶん首を振る。

「だったら問題ないじゃないですか。私が満足するまで私の愚痴に付き合ってください」

自信満々の、我侭とすら取れるサミイの言葉。

滅多に我侭なんて言わない子だったけど、やっぱりオレの妹だ。頑固と言っかなんと言っか……。

「……分かったよ。ただし条件がある」

「窓のことですね。分かっています。次からはノックを三回でお願いします」

普段から開けておくのは危ない。

そんなオレの言い分を先んずるみたいにそんな事を言うサミイ。

なんだか泣いていたカラスに良いように弄ばれているようでちょっとしゃくで。

「それじゃ、後は報酬だけだ」

「なんですか藪から棒に。まさか私に対してお金を請求する気ですか？」

オレがそんな事言うなんて思ってなかったんだろう。

さすがに今度ばかりはちょっとうるたえている。

「愚痴ってる時はいくらでも泣いていいからさ。別れるときにはサ

ミイの笑顔が欲しい」

「……」



そもそも、それが目的だから、それだけは譲れない。  
だからそんな提案をすると、サミィは見事に固まっていた。

「気障な人。砂を吐いてしまいそうだわ」

かと思っただけはっとなって赤くなり、ぷいと顔を背けて窓をぴしゃり  
りと閉め、部屋の奥に引っ込んでしまう。

「ああ」

ノックの練習かな？

そう思い立ち言われた通り三回ノックするオレ。  
するとすぐにむすつとした顔のサミィが出てきて。

「今日はもういいです。お帰りくださいませ。……報酬の方は努力  
してみます」

そう言って、再び引っ込んでしまう。

「うまくいった、のかな……?」

なんだか怒っているような気がしなくもないサミィに。  
オレはただ一人残され、首を傾げて……。。

(第26話につづく)

## 第26話、あとの祭りの約束

それからというもの。

オレは仕事を終わると、サミイの元へと足を運ぶようになった。

初めはぎくしゃくしていたところもあったけれど、元々仲の良かったオレたちが打ち解けるようになるのにさほど時間はかからなかったと思う。

涙よりも笑顔の方が増えてきていたのが、その何よりの証拠で。その点においてはいい方に進んでるなあって思ってたんだけど。

ノヴァキとしての祭の代表を目指す道のりは、中々に困難だった。オレがカリウス・カムラルを殺したという疑いが、特別クラスにおいても晴れていないせいもあるんだろうけど。

今まで一体どうやって仲良くできていたのだろうと首を傾げるくらいに、今まで友達だった人達との間に溝ができていたんだ。

たぶん、クラスが違ってしまったこともあるだろうけど。

一つ上の学年になってしまったマイカ達とは話す機会すら乏しく、晴れて同じクラスとなったサミイやキミテは、基本的に口もきいてくれない。

それ以外のクラスメイトも言わずもがなだ。

陰湿ないじめのようなものはさすがにないが、極力オレに関わらないようにしているのが身にしみて伝わってくる。

それに遠慮してしまって、俺が一緒にいるのはリシアやワカホ、時

々ヨースと言った、ノヴァキとして暮らすようになってからの、おなじみの面子に限られてしまう。

もちろん、その事に不満があるわけじゃない。

一緒にいてくれることには感謝の気持ちで一杯だ。

でもこのままじゃ駄目なのだ。

祭の開催日……オレの命の刻限が近付いてくればくるほど、なんとかしなくちゃって思いは強くなって……。

そんなある日の夕方遅くのことだった。

高く聳えていた壁が、向こう側から崩されたのは。

「え？ あれってまさか……」

いつものようにギルドが受けなかった仕事をもらおうと、ギルドの建物の前までやってきて、オレは思わず固まってしまう。

そこにはこんなところにいたらまずいだろう人物、キキョウ・ヴァーレストの姿がある。

ノヴァキとなっても、スクールで出会えば比較的まともに挨拶してくれる、のんびりとした空気は相変わらずの少女。

深めのフードを被ってはいるが、それが正体を隠すことにはならな  
いんだろう。何かを探しているらしくきよるきよると落ち着かない  
それによりこぼれる、目を見張るような金系の髪が、早くも注目を  
集めていた。

見た感じ近くにお付きの人物であるルツキーの姿はない。

かつてのオレのように街が見たくて勝手に抜け出してきた口だろうか、ちよっと思つて。

「あつ……」

そんなキキヨウの彷徨っていた視線が、ぴたりとある一点で止まる。そう、オレのところだ。

何かなつて思つて戸惑つていると、なんとキキヨウ自らオレのほうへ駆けてきた。

それも何だか、嬉しそうに。

「あの、すみません。よるかけさんですか？」

「よるかけ？ あ、ああ。『夜を駆けるもの』ってのはオレのことだけだ」

「よるかけさんが困つてる人を助けてくれる偉い人だつて聞きました。わたし、ヴァーレストのキキヨウって言つんですけど、困つてるんです。助けてくださいますか？」

きらきらと、曇りのない笑顔。

圧倒される。

しかも何だか『夜を駆けるもの』に対して偏つた幻想を抱いているような気もしなくもない。

街に出てきたばかりのオレもだいぶはしゃいでいたなあ、なんてことをちよっと思ひ出し、苦笑しながらそれに答えることにする。

「別に偉くはないよ。ただで請け負つてるわけじゃないし。生きるためだから」

「よるかけさん、人助けは生きがいですか。やっぱり偉いです。わたしの生きがいは歌だけだから」

オレの言葉に何か思うところがあつたんだろうか。  
とたんにしゅんとなるキキヨウ。

「どうして落ち込むのさ。とても素晴らしいことじゃないか。オレは知ってるよ。キキヨウ……さんの歌が、たくさんの人に感動を与えてくれるってことを」

「でもわたしの歌は誰かを助けることはできません。わたしの歌はただの歌だから。我侂言わないでカリスちゃんの言うことを聞いていれば、カリスちゃんは助かったのかもしれないのに……」  
「それは……」

キキヨウが落ち込んでいる理由。

その原因がオレであることに気付かされ、オレは言葉を失う。

オレはかつて一度だけ、キキヨウと喧嘩したことがあつた。

風の魔法の一種である音系魔法。

それって歌と同じようなものだよねって何気なく口にしたオレ。

歌のうまいキキヨウなら、その才能があるんじゃないのって。

悪気があつたわけじゃなかった。

そう言っただけなのに急に怒り出したキキヨウが、その時が訳が分からなかった。

ただ口での言い合いの、今となっては笑い話のような些細なものだ

ったけれど。

何故キキヨウがその時怒ったのか、それは後になって聞かされた。

キキヨウは知っていたのだ。

音系魔法の恐ろしさを。

確かにその魔法はキズを癒したり、蘇生させる、なんて物凄いものがある。

だがその一方で、簡単に人の命を奪うことのできる恐ろしい力である。

かつてユーライジアを恐怖に陥れたという魔人族が、その音系魔法の使い手である、ということ。

キキヨウは許せなかったんだろう。

自分の大好きな歌が、その恐ろしい力と同一視されることが。

オレはキキヨウに謝ることで許してもらったけれど。

キキヨウはずっと気にしていたんだろう。

確かに音系魔法に対し、類まれなる才能があったのに、その力を習得することがなかったのだから。

そして今、キキヨウはそのことを悔いているのだ。

考えなしに言ったオレの言葉に対して。

「それは、君のせいじゃない。御霊を呼び戻す力に、結局は答えなかったのだから」

オレのいなかった空白の数日間。

何者かに殺されてしまったオレの身体の中にいたノヴァキ。

当然その魂を呼び戻し、蘇生する努力はしたはずだ。キキヨウでなくても、音系の魔法を扱うものは少なからずいたからだ。

だけど、蘇生は成功しなかった。オレが戻ってきた時見た光景は、すべての手を尽くしたその後の光景だった。

「カリスちゃんは、この世界で生きるのがいやになっちゃったのかな……」

重くのしかかる、キキヨウの弦き。

それはオレだけではなく、ノヴァキにも当てはまる。

オレが殺されると分かっていたのかもしれないのに、オレと入れ替わることに頷いたノヴァキ。

それほどまでに世界から逃げ出したかったのだろうか。

同じような気持ちを抱いていたオレが言えることじゃないのかもしれないけれど。

「そんなはず、そんなはずないよ……」

オレは、そう思ったかった。

その言葉を、すぐに否定する。

ノヴァキには夢があったんだから。

『トランペット』とともに、音楽会の舞台に立つ、と言う夢が。

「そうかな。カリスちゃん、すっごく嬉しそうだったし……」  
「嬉しそう、か」

一体何にだろう？

確かにノヴァキは、安らかに微笑んでいたのは覚えている。

あれは誰かが死に化粧をしてくれたせいだと思っていたけど。

もしそれが、オレの身代わりになったことに対してであるのなら。

(どうして……?)

オレにはその理由が分からなかった。

「そんなわけ、ないと思う……」

だから首を振る。

ノヴァキが身代わりになることが嬉しいと思える価値がオレにあるとは、どうしても思えなくて……。

「ごめんなさい。変なこと言っちゃって。お話、戻すね？ お願いのことなんだけど……」

オレが出口の見つからない思考の迷路にはまっていると。

ふと我に返ったみたいにキキョウは本題を切り出してきた。

「ああ、うん。一体何かな？ 君の願いをギルドが無碍に断るとも思えないけど」

そんなオレができる唯一のことは、迷惑をかけている人達に対する罪滅ぼしなんだろう。

「ううん、ギルドさんには行ってないよ。直接よるかけさんに頼みに来たの」

「それは光栄だね」



すっかり元通りの笑顔。

それはきつとキキヨウが強いからなんだろう。

それが本意ではない無理したものだど知ってしまった今は、オレにとって苦しいものにしかならなかったけれど、

「あのね、そのお願いなんだけど……もうすぐルツキーの誕生日でしょ？　うちの主催でパーティするんだけど、カリスちゃんいなくなっちゃったから、演目の枠が開いちゃって……」

（あ……）

言われて今更ながらに思い出し、また自己嫌悪。

キキヨウの言うルツキーの誕生日と言うのは、言葉の通りの意味ではなく、十二の根源のうちの一人、氷（ルフロース・レッキン）を崇める日のことだ。

ルフロースは十二の神の中でも祭が好きらしく、四十年ほど前にこの地へとやってきて建国祭を大層気に入り、その姿隠してからも年に一度は自分のためにお祭り騒ぎをするようにと言い残したらしい。

それがユーライジアでは建学祭や建国祭とは別の祝日として今は定着している。

特に家を守る魔精霊に同じ名をつけるほど熱狂的なヴァーレスト家は毎年大賑わいだった。

かく言うオレもそのパーティに呼ばれていた。

何か盛り上がる出し物を考えておく、なんて約束とともに。

なのにオレはまたしてもその約束を破ってしまった。

タイムの件といいこの事といい、つくづく自分の駄目さ加減が嫌になる。

「カリスちゃんの代わりに出てくれる人を探してるんだ。だから、もしよかったら……」

「オレに出て欲しいって、そう言う依頼？」

「うん。誰かいないかなって探していたら、サミイちゃんがよるかけさんがいいって言ってたから……」

それでキキヨウは、いるはずのないこんな場所にいるのだろう。何故ならば夜を駆けるものは夜にしか現れないのだから。

サミイがオレを薦めた理由はなんでだろうって感じだったけど。

これは滅多にない好機かもしれないと、そう思った。

前に進めるかもしれない。

我俣で、勝手かもしれないけど、オレに残された時間はあまりないから。

オレはキキヨウの言葉に、首を振る。

「残念だけど『夜を駆けるもの』であるオレが出向くことはできない」

「そっか……」

観面に頂垂れるキキヨウ。

まさかそう言われるとは思ってなかった、そんな態度で。

「でも、その代わりにオレが推薦するものを遣わすよ。その者はユライジアーの『トランペット』の使い手なんだ。きっとルフローズの神も喜んでくれるはず」

「ほ、ほんと？　ありがとう！」

オレがそう言い直すと、ぱっと顔を上げ、その表情を綻ばせていて、その変わりようが何だかおかしくて。

オレは思わず苦笑を浮かべていた。

自分が、もう後には引けない、とんでもないことを口にしてしまったことなど、知る由もなく……。

（第27話につづく）

## 第27話、いつそ清々しいほどの即決

とんでもないこと。

その事に気付いたのは、もはや我が家と化したノヴァキの家に辿り着いてすぐのことだった。

真実を知るために明確な歩み寄りの一步を踏む。

それだけを考えればヴァーレスト家のパーティーに参加するのはありだったと思う。

というより、その時オレが今が好機とばかりに、その事しか考えていなかった。

ノヴァキの『トランペット』ならきつとみんなが満足してくれるだろうって、得意げだった。

「って、ノヴァキは今オレじゃん……」

急なことで咄嗟に口から出た言葉とはいえ、あまりにあまりな失態。ノヴァキならばオレの思っている結果が出せただろうが、ここにノヴァキはいないのだ。

ノヴァキでないのにノヴァキでいる偽者のオレには、本物のノヴァキほどに『トランペット』を演奏する技術なんてない。

カムラル家のたしなみとして、演奏の仕方を知っている程度だ。

「何自慢げに口走ってるんだよ……」

そう、確かにオレは誇らしげだった。

それは自分の力でもなんでもないのに。

「今からでも練習しなきゃ」

とはいえもう、後には引けない。

何よりオレは、一度口にしたことをなかったことになんてしたくなかった。

それが、たとえどんな無謀なことであっても。

「そんなわけで、パーティの参加の旨を伝えるために上のクラスに突貫します」

「……ええっ？」

「いきなり何よっ、そんなわけって、意味分かんないわよ」

特別クラスに編入して早数日。

今は昼休み。

唐突なオレに、二人とも驚いて顔を見合わせている。

「実はさ、お願いされました」

オレはそんな言葉を皮切りに、あつたことを話す。

ルフローズの日に行われるヴァーレスト家のパーティ。

基本的に、四王家……それに類するものしか出席しない、敷居の高いそれに『夜を駆けるもの』に出演依頼が来たということ。

しかし、『夜を駆けるもの』は都合があつて出られないので、ノヴァキ……オレに代わりに出るよう推してきたことを。何とも嘘っぽい話であつたが、そう外れてもいないだろう。

ひとしきり話し終えたが、二人の表情はあまり変わらない。未だに何をいきなり言い出すんだつて顔をしている。

「そう言えば最近は一緒にいとこ見なかつたけど、まだ付き合ひあつたんだねえ？」

「まあね」

リシアとはノヴァキのオレと、『夜を駆けるもの』のオレと、二つの顔で接している。

今は両方ともオレなわけだからリシアの言い分ももつともだろう。

何だか、真意を問うような……意地悪そうな笑みを見せてくるのが気になつたけど。

オレはそんなリシアの言葉に、曖昧に頷くことしかできなかった。胸を軋ませる罪悪感を内に秘めながら。

「ノヴァキ様は『夜を駆けるもの』と仲がいいんですね。そんなお願い事されるなんて、流石ノヴァキ様です。しかも『トランペット』が演奏できるなんて知りませんでした」

「はは……」

誇らしげな、ワカホ。昨日のオレみたいだった。

さすがにそれが、とんだ出任せとは言えない。

昨夜家に帰ったら、運良く『トランペット』の吹き方の本があつたから読んでみたけど、中々に厳しいだろう。

素人オレがはたしてもものになるかどうか、だ。  
嘘を真にするのに、生半可な努力では足りない、そんな気がする。

「『トランペット』ね。そういうのアンタ嫌いなんだったって思ってたけど……」

「え？ 何で……？」

と、ふいに呟いたのは、意外さの混じったりリシアの呟き。

「何でって……ほらその、似てるじゃない楽器って。かつてワタシたちの悪い先輩方が持ってたって噂の、世界を破滅させる道具に……」

言いづらそうな、後半ひそめるようなリシアの言葉。

初耳だった。

それはもしかしたら、魔族には常識なのかもしれない。  
瞠目しそうになるのを、なんとかこらえる。

「えっと……確か、『ナシオ・トラン』でしたっけ？ とても恐ろしいマジックアイテムで、十年前の事件にも使われてたって噂の……」

それにつられてワカホが小声になる。

ワカホもそれを知ってるんだって、オレはちょっと驚いて。

「似てる……の？」

「う、うん。たぶん。さすがにそんな危ないもの残ってるわけないからワタシも詳しくは知らないけど、確かに膨大な音系魔法を込めたやつで、楽器によく似てるって聞いたわ」

「ヴルツクのマジックアイテムを研究してる人の中では、結構有名な話ですよね」

人を滅ぼす魔法と歌と一緒にしないで欲しい。  
そう言っただ怒ったキキヨウ。

十年前のあの日に魔族によって使われたという覆滅の音系魔法。

それは、あくまでも噂だ。

事実、それが本当に使われたのかは分からない。

魔族の姿を、はっきり見たものはいない。

例え見ていたとしても……おそらくはこの世にいない可能性が高かった。

でも、もしかして。

そんないやな予感がオレの頭を駆け巡る。

しかし、オレはそれをすぐに打ち消した。

そんなはずはない。あの心打つノヴァキの演奏が、そんな怖いものはずはない。

そう言い聞かせ、口を開く。

「歌と魔法は別物なんだって。楽器も、マジックアイテムも違う。

似てるとか同じとか禁句だよ。

特にキキヨウ……さんの前ではね。せつかく仲良くなる好機がめぐってきたのに、台無しになる」

「わ、分かった。悪かったって。そんなに怒らなくてもいいじゃない」

怒る？ 俺は怒ってたんだろうか？



それはたぶん違う。

オレは、怖かったんだ。

初めてあった時の感じた魔力の奔流。

驚いて逃げ出そうとしていたノヴァキ。

オレが来たことで演奏を止めたノヴァキ。

止めた音色は、今でもオレの中で一番の音で。

それらから導かれるもしかしての答えを認めてしまっ、その事が。

今までは考えもしなかったこと。

その可能性に気付いてしまったことが。

「怒っていないよ。キキヨウに怒られるって話ね」

「……まあ、いいわ。ようはこれから一緒についてきてほしいから、その辺には気をつけるってことでしょ」

ため息つくリシア。

一人じゃ心ともないっていうのをちゃんと読みきってるところなんてさすがだ。

「うん。お願い。ワカホもいいかな？」

「あ、はい。もちろんです。私はもう逃げません。どこへなりともついてゆきます！」

オレが続けてワカホにも賛同を得ると、聞くまでもない元気な声が返ってくる。

オレは、それにつられるようにして笑顔を浮かべる。  
嫌なことは考えないようにして。  
そして、そのまま連れ立って特別クラスのある中央棟を出る。

「先輩方のクラスに向かわれるのではなかったんですか？」

すると、別棟と中央棟に囲まれた中庭へ足を向けるオレに、そんなワカホの疑問の声がかかる。

「キキョウさんたちは昼はたいてい中庭なんだ。まだあったかいし、いると思うんだけど」

「もうそんな事まで調べてあったのね。何もしてなかったから疑い晴らす気がないのかなって思ってたけど……」

意外そうなりシアの言葉。

なんてことはない。かつてはオレもその中にいただけの話だ。  
疑いを晴らすことに積極的になれなかったのは事実だった。

まずは心を通わせる。仲良くする。

それだけだと思っても、なかなかうまくいかない。

何もしないで手に入っていた頃を思い出し、ゼロとなった今と対比して戸惑っていたからだ。

「いつまでも止まってるわけにもいかないからね」  
揺らいでいる今だからこそ、強くそう思う。

犯人なんていないのかもしれない。

そんな心に支配される前に、早く真実が知りたかった。

と。

「やいやい！　こんな所に何の用だっ！」

ふいに聞こえてきたのは、頭上で騒ぎ立てる、そんな声。顔を上げるとそこにはルッキーがいた。

たぶん、オレたちが近付いてくるのを見て、慌てて飛んできたんだろう。

それならそれでちょうどよかった。

「ルフローズの日の件で、挨拶に来たってキキヨウさんに伝えて欲しい」

「……ちよつと待ってる。聞くだけ聞いてきてやる」

変わらない、尊大だけど心の広いルッキー。

オレたちの事を無碍にせず、そう言い残して踵返し飛んでゆく。

しばらくすると、キキヨウ本人が、実際はそうでもないのに、随分と緩慢に見える動きでオレたちのほうへと駆け寄ってきた。

ルッキーの姿はない。

おそらく『夜を駆けるもの』と会ったってことは内緒だったんだろう。

ついていききたいのに駄目だと言われて、気が気じゃないルッキーの様子がありありと想像できてしまう。

「あなたがよるかけさんの代わりに出てくれるの？」

その場には当然リシアやワカホもいたが、キキヨウは初めから分かっていたかのように、オレにそう問いかける。

かつてと変わらない、ほんわかした雰囲気。

もっと警戒されると思ったのに、そんな感じは全くない。

オレはその事が気になったが、嬉しい誤算でもあったので、その言葉にしつかりと頷く。

「はい、『夜を駆けるもの』に頼まれて……」

「知ってる。ノヴァキくんでしょ。後ろにいるのがリシアちゃんとワカホちゃん。特別クラスの子にはみんな声をかけるつもりだったからちょうどよかったよ。今回はうちじゃなくてカムラルさんちの教会でやるからよろしくね」

名乗ろうとするが遮られ、実に楽しげにそんな事を言うキキヨウ。

考える間もない即決だった。

いつそ清々しいほどに。

思えば初めから彼女だけは変わらなかったのかもしれないけれど。

「よ、よろしくお願いします……」

あまりにあっけなすぎで、オレたちは実感のないままにそう言うしかなかった。

気がつけばキキヨウの姿はなく、昼休みの終わりを告げる鐘が鳴って  
いて。

「あ、次の授業始まつちゃう」

オレたちは、そんなリシアの声とともに我に返り、慌てて駆け出す。

(カムラル教会、か……)

ただオレには、いつもと違う会場のこと気がかかっている……。

(第28話に続く)

第28話、世界に視線を逸らすことなく戦い続けよう(前書き)

きりがいいので、またまた短めです。

## 第28話、世界に視線を逸らすことなく戦い続けよう

結果で言えば。

オレは身体はいくらノヴァキでも、その魂までノヴァキのようにはなれなかったんだろう。

ルフローズの日までの一週間。

少しでもノヴァキの音色に近づけるようにと必死でトランペットの練習をした。

時には『夜を駆けるもの』として町へ向かい、楽器などを売ってるお店へ行つて、こつなにかを教えてもらったりした。

だけど結局、その当日を迎えてもオレ自身が満足できるような……あのノヴァキの音色は少しも出せなかった。

何かノヴァキだけが知っていた特別な弾き方があったのかもしれない。

オレがその曲を知らないからなのかもしれない。

オレが聞いたのは、盛り上がりが頂点に達したところまでで。その後は分からない。

お店の人に聞いてみても、図書館で調べても、風紀で一番うまいトランペット奏者の人に聞いてみてもその曲の正体は分からなかった。

おそらくはノヴァキの自作だったんだろうって結論に達しただけ。途切れたその先を想像して足してみても余計に悪くなるばかりで、正直オレは後悔していた。

オレには、人を感動させることなんてできないのに。何安請け合いをしているんだろうって。

そしてそれは、今更ながら辞退したほうがいいのでは、なんて迷っていたその前日だった。

ふらりと立ち寄ったのは、カムラル家の隣にある、カムラル教会。ユーライジアで一番大きな舞台がある場所だ。

「……よくまあ来れたもんだな。ま、ちょうどいいや。男手が必要なんだ、お前も手伝え」  
「あ、うん」

そこでは明日のルフローズの日のための会場づくりが行われていた。ルレインやタインをはじめ、うちの馬車つきだった風紀の人たちがそこにいる。

彼らとはとにかく分かりやすかった。カリウス・カムラルを殺した一番の容疑者であるオレに対しての嫌悪感を、包み隠そうともしない。

タインはノヴァキになって以降、話しかけてきてくれるどころか、



視線すら合わせてくれなくなった。  
逆にルレインは、余裕もってオレから視線を外さない。  
少しでも不信なところがあれば斬る。  
常にそんな雰囲気を保ちながら。

ヴァーレスト家にキキヨウの姿はなく、ここにいるのかと思っ  
ただけど、あては外れたらしい。  
ただどこにいるかなんて聞ける雰囲気じゃなくて。

オレはルレインに言われるままに会場の設営を手伝っていく。  
今までは間違っても任せてもらえることのなかった力仕事だ。  
ルレインの指示は的確で。  
新鮮なその感触を、オレは楽しいと、そう思ってしまった。

「接してみれば分かる、か。確かに生きてるのが楽しそうだよ、お前」

設営の合間の休憩時間。

タインとは一度も会話できないまま、逃げるように立ち去られてしまったけど。

人一人分開いた舞台袖に腰掛けていたルレインが、ふいにそんな事を言ってくる。

「い、ごめん」

お前にその資格はないと、暗にそう言われた気がして。  
反射的に謝るオレ。

「どうして謝る？ 何か謝らなきゃいけないようなことをしたのか

？」

「だって……オレにはその資格がないから」

結果的に見れば、オレはノヴァキの人生を奪ったようなものだ。ノヴァキに成りすまして、のうのうと自由を満喫している。

本当はそんな権利、ないはずなのに。

「卑屈だねえ。魔人族つてのは。少なからず人間族のせいもあるんだろっけどさ。そう言う意味で言ったんじゃねえよ。……なんつかさ、お前には罪を犯したものに共通した澱みがない、そんな気がするんだ」

ルレインは、オレが呟いた言葉を少し勘違いしているようにも見えたけど。

「……澱み？」

オレには、そんなルレインの言葉が気になった。顔を上げ、ルレインに聞き返す。

「ああ、澱みさ。何かしら罪を犯したやつらは、隠そうとしたって瞳の奥が澱んでるものだ。

それは包む空気にも出る。けどお前にやそれが無い。それだけ上手いんだろっつて、根っからの悪なんだろっつて思ってた時期もあっただけだな」

ルレインは、そこで視線を外し、天井高い空を見上げる。

そして再び視線を戻すと、心なしか今まであつたはずの棘のような

空気が和らいだような気がして。

「でもあなたはそうじゃないらしい。カリスの死を悲しむものの誰よりも、傷ついているように見える」

「……」

発せられた言葉は、オレ自身未だ実感がないことで。

返す言葉は出てこない。

でも、そうかもしれない、なんて自惚れたことも思う。

だって死を迎えたのはオレじゃないってことを知ってるのはオレだけだったからだ。

ノヴァキの死を悲しむことのできるのは、オレだけだったからだ。

「つまり、ルレイン……さんは、犯人が誰か分かりますか？」

人の罪が見えるのならば。

当然そう言うことになるだろう。

オレは今考えていたことを必死に我慢して、話題を変える。

「さあな。……たとえそうだとしたって、ただの勘さ。証拠はない。それでお前が一番に疑われてるのと一緒だよ。断定するにはあまりにも無茶すぎる。人なんて、言えないようなやましいこと、いくらでもためてるもんさ」

曖昧に濁すようなルレインの言葉。

だけど気持ちはよく分かった。

オレと同じだ。本当は疑いたくなんてないんだ。

決めつけ突きつけることがその人の人生を終わらせてしまうことを理解している。

関係が壊れてしまうことを理解している。

それは、オレが今の今までオレが犯人じゃないって分かかって動けなかった一番の理由だった。

「そう言うお前こそ、本当は犯人分かっているんじゃないのか？」

「……ううん。まだ」

可能性のひとつは見つけた。

だけどそれは信じたくなかったから。

オレは首を振る。

「ま、どっちにしろ、強いよ、お前。犯人だって周りじゅうから決め付けられててさ、よくもまあ心折れないもんだ。一般棟にいた頃、ひどかったらしいじゃねえか。オレならきつとすぐに流されるだろうな。もう俺が犯人でいいよってさ」

「だって、違うもん。ノヴァキは犯人じゃない。それは紛れもなく、オレ自身が証人だから」

流されてしまおうと、何度思ったことだろう。

確かにオレがオレのままだったのならとつくにそうしていたに違いない。

矛盾してるけど、命失ったのがノヴァキじゃなくオレだったのなら、オレはたぶん犯人探しをしようとする思わなかっただろう、とすら思える。

だけどそうじゃない。

オレには責任がある。

ノヴァキとして生きる責任がある。

ノヴァキのためにも、ノヴァキとして支えれくれる人たちのためにも。

それは今、一番譲れないことだ。

だから諦めない。

ノヴァキを犯人だと決めつけようとする世界に視線を逸らすことなく戦い続けようと、そう思った。

「自分が証人か。たいした自信だよ、全く。初めて会った時はそんな印象なかったけど」

「ノヴァキは最初から強いやつだって」

「はは。分かった分かった。変なヤツだよ、お前。まるで……」

「まるで？」

何だろう？

「いや、何でもねえ。休み時間は終わりだ。とっとと終わらせるぞ」

その日。ルレインがその事に答えてくれることはなかった。

ルレインは何を言いたかったんだろう？

オレはその事をずっと考えていて……。



## 第29話、軽快に歪むピアノは、励ましの旋律

結局オレは、断ることもできないまま当日を迎えてしまった。

今は舞台袖、舞台からの盛り上がり之余韻縫うようにして、リシアとワカホがオレの元へとやってくる。

「いやあ。これでワタシの野望に一步近付いたってわけね！」

「あうう。緊張しました。偉い人たくさんいるんですもの……」

あっけらかんとした様子のリシアと、どっと疲れた様子のワカホ。二人はたった今舞台上で喝采を受けていた張本人で。

「しっかし、うまいことやってくれたわ、ノヴァキ。まさかこれから国を担う方たちの前でワタシの発明品を披露できる機会が転がってくるとは思わなかったわよ」

剛毅で緊張の欠片も感じさせなかったリシアは、とにかく嬉しそうだった。

「はは……」

失敗で終わるかもしれない、そんな事を思い……与えられた持ち時間半分をリシアたちに押し付けたとは言えず、オレは苦笑するしかなくて。

「あら、随分緊張してるわね。ま、無理もないと思うけど、会場はそれなりに温めておいてあげたから、頑張んなさい。あんたの夢だったんでしょ」

「……っ」

たぶん、リシアは励まし、後押ししてくれたつもりだったんだろう。だが、ノヴァキでないまがい物のオレにとっては、緊張感を助長させるものでしかなかった。

「平気ですか、ノヴァキ様？ お顔が青いです」

「も、元からだって」

「あんたはどっちかっていうと赤ら顔じゃない」

益体もないやり取り。

だけどオレの言葉にキレはない。

改めて思い知るのは、人の生を背負うということへの重さで。

浸る間もなく、オレは呼ばれる。

「頑張ってください、ノヴァキ様！」

「いってこい、ノヴァキ！」

「う、うん」

オレは、二人に押されるようにして……舞台の上に立った。ノヴァキのトランプットを持って。

視界が白い。

まっさらに眩しすぎる魔法灯のせいだろうか。

音もあまり聞こえなかった。

司会役を仰せつかったらしいルレインの、オレを紹介する声は耳に届いていたが、緊張のためか周りの喧騒のためか、言葉として具現



していなくて。

ただあるのは、自分がカリウス・カムラルの時から感じていた視線だけだった。

いくつもの視線。

そこにはかつての友達、家族の姿も混じっている。

友好的、とは言い難い、それ自体が心刺す刃となる視線の大群。

いつもよりも、ひどく煩わしく感じた。

こっちの緊張がうつったみたいにぴりぴりと険悪な感じ。

何かに怯えてる感じ。

一体何に？

オレはルレインの話が終わったのを見計らい、頭を下げつつもそんな事を考えていて……。

すぐに気付く。

その対象は自分であると。ノヴァキであると。

(なんでっ……)

かっとなった。

なんでノヴァキがこんな目で見られなくちゃいけないんだろう。

そんな事分かつてる。オレのせいだ。  
そんな目を向けられるいわれはないって、信じたかった。  
何よりもオレ自身が、信じなくちゃいけなかった。

(やっつてやる……)

そう思ったら、さっきまでの駄目かもしれないって緊張はどこかに消えていて。

オレは顔を上げる。

真っ向から視線の大群を見据える。

いわれのない罪に、立ち向かうようにと。

それからは……ただがむしやらだった。

あの時聞いたノヴァキの一番を。

その音を必死になぞり、真似ようとする。

その時の感動の記憶を、手繰り寄せる。

始まってすぐのどよめき。

正直手応えはあった。

練習では一度も出せてなかった音。

ノヴァキの音。

追い詰められたからなのか、オレの心は冴えていて……。

(どっしって……っ)

そうして。

中盤に差し掛かった頃。

オレはようやくそれに気付いた。

初めてノヴァキに会ったとき、途中でやめてしまったはずの曲。

その曲だけはそれ以降披露してくれなかったはずの曲。

だからオレは、その先を知らないはずなのに。

どうして今、その続きが吹けているのだろうか。

それはオレが勝手に考えて作ったものじゃなかった。

確かに、記憶にあるものだった。

「……………」

それは……初めて聞いたはずなのに、懐かしさを覚えた、その答えだ。

視界の白は一層の濃さを増し、オレを忘れ去っていたはずの記憶の歪に沈ませる。

そう、オレは確かにその音色を聞いていたのだ。

十年前、新しい神がこの地に舞い降りた日。

魔物の大群が町を襲い、父さんが死んだ日に、安全なスクールの中で。

危険に見舞われた、外の世界から。

オレは、ただただ感動していた。

なんて綺麗な音色なんだろうって。

それが人々の阿鼻叫喚を誘う、鎮魂歌であるなどと、どうして思う  
だろう？

信じたくなかった。

こんなにも美しいのに。

だから……余計なことは、知らないふりをしていたのかもしれない。  
今の今まで、ずっと。

ひいんと。

余韻残して、演奏が途中で止まった。

たぶん、知りたくなかった事を理解してしまって、怖くなったんだ  
と思う。

このまま吹き続けていいのかって。

オレはその時初めて、本当の意味でノヴァキの事を疑ったんだと思  
う。

今までとは別種のどよめきが広がる。

多くの戸惑いに混じって、その中には確かに安堵も含まれていて。

やっぱりそうなんだ……って。

オレが後一步のところまで生きる価値を失いかけていた……その瞬間。  
弾むように柔らかい音が、オレの背後から響いてきた。

「サミィ……」

思わず漏れる、オレの小さな眩き。

サミイはそれに一つ頷いて、軽快にピアノを歪ませる。

オレと同じように感動し、きつと知れず恐怖していただろう音を。それは、ここで諦めるのかって訴えるような、励ましに聞こえた。

魔族と手を取り、生きる。

この曲を受け入れ、昇華させることこそが。

怖いものじゃない、ただ心打つものであることを証明することこそが。

今オレができることなのだと言わんばかりに。

「ありがとう……」

サミイだって怖いはずだ。

オレにしか分からない程度だけど、その音は震えている。

でも、完璧じゃないからこそ、その音は諦めかけていた心に火をつけた。

オレは再び『トランペット』に口付ける。

サミイと一緒に痛い過去をなぞる。

それが過去を乗り越え、先に進むための儀式であるかのように。

するとそこに。

乗り遅れちゃったよ、なんて舌を出して、キキョウが即興の歌をつけてくれた。

詩のないはずの名も知らないその曲に。

後は……曲のもっとも美しく心打つ部分の繰り返しだ。

一人、一人と曲に加わるものが増えてくる。

次第に会場が一つになる。

種族なんて、関係なくて。

それは、母さんが望んでいたもので。

ノヴァキの夢、そのものなんだろう。

その事を深く深く思い知らされて。

オレは初めて……泣いた。

天に届けと。

音鳴る花びらを天に向けながら。

とめどない涙。

それはノヴァキに対する痛みと哀しみ。

そして申し訳なさ故だった。

だってそうだろう？

ノヴァキがずっとずっと思い続けてきただろう夢が。  
叶わなかったはずの夢を。

ふいにやってきたこのオレが、横から搔っ攫うみたいに叶えてしま  
ったのだから……。

( 第30話につづく )

### 第30話、後に続いた言葉は、その現実にある希望

そして……宴も酣なその後。

本来ならノヴァキが受けるべき賞賛や喝采を受けるのがどうにも忍びなくて。

オレは半ば逃げるようにして、カムラル家の庭園にいた。

いつまでも止まらない涙が恥ずかしくてしょうがなかった、って言うのもあったけれど。

今いるのは、背の高い植樹帯に囲まれた秘密の隠れ家だ。魔法によって改良され、とりどりの花が一年中咲き誇る。そんな場所。

「やっぱりここにいた。本日の主役さん」

「……っ」

ここでしばらく落ち着くまで待機していよう。そう思ったけど、そんな暇もなかったらしい。悪戯っぽい笑みを浮かべているアルに目ざとく発見されて、オレはまだ残る涙を拭い、なんとか会話の体裁を整える。

「どつやら、仲良しの道の第一歩は、なんとかなったみたいだね」「……だといいですけど」

そう言うアルは、満足げに頷いていたけど。



後半泣きっぱなしで恥ずかしいやら情けないやらで、決して満足とは言えなかった。

何よりノヴァキはこんなもんじゃない、そう思っていたから。

「あの時……何で泣いたの？」

と、そんな事を考えていると、よりもよって一番答えづらいことを聞いてくる。

「正直に言えば、よく分からないんです。オレはあの時の感情、その名前を知らない。もう二度と会えないんだって実感したのは確かだけど、それは悲しいって気持ちだけじゃなくて……」

だから答える気なんてなかったのに。

どうしてかオレは、今思ってるその本音を口にしてしまった。

それは、アルの人のなせる業なのかもしれないけれど。

「カリス、あの曲好きだったからね……」

「知ってたんですか？」

「知ってるよ。扱う人の心違えば、悪いものもいいものにも変わるってことをさ」

今はもう、オレは確信している部分もあった。

十年前に聞いた魂揺さぶられし音色は、オレたちの父さんを含めてたくさんの人を犠牲にしただろう音系魔法のものだったのだと。

だが、だからこそそれをただ感動できる、心震えるものとして変えたかった。

歌と魔法は違うんだ。

きつとノヴァキもキキヨウと同じことを考えていて、

その忌むべきものを、感動できるものに、昇華させることを夢としていたのではないかと、今は思う。

「それで、どうだった？ 今日参加してみて。真相、究明できそう？」

ノヴァキのおかげで、助けてくれたサミイやキキヨウのおかげで。

今日一日オレは大分みんなに歩み寄れたって、そんな気はしていた。だからこそためらう。

オレのせいで誰かを疑わなきゃならないなんて。

「演奏が止まるあの瞬間まで……オレは答えを見つけたと、そう思っていました。犯人なんていないのかもしれない……って」

これは、あくまでオレの想像でしかないけれど。

初めて会った時、ノヴァキは『トランペット』に似たマジックアイテムの力を解放しようとする、その直前だったんだろう。

偶然か必然か。

オレは知らぬままにそれを止めた。

それから一度も聞かせてくれなかったのは、ノヴァキ自身、自分がしようとしていたことにためらいがあったんだろう。

オレが少しでも抑止力となったのならそれは喜ばしいことだけだ。

「つまり……カリス自らで命を絶つた？ そんなばかなこと」「ええ、愚かでした。一瞬でもそんな事を考えてしまった自分に」

それは、最悪な想像だ。

オレは演奏を止めるその瞬間まで、そう思ってしまった。

自分のしようとしたことに負い目を感じて。

あるいはかつてのノヴァキが口にした言葉の通り、当初の目的オレを道連れにしようとしたのではないかと。

でも、違うのだ。

そんなこと、あるはずがない。

何故なら、ノヴァキは夢を口にしたからだ。

自分の持つ道具がどんなものか分かっているなお、舞台に立つことを。

オレは、その時の言葉が嘘でないことを確信している。

一度は止まりかけたけど。

オレのような紛い物でも、みんなの助けが合ってその夢を叶えることができたからだ。

それに、よくよく考えてみれば前提がおかしいんだ。

確かにノヴァキは、覆滅の魔法を知り、そのための道具を持っているたかもしれない。

でもオレには、そんな夢を持つノヴァキが、自分の意志でその道具を悪事に使うなんて到底思えなかったんだ。

震えながら、御伽噺の勇者のように、ワカホを庇ったノヴァキが。

あえてロシアのことを遠ざけていたノヴァキが。

魂を入れ替えるなんて、ようでもないオレの我が侘を聞いてくれた優しいノヴァキが。

自分がどうなるか知った上で、オレを滝つぼに落とすとしたのだとしたら。

誰かに命令されていたのかもしれない。

もしかしたら、何か弱みを握られていた可能性もある。

「……犯人は別にいます。オレは理由を知らなくちゃいけない。きっとそれが、オレにできる最低限の償いだと思うから」

正直に言えば、それは今までのものとは意味が違った。

もしノヴァキに命令してる人がいたとするなら……許せなかった。

殺したいほど憎いなら、オレに直接言えばよかったんだ。

人のせいにして自分は隠れてるなんて、たとえオレにそれだけの非があっても許せるものじゃなかった。

「……犯人探しの期限、建国祭当日までだって、そう言ったよね？」

新たな決意を秘めたオレを見て、アルはどう思ったのだろう。

逃げてなどいられない、そう思わせる言葉を投げかけてくる。

オレがそれに頷くと、しかしアルは首を振った。

「本当は少し違うの。その日が期限なんじゃなくて……その日までには真実が分かるからなの」

「どうということですか？」

当然、真相を探るのにオレだけが動いていたわけじゃないんだろう。むしろオレは今まで意図的に見当違いの方向へと動かされていた気がしなくもない。

「今年のお客さん、誰だか知ってる？」

「それは時の根源……って、まさか時の根源の力を借りるんですか？ 時間を戻したりとか！」

だったら、こんな風に悩むことはない。

何もなかったことにできるのならば、これほど喜ばしいことはなかったけれど。

「残念だけど、時の神って言ったって君が言うようなすごい力は持っていないんだ」

オレの過剰なまでの喜びは、一瞬で鎮火される。

期待していただけに、その落胆は大きくて。

現実というものを重く実感する。

今に、後悔する。

「私たちとそう変わらない。過去と未来を見ることくらいはできるだろうけど」

しかし、後に続いた言葉は。

その現実にある希望だった。

「それじゃあ……」

「うん、うまく話を聞いてもらえれば、真実が分かると思う」

だからアルは、その日に答えが出ると、そう言ったんだろう。

そしてその言葉には、まだ続きがあった。

「その事は……真相を知られたくない犯人だって気付いてる。おそ

らく犯人はその日に行動を映すんじゃないかな。全てを知られる、その前に」

「そんな無茶な、そんな事した時点で、全てが台無しになるんじゃない……」

「そもそもそれが目的だったとしたら？ 神を滅ぼすことが。犯人は、その当日までその正体を知らなければいい」

それは、かつての悪い魔人族がしようとしていたことで。

「となると、カリスを殺したのは、その目的のために一番の障害になるから、と推察できる」

「そんなの……そんなの絶対に止めなきゃ」

そんな事をしようとする人が、オレの知っている人なら、尚更。

「そう、そこであなたの出番よ。誰でもいい、祭の代表者の補佐につくの。おそらく、一番危険なのは儀式の後、神がやってくるその瞬間だから」

自分の無実を証明するためには、どんな手を使ってでも。アルの言葉には、そんな意味合いも含まれていて。

「分かりました。やってみます」

オレはそれに、しっかりと頷いていた。

そんなひどいことが理由だったのならば。

絶対に許しちゃいけないって、そう思ったからだ。

オレはその時、与えられた使命に熱く燃えていて。

故に気付きようもなかった。

今いる場所が、いつもの校長室などではなく。

こっそり聞き耳を立てようものならば簡単にできてしまう場所であったことを。

事実……オレたちの話を盗み聞きしていたものがいたことを。

）第31話につづく（

### 第31話、一度そうと決めたら、揺るがぬ似たもの同士

そして……次の日の夜。

オレは『夜を駆けるもの』として、再びカムラル家を訪れていた。

昨日は大賑わいになったカムラル家も、今や別物であるかのように  
人気もなく、静かだった。

あるのは闇だけ。

今の姿にふさわしいもの。

昨日の今日でいるだろうか。

そうは思ったが、とりあえずとばかりに元自室の窓を軽く叩く。

「……来るかな、とは思ってましたけど。あいにく、今日はあなた  
に愚痴るようなことはありませんよ?」

間髪おいて開かれた窓。

その割にはつれないサミイの言葉。

そのすました様子が、ちよつと前のサミイみたいでおかしい。

そうやって少しずつでも痛みを忘れてくれれば、なんて勝手なことを  
思い苦笑する。

「何ですか、仮面の奥で含み笑いなんて、趣味悪いです」

「今日はオレのほうをお願いがあつてきたんだ」



唇を尖らすサミイ。

せつかくお願いしにきたのにいきなり機嫌を損ねるのもなんだと思  
い、笑みを引つ込め今日やってきた理由を話す。

「へえ。 お願いですか？ 初めてですね。 あなたが私にそんな事言  
うのは」

驚きと意外さの混じった声。

言われてみればと、オレはちょっと思う。

『夜を駆けるもの』の時もそうだったけれど。

カリウス・カムラルであった時から、 お願いを聞くことはあっても  
お願いすることはなかったんだって。

「駄目かな？ ただでさえおせっかいな依頼なわけだし」

「……別に構いませんよ。 聞きましよう。 いくらなんでもずっと無  
報酬というのも心苦しいと思っていましたから」

心苦しい、という割には尊大な物言い。

オレにはあえてやっているようにも見えたけれど。

「サミイは今度の建国祭で、代表者の一人を務めるんだよね」

「ええ。 カリスの代わり、ですけどね」

「その補佐役、オレにやらせてくれないかな？」

代わりを強調するサミイの言葉が耳に痛かったが。

アルに言われた時にはもう、オレはサミイにつくことを決めていた。  
理由はたくさんあるけど、サミイしかいないって、そう思っていた。

「……………」

沈黙。

カリウス・カムラルであった時と同じで、断られてしまいそうで不安になる。

「も、もしかしてもう補佐役の人、決まっていたり？」

「いえ、そうではなく。それ以前にあなたが出るんですか？ 『夜を駆けるもの』であるあなたが？」

儀式の代表者は、ユーライジアの生徒に限られている。

つまりサミイは得体の知れないオレの事を慮っているのだろう。

「そこは大丈夫。オレはスクールの生徒だし。それに今日は、この仮面を取るつもりできたんだ。」

『夜を駆けるもの』の正体を知ってもらうために」

どんな手を使っても。

それで思いついたのは、正体を晒すことだった。

ノヴァキそのまま真っ向からお願ひしたら断られるかもしれない。何せ神に次ぐ危険に晒されるのは、オレの代わりにカムラルの守り手となってサミイに他ならないからだ。

もう、代わりはきかない。

だからオレは、サミイにつきたいって、そう思ったわけだけど。

「結構です」

にべもない否定。

かたくなな意思。

さすがに落ち込む。

「そっか。そりゃそうだよな。変なこと言ってるごめん」となる。他の代表者を当たってみなければならぬだろう。

確かまだ決まってるのは、キキョウだけだった気がするけど……。

「勘違いして一人で話を進めないでくれませんか？ 私はこう言ってます。仮面を取る必要はない、と」

「いや、そんな事言ってるじゃないじゃん……」

思わず反論。しかしサミイはイジワルそうに微笑むばかり。

全く、こうやって口八丁でからかうことなんて、変わらないってしみじみ思う。

「つまり、このままなら補佐役やってもいいってこと？」

「そういうことになりますかね。あなたは町での評判はよろしいようです。生徒であるなら、文句も少ないでしょう。……その素顔晒すよりはよっぽど、ね」

意味深な言葉。

いや、それは……。

「あなたは一番の容疑者ですからね。前科がある、と言ってもいい。カリスの事があって尚知らぬ間にあなたが私の元につけば、誰だって怪しむでしょう。それを考えれば、仮面の姿でいるほうがマシです」

紛れもなく、『夜を駆けるもの』の素顔を、知ってるものの言葉だった。

「それに、素顔のあなたと一晩過ごすのは少々きついです。あなた

を傷つけてしまうかもしれないから……そのままのあなたでいてください。その方が滑稽なぶん、笑えます」

「いつから知って……」

まさかバレしているとは思わず、呆然とするオレ。

サミイは、そんなオレを見れば部屋の外のものに聞こえるんじゃないかなろうかって勢いで笑みをこぼす。

「それが滑稽だと言っんです。そんなお手製の仮面とマントで自分が隠せるとお思いですか？」

……いくら私でもクラスメイトの声くらい分かります」

「あ……」

そ、そうだった。

本物はこの部屋の筆筒の隅にしまいっ放しだったんだっただ。

急ごしらえで似せて作ったんだけど、それは当然本物とは程遠いんだろう。

となると、リシアにもバレバレなんだろう。

二人で会ったことがあるのを、リシアがどう考えているかにもよるが……。

「いつまで呆然としてるんですか。当日は声を変えてみるなりしてくださいよ。立場が悪くなるのは私なんですから……」

「え？ い、いいの？ オレが補佐役しても……」

正体を知っていて尚そう言ってくれるサミイ。

迷いなきその言葉に、こっちが不安になる。

「いいって言ってるでしょう。報酬代わりです。そのくらい我慢します」

「だけど仮面なんてかぶってたら怒られないかな？」  
「しつこい、そんなの私の我が侬でどうとでもなります。何せ国を守る女ですから」

サミイは、オレに似て頑固だ。

一度そうと決めたら、その意見は変えないだろう。

サミイからすればオレは、身内を殺された……その犯人に一番近いものはずなのに。

一体どこからそんな自信が溢れてくるのが疑問でならなかった。

当然、頑なにノヴァキを信じたオレの事は棚に上げて。

「ほんとに、いいの？」

「あーっ、うるさいうるさい！ いったらいいんです！ その自分をとことん卑下するのなんとかならないんですか？ 昔っから見  
てて腹が立ってしょうがなかった！」

「うわっ」

その、最後の一言は余計だったらしい。

ついにはひそめることも忘れて大声をあげるサミイ。

とたんにごとごとと、周りが反応する気配。

これはさすがに気付かれただろう。

ケイラさん辺りが飛んできそうな勢いだ。

「た、退散っ、また来るっ！」

ここで掴まったら全てがおじやんだ。

オレはいつもの手順でバルコニーを飛び越え、ヴァーレスト風の力を借りつつ庭に飛び込む。

そしてそのまま外に向かって疾走。そのまま雷ガイゼルの魔力溢れる金網を飛び越え、夜の中に消える。

幸い、追ってくるものはなかった。

きっとサミイが何かしらの理由で足止めしてくれたんだろう。

一度だけ振り返ると、さっさとどこかに消えろと言わんばかりに睨まれたのが怖かったけど。

こうして一度断られたはずのものは、オレの予想を遥かに超えるあっけなさで、叶ったのだった……。

(第32話につづく)

### 第32話、問いかければ心響く言葉

そうして、運命の日。

建国祭前夜。

時の根源『リヴァ』を迎える儀式の日。

「いよいよ『夜を駆けるもの』、表舞台に登場！つてやつ？」

リシア特製の声の変わるマジックアイテムつきの七色のお面。それらしく新調したマントにシルクハット。

ばつちり決めて、いざゆかんと、夕暮れに染まる空の下ノヴァキ家を出ると、そこにはリシアがいた。

「いやあ、さすがにノヴァキの家から出てこられると妙な違和感があるわね。ワタシや未だに別人説捨ててないんだけどさ」

バレてるのだろうかと案の定リシアに聞いてみたところ、そりゃそうでしょと言葉を返されたわけだが。

ノヴァキと『夜を駆けるもの』が二人でいたことで、今と昔で『夜を駆けるもの』の中身が違うんじゃないかって、リシアは疑っていた。

「さあ、どうだろう？」

「またそうやってはぐらかす」

その考えが、正しいけど間違っている。

オレは、リシアの言葉の通り、はぐらかすことしかできなかった。

リシアを悲しませないように、オレはノヴァキでなければならな

ったから。

「にしても凄いわよねえ。まさかあんたが祭の代表者に選ばれるなんて。しかもどう考えても無理そうなカムラルんところのお姫様でしょ？ 一体どうやって落としたのよ？」

お姉さんに教えてみなさい、ん？」

山のふもとまで見送ってくれて言うから頷いたら、返ってきたのはその言葉で。

「落としたって。その言い方はなんだけど……正直言つと、オレも驚いてる。」

『夜を駆けるもの』で頑張ったのがよかったのか……」

「まあ、それも少しはあると思うけど……やっぱりルフローズの日のことが大きかったんじゃないの？ あんな泣き虫じゃ、悪さするようには見えないってさ」

「うう、オレが気にしてることを……」

痛いところをつかれて、唸るオレ。

そう言うリシアの目がとてつもなく柔らかく優しげなのが余計になんか癢で。

「いや、なんかこうやって送り出してるかさ、遠くに行っちゃうみたいだよね」

「大げさだな、別に遠くになんか行かないよ。ずっと側にいる。リシアがいるから、オレは今ここにいるんだから」

ふいの言葉に、もう二度とそんなことはないって誓うようにオレは呟く。

「同じ台詞をワカホにもしてなきゃ、満点だったんだけどね……」



すると、ジト目でそんな呟きが返ってきた。  
同じだと駄目なのかな？　なんてちよっと思っただけ。

「普通ないわよ。落ちるとここまで落ちてたはずなのに……あんなに  
気に入られるなんて。」

玉の輿に乗れるんじゃない？」

すぐさま、話題を変えるみたいにリシアはそんな事を聞いてくる。

「こし？　乗っちゃ駄目でしょ。それは時の根源が乗るやつだし」

「……こいつは手ごわいぜ」

またもぶつぶつ、ふどくうんざりした様子。

「リシア……？」

「なんでもないわよ。さっさと行って無実を証明して、とっとと幸  
せになっちゃいなさい！

お天道様の下、堂々と歩けるように！」

問いかければ心響く言葉。

オレはそれに一つ頷く。

「そうだね、そうなら祭の出店見て回る。ワカホたちも一緒に  
さ」

そして、山の入り口で立ち止まるリシアに、手を上げてオレはスク  
ールへと向かったから。

「……一言余計なのよ、バカ」

最後に呟いたリシアの言葉は、オレに届くことはなかった……。

陽が橙の色を増し、一瞬の紫を見せ始める頃。

辿り着いた中央棟……校長室には。

祭の儀式、その代表者の七人と、その連れ、アルを初めとする先生たちが既に揃い踏みしていた。

スクールもここ数日ですっかり様変わりし、祭の装いをしている。

「おうおう、さすが町の人気者、最後のご登場たぁいい度胸じゃねえか」

言葉通り最後になってしまったオレに、初めに声をかけてきたのは、残念ながら祭の代表者には選ばれなかったルレインだ。

得体の知れないオレが選ばれたのが気に入らないらしく、ちょっとガラが悪い。

「でもわたし、よるかけさんがこの生徒さんだったなんて知らなかったよ」。

その仮面すつごく目立つのにね」

たぶん、キキヨウは素で言ってるんだろう。

「ふふ、キキヨウさんたら。きつとよるかけさんは普段もつと目立

たないものをお召しになってるのではないでしょうか」「  
そりゃ普段は仮面なんかしてるわけない。

そう思うのが常識かと思いきや、キキヨウと同じ考えなひとがもう一人いたらしい。

そう言つて上品に微笑むルコナは、ルレインをさしおいて、キキヨウの補佐役を勝ち取っている。

その最大の勝因は、『ルコナならいいか』っていうルツキーのお墨付きではあるが。

当のルツキーは祭の儀式に参加しない代わりに忙しそうに飛び回っていた。

今は何やらアルと難しい顔で話し込んでいる。

「遅い、私の補佐役なんだから、家を出る時から待つてて当然なんじゃないの?」

そんな二人を見やりながらつくべき場所……サミイの元へとやってくる。

開口一番ぶつけられたのは、高貴な感じが随分と板についてきてる、そんな言葉だった。

「いや、だつて。ラネアさんとケイラさん、怖いんだもん……」

見逃してはくれたけど、ばっちり目をつけられていたらしい。

カリウスときにはまず向けられることのなかった鬼のような目に震え上がったものだ。

「ふふつ、練習の時も思つてたけど、随分印象違うよね、きみつて」  
リシアにも言われたことだけど、マイカにまでそんな事言われる始

末。

世間一般の『夜を駆けるもの』って一体どんな感じだったのだろうか、ちよつと気になったりはする。

儀式の代表者たちとは、この格好での顔合わせは既に済ませていた。神を呼び出す儀式、一晩歌い続けるその祝詞。

間違えずに覚えるためには、練習が必要だからと言われたからだ。

「そのなよなよをやめると言ってるんだ。お前は仮にもサミイに選ばれしものなんだぞ」

「そ、そついう言い方はやめてください」

そんな事言われたって直りようもない。

練習の時にも口うるさかったルートにそつ言い返そつとしたけど。

先に言い返してくれたのはサミイだった。

おお、ありがとうとサミイのほうを見やると。

「勘違いしないでください。私は仕方なくあなたを補佐に決めただけです」

「……………」

そんなはつきり言わなくても分かってたことを口にされる。

うん、そつだと思つてたよ？

「……………」はは。でも、選ばれるだけの力があつたつてことでしょう。

初めて観た長い祝詞を、あれだけ苦もなく覚えられたんですから

「……………」

そこに、からかうようなタイムの言葉。

痛いところをつかれて、オレは言葉に詰まる。

初めも何も、カリウスの時にとくに覚えてました、とは言えるはずもなく。

その事を失念して得意げになってた自分を恥じるばかりである。

「そうだね。そのギリギリまで覚えられなかった図体がでかいだけなのとは大違いだよ」

「……ふん」

そこに、ちょっとトゲのあるマイカの言葉。

鼻をならし、ルートの後ろにいるキミテが、マイカから顔を背ける。そう、オレが『夜を駆けるもの』としてサミイにつくにあたって、一番びつくりしたのはそこだった。

サミイに聞くとところによると、マイカとキミテが大喧嘩をしたらしい。

オレはてっきりマイカは自分の補佐役にするためにキミテを連れてきたのかと思っただけ。

結局マイカはティンと、キミテはルートにつくことになった。ルートにしても、ティンと組むのは嫌だったそうで、ちょうど良かったとか。

かといって、新たな組み合わせが馴染んでるわけでもなく。お互いに会話は無い。

マイカはティンに対しつつっけんだし、ルートは腕っ節がある割に大きなキミテを怖がっているような節がある。

だからなのか、その腕にはずっと白猫さん……ヨースを抱いていた。今は、周りのがやなどお構いなしにルートの腕の中で眠りこけている。

聞いたら、特例で一緒に連れてくのを許してもらったそうだ。

オレの仮面が許されるのだから、だそうだが。  
何だか取られちゃったみたで、ちよつと寂しい。

「な、なんだ。この子はやらんぞっ」  
そんな事を考えてみていたら、心読まれたみたいそんな事言われる。

仮面かぶっていて表情は分からないはずんだけど……これでも可愛いもの好きな力の賜物だろうか？

「それではみなさん揃ったところで！ 時の根源リヴァ様を迎える儀式を始めるよ！ 『代表者』の人たちは所定の位置についてください！」

そんな事を考えていると、朗々と響くアルの声。

ばたん、とひとりでに開かれる校長席の真裏の空かすの扉。  
練習通りの前夜祭儀式開始の宣言。

この後の段取りは、もう頭に叩き込んである。

「ルコナ、頑張れ！」

「キキヨウ、寝たりするんじゃないぞ！」

「……っ」

「そんな事しないよお」

応援組のルレインとルツキーに励まされて、おそろく一番問題ないんだろっ組み合わせのキキヨウとルコナが、一番に下へ下へ続く階段へと消えてゆく。

「ゆ、ゆくぞっ……………」  
「……………ああ」

その次にお互い妙に緊張しているルートとキミテが。

「マイカ、行きますっ」

「ちょ、ちよっと待ってくださって……………」

一人で降りようとするマイカを、サインが慌てて追いかける。

そうして、残されたのはオレたち二人。

「行きますよ」

「う、うん」

差し出される手。

違和感などまるでなく無意識のままにオレはサミィの手を取る。

口の端に笑みを浮かべていたアルに頷かれて。

オレはそれに答えるようにして頭を下げ、闇の中へと降りていったのだった……………。

(第33話につづく)

### 第33話、歌うより考えないといけないこと

開かずの扉の向こうは、オレが思っていたよりも深く広大だった。どこまでも続く闇の中に、魔法灯で光る階段が浮かんでいて、ぐねぐねとうねりながらずっと続いているような、そんな感覚。

「覗き込まない。また落ちますよ」

「だ、大丈夫だって」

手を繋いでいるのはそのためだ。

虚勢は張ったが、まさかそこに足場のない、ずっと下まで続く闇があるとは思わなくて、足を踏み外しかけたことがあったからだ。

「まったく……」

なにやらぶつぶつ呟いていたけど、後半はオレの耳には届かない。

それでも手を離すことはなく、一体どうやって作ったんだろうって思えるおっかない浮石の階段を下ってゆくと、すぐに踊り場が現れた。

ここは目的地までの中間点。

ここからは階段が四つに分裂し、それぞれの組が指定された階段を下ってゆくことになる。

オレたちは火の方角「東」だ。

踊り場で一呼吸入れ、すぐに赤石に変わった階段を降りてゆく。

そこからは、階段のうねりが一層強くなる。

魔法灯は足下しか照らさず、他の三つの階段はすぐに見えなくなっ



て、ぐるぐると下っていくうちに自分がどこにいるのか分からなくなってくる。

ちようどそれは、母さんのいる場所へ向かう途中の虹の泉の中に入った時のような感覚に似ていた。

何も見えない闇の中から何か飛び出してくるんじゃないか……そんな気さえする。

でもオレはもう、目をつむったりすることはなかった。

それは、以前よりもずっと、握られたサミィの手が頼もしく……あるいは頼りなく感じるからだろう。

それは責任の重さだ。

サミィに全てを押し付けてしまったその我が侘に対する代償。

守らなければならぬ。

サミィはもう、一人なのだから。

「……つきましたよ」

「あ、う、うん」

そんな事を考えていると、いつの間にかやらオレたちの持ち場に到着したらしい。

オレは頷き、サミィの手を離すと、辺りを見回す。

もう慣れた場所だが、確認は大事だから。

赤く、ぼくと光る魔方陣を中央に敷いたフロア。

階段はいつの間にか終わっている。

そこは地面だけがある闇の部屋だ。

何でこんなつくりになっているのかは知らない。  
ただ、自分たちの世界からやってくる神様たちは、ほとんど光のな  
いところに住んでいて、光の根源以外は光に慣れていないから、と  
いうのは小耳に挟んだけど。  
なんて言うか、意識過剰なほどに凝っている気がする。

光源は、魔法陣自体の灯りとその真ん中にある一つの魔法灯だけ。  
確かにそんなところに一人でいたらたまらないだろうなって、そう  
思う。

「……」

「ん？　どうかした？」

「いいえ、何も」

そんな事を考えていたらじっと見つめられていた気がして。  
そう問いかけると、ぷいとそっぽを向くサミイ。

練習の時はそうでもなかったのに、何だか今日は機嫌が悪そうだっ  
た。

本番で緊張しているだけなのかもしれないけど。

……と。

それからまもなく、かすかに届く鐘の音がした。  
儀式の始まりの合図だ。

「……」

サミイは黙って頷き、オレもそれに頷き返し、陣の外へ。

サミイがよく見える位置に、肩肘をつけて待機をする。

サミイはそんなオレを正面から見据えた後、オレの後方真上を見上げる。

そこには、一見闇だけしかないが、四方に立つ代表者のその視線の先には、輿……舞台があつた。

その場所こそが、神の降り立つ場所だ。

とはいっても実際は真っ暗なので、そう聞いてるだけのことだけ。

まあそれはとにかく。

四人の代表者は、鐘が鳴るごとに神を呼び出す、その祝詞を歌い上げることになっている。

日が昇り朝を向かえ、神が訪れるまでぶつつづけで歌い続けなければならぬ。

最初はそんな風にも思っていたけど、よく考えれば祝詞はそこまで長くはなく、繰り返しても飽きられるだけなんだろう。

実際は鐘が鳴るたびに一曲、それを十二回、全十二曲を披露する、といった感じだ。

祝詞は方位によって違うので（聞いているのかどうかは怪しいけど）、お客として迎えられる神は、四十八曲聴かされることになる。

鐘が鳴るのは、一時間に一回程度。

確かに貫徹ではあるが、余程のことがない限りオレの出番はないだろう。

オレはただ、サミイを見守っていればいい。

問題はそれ以外の空き時間をどう過ごすか、なんてことで……。

（変な儀式だ）

きつと誰もが思ってるだろうことを口にしつつ、オレはサミイの歌

声を聴くことに専念する。

一曲目は、火とはきつと対極にあるだろう水ウルガゼの曲だ。

空舞うことを夢見る、魚の歌。

何でか分からないけど、泣けてくる。

歓迎の曲としてがいがなものかとは思っけれど、オレは好きだった。

キキヨウのように誰もが認める上手さではないけれど、それでもサミイが必死で頑張つて歌ってるからそう思えるのかもしれない。

とはいえ、その感動もずっと続くわけじゃない。

何起こることもなく、あつという間に最初の一曲が終わる。

控えめに拍手。

きつと睨まれたけど、別に拍手をしては儀式に支障がありませんと、言われたわけでもないので別にいいだろう。

オレはそのまま立ち上がって、ねぎらいに陣の中へと入っていく。後ろが闇なのはちょっと怖いのだ。

それに次の鐘がなるまでの時間は短いようで長い。

すこやかに次が迎えられるよう、小粋な小話の一つもしなきゃって感じた。

「お疲れ様。やっぱり泣けるね、この曲」

「それは褒めてるんですか貶してるんですか？」

「もちろん褒めてるに決まってる」

これからの待ち時間は、未知の領域だ。

何せ練習の時は間髪おかずに鐘が鳴ったから。

「……………そうですか」

オレがそう言って笑うと、すぐに興味を失ったみたいに、そっぽを向いて陣の真ん中にしゃがみ込むサミイ。

オレはどうしようかって考えていると。

「突っ立っていると目障りです。……………座りなさい」

「う、うん……………」

少し怒ったような、そんな言葉。

従うようにして隣に座ると、きつと睨まれた。

「な、何？」

「……………いえ、何も」

おそろおそろ訊けば、さっきと同じ言葉が返ってくる。

そのまま顔を背けられて、気まずい。

それが夜通し続けばオレはおかしくなるかもしれない。

どうにかして状況を打開しなければと、オレは話題を探す。

「んーと、あ、そうだ。いつもの愚痴を聞こうじゃないか。今日はどうせここにいっぱなしなんだし」

まずは駄目もとでそう切り出してみる。

顔を向けてくれないサミイを見てみると、そんな気分ではないかな、とは思ったけれど。

「愚痴……になるかどうかは分かりませんが、聞いてもらってもいいですか？ 話を」

「うん、もちろん」

悩んだ末の了承の言葉。

オレは気分上げて頷く。

「以前私は……カリスに誘われたことがあるんです。この儀式の補佐役をやってくれないか……って」

「……うん」

そんなに前の話じゃない。よく覚えている。

「でも私はそれを断りました。その時は私よりふさわしい人がいるでしょうって、そう言ったんですけど……」

「うん」

「それは嘘だったんです。本意じゃなかった」

「……」

中々にびつくりなお言葉。

当然、何故って疑問が浮かんでくる。

「何故だか分かりますか……？」

と思つたら、その質問自体をオレにされた。

戸惑い、焦る。

「い、いや、ごめん。分からない、降参だ。一体、どうして？」

「少しくらい考えてもらってもいいとは思つんですけどね」

時間はたっぷりあるのだからと苦笑のサミィ。

オレは、何とか考えてみることにする。

「うーんと、他に補佐役としてつきたい人がいたとか？」  
一番仲のよかったマイカにすら人見知りの気があったサミイだから、違うだろうなあと思ったけど、それしか思いつかなかったので、そんな事を言ってみる。

「違います」

「うむむ。……なんだろ、実はカリウスのことが大嫌いで一緒にいるのも嫌だった……とか？」

自分で言っていて悲しくなってくるけど、幸いにもそれにもサミイは首を振ってくれた。

「そんなわけないことくらい、あなたが一番分かってるでしょう？ カリスがいなくなっただけで泣いていた私を励ましてくれたお節

介が」

「……う、うーむ」

何だか二重の意味でこそばゆい。

オレが唸っていると、サミイはひとつ笑みをこぼして。

「本当に知らないんですね？ 街の人気者のあなたならこの儀式の野暮ったい噂なんて当然知ってるものと思ってましたけど」

野暮ったい噂？ 何だろう？

「ごめん、勉強不足で」

身体が変わっても、仮面をつけてもオレはずっとこうなのかなあと、ちよっとしみじみ。

「別に謝ることじゃないです。ろくでもない噂ですからね。……それを鵜呑みにしてしまってる私が言つのもなんですけど」

何だか嬉しげで、楽しげなサミイ。  
最初にあつた不機嫌さがなくなっている。

「……その噂とは？ 是非ご教授を」  
いい傾向がなつて、オレは調子に乗つてそう聞いて。

「ああ……うん。本当にたいした噂じゃないのよ？ ただね、十年に一度のこの祭の代表者とその補佐役をした人は、永遠の愛が約束される、あるいはずっと一緒にいられるっていう……」  
後半尻すばみに赤くなつて、そんな事を言うサミイ。

「ええと……つまり？ カリウスとそうなる……そんな噂されるのが、嫌だつたつて言うこと？」  
ぶんぶんと首を振るサミイ。

ん？ 今の言葉に対して否定つてことは……。

「逆なの。カリスに誘われて、カリスもその噂、知つてると思つて家族なのに……それもいいかになつて思つちやつて。そんな事考へてる自分がすごく恥かしくて嫌で……それで断つたの」

もう、こっちが心配になるくらいに茹蛸だ。

だけどそれでようやく、意味が繋がつた。

何故サミイがあの時断つたのかが。

あれ……？ でも、待てよ？

「そしたら何故今オレと君はここにいるのでしょうか？」

「そ、そんなのっ！ 察しなさいよ！」

怒られました。

完全にそっぽを向かれました。



また振り出しに戻るどころか、さらに悪くなっています。

とりあえず察しろと言われたので、無い頭で必死に考えてみる。すると、意外にも、その答えは考えるまでもなく、すぐにぴんと来た。

「そっか……うん、いいよ。ずっと一緒にいよう。オレもさ、ちょっと思ってたところなんだ。」

サミイのこと、ずっと守ってあげなくちゃ……って」

それが我が侂を通してもらってるオレの責任だ。

サミイも同じ気持ちなら、これほど喜ばしいこともないだろうし。

だから笑顔でそう言うよ。

サミイはお魚のように口をぱくぱくさせていて。

「なに？ お腹減った？」

「あ、あなた……今自分が何言ってるかわかっています？」

「うん？ ……うん」

必死の形相。こくこく頷く。

すると再び視線を逸らされて。

そのまま、長い沈黙。

そんな事してるうちに二度目の鐘が鳴ったんだけど。

「あ、鐘鳴ったよ？」

「……変わりなさい。緊急事態が発生しました。私は歌うより考えないといけないことがあります」

「ええっ？」

ぴしゃりとそう言われて。

サミイは陣から出て、オレは陣の中にぽつんと取り残されたのだっ  
た。

「早くしなさいっ！」

「は、はいっ……」

それが、お互いの一生の関係を示す明確な構図であることは、その  
時はまだ知る由もなく。

(第34話につづく)

第34話、墮ちる世界の礎（前書き）

相変わらず短いですが、そろそろクライマックスかな。

### 第34話、墮ちる世界の礎

その後は、妙な緊張感があるにはあつたけれど。  
おおむね順調に儀式は進んだ。

問題なく鐘が鳴るから、他の組もうまくいっていたのだろうし、オレの下手くそな歌も捨てたもんじゃなかったんだろう。

そのうち緊急事態は解かれたのか、交互に歌い続けるようになった。

今は……半ばを過ぎた頃。

もっとも眠りの頂点であろう時間帯。

すっかりお互い口数は減っていたけど、ここで寝てしまつてはまずいだろう。

そんなわけでオレは思い立つ。

かねてから聞きたかったことを、聞くことにする。

「そつえばさ、聞きたいことがひとつあるんだ」

「……何です？」

サミイもそつ思っていたらしい。

視線は向けてくれなかったけど、すぐに相槌が返ってくる。

「カリウス・カムラルは病にかかっていた。前にそう言ったよね？  
それってなんだったのかなって。」

普通に健康そうに見えたけど」

というか思っていたけど。

サミイは、オレも気付いてないと、そう言っていた。

その時ははぐらかされたけど、今なら聞ける気がして。

「名づけるとするなら……それは激しい思い込みの病です。幸い私はかかりませんでした。カムラルの使命負うものには、よくあることだそうですね」

「それって……」

「なりたい理想、こうでありたいという気持ちが強すぎて、理想と現実を勘違いしてしまうんです」

「いまいちよく分かんないんだけど……」

曖昧な言葉。

首を傾げる。

すると、サミイは微笑み浮かべて。

「カリスは、その理想を叶えました。だからその、病はもう病でないのでしょうか……」

それは……それはつまり。

「死を望む……病？」

「かもしれませんね。カリスはずっと自分から逃げ出したかった。自分の使命から遠ざかりたかった。その苦しみをずっと知っていたから。悲しいですけど……今では少し思うのです。これでよかったのかもしれない、と」

それは、一つの可能性だ。

カリスを殺したその意味。

もし、その相手がその事を知っていたとするなら、  
ノヴァキが、その事を知っていたとするなら。

「……なんて迷惑なやつなんだ」

「同感です」

やるせない苦笑とともに、オレは理解する。

やっぱり一番悪いのはオレじゃないか……って。

そうして、十二回目の鐘とともに最後の曲を歌い終えて。  
オレたちは滞りなく、すべての儀式を終えた。

後は、中央の舞台に現れる時の根源リヴァを待つだけ。

おそらくは、一番危険かもしれない、その瞬間。

「……今更ですけど、本当にいらっしやるんですかね、時の神は」  
「た、たぶん」

オレはサミィとともに闇しかない中空を見上げながらその瞬間を待つ。  
それはとてつもなく長いようにも、ほんの一瞬のようにも感じたけれど。

「ん……？」

最初は瞬くような白い光。

それがだんだんと、どんどん大きくなって……。

「来ました！」

膨れ上がる光。

久しぶりの光に目が眩む。

照らされたその場所には、確かに輿とも言えるものがあって。

そこにいたのは、光の鳥だった。

おそらく、光の燐粉をまく翼だけでも、オレの身長の一・二倍はある。優雅に神秘的に羽ばたきながら、甲高い声をあげている。

「あれがリヴァ、なんですか？」

「だと思っけど……」

ここからあそこにはどうやって行けばいいのか、これからおもてな

しをするために話は通じるのか、  
そんな疑問はいくつもわいてきて……。

だが、しかし。

その疑問が解消される前に……事は起こった。

「……………え？」

「こ、この音色はっ!」

ふいに聞こえてきたのは、懐かしくも美しい『トランペット』の音。

青ざめてお互いの顔を見る。

だってそれは、ノヴァキの……あの一番感動した、だけど恐ろしい  
音色だったからだ。

「ちよつとごめん!」

「あ、うん……」

慌てて近付いてきたサミィが仮面を取る。  
そして安堵。

気持ちは分かる。

だってそれは、ノヴァキにしかかせないはずのもの、そう思っていた  
だからだ。



なら一体誰が？

オレが……そう思った時。

ドッゴオオオンッ！

「……………っ！」

遠くからの爆発音とともに、かすかな悲鳴。

「ま、マイカの声だっ！」

尋常じゃない何か起きた。

オレは声上げ走り出そうとして……。

ギイヤオオオオン……。

再びの爆発。

放たれる青い閃光。

優雅に待っていた光の鳥は、その一撃の元に打ち落とされて、光の粉となって闇へと散ってゆく……。

滅びれば世界が終わる。

そう謳われた根源が……あまりにもあっけなく。

(第35話につづく)

### 第35話、優しい闇に包まれたなら

オレたちは闇の中、走っていた。

絶望に苛まれながらも、北……『エクセリオ闇』の陣がある場所へと。

カリウスを……ノヴァキを殺し世界を滅ぼそうとする、その人物の元に。

そこにたどり着いたのは、オレたちが一番乗りだったらしい。

「随分と遅かったじゃないか……」

その人物……タインは笑っている。

初めて見るギラギラして瞳をたたえて。

その手には、魔族しか扱えないはずのものを持って。

『魔族は上手いんだ』

今更ながらに思い返されるのは、ノヴァキのその言葉だったけれど。

「マイカっ！」

それよりも。

直視できないものは、暗い大地にあった。

マイカが倒れている。

うつぶせの、その背中には、形容しがたい傷跡。

その小さな身体を真っ赤なものに染めて、沈みこむように。

「すべてが手遅れだと、そう言ったろう？　これで至近距離で風穴を開けてやったんだ。即死さ。」

……もつとも、世界は終わるのだから、意味はなさないがな」

「何があった!」  
と。

そこに、ルートやキキヨウたちも駆け込んできた。

そしてすぐに状況を理解し、息をのむ。

「マイカっ! ……き、きさまあっ、ゆるさんっ!」

「おっと、こいつは趣味の悪い。もつと無残な死がご所望と見える」  
「ぐっ……や、やめろっ!」

駆け寄り、殴りかかろうとしたキミテ。

しかしタインはそんなキミテを嘲うように、花びらめいたマジックアイテム……ノヴァキのものとは色違いのそれを、倒れ伏すマイカに突きつける。

「時の根源リヴァは死んだ。もう世界は終わりなんだよ。魔人様の勝利宣言くらいさせてくれよ、なあ?」

タインは薄ら笑いを浮かべて、一同を見渡す。

それに反応して最初に口を開いたのはルートだった。

「何故だ、お前が魔族だと？ そんなはずはないっ、お前はオカリ家の使者だと、私に言ったではないか！」

「はははは。助かったよ。こんな嘘も見抜けないんだからさあ。すっかり本物と私を勘違いして、気に入らん、とか怒っちゃってさ。かわいそうに。主が愚かだから今頃腐れた骨にでもなってるんじゃないかな？」

「お、お前と言うやつはっっ！」

悔恨の呟き。

ルートの眦に涙が滲んでいる。

それはきつと、騙されたことより、気付けなかったことが悔しかったんっだろう。

それを見て……オレは一步前が出る。

タインと真っ向から対話するために。

その身隠す仮面を、取り払って。

「タイン、そこをどいてくれ。話なら後でちゃんと聞く。マイカを助けなきゃならないんだ」

「……ほう！ やはりそうだったか。魔族の風上にも置けぬ臆病者のノヴァキよ。お前がなにもしなかったから苦労したぞ。せつかくカリスを殺す機会を与えてやったのに、あっさり返り討ちにあうのだものなあ？」

オレの言葉にまったく聞く耳持たず、タインは笑う。

ノヴァキとの接点を匂わす言葉とともに。

「あのリシアって子も可哀想に。せつかくみんなと一緒に死ねるのに、今頃は同志たちにひどい目にあわされて先に死ぬ破目になるなんてさ。臆病者のお前のせいだ！」

「……………っ、リシアに何をした！」

「何って？ 知ってるくせに。……………約束しただろう？ カリスを殺さなかったら辱めて殺すと！」

「……………っ」

ニタニタと、心底おかしそうにタインは笑う。  
もうそこにかつてのタインの面影はなかった。

だけどノヴァキの行動の意味が、ようやく分かった。

ノヴァキはやっぱり、弱みを握られていたんだ。

ノヴァキは本当はそんなことしたくなかった。

信じ続けてきたことが報われた瞬間。

だけど心はちっとも晴れない。

重くなる一方で。

「……………どうしてっ、どうしてこんな事するんだっ！」

「……………どうして？ ……はん。そんなもの楽しいからに決まってるだろっ？ 騙し、裏切り、殺戮、それが私の生の価値だからだよ！ それを理解しようとしてないお前が悪いのだ！」

本気の叫び。

知りたかった理由としては最悪なもの。

物語に出てくるような諸悪。

オレはそんなもの、実際にはいないんだって、そう思っていた。

それなのに。

「……楽しい？ だからそんなことを？ だから……カリウスを殺したの？」

「あれはそうでもなかったなあ。刺しても刺しても、泣きも苦しみもしない……全く腹が立つ。」

あの反吐が出る人を見下して勝ち誇ったような笑顔でさ！ 死ぬ間際まで私を見ていたよ……」

笑いを引っ込め、低い声。

それは決定的な言葉だ。

そこにあるのは、苛立ち。

それは暗に、楽しいからという理由を否定しているようにも思えたけれど。

「見下してなんかない、一度だって！」

「見下してただろうが！ それはお前が一番分かっているはずだ！

人間族はみんなそうだ、魔族を蔑み、見下す。弱いものの服を着て迫害する。見下して、道場してただよ。試験の時だってそうじゃないか！ お前が可哀想だから助けた！ みじめだからってお前と組んだ！

余計な同情でみすみす殺されるのにも気付かずによお！」

「違う……絶対に違う、カリスはそんな子じゃない！ 種族なんて関係ない、みんなが仲良くなれるって信じてた！ だってカリスは……っ！」

オレよりも早く。

そう叫んだのはサミイだった。

そして、オレのことをじっと見据える。

「ノヴァキと出会って幸せそうだった、楽しそうだった！ ……私にはカリスの気持ちが分かる。種族の違いなんて、ないんだって！」  
タインは間違っていると、叩きつけるように。

「……嘘を、嘘をつけ！ だったら何故、私は受け入れられなかった？ 私のものにならなかったんだ！」  
「……っ！」

それは、タインの本音の叫び、だったのかもしれない。

その瞳に、初めて悲しみが浮かんだ。

今までマイカに向けられていたマジックアイテムの銃口が、サミイのほづに向けられる。

「サミイっ…！」

オレは無意識のままにそんなサミイを庇って。

聞こえてくるのは、懐かしくも怖い音色。



オレは来るだろう衝撃に備えて身体をこわばらせたけど。

ザシュッ！

「が……あつ……っ？」

衝撃はなかった。

聞こえてくるのはタインの苦悶の声。

何が起きたのかと瞳を開けたのに、視界は闇一色。

何も見えない。

濃密な闇の気配が、その場を支配している。

一瞬、一瞬のことだ。

あまりに目まぐるしい展開に、理解追いつかなかっただけれど。

(これは……)

オレにはその気配に、見覚えがあった。

それは十年前。

祭の日。

遠目で見た……闇の根源、エクゼリオの気配だ。

「何故ですって？ そんなの聞くまでもないでしょ。あたしの親友はね、あんたみたいなどうしようもないのに惹かれるほど、馬鹿じゃないの」

心まで染み入り、同化して一つになってしまうような、深く思い闇それは、苛烈な意思を持ち……鈴なる可愛らしい、少女の声を発する。

「あなたの罪は重いわ。……絶対にゆるさないから」

それはオレの知っている声。

マイカ・エクゼリオ、そのものの声で……。

闇の魔精霊で、闇の根源であるそれと同じ名を持つことは知っていた。

だけど、お互いを等号で結ぶことはなかった。

敬い従う神の名を、自分の名前につけるのは、魔精霊でなくたって  
たくさんいるからだ。

まさか本人だったなんて思いもよらなかった。

父さんの死で少なからず恨んだこともあるその当人が。

オレの、最も近い場所にいたなんてこと、信じられなかった。

オレが知らないせいで、傷つけただろう人がもう一人。

そう思うと、いてもたってもいられなくて……。

その瞬間だ。

視界を覆い浸食し始めていた闇は、ふわりとオレを包み込む。

全てを一人で背負い込むことなんてないよ。

そんな、暖かく柔らかかな……声とともに。

そう認識した瞬間。

オレの意識は途絶えていた。

優しくその間に、飲まれるようにして……。。

（第36話につづく）

### 第36話、新たな明日を指し示す、その光

「……………」

どれくらい意識を失っていたんだろう。

オレが目を覚ますと、そこは中央棟の外、中庭だった。

「ノヴァキ、大丈夫？」

「え？ あ、うん……………」

視界のすぐ近くにサミイ。

その隣にリシアと、マイカがいる。

「り、リシア！ 大丈夫だったのか？」

「いや、それはこっちの台詞でしょ。理事長先生に引っ張られてここに来たらあんたが気を失ってて、姫様に膝枕してもらってるんだもの」

タイムの言葉を思い出しての言葉だったが、どうやら特に問題はなかったらしい。

と言うか、どうしてか言葉が随分と冷たかった。

「あ、ごめん。サミイ、ありがとう」

「いいえ、大事なならそれでいいんだけど……………」

膝枕されてるのはほんとだったので、礼を言って起き上がると、そこにはみんながいた。

タインを除く、みんなが。

それに気付いた時、マイカと目が合う。

さっきまで重症だったはずのマイカは、服はぼろぼろだけど元気そうで。

「マイカ、怪我は？」

「……治った」

オレの問いに簡潔な答え。

あまり触れられたくない、そんな感じ。  
だから代わりの言葉をオレは紡いだ。

「タインは……」

「謝りに行かせた。あたしは謝ってもゆるさないけど」

君がエクゼリオ当人だったのか？

初めに思い浮かんだのはその事だったけれど。

別にだからどうだと言うわけじゃなかったから。

十年前の件に負い目を感じていたのは分かったから。

口には出さない。

そうやって怒る様は、オレたちと何も変わらなくて。

「やられたらやり返す……これって間違ってるかな？」

「……」

オレは、その問いには何も言えなかった。

ただ、首を振る。

それでも駄目だと、今までのような甘い考えは、口にできなかった。

知りたかった理由。

知らないほうが良かった。

そう思ってしまったオレには。

それに、カリウス・カムラルの件を置いて、タインは庇いきれない罪を犯している。

「時の根源はどうなったの？ 世界は……」

このままマイカが口につけて口にした通り、均衡が崩れて世界が滅びてしまふのだろうか？

その割にはオレの周りを取り囲む世界はいつも通りに見えたけれど……。

「何だ、呼んだか？」

その時オレに言葉を返してきたのはキミテだった。

とたん、それまで怖いくらいだったマイカが、気まずそうに視線を逸らす。

「え？ も、もしかして……」

「その疑問には私が答えるよ」

オレが言葉を失い、すべてを理解しかけたところで。

アルがルツキーとともにやってきて拳手をする。

そして、明かされたその真実は、中々にどえらいものだった。

時の根源リヴァ。

時間旅行のようないそれたことはできないが、自分に起こる事を予知することはできるらしい。

自分の命の危険を知ったリヴァは、こっちの世界に来ていた先輩、マイカに相談を持ちかける。

それに対し返ってきた言葉は、だったらこっちに来るのを少し前倒しにして祭の日は魔法で作った偽者を囿にしたら、というもので。

拾ってきたって言うからどこでって気にはなってたけど、そんな真実があったとはって感じである。

更に、驚くべきことに、今回の中央棟の会場自体が作り物の偽物だったそう。

本物は、本物の神の世界へと続く扉は、母さんが守ってるらしい。

いろんなものに混じって、長年の謎まで解明してしまったその瞬間で。

「カリスのことがなければ百叩きくらいで許してやったのに……」



言葉尻とは裏腹に、重いマイカの声。

「タインは文字通り神の怒りに触れてしまった、ということなんだろう。」

そして……。

「タインが口にしたこと、それは嘘じゃなかった。」

「タインは人に紛れて過ごす魔族の仲間がいたのだ。」

「それは、スクールの教師だった。」

「試験の地図に載らなかった場所があったのは、オレを陥れるための彼らの仕業だったのだ。」

「リシアに危険が及ぼうとしていたのも事実で。」

「その魔族たちを捕らえたアルルツキーがリシアのことを助けてくれたらしい。」

「周りを騙っていたようで……しかし確実に罠に嵌められていたのは、彼のほうだったのかもしれない。」

「あ、そうだ。タインがなりすました、オカリー一族の人は？」

「ガイゼル家に代々仕える従者の一族。」

「タインがその人になりすましていたのなら、その人は今頃……。」

「みゃん」

「最悪の想像に思いをめぐらせていると、さっきのキミテみたいに返

事をしたのはルートの腕の中にいる白猫さんだった。

「……助けられてありがとう。そう言っているぞ。うちの従者が世話になった」

「ええと……」

「この子は獣人族なんだ。タインの姦計に嵌り、捕らえられ、ひどく衰弱してしまい、しばらくは猫の姿しか取れないそうだ」

「みゃんみゃん」

そうだそうだと頷く白猫さん。

じっと見つめていると、ぷいと視線を逸らされる。

もしかして、戻れないなんて嘘なんじゃないかなって思ったけど。

「となると後はオレだけだな……」

「ノヴァキ？」

落とし前、というか約束だ。

不安げなサミイを制し、オレはアルの前に立つ。

「どした？」

「アルさんは……こう言ったよね。オレの無実が祭始まるまでに証明されなければ、オレの命はないと」

首を傾げるアルに、オレは片眼鏡を指し示す。

「犯人はオレじゃないことは証明されたかもしれない。だけど、オレに責任がない、とは言えない」

「……少なくとも犯人で通じていたのは間違いない。加えて、カリ  
スと組んだのは計画的なもので、  
共犯と言ってもおかしくない……と」

「ちよつと、二人とも何言つて！」

オレたちのやり取りに、声上げて駆け出そうとするサミー。

しかしそれは、いつの間にそこにいたのか、ケイラさんたちに止め  
られる。

「待つてよ、それつてワタシのせいで脅されてたからでしょ！ ノ  
ヴァキは悪くないじゃない！」

リシアが言うように、仕方のない理由はあつたんだろう。  
でもこれは、オレ個人の落とし前だった。

オレがノヴァキとしてこれから生きることが本当に正しいのか、答  
えが欲しかったんだ。

「そうです、ずっと一緒だつて約束したじゃないですか！」

さらに続き口を挟んだのは、リシアと一緒にいたワカホだ。

そう、彼女の言う通りだ。

オレがノヴァキとしてみんなと一緒にいていいのかどうかと。

オレはそんな想いを込めて、アルを見据える。

「わかりました。それじゃあ今から審判にかけます。あなたが生き  
る価値なしと十二の神に判断されれば、その眼鏡はあなたの頭蓋を  
砕くことですよ」

「……はい」

真剣な瞳。

オレは一つ頷く。

近付くアルの手。

それがそつと、片眼鏡に触れて……。

「ていつと。……おやおや、神は生きよと申しておるようです。救われましたね、ノヴァキさん」

「……え？」

あっさりと、なんの余韻もなくアルは眼鏡を外し、放り投げる。そこには、呆然とする無事なオレが残されて。

「……ちよつと、何これ。ただの眼鏡じゃない。びっくりさせないでよー！」

「もう！ からかったんですか！」

何故かオレが怒られる。

「ちよ、ちよつと、どういう事？ こ、こんなんでいいんですか？ほんとに神様に聞いた？」

あまりの温情に、逆に焦る。

オレは、リシアから受け取った眼鏡を確かめながら（確かにただの眼鏡だった）そう聞いて。

「そりゃもちろんっっていうか、聞くまでもないっっていうか？ 疑うなら聞いてみれば？ ちよつと今ここに四人ほどいらっしやるんだ

し  
「ええっ？」

根源は祭の後、誰に知られることなく、世界に同化するという。

……同化するってそういうこと？

人の世界に溶け込むってこと？

そんなのってあり？

慌てて辺りを見回す。

マイカとキミテ以外に二人、あからさまに反応した人が二人いる。

ちっちゃい羽根の人とか、いつもおどおどしている異国のお姫様とか。

世界に関わることだから、誰とは言わないけど。

「でも……」

ほんとにいいのだろうかって、そう思う。

オレがノヴァキとして生きる、価値があるのかって。

「うだうだ言うなって、何かを償いたいんなら、生きて償え、生き地獄を味わえ。」

……それが生きてるやつの責任じゃねえのか？」

そうしたら、オレに価値ある言葉をくれたのがルレインだった。

「そっか……そうだよね」

それは天啓。

まさにその瞬間こそが、本当の意味でオレが生きる価値を見出したその瞬間で。

「ほら見てみる、お前の決意にあった素晴らしい朝日じゃねえか」  
「ほんとだ、綺麗だな……」

そうして。

オレたちは肩を組み、ずっとずっとその空を眺めていたのだった。

新たな明日を指し示す、その光を……。

(第37話につづく)

第36話、新たな明日を指し示す、その光（後書き）

少しばかり唐突なのは仕様です。  
次で最後かな。

### 第37話、さいごを迎える、しあわせな朝

いつの間にか、朝が来ていた。

あの日のような心地よい光が、目に眩しい。

……最期を迎えるのには、いい朝だった。

「……………とまあ、こんなとこだ。これが私がカリスであり、ノヴ  
アキである理由だ」

「ちよ、ちよつと待てつて、じいちゃん！　なんで最後の落ちがそ  
んな微妙なのさ！

……………つーか終わり？　もっと話すことあるでしょ！　その後とかさ  
！」

カリス・カムラル。

かつてそう呼ばれた自分とみまごうばかりの、一人の少女。

その自分偽る病と、重い宿命を背負った少女。

「……………いや、同じにしては失礼か。お前はカムラルのものの中でも、  
誰よりも美しい」

「何だよ急に。照れるじゃ……………つてはぐらかさないでよ、続きっつ  
！」

だだをこねる、その様もいとおしく、故に別れがたい。



「話はこちらでしまいだ」

「……っ」

冷たくにべもない一言。

少女はそれだけで理解しただろう。

表情を凍らせ、しゃくりあげる。

カムラルの宿命背負いしものには笑顔が似合う。

儂く、強く燃え盛るからこそ、心に残したかった。

目の前の少女の、その笑顔を。

「……話を聞いた上で、私にはずっと解き明かせなかった謎があるんだが、聞いてくれるか？」

「う、うん」

半べそでけなげに頷く少女。

それすらいとおしくて自然と笑みがこぼれる。

「サミイは言った。初めて会ったノヴァキに私がこれほどまでに惹かれたのは、同情などではないと。……だったらそれはなんだったのだろう？ この身を焦がす強い感情は？」

それは、最期の……少女に対する教えだ。

重い宿命を背負った、カムラル家のものにとって、もっとも必要なもの。

真剣に問いかけると、少女は笑った。

こっちも嬉しくなるほどに華びやかに。

「そんなの……決まってるじゃん。一目惚れだよ、一目惚れ。好きだったんだ。恋しちゃったんだよ」

本当に楽しそうに。

これから来る悲しみを奥へ奥へ隠して。

それはきつと、彼女のやさしさだ。

「そうだったのか……初めて知ったよ」

「嘘だよ。だって知らなきゃ……」

「だからお前は美しいのだな。誰かを愛することに、気付くことができたのだから……」

病に打ち勝ち、自分の魂の赴くままに。

オレはそれができなかった。

だからそれがうらやましくて、誇りに思える。

言葉を塞ぐようにしてそう笑うと、燃え盛る炎も暮れの日も及ばぬほどに少女は赤くなった。

赤面症は家系らしい。

「私は知っているよ。そのけしからん相手を」

何せ惚れ方が同じだから。

そう言っつて意地悪く笑うと。

「いい！ 言わなくっていいって！ ちょ、ちょっと水変えてくる  
！」

人生の中でもっとも輝いているだろう表情を浮かべて。

恋する少女は部屋を出て行く。

その場にはただ静寂だけが残されて。

「………これでいい。ようやく会いにゆける」

オレは目を閉じたのだった。

生をまっとうできたと。

その価値はあったと。

愛しい人に伝えるために。

「……………」

そっと、瞳を閉じる老人。

二つの名を持ち、二つの人生を生きたもの。

その、価値ある生を如実に表わすがごとく。

薄日に照らされ、永久の眠りにつく姿は、幸せの笑顔に満ちていた……………。

( 終わり )

### 第37話、さいごを迎える、しあわせな朝（後書き）

あとがき

伊吹ノアです。自身第6作品目、クオリティ・オブ・ライフをお送りしました。

今までの作品を糧に、少しは進歩できたでしょうか。相変わらず根本的にお話は終わっていませんが、今までの作品の中では尻すぼみの急降下にならずにまとめられたかなと思っています。このお話は、自作におけるすべてのお話につながり、中心となりうる作品、

通称『本編』の、一、二世代前のお話になります。

このお話で補完できなかった部分は、いずれ『本編』を含めた、同じ『ユーライジア』の世界が舞台のお話で披露できればいいと思っています。

次作ですが、一日1話（この最終話で途切れましたが）というわけにはいかなくなりそうです。

早くで一週間に一回更新できるかどうか、と言った感じです。

その代わりに、複数同時投稿や、今までの長編とは呼べぬ中編たちとは一線を画した長編とかやっていければいいなと思っています。

それでは、日は開くと思いますが、次作でまた会いましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2800k/>

---

クオリティ・オブ・ライフ

2011年2月12日14時40分発行